

---

# 追憶のシオン

加賀見メグル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

追憶のシオン

### 【Nコード】

N5828T

### 【作者名】

加賀見メグル

### 【あらすじ】

千年周期で滅びを迎える文明。

奇蹟を顕現させる古代遺物『秘蹟礼装』。

そして、滅びを齎す個体『龍』。

『蒼の大地』に降り立った乙女な少年の冒険譚が今動かす。

歯車を

それは剣と魔法とアーティファクトが紡ぐ物語。

この作品はArcadiaにも投稿しています。

## 序章 『少年アリス』

「あ」

用を為さない眩きが果実のように瑞々しい唇から零れる。

落ちる。

崩落する地面。

視界の中で遠く、小さくなる光源。

ほんの数瞬前まで床を構成していた瓦礫は重力に囚われ、少女と共に先の見えぬ闇へと落ちていく。

重力という鎖に束縛された少女は、ただ只管に可憐であった。

背丈と外見から推測できる歳の頃は十四・五程度であろうか。

幾千、幾万もの言葉で少女を賛辞しようとも足りない。

見る角度によって蒼穹の色にも、深い海色にも千差変幻する蒼い大粒の瞳。

少女がその何処までも澄んだ蒼い双眸を細め、にこり、と微笑んでくれるのならば命を投げ出す事さえも厭わない。

そう本気で思ってしまうほどに整い過ぎた奇蹟の美貌。

少女から女へと成長する曖昧な年代だからこそ存在できる完成された未完成の美。

長い、長い腰まで届く鴉の濡れ羽色の黒髪は首筋の後ろで一束に結わえられ、

落下に合わせて漆黒の絹織物のように華奢な身体に纏わりついて宙に広がっていた。

「ッ、シオン！」

刻一刻と小さくなる『地面だった』場所から焦燥にかられた声が届く。

遠くなる光源を見やれば、燃えるように鮮やかな真紅の髪の女性が見て取れた。

呼ばれた名前に、お伽話から現実に訪れたアリスのようなあどけない少女は我に返った。

白を基調とした金の刺繍が施された腰マントを翻し、中空でしなやかに体勢を整える。

そして、共に落下する近くの瓦礫を蹴った。

とんとん、と少女は大小様々な瓦礫を足場にして軽い足取りで落下速度を緩めていく。

散歩道を機嫌良さ気にステップする童女のように。

やがて。

とん、と少女は地面に身体を降り立たせた。

シオンと呼ばれた少女を中心に避けるようにして地面に激突する瓦礫。

立ち込める砂煙。

ふわり、とシオンへと追従する一束の黒と金刺繍の腰マントが膨らんで落ち着いた。

随分深くまで落ちてきたらしい。

少女が頭上を見上げ、握り拳大になった明りを確認すると秀麗な柳眉をやや顰めた。

「随分と落ちてきたみたい」

『独り言のように』言葉が紡がれた。

満ちている空気はひんやり、と冷たく上階よりも気温が低い。

辺りは見渡す限り闇。

だが、瞳が暗がり慣れてくると、ぼんやりと地下の景色が輪郭を成してきた。

そして。

その先に潜む脅威の存在も。

唸り声を口内で響かせ、獣は獲物を見据えていた。

暗がりから姿を現したのは犬頭の獣。

薄汚れた茶褐色の体毛を靡かせ犬頭の獣が宙に跳躍する。

「グルル……ガアアアツ！」

血と埃と体液が長年にわたり染みついた襤褸切れを身に纏い、岩石を粗く削り出した手斧を振りかぶった獣の名は『コボルト』。

人間の少年程度の背丈に毛むくじやらかな犬に似た頭部を持つ『蒼の大地』全域に広く生息する魔物だ。

半開きの口腔に並ぶ不揃いの歯の隙間から粘着質な唾液を零し、

コボルトは獲物とシオンに襲い掛かる。

しかし、犬頭の持つ石斧が少女のやわ肌を傷付ける事は無かった。

背中に羽の生えたかのように身のこなしでシオンが片手で側転。

刹那の後に少女が居た空間を石斧が通過する。

獲物を捕える筈の石斧は、遺跡の年月を経た茶色の床に鈍い音と共にぶつかり、砕けた床の破片が飛び散った。

コボルトは自身の思い通りに屍体とならなかった黒髪のシオンに對して血走った眼で睨む。

体毛に覆われた喉から低い唸り声を鳴らし、コボルトは再び体勢を沈めた。

既に側転から体勢を立て直したシオンがコボルトの一挙一動を蒼の瞳で見据えていた。

シオンはコボルトが再度飛び掛かってくる前に、その黒地の絹の長手袋に包まれた腕を振るった。

瞬間。

乾いた茶褐色の遺跡の壁に自生している光苔ひかりけに照らされ、反射する幾本もの『糸』が刹那見えた。

『糸』は、それ自体が意志を持つかのように自在に動き、コボルトを体に巻き付く。

当然、身体に巻き付いてくる煩わしい糸を引き裂こうとコボルトが抵抗する。

「グウルワアッ！」

雄叫びと共に振り回される両腕。

だが『糸』はそんなささやかな抵抗で切れるほど柔な材質で出来てはいない。

逆に薄暗い遺跡内部で糸の軌跡が閃く。

その糸の軌跡はコボルトの振り回した筈の腕を絡め取り、宙に縫い付けてしまった。

ガラン、と毛むくじゃらな手から零れた石斧が鈍い音を立て地面にぶつかる。

腕、脚、胴。

シオンの妙技によって至る所を糸によって絡め取られていき、コボルトは遂に身動きすら取れず立ったまま制止した。

否、制止する事を強制されているのだ。

その様は蜘蛛の巣にかかった蝶を思わせた。

動く事も叶わなくなつたコボルトにシオンは一步、また一步と距離を縮めていく。

少女が望めば指先の動き一つでコボルトを縛る糸は鋭利な刃となつてバラバラ死体を作り上げる事は想像に容易い。だがシオンは敢えてソレを実行に移さなかつた。

「ウウウウ……」

四肢を拘束されていても生への渴望故か。コボルトはしっかりとシオンを睨み、低く唸る。

交差するシオンの蒼の瞳とコボルトの瞳。

コボルトは年不相応な聡明さを内包した瞳をただじつと見続け、シオンもまたソレに倣つた。

その見つめ合つた時間は十秒足らずのごく短い間だったが、吸い込まれそうな蒼を直視したコボルトはそれ以上に長く感じられた。

「……クウーン」

唐突、コボルトは小さく鳴いた。

ピンと立っていた犬耳はペタンと頭にくっ付き、尻尾は垂れ下がる。

「ん……いい子」

鈴の転がるように軽やかで澄んだ声色がシオンの口から発せられた。

戦意を霧散させたコボルトに対して、黒髪蒼眼のシオンは絡み付いた糸を解いてやり、虱だらけの犬頭を気にせず撫でた。

糸の拘束から解放されたコボルトは再び襲い掛かる事無く、シオンの行動を不思議そうに見やる。

やがて嬉しそつに茶色の尻尾を振り回し始める。

その様子にシオンは柔らかく目を細め、自身の細く折れそうなくらい繊細な腰に片手を回す。

パチンと小気味の良い音と共に開く、腰マントを止めるベルトに付属していたポーチの一つ。

中から取り出されたのは白い紙包み。

少女が丁寧な手つきでその紙包みを開くと、現れたのは色とりどりの一口サイズの砂糖菓子。

「コレあげるから我慢してね」

「？」

差し出された菓子の意味が分からないのだろう。

コボルトは目を丸くして、鼻先にで砂糖菓子を嗅いだ。      こんぺいとう

そんな様子にシオンは眉根を寄せ清楚に苦笑。

こんぺいとうを一つ、白魚のような指で掴み、自身の口に含んだ。途端に舌から広がるこんぺいとうの控え目な甘さに頬を緩めた。

「ね？」

ほつぺを金平糖で小さく膨らまし、語りかけるようにしてコボルトに笑い掛けた。

コボルトの方も目の前にある食べ物が毒ではないと分かり、恐る恐るその毛に包まれた指で掴み、大きな牙の並ぶ口に放り込んだ。

途端に口に充満する生涯の中で感じた事の無い甘さ。

犬頭の獣人は目をコレでもかというほど見開き、もう一度この素敵な甘露を味わおうと少女にねだるように情けなく鳴いた。

「くうーん、くうーん」

その仕草が何とも可愛らしくて、シオンはくすり、と苦笑を洩らした。

シオンは毛むくじやらかなコボルトの片手を取り、その掌にこんぺいとうの入った紙包みを握らせた。

しっかりとコボルトに紙包みを握らせた後、少女は何をするわけでも無く、ただ一言。

「もうお行き」

見逃す、と告げた。

コボルトの顔が二度、三度、シオンと紙包みを行き来する。

やがて意図を察したのか、犬頭の魔物は落ちた石斧を拾い、背を向け歩き出す。

遺跡の暗がり消えていくコボルトの背中をシオンは最後まで見送っていた。

光苔ひかりこけが放つ仄かな光の中、一人佇む。

不意にシオンしか動く者の居ない遺跡内部に声が響いた。

《物好きな奴よの。あのまま引き裂いてやればソレで済むものを》

背筋をぞくり、と舐められるような艶を含んだ声。

耳元で囁かれたのならば、それだけで絶頂をしてしまうような女の子だった。

シオンはその声に驚く様子も見せず、独り言を言うように遺跡の虚空に向かって返す。

「無駄な殺生はあまり好きくないです」

《……さよか、そなたが良いのなら別に強うは言わぬさ。ただ》

艶めいた女の声が途切れ、シオンの背中　腰につけた変哲の無いショートソード　から金色の魔力光が蛍火の如く灯る。

そして。

途端に「ゴウ」という音と共に薄暗かった遺跡が明るくなる

シオンの漆黒の長手袋に包まれた右腕が突然、燃え上がったのだ。腕を取り巻き、燃える炎の色は白銀。

自然界に存在し得ない色彩の炎は、次の瞬間何事も無かったかのようにフツと掻き消えた。

後に残るは焼けただけだシオンの無残な右腕、ではなく先程と変わりない黒シルクの手袋に包まれた綺麗な右腕。

《　妾の担い手が虱塗れでは恰好がつかぬしな》

「有難う御座います、バル」

《容易く礼など述べるでない。妾が好きでやった事じゃ》

それ以降、シオンと謎の声との会話が途切れた。

ただ、シオンは綺麗になった手で腰に備え付けた短剣をそっと撫でただけだった。

Original Novel

追憶のシオン

序章『少年アリス』

「シオン！ 無事かつ！」

コボルトと別れて、幾時も経たぬ内にシオンの名を呼ぶ声が遺跡内に木霊した。

シオンがその流麗な黒髪を翻し、振り返る。

視界の先には、遺跡の回廊奥より一つの光源が近づいてくる様子が見て取れた。

ぼつりと小さな光源だった光は、時間を置くごとに大きくなり、やがて中空に浮かぶ光の球の傍にいる人物達の全容を照らす。

照らされた人影は二つ。

真紅の軽鎧ハイフプレートを装備し、背に巨大な斧槍ハルバートを携えた長身の女性と、身軽そうな皮鎧と頭にバンダナを巻いた中肉中背の男性だった。

「アルトさん、見ての通り『俺』は無事ですよ」

少女の一人称 『俺』 に男性の方は慣れぬ様子で顔を顰めたが、

アルトと呼ばれた真紅の鎧の女性は気にした様子も無くシオンに近付き安否を確認する。

シオンとアルト。そして皮鎧の盜賊然とした男性が並ぶとシオンの華奢な体躯がより一層強調される。

頭二つ分ほど違う身長。

片や成人を迎えている二人に対して、深窓の令嬢といった方が相応しい雰囲気を持つシオン。

盜賊然とした男性さえいなければ令嬢とそれを護衛する女騎士と

絵になるのだが、残念ながらそうではない。

彼ら三人は、今現在居る遺跡 シューゲルト古代地下神殿を探索する冒険者パーティー一行なのだ。

「兎に角、無事で何よりだ。シオンの力を過小評価しているつもりはないが、何が起こるか分からないのがこの稼業だからな」

「姐さんも心配しすぎッスよ。んな落とし穴ぐらいで大袈裟な」

やや過保護な様子でシオンの小柄な身体を触診していたアルトであつたが、隣の盜賊然とした男性の言葉にゆらりと振り向く。

と、同時に高い位置で結われた鮮やかな深紅のポニーテールが追随し、烈火を内包した朱の瞳の瞳孔が縦に割れ、男を射抜いた。

「元を辿れば全て貴様の落ち度だろう！ ヤドック！！」

「ヒイイツ、スンマセン姐さん！」

顔立ちが整っている女性ほど激昂した時に怖いものは無い。

その叱咤が冒険者ギルド・ランク『A』の実力を持つ『炎獅子』アルトリーゼ「クルスバーク」のモノなら尚更だった。

アルトに一喝されたヤドックという男は、傍から見ても情けないほどに身を縮み込ませた。

だが、アルトは怒りの矛を収めない。

逆に不甲斐ない後輩に対して更に苛烈に叱りつける。

「事前にあれほど下手に動くなと苦言して置いたのに、なんて体たらくだッ。貴様それでも元盜賊か！」

「な、何年も前に足を洗ってますから、う、腕も錆びついてるッスよ」

「言い訳など聞く耳持たん」

このヤドックという男、二人の会話に出てきた通り、むかし近隣の街で名の知れた盗賊集団に身を置いていた元犯罪者である。

ソレをアルトリーゼがギルドより依頼を受け、単騎でヤドックが所属していた盗賊集団ごと壊滅。

彼等はお縄につく事になった。

一緒に牢に入れられた仲間達は口々にアルトの恨み言を吐き出していたが、彼一人は違った。

憧れたのだ。アルトの振るう斧槍ハルバートの力強さに、彼女の美しさに。

そして、何年も強制労働を従事しようやく出所。

彼の足は自然と冒険者ギルドに向かっていた。

それから紆余曲折はあるが、大部分は割愛して憧れのアルトの弟子として現在に至る。

その冒険者としての技能や心構えはお粗末なものだが。

「アルトさん、幸い俺も怪我らしい怪我をしてませんですし、お叱りはその辺で」

未だ続くヤドックへの叱責をシオンがやんわりと止めに入る。

「む、そうか？ まあ馬鹿弟子を締め上げるなど帰ったら幾らでもできるか」

後ろでそんな一、とヤドックの悲痛な叫びが上がるがアルトは徹底的に無視。

三人が遺跡の探索途中ではぐれた原因は、全て彼の不注意にあるのだから当然の帰結である。

遺跡上層部の探索中、ヤドックが疲れたと言って壁のよりかかった事がそもそもの発端。

彼がよりかかった壁の一部分が陥没。

その罫に連動して一緒に探索していたシオンの下の床がぱっくりと口を開けるように崩落したのだ。

シオンは瓦礫と共に滑り台の様に曲がりくねった穴の下へ、下へ。このような経緯からシオンは魔物ひしめく遺跡で単身の時間を余儀なくされたのだった。

「シオン。お前と合流する前、此处より西南にある小部屋の中で地下階段を見つけた」

不甲斐ない弟子を叱咤する先達の顔より一転。

アルトの美麗な顔が引き締まり、冒険者の顔となった。

「マナ羅針盤コンパスが微弱だが反応を示した。おそらく地下にあるぞ」

秘蹟礼装が。

ひせきれいそう  
秘蹟礼装。

定義としてのソレは、現代魔法技術では生産不可能なアーティファクト。

千年単位で現在を遡る遙か太古の文明によって産み出された超技

術の結晶。

秘蹟礼装によって齎される奇蹟は、常軌を逸したモノが大半を占めている。

一振りて街を焼き尽くす深淵の業火を宿した直剣。

ありとあらゆる魔法を吸収し、その力を持ち主に還元する鎧。

どんな城壁よりも堅牢で、どんな兵士よりも強靱な魔科学によりつくられた機械仕掛けのゴーレム。

不可視である筈の未来を垣間見られるクリスタルの群体。

その強大な力故に各国の王侯貴族は、多額の懸賞金を秘蹟礼装に掛け、自国の所有物にせんとしているのだ。

そして冒険者にとっても秘蹟礼装の持つ名は重い。

何せ手に入れさえすれば一夜にして億万長者。

秘蹟礼装発見の実績はギルド内でも高く評価され、金と栄誉の二つが舞い込んでくる。

勿論、秘蹟礼装を国に渡さずに自身の為に使う選択肢も存在する。世界中にひしめく冒険者の大半は、秘蹟礼装を目的として探索をしているのだ。

土埃を巻き上げながら、ガタン、と壁と同じ材質で造られた床の一部が外された。

中から口を開いたのは、地下へと続く石階段。

先に続く道は、まるで来る者を拒むかのように深い闇に包まれている。

一行の中で一番経験の浅いバンダナの男 ヤドックがごくりと生唾を飲み込んだ。

「流石に暗いな……シオン、頼む」  
「はい」

アルトリーゼの要請に、シオンが小さく頷く。  
シオンは長手袋に包まれた細い腕を暗闇に向ける。  
すると其処に「光」が生まれた。

地下階段の闇を照らす光球。

冒険者の中でも必須技能と言われている『小さな妖精の案内』と  
呼ばれる魔法だ。

一般的な魔法であるが、ヤドックは酷く驚いた様子でシオンを見  
た。

「ま、『魔動』<sup>まどう</sup>ツ！？ シオン、お前ハイエルフだったのか！？」

「ヤドック、少々騒がしいぞ」

「いえ、違いますけど」

不用意に上げる驚愕の声をアルトが睨んで竦め、シオンは振り返  
り、肩越しにやんわりと否定する。

「だ、だって今詠唱も無しに『小さな妖精の案内』<sup>フェアリーノート</sup>を使っただじや  
ないツスか」

ヤドックの驚きと疑問は当然だった。

幾ら簡単な魔法とはいえ、魔法は魔法。

人間族である彼等には力在る言葉　詠唱　が必要不可欠な筈  
であった。

しかし、先程のシオンはその常識を覆していた。

そのような芸当ができる生物は確かにこの世界『蒼の大地』に生  
息している。

妖精であったり、  
精霊であったり、  
エルフの上位種ハイエルフであったり、  
果ては龍であったり、  
より世界に対して高い親和性を持った種族の特権である。  
その名を『魔動』まどうという。  
人が呼吸をするように、植物が光合成をするように、彼等は当たり前のように魔法を行使する。  
詠唱や小難しい儀式など彼等に必要無い。  
彼等にとって魔法とは、歩く事と同義なほど自然に行える産物なのだ。

「ちよつと前に事故みたいな事がありました、それ以来かな？ 魔動が使えるようになったのは」  
「それって一体？」

ヤドックの疑問の声に、シオンは困ったように微笑む。  
フェアリートーチの光に照らされた微笑みは月下美人のように美しいと同時に、疑問への回答を拒んでいた。

「すみません、あんまり話したい内容じゃないから」

申し訳無さそうに謝罪を零すシオンに、ヤドックはそれ以上追及する事は出来なかった。

そして、無遠慮な質問にシオンの背後に位置するアルトの眼光が鋭さを増す。

冒険者間において過去の話は、本人が話す以外訊かない事が常識であり不文律。

それ故にアルトの視線が険を帯びる。

「い、いや全然大丈夫ツス。俺だって脛に傷のある身の上、誰にだって言いたくない事の一つや二つあるんだから気にする事無いツスよ」

どもりながら大仰に弁解するヤドック。

此处で下手を打てば、街に帰還してからの折檻が悲惨な事になる。あながち間違っではない未来だけにヤドックも必死だ。

その様子が面白かったのか、シオンは口元を折り曲げた人差し指で隠し、くすくすと上品に笑う。

「ヤドックさん」

「はいいッス！」

「有難う御座います」

優雅な一礼。

礼から上げられるシオンの顔を見て、ヤドックは止まった。

改めて見るシオンの容貌は、やはりどこまでも可憐だった。

幼さを残しながらも大人への階段を登りつつある蕾のように瑞々しい色香。

日に焼けた自分の肌とは比べ物にならないほど白い白磁の肌。

さらり、と流れる濡れ羽色の髪は僅かな光を反射して天使の輪を作り、

小振りな唇は甘い果実を彷彿とさせる。

そして、深い深い空を閉じ込めたかのような一對の蒼色の瞳。完璧だ。

あまりにも完璧すぎる美貌に思わずヤドックは一步たじろぐ。

いきなり挙動不審な行動を見せるヤドックに、シオンはこてんと

小首を傾げ、疑問を呈した。

「じゃあ、先に下りますね」

が、特に言及することも無く、一礼をしてシオンはアルトと共に地下階段を降り始めた。

ヤドックも慌てて追従する。

階段を下りながら、先を進む朱と漆黒の髪を見ながらヤドックは己の考えに没頭する。

ヤドック自身、シオンという人物に対して知っている事はそう多く無い。

依頼主にして遺跡探索のパートナー。

それがシオンとヤドック達との関係だった。

冒険者が冒険者を雇うこと自体はそれほど珍しくは無い。

自身の身の丈に合わない依頼をギルドから引き受けてしまった場合、よく取られる手段だからだ。

探索の目的は当然ながら遺跡に眠る『秘蹟礼装』。

その他に既知な事と言えば、

ヤドックの師匠でもあるアルトリーゼとは以前より知己の間柄。

常に一歩引いて男を立てる大和撫子な気質。

ギルド・ランクは『C』と中堅クラスだが年齢を鑑みれば十分過ぎる実力。

そして

「やっぱ未だに信じらねえッス。あんな可愛いのに『男』だなんて」

シオンが真正正銘の男だという事実。

先に行く二人に聞き咎められない様にぼつりと独り言を漏らし、新米冒険者ヤドックは『炎獅子』と『少年アリス』の後に付いていく。

長い地下階段を抜けた先に待ち受けていたのは、地下とは思えないほど広大な空間だった。

『小さな妖精の案内』と光苔だけの光量ではこの広すぎる空間の全容を見渡す事が出来ない。

シオンが更なるフェアリーチを灯そうとした時、艶美さを纏わせた退廃的な声が奥より木霊した。

「珍しい……真に珍しい。人の子らよ、我が巢に何用ぞ」

聞こえた瞬間、既にアルトはハルバートを構え、臨戦態勢に入っていた。

唐突。

空間に存在した全ての燭台、かがり 篝が役目を思い出したように音を立てて火を灯す。

赤い炎が闇を払い、広すぎる空間を照らす。

其処は時代に忘れ去られた大聖堂。

地下聖堂を支える幾本もの円柱は、気の遠くなるほどの年月を経

てもその力強さを失わず、

聖堂内部に漂う神聖で清浄な空気は、些かも損なわれてはいない。  
そして。

聖堂の最奥。

安置された秘蹟礼装を祀る祭壇の前に　この聖堂の主が居た。

「あ……うあああ……」

その存在の重圧に圧倒されたヤドックがその場でへたり込み、口から言葉にならない悲鳴が漏れる。

とぐるを巻き、ぬめるように光沢を放つ白い鱗を覆われた蛇の下半身。

その蛇の上半身に位置するは魔性の女体。  
妖艶。

これほど彼女の姿を現すのに適切な表現は無いだらう。

申し訳程度に乳房と秘部を隠す、金属細工の布地。

地面に届くかという程に長く、癖の無い白銀に輝く髪。

その銀髪は起伏に富んだ裸体に絡み付き、男を淫らに誘っているかのように色香を放っている。

半人半蛇の白き魔物。

その名は

「アルビノラミア……」

アルトの眩きに、蛇の魔物は血のように赤い瞳を細めた。

瞳に宿った感情は苛立ちと怒り。

浴びせられた視線に、知らずハルバートを握る手に力が入る。

「礼を失した輩よ。我をそのように呼びやるとは」

魔物の中から極稀に産まれる色を置き忘れた存在　アルビノ。  
彼等の多くは産まれたその瞬間から同種族とは隔絶した力を保有している。

だが、比肩無き力は周囲へ怖れを生み、やがて怖れは排斥へと変わる。

アルビノとして生を受けた彼等は、その殆どが同族より排斥され孤独に生きる。

故に知恵有る者は自身の生まれを疎み、憎悪する。

ラミアの彼女もまた、その一匹であった。

「久方振りの来客ではあったが気が変わった……貴様等の臍物、全て我の腹の中に収めてくれるわッ！！」

咆哮。

白き蛇姫から放射状にマナの突風が吹き荒れる。

聖堂を揺るがし、離れたシオン達をも飲み込むマナの奔流。

マナとは『蒼の大地』に生きる全ての物が持つ力の源。

その質と量の大きさは、そのまま存在の格の違いを現す。

肌を突き刺すマナの突風。

立っているだけで体力を奪われる圧倒的な生物としての格の違い。

真紅の鎧に覆われたアルトの背中がじつとりと汗ばむ。

アルトの体に流れる亜人の血　蜥蜴人間リザードマンの血がざわつき、真紅の瞳の瞳孔が縦に割れる。

交戦体勢に移行したアルトからざらり、と濃密な戦人の緊迫感が溢れだした。

一触即発。

その緊張の糸を緩めたのは、小さな掌だった。

アルトの長大なハルバートを握る腕にそつと重ねられた細い手。

真紅の瞳がその持ち主を睨む。

「なんのつもりだ？ シオン」

気を削がれ、若干の苛立ちを含まれた問い質し。

シオンは、少し困ったような、それでいて幾分アルトを責めるような眼差しでその蒼い視線を送っていた。

「今のはアルトさんが悪いと思います」

「しかし、奴は既に私達を」

「相手は身重です。言葉に気をつけなくちゃ駄目です」

被せるようにして発せられた言葉にアルトは片眉を跳ね上げる。

表面上の変化は微々たるものであったが、内心では彼女らしからぬほど動揺していた。

「……………なに？」

「ほう？」

「だから、あのラミアは妊婦さんなんです」

再度、ラミアが懐妊している事を告げ、シオンは祭壇の方に向き直る。

其処に居るのは、長き時を生きる蛇の化生。

腹部を注視すれば確かに生命の膨らみを内包している。

その人外の美しさを誇る顔には先の殺意は無く、逆に興味深げにシオンという存在を認めていた。

「仲間の非礼をお詫びします、こちらに貴方と争う意思はありません。矛を収めては頂けないでしょうか？」

「言うだけは容易いこと、謝罪にはそれ相応の報いが無くてはな……  
……例えば娘、お前の藍と蒼を行き来する美しい瞳であつたりな」

ラミアという種族は元来宝石等、光り輝く財宝を蒐集する性質を持つている。

それはアルビノで有るからと言って変わらず、  
彼女がシオンの色合いが干差変化する蒼の瞳に関心を持つのも当然の帰結であつた。

しかし、だからと言ってはいそつですかと渡せるものでも無い。  
シオンは眉尻を下げ困つた顔をし、腰に取り付けたショートソードは不気味に存在感を増した。

「それは、少し困ります。他に代替案は無いですか？」

「……」  
「あの？」

ラミアの要求をやんわりと断り、シオンとしては別の方法で謝罪の意を示したかった。

誰だつて瞳を抉られるのは御免蒙る。

だが、突然ラミアが黙りこくつてしまい、相互の意思疎通が滞つてしまう。

微量の沈黙。

その後ラミアの血のように赤い唇から愉快気に笑う声が漏れる。

「くくく」

「……えつと？」

「いや、すまなんだ。我を前にして平然と口が利ける輩はそう居らんでな、つい興が乗ってしもつたわ。ほんの戯れを許せ」

半人半蛇の魔物から濃密な殺意は去り、代わりに残ったのはシオンに対する好奇心。

シオンの生来持ったおやかな美貌と、どのような宝石にも勝る蒼い瞳。

そして、自身の威圧を平然と受け流す度量に、いたく興味を引かれていた。

「キーリニヤ」

前置きの無い突然の単語。

ラミアの口から音の調べとして届いた言葉を、シオンは眼前のラミアの名前だと認識した。

「それが我が名だ。娘、お前の名はなんと云う？」

「シオン」

「シ、オン。そうか、シオンと言うのか。お前に良く合う清廉な響きの名だ」

シオン、と口の中で幾度か転がし、白子のラミア キーリニヤは賛辞を贈る。

社交辞令など存在しない魔物の純粹な褒め言葉に、シオンは童女のように顔をほころばせた。

それだけで彼にとって自身の名前は、宝物に匹敵するほど大切なものだと窺えた。

「ありがとう」

嬉色を多分に含んだ鈴が転がる声色。

「くく、真に愉快的気分よ。シオン、お前は自分の名付け親は好きか？」

「はい」

一瞬の迷いも無く、縦に頷かれるシオンの頭。  
予想通りの反応にキーリニヤは、ますます笑みを濃くした。

「やはりの、そうでは無いかと思ったわ。くく、無粋な輩の一人か  
と思っていたが、なかなかどうして……」

短い邂逅の中、キーリニヤは驚くほどシオンに惹かれていた。  
魔物に対しても飾らない柔らかな物腰。

かと思えば並の人間が失神する程の存在である自身の威嚇を受け  
ても平然と流せるだけの器量。

キーリニヤは自分が同種族の中でも飛び抜けて力の強い固体であ  
る事を嫌でも自覚している。

それだけに畏れ、妬み、忌避等の負の感情に晒され続けた中、自  
然体のシオンの態度は、春風のように心を吹き抜けていった。

さらに。

短時間の間に惹かれていった原因はシオンの容姿にもあった。

身籠っている今の状態で、シオンの幼さを多分に残す容姿はキー  
リニヤの庇護欲を多大に刺激する。

華奢で繊細な肢体。

まったく荒れておらず、赤子のようにきめ細やかな肌。

柔らかな弧を描く顔の輪郭。

シオンに対する情動には、母性本能も少くない量含まれている  
とキーリニヤは正確に自覚していた。

故に、彼女はシオンを手元に置きたくなくなった。

「そうさな……詫びと言うならば、私の稚児ちごが産まれるまで、傍で寝物語でも聞かせてもらおうかのう？」

薄布一枚に覆われた腹を一撫で、チロリと二股に分かたれた舌を出し、キリーニヤは妖艶にシオンを流し見る。

だが、唐突。

和やかな空気は消え去り、キリーニヤの眉間に深い皺が刻まれる。不機嫌さを隠そうともせず、彼女は吐き捨てるように言った。

「やれやれ、本当に無粋な客が来てしもうたわ」

言い終わる直前。

遺跡の地面が揺れた。

断続的に揺れる遺跡の内部。

その度、時を経た天井からパラパラと石と砂が落ちてくる。

「足音？」

そう、この地面を揺るがす振動は足音だった。

発信源は聖堂外部に通ずるシオン達が入ってきた物とは別の回廊  
その闇の先。

歩くだけで地響きを起こす巨大な存在が、見えぬ闇の先に居る。  
一步。

存在が進む度、体に掛かる重圧が増し、肌が泡立つ感覚をアルト  
とヤドックは味わった。

ヤドックにいたっては失神しないか不思議なほど顔を蒼褪めさせ  
ている。

そして、遂に『ソレ』が姿を現した。

見上げるほど筋骨隆々の巨軀。

理性の一欠けらも見受けられない血走った眼。

頭に生えた三本の猛々しい角が特徴的な牛頭。

その怪物の名はミノタウルスと言った。

ぎよろり、と濁った眼でミノタウルスがシオン達を見る。

瞬間、得物を見つけた牛頭の怪物が吼えた。

「ウボオオオオア、ア、ア、アアアアっ！！！！」

その咆哮は音の壁だった。

本来質量を持たぬ筈の音が、馬鹿げた声量により壁としてシオン  
達に叩きつけられる。

反抗する気力を根こそぎ霧散させる程の圧力が、その嘶きに充満  
していた。

「はひい……はひいひいひい！」

元よりへたり込んでいたヤドックには、あまりにも過酷な重圧であつた。

体内の臓腑が全て込み上げてくるような恐怖。

心臓の鼓動が壊れるくらい速く、息を吸おうにもまるで酸素が肺に入っていない。

抜けた腰で必死に距離を取ろうとするが足がもつれて遅々として進まない。

「ヤドックッ！ 何をしている大馬鹿者！ 速く逃げろ」

「あ、姐さんっ、こ、腰が抜けて……」

「ヤドックッッ！！」

アルトの焦り、悲痛な叫びが鼓膜を打ち、もたつくヤドックの頭上に影が落ちる。

見上げれば牛頭の濁った瞳と視線が交錯した。

あ、俺死んだ。

丸太より径が太い腕で振りかぶられる鉄塊と見紛うほど巨大な斧。それは死神の鎌などよりもよほど現実的に死を齎す。

数瞬後、挽き肉になる自身の運命を、ヤドックは恐怖でネジが跳んだ頭で呆然と見詰めていた。

そして。

豪碗によつて空気を引き裂き、振り下ろされた鉄斧が地面と激突し、轟音を伴って聖堂全域を揺るがす。

遺跡の床石を深々と砕き、もうもうと立ち込める砂煙。

煙が晴れた後、ミノタウルの斧が振り下ろされた箇所には、夥しい血の痕とヤドックだった肉塊が 存在していなかった。

「へ？」

現状を理解していないヤドックの間の抜けた声。

なぜか彼はシオン達と一緒にアルビノラミア　　キーリニヤの居る祭壇の上に立っていた。

理解が及ばない。

自身はミノタウルスが起こした破壊跡に死体を晒した筈だ。

だが現実にはヤドックの認識とは掛け離れていて、今もなお心臓は生命の鼓動を刻み続けている。

「怪我は無いですか、ヤドックさん？」

アルビノラミアと同等程度の力を持つミノタウルスの亜種が出現したというのに変わらぬシオンの態度。

ヤドックは直感的にこの少女のような少年が命の恩人なのだと確信した。

それは近くで見えていたキーリニヤも同様であった。

「『魔動』では無いな。シオン、お前一体何をした」  
「ん、企業秘密です」

片目を瞑り、ピンと立てた細い人差し指を顔の前に持って来て、シオンは少しの茶目っ気を覗かせて答えた。

「ヒイイイ！ で、出たあぁっ」

傍らでキーリニヤの存在を認めたヤドックが再度、情けない声を出して後退る。

キーリニヤは矮小なヤドックを意にも介さず、ただシオンの行動に疑念を抱く。

ヤドックの生命が刈り取られるあの時、あの瞬間。

シオンは確かに『何もしていなかった』。

仲間の死の危険に眉一つ動かさず、まるで最初からヤドックが助かる事を確信していたようにシオンは動じていなかった。

事実、キーリニヤの脳に刻まれた記憶には、鉄塊じみた斧が振り下ろされる瞬間、

腰を抜かしていたヤドックが別人のように飛び上がり、驚異的な身体能力でミノタウルの斧を避けた光景が残っていた。

確実にシオンがヤドックの変貌に関わっている。

しかし、それをシオンに問う時間は、残念ながら彼女に残されてはいない。

「秘め事にされると返って気にはなるが……戯れている場合ではないか……。シオン、『奴』は我と同じはみ出し者。縄張り争いの相手だ。

故に下がっておれ。これは魔物同士の争いぞ」

ぬめり、と白蛇の半身が艶めき、キーリニヤの魔力が空間に滲み出す。

確かに彼女の言うとおり、これは人の埒外での闘争。

放って置けば人外達は互いに消耗し、漁夫の利を得るには絶好の

機会。

だが、敢えてシオンは前に歩を進め、三本角のミノタウルの視線から妊婦を守るように立ちはだかった。

「……何のつもりだシオン。此度の争い、既に人の出る幕では無い。相応の理由が無ければお前とて容赦はせぬぞ」

血の赤みを秘めた瞳がシオンを睨みつける。

修羅場を潜り抜けた冒険者でも肝を冷やす視線の圧力を、シオンは平然と柳のごとく受け流す。

それは十四、五の齡の人間が持つ胆力では無かった。

しかし、その年齢不相応の胆力をシオンは確かに持ち、真っ向から半人半蛇の眼力を見据える。

そして、凜とした表情を崩し、ほにやりと柔らかく微笑んだ。

命を削り合う場において不似合いなほど穏やかな空気をシオンは纏っていた。

「ご期待に添えなくて申し訳無いですけど、あまり大層な理由では無いんです」

シオンが屈強なミノタウロスに無防備な背中を向けた瞬間。

真紅のグリーブ（金属製の靴）が祭壇の床を踏み碎き、傍に居たアルトが駆け出す。

亜人種の血が流れているアルトだからこそ可能な人の域を越えた加速。

彼女が愛用する斧槍は秘蹟礼装に及ばぬも、凡百の物と一線画する強力無比なマジックウェポン。

握り締めた長大なハルバートが持ち主の意を組み、穂先から火炎を世界に顕現させる。

「祖父の『困っている人を見かけたらできるだけ助けてあげなさい』  
という言いつけが一つと」

炎はハルバート全体に留まらずアルトリーゼの全身に拡がり、  
その姿はさながら業火の獣があらゆるものを燃やし尽くし大地を  
駆けているようであった。

これこそアルトリーゼが『炎獅子』の二つ名で呼ばれる所以。

「この状況が亡き父の教えてくれた『仇なす者に容赦無用』に当て  
嵌る事が一つ」

三本角のミノタウロスもただ木偶のようにアルトの疾駆を見てい  
た訳ではない。

巨軀に見合った鉄塊の斧を大上段に掲げ、『炎獅子』を挽き肉に  
せんと待ち構える。

いくらギルド・ランク『A』クラスのアルトリーゼといえども、  
アルビノラミアの力に匹敵するミノタウロスの亜種との真っ向勝  
負は荷が勝ち過ぎる。

だが、今この状況で相手が『魔法などに頼らないミノタウロスと  
いう種』である事がアルトの最大の勝算であった。

ゆえにアルトは、ミノタウロスの巨体を目印に愚直な前進を止め  
る事は無い。

「そして最後」

全身を炎に纏わせた戦乙女の身体が沈み、怪物の息の根を止めん  
と首目掛け飛翔する。

地面より離れたアルトは、待ち構えるミノタウロスにとって格好  
の的。

無謀とも思える飛翔。

アルトとミノタウロス。

両者にとってこの状況は詰み。

構えたミノタウロスが死の鉄槌を与えんと鉄斧を下ろせない』。

『振り

「この魔物相手なら例え百戦相手取ったとしても、百回首を落とす自信がありますから」

目を見開くキーリニヤ。

聖堂の主である彼女は血色の瞳を見た。

百殺をやったのけると言ったシオンの背後で、真っ赤に赤熱した斧槍の刃が確かに首を刎ねる瞬間を。

あとがき

お久しぶりです。

身辺関係が落ち着いてきたので予定より少々早いですが加筆修正を行い、出来ている分を順次投稿していこうと思います。

## 第？章 『水鏡紫苑』

『彼』は稀代の暗殺者であった。

彼の一族は、糸を繰る人形師の家系であり、暗殺を生業とする裏に属す者達だった。

一族の業は美しい。

彼等が操る金属糸は生命を吹き込まれたかのように縦横無尽に軌跡を描き、

人体はバターを切るより容易く分割され、一族の繰る糸は鋼さえも切り裂く。

それはいつそ芸術と言えるほど完成された技術の結晶だった。

その一族をもつてしても『彼』は非凡であり、異質であり、また鬼才であった。

彼もまた他の一族と同じく糸を繰る者。

だが、彼が繰る糸は肉眼で捉える事が不可能なほどの微細な糸。微細な金属糸は、標的の神経に刺さり、微弱な電流で肉体の動きに対して強制的な干渉を可能にする。

それはまさに人間の範疇を逸脱した悪魔の業。

彼の糸に捕えられた人間は、人形となんら変わり無い。

意にそぐわぬ行動を強制され、人体の限界を無視した力を引き出され、自らの死を齎す行動にすら反抗できない。

これほど対人戦において無敵に近い業は無い。

彼はその業を以って、夥しい数の人間を殺し、殺し、殺し続けた。だが、そんな血に塗れた彼も凡百の徒と変わらぬ一人の人間だった。

彼は極東の小さな島国にて、一人の大和撫子と恋に落ちる。  
彼の妻となつた女は、彼の空虚な心を埋め、安らぎを与える。  
女の愛は、彼を殺戮人形からただの人に戻したのだ。  
女は彼の子を身籠り、  
彼に人の心を与え、  
そして、

最愛の彼との子供を産み落とした後、静かにその生涯の幕を下ろした。

人に戻つた彼は、妻の忘れ形見である子供を不器用ながらも教えられた愛で育てた。

彼の不器用な愛を一身に受け、子供は妻の面影を色濃く残し、美しく成長していった。

そんな最愛の子供に、彼が『護身術』として自身の悪魔じみた業を教えた事実を知る者は少なかった

Original Novel

追憶のシオン

第？章 『水鏡紫苑』

「なんと」

半人半蛇の化生      キーリニヤの口から呆けたように驚愕の声が漏れる。

視線の先。

彼女の瞳の中に、吟遊詩人が謡う物語が現実として映っていた。

炎を纏う戦乙女が、醜悪な怪物に立ち向かい見事その首を刎ねる。まさに英雄譚の一節を彩るに相応しい光景。

ずん、と胴体と泣き別れになったミノタウロスの頭部が重い音と共に地面に帰還する。

その斬首のされた断面には、未だチロチロ、と燃える斧槍ハルバートの残火が燻っていた。

ミノタウロスの首を落とさんと飛翔していた戦乙女      アルトリ  
ーゼが軽やかに着地。

マナを伴った呼気は、魔動の体裁を成し、火の息となってアルトの唇から吐き出された。

「フウウウ……………」

眼前には未だ鉄斧を振りかぶったままの状態の首無し死体。

その死体がアルトの吐息で時間を思い出したように後ろに崩れ落ちていく。

ズウウン。

腹の底に響く大音量を伴い三本角のミノタウロスは完全に沈黙した。

「お疲れ様です、アルトさん」

「実力で勝っていた訳ではない。シオンが居なければ、死に絶えて

いたのは私の方だ」

「でも、『冒険者は個人の實力では無く、パーティの力量を見る』と仰ったのもアルトさんじゃないですか」

「違うない」

むす、とぶつきらぼつに吐かれた言葉にくすくす、と控え目に笑うシオン。

見た目美少女が笑う、それだけで辛気臭い遺跡内でシオンの周囲だけ華やいだ雰囲気形成された。

アルトは一本取られたとばかりに肩を竦め、纏わりつく炎の残滓を散らした。

三本角のミノタウロス。

アルトリーゼに首を刎ねられたこの魔物は、通常のミノタウロスの亜種だった。

当り前なミノタウロスの角の本数は、二本が原則。

彼ら牛頭の魔物にとって角とは強さの象徴。

基本的に角が長大で雄々しいほど、個体として強靱であるとされている。

その角が三本。

少なく見積もっても討伐難易度のランクが一ランクほど跳ね上がるのは確実だろう。

だが、ミノタウロスという種は、存在の魔力をその強靱な肉体を形成する為だけに割り振ってしまう。

その為、彼ら牛頭の怪物は魔法に類する奇蹟を一切使用する事が出来ない。

そして、その巨体さを除けば、人の人体構造と然程変わらぬ人型

であるという事。

この二点がある故に、この種族のシオンとの相性は致命的なまでに最悪である。

微細な金属糸で肉体に干渉するシオンと、己が肉体のみで獲物を狩らねばならないミノタウロス。

双方の殺し合いは、鬨ぎ合う前から勝敗が決定づけられていたのだった。

牛頭の怪物の死という結末で

「ヤドック！ 魔霊珠まれいじゆを集めておけ。フェアリートーチ分の役にも立っていないのだから、キビキビ働かんかッ！」

「は、ハイッス！」

アルトリーゼの獅子奮迅の活躍ぶりに、口をぽかんと開けて見惚れていたヤドックが一喝で我に返る。

彼は血相を変えて駆け出し、シオン達を通り過ぎてミノタウロスの死骸へと向かっていった。

其処には既にミノタウロスの巨体がぼんやりと輪郭を崩し、螢火の光と共に消え去っていく光景が広がっていた。

死体が消えら後に残ったのは、幾つもの紫に煌めく光。

それは市場にて、高価な値段で取引される魔力の結晶体まれい 魔霊珠じゆの良質な輝きであった。

「差し出がましい真似でしたか？」

脅威が過ぎ去った後、控え目な問いがキーリニヤの耳朶に響いた。問いかけの発言者は、つややかな濡れ羽色をした長い髪を一房に結わえた少女　ではなく。

少女然とした面立ちの少年　シオンだった。

既に先刻の一響より平静を取り戻していたキーリニヤは、問いの返答をふむ、と顎に手を当て一考する。

元よりシオン達一行の介入を拒んだ理由は、本音でもあり建前でもあった。

縄張り争いに第三者の手を借りる事は、キーリニヤの矜持が許しはしない。

これは嘘偽りでは無い。

しかし、シオン達は降り掛かるであろう火の粉を払っただけという見方も出来る。

否、つらつら核心に迫らぬ上辺を言い繕うのは止そう。

本音を言えば、キーリニヤはシオン個人を三本角のミノタウロスから護ろうとしたのだ。

それは母性本能からくる未成熟なシオンへの庇護欲であり、また彼本人の性格が得難いものだったからである。

結果的にはシオンの反則じみた繰糸くりいとの業と、

アルトリーゼの人間離れた身体能力の組み合わせで、危な気無く首級をあげてしまったのだが

「……否である。確かにお前達の介入は業腹ではあったが、我の稚児を多少とはいえ想つての事。

なによりシオン、お前ほど快い人間の話し相手は、生を授かつてから初めてだ。大事に至らなく嬉しく思うぞ」

心の悶着が腑に落ちたキーリニヤは、シオンを不敵な表情で労う。チロリ、と満足気に赤い舌が美貌を這った。

「ふむ、恩義には礼を。武勇には褒美が無くてはな　シオン、ちこつ寄れ」

ふと、名案を思い付いたかのようにキーリニヤが接近を提案する。手招きをする半裸の、枕詞に絶世がつく美女。

だが、如何にキーリニヤが人外の相貌を持つとはいえ、はいそうですか、と言って罫まはを巻いている蛇の化け物に近づく常人は居ない。

だからこそ。

「あつ、おいシオン！」

「悪い癖が出たか」

戸惑いも無く楚々とした足取りで近づくシオンに、ヤドックは突然の事態で呆気にとられ、

アルトはまたか、と痛むこめかみを揉みほぐした。

無論シオンとて相手に害意も敵意も一片たりとも感じられぬからこそその行動である。

「くく、愛い奴よ。もそつと、ちこつ寄れ」

「此処、ですか？」

「うむうむ」

その逡巡の無い振る舞いに、キーリニヤは更に満悦し、純白の尻尾がフリフリと揺れた。

そして、

キーリニヤは十分に近付いた頃を見計らい、その蛇の下半身で自身とシオンを取り囲むように『巻き付き始めた』。

二人を囲み終わった色素の存在しない蛇腹はその内部で、発達途上の瑞々しい太腿から這い回って往き、

金刺繍で縁取った腰マントの下の小振りな臀部、

肉付きの薄い胸元、

ほっそりと儂い首筋へと順に巻き付いていく。

ぬめり、と蛇特有の鱗のざらついた感触がシオンの肌を舐める。

シオンは大木すら容易くへし折れるラミアの抱擁に動じる事無く、時折くすぐったそうに身を擦るだけで終始為すが儘だった。

「ひんやりしてる」

言葉と共に生じる呼気が互いの頬を撫でる至近距離。

血濡れた赤き瞳と、蒼穹の蒼き瞳。

成熟した美貌と、未完成で完成された美貌が見合う中、シオンの素直な感想がキーリニヤの鼓膜を震わせた。

率直な感想に、キーリニヤは二股の真つ赤な舌を使い、頬を舐める事で返した。

ラミアが蛇の半身を巻き付ける行為には、二種類の意味合いがある。

一つは獲物を捕食する為に行われる、強靱な筋力による締め付け行為。

そしてもう一つ。

ラミアの雌雄の交尾時、互いが巻き付き合い生殖行為をする生態に端を発する『愛情表現』であるという事。

「私の膨らんだ腹が気になるか？」

「はい、こんなに近くで妊婦さんを見たのはじめてで」

「ならば特別に許す。触れてみるがいい」

「いいんですか？」

「うむ」

小首を傾げて確認を取るシオンに、キーリニヤは抱擁を緩め、腕をある程度自由にさせる。

白魚の様な指の掌が、透ける紫の薄布越し、ラミアの妊婦腹におそるおそる触れた。

あつたかい。

キーリニヤの膨らんだ腹部　ぬくもりの揺り籠の中に新たな生命が息衝いている。

その事実、生命の神秘にシオンは不思議な心持ちになった。  
トン。

不意に、触れていた部分から返答が送られて来た。

シオンの長い睫毛の瞳が、少しの驚きに見開かれる。

「赤ちゃんが、蹴った？」

「正確には我が稚児しやぎの尾が叩いたのだがな。くく、此度孕んだ子は卵でないからの、はよう産めとせつついてたまらぬわ」

真つ白な手がシオンの手と重ねられ、導くように愛しげに腹を撫ぜる。

一般的に謎に包まれているラミアの生態。

その一つにラミアの出産がある。

眷属を増やす為に行われる卵生、そして次代の命　自身の形質を受け継ぐ子供を産む胎生。

ラミアがこの二種の産み分けをする魔物である事実を知る生物学者はそう多くないのだ。

「それにしても見惚れるほど真に美しい瞳よの。初見の時分は深き海の色合いかと思えば、今は大空の澄んだ様相をしておる」

「父の瞳と同じですから」

和風の雰囲気を醸す面立ちの中で唯一異国の薫りを放つ瞳は、父の血の賜物。

送られる手放しの賛辞にシオンは、気恥ずかしげに頬を染め、けれども口元は嬉しそうに緩んでいた。

その愛くるしい仕草は、彼が父親をどのように想っているのかを如実に表していた。

「愛いのう、実に愛い。そうだシオン、我の乳を飲み、我が子供にならんか？」

ぷるん、と突き出される丸い曲線を描く豊かな双丘。

胸部を覆う少ない布地では隠しきれず、

上部からは真っ白い谷間がくつきりと見え、下部からははみ出した乳房が下弦を描いていた。

「……俺には帰る家がありますから」

目と鼻の先に突き付けられた胸から目を逸らしながらも、シオンははつきりと申し出を拒否した。

「うぬう……そうか。残念だが、帰るべき巣があるのであれば無理

強いはできんな。

しかし『俺』とな？　なんとも似つかわしくない物言いをする「

不可解な、とでも言いたげにキーリニヤは首を傾げる。

その拍子に真ん中で分けた長すぎる白髪がさらり、と流れ落ちた。シオンはキーリニヤの反応に苦笑い。

第三者から自分の容姿がどのように見られるのか、シオンは誰に指摘されなくても十分過ぎるほど理解している。

初見で性別が見抜かれた事など、彼の短い人生経験の中で無いのだから。

「似合っていないのは常々自覚してますが、せめて一人称くらいは『男らしく』と思っけていまして「

なにぶんれっきとした男の子ですから。

桜色の唇から告げられた性別に、キーリニヤの時計の秒針が暫し動きを止めた。

一秒、二秒、きつちり三秒経ってからの再起動。

「男、であるか？」

「はい」

キーリニヤは蛇尾に甘締めされているシオンを、じつとり嘗めるように観察する。

黒色のハイネックインナーを着込んだ胸部分は、年相応に在る筈の膨らみが無く、絶壁。

全体として見たシオンはどこことなく女性特有のふくよかさが見受けられなく、肉付きの薄さが気になった。

それでもよくよく観察してみればの話であるが。

「ちよつと脱いでみぬか？」

「それはご遠慮します」

「……で、あるか」

「ん」

人目に肌を晒す趣味の無いシオンは、申し出を一蹴。  
なんとも言えない沈黙が二人の間を支配した

「しかしシオンは男であつたか………ならば我の稚児が娘の子だ  
つたのなら嫁として娶らぬか？ 名案であろう？」

我の娘なれば、さぞかし器量良しに育つぞ？」

「キーリニヤさん、流石に気が早すぎますよ」

「談笑の最中に済まないが、此方の目的を果たさせてもらつてもい  
いか？」

会話の話題が、シオンの見合い話に移り始めた頃。

話の華を咲かせ続ける二人に待ったをかける人物が居た。

色鮮やかな深紅の髪を高い位置で一纏めにし、ミノタウロスとの  
大立回りを繰り広げた軽鎧の女性     アルトリーゼだ。

話の腰を折られたキーリニヤは急下降を辿る機嫌を隠そうとせず、刺すような視線を送る。

負けじとアルトも瞳の瞳孔を縦に割り、鋭い視線に真っ向から対峙する。

互いに色調は違えど、赤い瞳を持つ女同士。

背後に付き従っていたヤドツクの胃がキリキリと声無き悲鳴を上げる。

その重圧は、スライムに溶かされた方が良くくらいヤドツクの胃に多大な損害を与えていた。

「仕方あるまい。楽しき時は早々に立ち去って行くもの」

意外にも先に折れたのは、キーリニヤの方からであった。

滑り、と光沢を放つ純白で長大な下半身を蠢かし、名残惜しげにシオンの拘束を解いていった。

抱擁を解かれ、とん、と地面になめし革のブーツを落ち着けるシオン。

ふわり、と金刺繍の腰マントが広がった。

「さて、女。改めて聞こうか、何用得巢に参った？ ……まあ見当は付いているがの」

打って変わり、退廃的で気怠げな表情で問うキーリニヤ。

元よりこの雰囲気こそがラミアの人間に対する正しい対応なのだろう。

身に纏う魔力故か、彼女からは墮落へと誘う色香が匂い立っている。

「私達は其処にある秘蹟礼装を求めて此処に潜ってきた。出来れば譲って頂きたい」

「やはりか……シオンもお前達と同様の腹積りか？」

「元よりシユージェルト古代地下神殿の探索は、シオンからの依頼だ」

こくん、と依頼主　シオンがキーリニヤの傍らで頷き同意を示す。

「そうか、シオンが所望しておったか。先にも言ったが武勇には褒美を　我には必要の無いもの故、好きに持って行くがいい」

視線を石造りの祭壇の上に流し、キーリニヤは所有権をシオンに譲った。

その下賜の許しに一際沸いた人物はヤドックだった。  
秘蹟礼装は冒険者にとって一獲千金の象徴。

盗賊稼業で日々の糧を繋いでいた時期や、監獄で臭い飯を食べていたヤドックにとって、漸く巡ってきた人生の栄耀。  
ギルドランク『F』の底辺がお零れとはいえ掴んだ大金星であった。

「や、やったツス！！　これで俺達大金持ちだーっ！！」

「こら、なにやっとなるか」

「あべっ！！！」

我先にと秘蹟礼装の安置された祭壇に向かうヤドックの顔を、  
純白の尾がしたたかに打ち据えた。

もんどりうって転がり落ちるヤドック。

その情けない有様を冷ややかに見下ろすキーリニヤ。

彼女は『小さな妖精の案内』<sup>フェアリートーチ</sup>分の活躍を魅せていない男が、一番に褒賞を手にする事が気に食わなかった。

アルトも概ね同じ考えで醜態を見せる馬鹿弟子に溜息を吐いていた。

「自重しろ、馬鹿弟子」

「如何にもである。勇無き者が財ばかり欲し喚くな、胎教に悪い」

合致した二人の息。

時間さえあれば種族を越えて友情を育めそうなほど彼女達の息は合っていた。

一方、シオンは埃塗れになったヤドックに駆け寄り、手を差し伸べる。

黒シルクの長手袋に包まれた細い手で立ち上がる手助けをしてもらうヤドック。

握った掌は、旅慣れていない繊細で儂げな印象を受けた。

「シオン、馬鹿弟子は放っておけ。さつさと礼装を持って街に帰還するぞ」

「あつ、はい。これ使ってくださいね、ヤドックさん」

パチン、と小気味好い音と共にベルトのポーチが開かれ、取り出したハンカチを手渡される。

藍に染められた趣味の良いハンカチ。

ヤドックは手に残るシオンの掌の感触を思い出しながら、祭壇を駆け登っていく小さな背中を見続けていた。

いい子だなあ……あれが女の子ならなあ……

ギルドランク最底辺『F』の元盗賊の新米冒険者。

人生の大半、人間の汚い部分と接してきた彼にとって、

細かい所にもよく気が付き、そして外見は掛け値なしの美少女の

シオン。

さらに将来良妻賢母が確実な大和撫子の性格は、性別さえ度外視すれば嫁にしたい候補単独首位であった。

台座の上。

其処には理外の理で浮遊する一つの短剣。

鍔は無く、柄と刀身で構成された簡素な造りだが、柄頭やグリッ  
プ部分には最低限宝石などで装飾されていた。

しかし、控え目な装飾の中、一際目を惹く箇所はその刀身。

光を一切反射しない、まるで光そのものを吸収しているかのような漆黒の刃部。

見る者を惹き込む魔性の色合いが、その秘蹟礼装には在った。

シオンはその黒剣をそつと手にする。

瞬間。

理外の力は消え行き、ずしりと金属の重さが手に加わる。

短剣を翳して観察するが、其処にあるのは光を忌避する闇色の刀身。

「どのような代物か分かるか？」

秘蹟礼装とは古代の魔導技術の結晶。

その奇蹟を知り得るには、大まかに三種類の方法がある。

一つ、残存する少ない礼装の文献を長い時間かけて解読。

一つ、解析の魔法『知識人の見解』ディテクト・マジックの詠唱。

そして、実際に使用してみるという方法とも言えない最後の選択肢。

遺跡探索前の事前調査は基本中の基本だが、

シオン達の調べた範囲では、シューゲルト古代地下神殿に関する文献の殆どが散逸。

とても最深部に安置された秘蹟礼装の奇蹟を知り得るに至らなかった。

「ん」

シオンの眼が細まり、魔動で『知識人の見解』ディテクト・マジックが発現。

片目に大気のマナの集束。

金の光を伴って、モノクル（片眼鏡）のような円環状の魔法陣が形成された。

《……………葬…………… 仕様……………遺体を……………灰……………黒……………》

だが、円環の魔法陣を介して、脳に送られてくる情報は継ぎ接ぎだらけ。

意味の為さない単語の羅列だけが分かった。

元より現代の魔法で秘蹟礼装を解析する試みの方が無謀なのだ。

故に大抵の場合、『知識人の見識』ディテクト・マジックを使つての解析は、理解できれば御の字程度の感覚で行われている。

しかし、突然。

シオンの後ろ腰　革の鞘で固定されたショートソードが刹那、金の光線が幾何学的に刀身表面を奔る。

まばたきに満たない僅かな間。

一瞬の事に、シオンの背後に居たアルトは見間違えかと思った。

礼装名『常闇の埋葬』。

約2100年前の魔導機械時代中期の祭具。

葬儀の際に使用される儀式剣。

柄頭に取り付けられた宝石に魔力を送り込むと発動。

対象を切り付けると物質的な存在情報が破壊され、黒い灰に変換される。

その効果を用いて遺体の葬送としていた。

ショートソードが煌めいた直後、継ぎ接ぎだらけだった情報が整合性を帯び、

理路整然とした秘蹟礼装の知識が、シオンの脳に刻まれる。

「お葬式の際に使われる儀礼用の剣です。これで親族の方が亡くなった人を刺して、灰へと帰す使い方みたいですね」

「『？等級礼装』程度か」

「ですね。発動中ならかすり傷でも致命傷です」

「それはまた物騒な……」

古えの工芸品アーティファクトを一括りに秘蹟礼装と呼称すれど、その奇蹟の規模は千差万別。

故に秘蹟礼装は、顕現する奇蹟の規格に応じて大まかな等級が定められている。

等級は？から？まで数字が割り振られ、数が小さくなるほど礼装

の階梯は超常の色合いを色濃くしていく。

掌中にした『常闇の埋葬』の等級は『?』。

下から二番目の等級といえども『?等級礼装』は、個人間で絶大な影響を齎す等級と定義付けられている。

一介の冒険者パーティが獲得するには、十分過ぎる等級礼装だ。

「ではアルトさん、契約内容通りに」

「ああ、元々お前からの依頼だ。異論は無い、好きにしてくれ」

雇用関係を結んだアルトからの認可に、シオンはこくん、と頷いた。

『常闇の埋葬』を両手で胸に抱く。

そして、シオンは敬虔な信者が祈りを捧げるように祭祀の祭壇で膝を着き、蒼い瞳を瞼で隠した。

変化は直後に訪れる。

ぼつり、ぼつりとマナの蛍火が、髪、背中、胸、脚の至る所より生じ、泡沫の如く浮かんでは消える。

唐突。

胸に抱いた秘蹟礼装『常闇の埋葬』から蒼白いマナの奔流が爆発的に拡がり、シオンの小柄な体躯を包み込む。

秘蹟礼装の内部に蓄積された『純なる魔力』が外へ、外へと。

行き付く先は、祈りを捧げる『少年アリス』。

最初からシオンの探索目的は秘蹟礼装では無かった。

金、名誉を追い求める冒険者の常識では異端の行動。

だが、シオンには為さねばならない宣誓がある。

故に切望し、希求し、渴望する。

少年アリスはマナを欲す

「本当に良いのだな？」

斜陽が地上のシューゲルト遺跡跡を朱色に染める黄昏刻。

東の空が夜闇の訪れを告げる頃にアルトリーゼの言葉が宙を泳いだ。

シューゲルト古代地下神殿の地上部。

崩れた遺跡群に植物の蔦が絡み付き、緑が覆い、過去の栄華を今に虚しく伝えている。

秘蹟礼装の魔力を吸い終えた後、キーリニヤとの別れを済ませたパーティは地下聖堂より帰還していた。

三人組パーティの一人。

夕暮れの朱より、尚も赤い赤毛を誇る長躯の女性　アルトリーゼが確認の意を込めて、シオンに問うた。

「はい。あまり名誉とかに心惹かれる性分ではありませんから」

夕日を浴び、遺跡群に伸びる三つの影の中。

はつきりとシオンは自身の意見を、その可憐な唇から主張した。

告げられる返答にアルトは何処か納得のいかない気難しげな表情をする。

その原因。

光を嫌う闇色の短剣『常闇の埋葬』がアルトの手甲を纏った掌で玩ばれていた。

《探索の際に発見された秘蹟礼装の所有権は全てアルトリーゼックルスバーク、ヤドックの以下二名に譲り、如何なる秘蹟礼装であっても契約主であるシオンは一切の異論を唱えない》

これが事前にシオン達の間で交わされた契約内容である。

一般の冒険者が契約書類に目を通せば、百人中が百人が仰天する内容。

契約主であるシオンの旨味があまりにも少ないのだ。

アルトのギルド・ランク『A』の評価は伊達ではない。

彼女を雇おうとすると、普通の一世帯家族が半年間生活できる100金貨が最低でも必要だ。

既に前金の50金貨を受取り、街に戻ればギルド窓口より残りの半分が受け取れる手筈となっている。

にも関わらずシオンは、最大の収穫である秘蹟礼装の所有権を放棄する契約を提示。

そんな馬鹿げた契約では、黒字など夢のまた夢で大赤字である。

綺麗事だけでは冒険者稼業を続けて行けない事を重々承知しているアルト。

だが、此処まで一方が利を得るのは些か気が引ける。

ましてシオンは十五に満たない少年。

年長者としてアルトの懊悩は当然だった。

「……受け取れシオン」

ぼす、と軽い音を立て、シオンの胸元に小袋が投げ渡される。緩くなった紐の封の隙間から魔霊珠の輝きが漏れていた。

此度の探索で獲得した魔霊珠の全てが、その小袋の中身に在った。

「こんなに……受け取れません」

返却を履行しようとしたシオンの手。

しかしその手は真紅の手甲を装着した手によって阻まれ、やんわりと胸に戻された。

「収めておけ。こんな稼業だ、金は幾らあっても困る事はない。私達の報酬は秘蹟礼装分だけ十分なお釣りが来る。」

それにシオン……先輩の好意を後輩が無碍にするものではない」「アルトさん……はい、有難う御座います」

深々と頭を下げ礼を述べる黒髪の後輩。

そんなに畏まられても困るのだがな、と口の中で転がしアルトは苦笑いを浮かべた。

「奥床しい、とでも言うのか……たまにその性格で荒くれ者の集まる冒険者が務まるのか心配になって来る。」

まあ、お前の美德でもあるのだがな」

「そんな……ただ人の顔色をうかがうのが得意なだけですよ」

謙遜。

頭に二文字が浮かんだが、アルトが口に出す事はしなかった。

言葉の形にして出した所でシオンは素直に認めないであろう事が容易く予想出来たからだ。

だが、シオンのその気質故に魔物と親愛の情を交わせる。  
今、この瞬間のように

三人が遺跡群を抜け、シューゲルト古代地下神殿を囲む雑木林に  
差し掛かる頃。

突然、一つの燐光が林から飛び出し、シオンに目掛け直進して  
くる。

あわや衝突。

と思うほど至近距離まで接近した光は、軽やかな旋回を見せ、シ  
オンを周囲を飛び回る。

その様は主人に懐く犬を思わせた。

目を凝らすと燐光の中心には小さな人型をした生物。

掌サイズの小人が背中に着いた蜻蛉のように透明で澄んだ羽で飛  
んでいる。

「全く、本当にシオンにはフェアリーが良く懐く」

感心と呆れ。

二つの感情が緋い交ぜになった感想をアルトが静かに零す。

妖精種フェアリー。

『蒼の大地』の全域に生息するこの小さな隣人の性質を一言で述  
べるなら『気まぐれ』。

森や林など澄んだ空気を好み、街などでもよく見掛けるが滅多に  
人には近づこうとしない。

かと思えば悪戯好きで、魔法を使って人を転ばしたり、物を盗ん

だり、悪い意味で人と関わりがあつたりする。

『物が消えたら、それはフェアリーの仕業』と言った諺はフェアリーの性格を上手く表している。

そんなフェアリーだが誰彼にも無差別に悪戯を敢行している訳ではない。

気に入った者に対しては驚くほど友好的で真摯に接してくれるのだ。

フェアリーに気に入られた樵まきこりが森の深い場所に迷い込んだ時、何処からともなく現れた一匹のフェアリーが正しい帰路へと導いてくれた、と言った逸話など数え切れないほどあるのだから。

シオンもまた、そんな小さな隣人のお気に入りの人間であつた。

「あつ、御免ね。お菓子はもう無いんだ」

つん、とシオンの頬を突いて食べ物物の催促をするフェアリー。

しかし、こういった時の為に持ち歩いていた甘味は既に犬頭の胃袋の中。

機嫌を損ねたフェアリーが再度シオンの頬をつついて飛び去る。

雑木林の闇に消えていく燐光を目で追うと、闇の向こうで『白い巨大な影』がのそり、と蠢いた

それはギルドから将来有望な新人のシオンへと贈られた二つ名。だが、シオンには『少年アリス』とは別にもう一つ、冒険者達の間で噂される二つ名があった。

その名は 『狼王の君』。

雑木林の奥より姿を現した白い影。

大きい。

この一言に尽きた。

大きさだけで言えば地下神殿で遭遇したミノタウロスを優に凌駕するほどの白い体毛に覆われた体躯。

鋭く生え揃った巨牙に、成人男性を簡単に飲み込んでしまえそうな大口。

見る者の背筋に氷柱を突き刺す二対のアイスブルーの瞳。

相対はすなわち死。

ただ其処に存在するだけで放たれる圧倒的存在感。

それが氷狼フェンリルの系譜に連なる巨狼『白狼王』だった。

「シロ」

白狼の登場にシオンが巨軀に向かって駆け出す。

その顔に畏れは無く、年相応のあどけない笑みが浮かんでいた。

シロ、と呼ばれた巨狼はゆっくりと首を地面に下ろし、その顔にシオンが抱き付いた。

毛並み豊かな感触がシオンを包み、お日様と森の香りがほのかに香る。

顔面に纏わりつく人間に嫌な顔一つ見せずにされるがままの白狼王。

それどころかその巨大すぎる尻尾がぶんぶん、と風を切り裂いて振られていた。

相当な上機嫌である。

唐突、一人と一匹の抱擁は終わりを告げる。

器用にシオンの小柄な身体を鼻先に乗せて、シロが勢いよく首を上げた。

ふわり、と重力から解放され、宙に放り出される軽すぎる体重。

そのまま中空で体勢を整えたシオンはとさり、と軽い音と共にシロの広い背中に着地した。

ちよこんと足を揃えた横座りの格好。

「すこし待ってシロ」

踵を返し、雑木林の向こう側 街道沿いに歩を進めようとする

巨狼にシオンが制止を掛ける。

背に乗った騎手の意に沿い、シロは足を止めた。

白狼王の背に乗せられ、相対的に高くなった視線でシオンはアルト達を見下ろす。

「高い所から失礼します。一足先にラタトクスの街まで帰っていますね」

「ああ、構わん。どうせ馬では白狼王の足には追いつけん。先に帰還してギルドで報告を済ませて置いてくれ」

「はい。それではお邪魔虫は早々に去りますね」

「っな、こらシオンッ」

非難の声を上げるアルトに手の甲で口元を隠し、くすくすと愉快そうにシオンは笑う。

何故かこの時だけは、清純な少女然としていたシオンが、噂話が大好きな近所のおばさん風に思えた。

いきなりのシオンの言葉にアルトは、その頬を真紅の髪と同色に染め、怒鳴る。

隣で照れたように頭を掻くヤドックの尻に照れ隠しとばかりに蹴りを入れるアルト。

怒られては敵わないと、シオンはシロを急かし、巨体を疾駆させた。

巨狼の並外れた脚力に裏打ちされた速度は馬の比では無く、直ぐに豆粒程度まで一人と一匹の後姿は小さくなっていった。

遺跡跡に残されたのはギルドランク『A』のアルトリーゼと新米冒険者のヤドック。

互いの間に鎮座するのは微妙な空気。

ヤドックと目を合わせぬようにそっぽを向いたアルトの頬は、斜陽では隠しきれない朱が散っていた。

巨大な筋肉の躍動。

其処から生まれる慮外の速度を以って、白狼王は夜闇の帳が落ちた街道を駆ける。

背に跨る小軀のシオンに負担を掛けぬよう気を割きながら、それでもシロと名付けられた巨狼は、名馬を凌駕する速度を保っていた。

風がシオンの流麗な黒髪を攫う。

注がれる視線の先は、星々が燦然と散りばめられた満天の夜空。ただ、シオンの『常識』との差異を挙げるとすれば、それは月。地球から身上げる不毛の大地の月と比べ、『蒼の大地』を照らす月は青く、そして緑に覆われていた。

それは、まさしく生命に満ち溢れた星の輝き。なんと彩色に富んだ世界なのであろうか。

生命の輝きを発する月は、夜を駆けるシロと、その背に乗るシオンを平等に照らしていた。

《変わり映えのせぬ空ばかり眺めて楽しいか？》  
「バル？」

隠しきれない艶を含んだ声がシオンの耳朵を打つ。

コボルトとの遭遇時と同様、周囲にシオン以外の人間はいない。だが。

何が色香を滲ませる女の声を喋っているのかは分かった。

それは、闇の中で発光し、明滅するシオンの後ろ腰に取り付けられたショートソード。

この無機物がシオンと会話をしていたのだった。

それは更に眩く発光すると、形を変貌させた。

『白い』。

何処にでもありそうな無骨なショートソードは、柄頭から刀身の切っ先に至るまで、総てが無垢な白さを誇る流麗な剣へと、その姿を変えた。

バルトアンデルス。

それがシオンの持つ秘蹟礼装の銘であった。

「あまり楽しくは無いか。ただ……此処で見る空は月以外似過ぎ  
ていて、少し……つらいです」

《……やはり望郷への念は薄れず、か？》  
「当然」

問われた帰郷の意思は、二文字で即答された。  
それきり一人と一本との間に会話が途切れた。  
びゅうびゅう、と俊馬の背に乗るよりもなお冷たい風がシオンの  
身体を吹き付ける。

無言のまま、シオンは夜の空に、その蒼い瞳の視線を注ぎ続ける。  
そして。

ぼつりと、唇が震え、言葉が零れる。

「もう、一年になるんですね」  
《そう、さな》

俺が、死んでから。

齢十五にも満たない少年 『みかがみ・しおん水鏡紫苑』の口から零れた望郷の

言葉は、元居た地球に届くことなく、

『蒼の大地』の空へと溶けて消えた。

## 第？章『冒険者』

まるで自動車同士が正面衝突を起こしたような巨大な激突音が朝の閑散とした街並みに轟きわたった。

その音は決して人と5トンを越す大型車両が激突して奏でられる音では無い。

決して人通りが多くはなかったが、少ないながら外に出ていた人達は激突音に身を竦ませ、事態を目の当たりにした時、自分の目を疑った。

大と小の対比。

在り得ない事態。

少女と見紛う小柄な少年が確かに、幼馴染みの少女に死の魔手を伸ばしていたトラックを 止めていた。

しかしその奇蹟を起こすために支払われた代価はあまりにも大きい。

トラックを手で、腕で、頭で、そして全身で受け止めた少年

紫苑の姿は最早ボロボロだった。

当然だ。人間が走るトラックの内包していた運動エネルギー全てを受けて無事で済むはずが無い。

例え、目のブレーキでその総量が減衰していても。

両手全ての指の骨は複雑骨折。

その手を支える両腕も本来曲がる筈の無い方向に折れ曲がっている。

衝突した際、接触した頭部は一部陥没し、元の秀麗な顔には血液の化粧が顔全体に施されていた。

更に内臓の損傷も尋常では無かった。

幾つかの生命維持に必要な臓器は破裂し、もはや使い物に

なりはしない。

紫苑は既に死に体。

未だ息をしている方が不思議なほど満身創痍であった。  
ぐらり。

今の今までその矮小な体躯で鉄の箱船の猛威を一身に受け止めていた紫苑の体が崩れ落ちる。

「……………しー……………ちゃん？」

檻褻切れ同然の状態でアスファルトの地面に転がる紫苑。

呆然と、自体の推移についていけない助けられた少女はうわ言のように呟いた。

ヒュー、ヒュー、と喉からか細い呼吸が漏れる中、紫苑は己の身を投げ出して守り抜いた少女の呆然とした声が耳朵を震わすを感じた。

もはや顔を声の方向に向けることも出来ない。

しかし、少年は安著して、後悔した。

親愛に似た、まだ恋心とも言えない淡い萌芽前の感情を向ける少女が無事だったこと。

そして、身に駆け巡る灼熱の激痛よりも深い後悔は、

「イヤあああつああああつあ！！！！」

その少女に深く重い傷痕を遺してしまうこと。

ゴボツ、口から粘性の高い血液が零れ落ちる。

未成熟の体から熱い何かが少ない、少しずつ漏れ出していく。

アスファルトに舗装された地面が赤い、朱い、紅い絵の具に彩られる。

トクトク、トクトク……………、と。

心の臓の脈動は時を追うごとに小さく、儚く。

視界がまるで黄昏時を早送りしたように徐々に暗闇に染まってい

く。  
誰かがその死にゆく肉体に触れた。

紫苑は見た。半狂乱になって己の名を呼ぶ少女を。

いつもの無表情で感情の起伏が見えにくい彼女が見る影もない。

その顔は涙に濡れてぐしゃぐしゃだった。

嗚呼、と紫苑は想う。

泣かないで、とそしてそれが無理な願いだと同時に悟る。

そんな言葉を伝えたいんじゃない。

己はもう助からない。確定された未来、事実。

だから、

「とも……ちや……ん、……ぶ……じ？……」

大好きだよ。

動かす事が出来ない機能しなくなった両の腕が恨めしい。

彼女の頬を伝う涙さえもう拭う事も叶わない。

だから、

「よかつ……た……」

幸せになって。

それが貴女に贈る最期の言の葉

Original Novel

追憶のシオン

第?章『冒険者』

交錯の街『ラタトスク』。

国境線沿いに位置している為、様々な人種、種族が闊歩する交易の要となる街であった。

此処はその土地の性質上、地方の街とは比べ物にならないほど栄え、潤いに満ちている。

市場に赴けば、既に夜の帳が落ちているにも関わらず精霊灯の光に満ち、

開いている店先には手に入らない物は無いとばかりに食材で溢れ返り、商人の商いをする声飛び交っている。

彼らはもう一段落すれば店を閉め、妻子の小言を聞きながら酒場に足を運ぶのだろう。

夕暮れを過ぎ、闇が空を覆う頃になってもこの街は賑わいを見せていた。

そんな活気溢れる交錯の街『ラタトスク』の中央部。

雑多な建物が立ち並ぶ中で一際目を引く白亜に染められた壮麗な建物 『冒険者ギルド』。

その冒険者ギルドの内部。

大理石を敷き詰めた清潔感と統一性に優れたロビーの受付にて、一人のエルフの美丈夫が職務に励んでいた。

彼の名はツイーリィツヒ。

エルフ特有の流れる水のような腰まで伸ばされた金髪。鼻先に乗せた丸眼鏡の奥に隠れた涼やかな切れ長の眼。

受付の机に置かれた羊皮紙は、彼が羽ペンを動かす度、踊るように字を書き記されていく。

彼の一挙一動に職場を同じくする女性職員は悩ましい溜息を吐いた。

そんな恋する乙女達の様子に、仕事を受注しにきた荒くれ者の冒険者達は面白くなさそうに、けつ、と悪態を吐く。

此処、ラタトスクの冒険者ギルドでは見慣れた光景だった。

寡黙に己の職務をこなしていたツイーリィツヒの感覚器がある人物の魔力を捉えた。

彼は機械のように正確に動いていた手を止め、ふむ、と鼻先に乗せられた丸眼鏡を細い中指で押し上げた。

視線の先、重厚な冒険者ギルドの正面扉が静かに開かれる。開いた扉から姿を現した人物は可憐な少女であった。

ギルド内を照らす照明を柔らかく反射する艶ある長い黒髪。

まだ、少女の域を抜けきらない青い果実を思わせる瑞々しい小柄な身体。

黒いハイネックのノースリーブインナーや、カーキ色のショート

パンツとニーソックスの隙間から覗く白い絹肌。

どれ一つとつても非の打ち所のない少女は、周囲の視線をギルドに入った瞬間、独り占めにしていた。

少女　紫苑しおんは辺りから注がれる視線を気にした風もなく、一直線にツイーリツヒの元へ歩みを進めた。

身体に一本の芯が通ったような姿勢の良い歩みは、紫苑に注視していた余人が思わずほう、と溜息を吐くほど楚々として美しいものであった。

「『黒アリス』か。随分早い凱旋のようだが、他の二人は置いてきたと解釈して構わないようだな」

「はい、流石にシロに着いて来れるほどの馬はいませんし、歩調を合わせるとなると怯えてしまいますから。」

それと以前から言っているように『黒アリス』やら『少年アリス』と呼ぶのは止めていただけませんか？　言っても無駄でしょうけど」「分かつているのなら不毛な要求はせぬことだな。それにその二つ名達は最早ギルド内で定着しすぎていて変更は効かぬよ」

肩を竦め、いけしゃあしゃあと紫苑の二つ名を広めた張本人であるツイーリツヒは言つてのけた。

紫苑の方もこの性根が曲がったエルフの性格を熟知しているようで、少々残念そうに話題を流して本題に入る。

依頼主としての成功報告の為だ。

「受付番号58の依頼がアルトリーゼ「クルスバーク、ヤドツクの両名にて完遂された事を依頼主として証明しに来ました」

「ならばこの紙に受領印か本人自筆のサインを頼む」

差し出された依頼書の署名欄に紫苑は、紙と共に渡された羽ペンですらすらと自身の名を書き連ねていく。

異世界とはいえ一年も滞在していれば自分の名ぐらいは当然書けるようになっていく。

聖ティアラス共通言語で署名された文字は何処に出しても恥ずかしくない程度に綺麗に書かれていた。

「どうぞ」

「確かに受け取った。これにてナンバー58の依頼は達成されたのみなしアルトリーゼIIクルスバーク、ヤドック兩名に単位を追加しておこう。」

もともと『炎獅子』にとっては微々たるものではあるがな」

ギルドから依頼達成時に貰える単位とは、ランクに関係する点数の事である。

これが規定数に達することにより冒険者は上のランクに行けるシステムになっている。

「全体からみればそうかもしれませんが、本人にとってはそうでもないみたいですよ。向上心の強いお人ですから、アルトさんは。」

それに今回の遺跡探索では、三本角のミノタウロスの首級をあげていましたから、またアルトさんの話題で持ちきりなと思いますよ」

「ミノタウロスの亜種を討ち取るか……やはり凄まじいな。私達エルフからすればあんな筋肉達磨の種族の相手は御免蒙りたいがね」

肩を竦めて『炎獅子』アルトリーゼの武勇を称賛するツイーリィッピ。

其処には皮肉気な雰囲気はなく、純粋にアルトリーゼを称賛している様子であった。

「それはそうと、三丁目の薬屋がいつもの依頼をシオンに頼みたい  
そうだが？ 期限は一週間以内なら何時でもいいそうだ」

「ミーネお婆さんですか？ あの程度なら代金はいつもいいです  
と言っているのですが」

いつもの、とはラタトスクの街に店を持つ薬屋が紫苑に頼んでい  
る薬草の採集だ。

その依頼の催促に紫苑は少し困ったように秀麗な眉を八の字に曲  
げる。

薬草が自生している大抵の場所は紫苑の頭の中に入っている。

そして、街の外の採集になるとはいえ紫苑にとってはさほど苦に  
なるような依頼ではない。

大概の魔物はシロが近くにいれば寄ってくることもなく、植物系  
の魔物も撃退できるだけの力量を紫苑は備えていた。

行ってみれば近所へのお使い程度の依頼。

ギルドへの仲介料も勿体無いだろうに、と紫苑は考えていた。

「そう言っただけだ。要は孫みたいな奴にやる小遣いの建前だ。地  
元密着型の冒険者だからな『黒アリス』は」

「そう思っていただけなのは嬉しいのですが……」

「たかが百歳も超えていない餓鬼が遠慮なんぞするな」

ぴしゃり、とツイーリイッヒは紫苑の言い分を閉ざした。

長命種であるエルフのその台詞は無駄に説得力がある。

彼の強めの物言いに紫苑は眉を八の字にしたまま控え目に笑った。  
納得は余りしていないが好意は無碍にできない。

紫苑の薄い胸にその結論が落ち着いた。

「そうしておきます。俺はこの辺で失礼しますね。お仕事頑張ってください」

「ああ、早く帰れ。遅くなると『渡り鳥の止まり木』の女将が心配してまたギルドに怒鳴り込まれては敵わん」

既に依頼完了報告を済ませている紫苑は、薬屋の老婆に早々に薬草を採って来てあげようと考え、踵を返そうとした。

空に月が輝く頃とはいえ、まだ宵の初め。

『小さな妖精の案内』フェアリートーチを複数使用すれば暗がりだろう問題なく採集を行えるし、

急いで帰ってくれば、宿の夕飯に間に合う時間帯。だが。

バアン、とあらん限りの力で正面の扉が開け放たれた。

紫苑の思惑は、けたたましく開けられた扉によって変更を余儀なくされる事となる。

扉から転がり込んで来た中年の男性は叫んだ。

「さ、山賊が！ 『山猫の爪』が西の森に出たっ！！ ま、まだ魔導学院の生徒達に取り残されているんだ！」

交錯の街『ラタトスク』の夜はまだ終わらない

とん、と軽やかな音と共に黒く丈夫なブーツが煉瓦造りの屋根を蹴る。

ふわり、と紫苑の小さな身体が持ち上がり、魔動の光筋を残し夜空に跳躍する。

そう跳躍である。

ギルドの白亜の建物を、

孤児院の屋根を、

教会の時計塔を、僅か一足で飛び越える。

まるで背に羽根でもあるかのように紫苑は次々とラタトスクの空を飛び跳ねていた。

これこそ魔動の真髄。

妖精種の羽の大きさでは彼女等の体重を重力から解き放つ程の浮力は生まれない。

巨大な飛蜥蜴の翼膜でも同様の事がいえる。

ならば何故彼等は空を自由自在に飛行できるのか。

答えは魔動を行使しているからに他ならない。

世界に働きかける親和性を武器に彼等は、空を飛ぶという法則を掌握している。

魔動とは即ち、無意識化による法則の改竄。

『とある理由』により魔動を自由行使できる立場にある紫苑にとって、

屋根から屋根へ移動するという荒業は時間短縮の為にとられた極有り触れた選択肢の一つでしかない。

そして。

紫苑は街をぐるりと取り囲む高い赤茶けた街壁を踏破し、街の外に躍り出た。

「シロ」

決して大きくはない声量。

しかし、その澄んだ声はラタトスクの街空に良く浸透した。

巨大な白い影が街壁を『縦』に駆け上り、紫苑の元へと街壁が軋みを上げるほど力強く蹴り、近づいた。

緑溢れる月を上天に紫苑を影　シロは予定調和の如く背に跨らせた。

ズダン、と白狼王の巨軀が大地を踏み締め、操者の意思を組み、爆発的な加速力で駆ける。

白狼王の白い毛並みに、紫苑の黒い頭髪。主従を白と黒の軌跡を残し、風となった。

「『山猫の爪』、か。被害の程はどうなっている」

血相を変えて転がり込んで来た男に対し、ツィーリィッヒは顔色一つ変えず冷静に問うた。

商人風の服装をした男は息も絶え絶えにしながらツィーリィッヒの問いに矢継ぎ早に答える。

「人死には……まだ、出て無い筈だ！　隣町の積み荷を商隊で運んでいる最中に襲われたんだ！」

「して、魔道学院の生徒が何故居る？ 課外の依頼を請け負っていたのか？」

「ああ、その通りだ。一応護衛の任務ということで雇い入れていたんだ。」

「だがあの馬鹿餓鬼共よりもよって『山猫の爪』を壊滅させる腹積もりで突っ込んでいきやがった。止める暇もなかったんだ。」

無謀。

ギルド内の職員、冒険者の頭にはその二文字が過ぎった。

『山猫の爪』と言えば最近になって知名度を上げてきた山賊一味。最近他国で起こった戦争の際に脱走した兵士が加入した事により、勢力を急激に伸ばしたと町人達の間で噂されている。

事実、

被害を受け、生き残った者達の証言によれば、武器や防具もすっかりとした物に取って代わり、

その装備には他国の紋章があったと何人も商人が目撃している。

そんな凶悪な山賊一味に、優秀な人材を輩出している魔導学院とはいえ、卒業もしていない半端者が何人で挑んだ所で結果は見えていた。

「何人、残っている？」

「五人だ！ 本当ならお抱えの護衛も居たんだが積荷を守るの精一杯で生徒達の方まで手が回らなかったんだ。」

俺は商人頭の親方に言われて早馬でこっちに事情説明の為に寄越されてきたんだ！」

本来であれば、山賊に襲われた商隊が取る一般的な対処法は逃げの一手である。

地の利が山賊側にある以上、しんがり殿を護衛に任せ、近くの街に非難するか、

それが出来なければせめて最低限の迎撃で怯ませて、山賊が諦めるまで逃げなくてはならない。

一味の壊滅など国お抱えの軍か、複数の冒険者で設立されクランに任せておけばいいのだ。

商隊の護衛の任務に壊滅は最初から含まれていない。

「頼む！ 馬鹿をやったとは言えまだ年端もいつていない子供達なんだ。救出を頼みたい！ これはウチの商隊の総意と取ってくれてもいい！」

「見えた範囲でいい、『山猫の爪』の戦力は？」

「暗がりではハッキリとは見えなかったが、最低でも三十人はいたと思う」

「ふむ」

ツイーリツヒは思案するように丸眼鏡を指で押し上げる。

そして値踏みをするようにギルド内の冒険者を見渡した。

ツイーリツヒの鋭い眼光に晒された冒険者は、荒くれ者の顔に反してすぐさま眼を逸らす。

碌な者がいない、な。

彼の長き時を生きた頭脳は、救出はほぼ無理だと結論付けた。

早急に動かせる大規模な冒険者集団　クランは全て出払っている。

ギルド内を見回してみたが、『山猫の爪』を壊滅し、なお且つ魔導学院の生徒達を救出できるだけの腕前を持つ冒険者は居ない。

誰も彼も『C』クラス以下の者達であり、結成されているクランも五人以下の小規模クランばかり。

人手が圧倒的に不足していた。

「あの、ツイーリツヒさん」

しん、と静まり返ったギルドの受付で、鈴を転がす声が木霊した。声の発信源は黒髪を後ろにさらり、と流した枕詞に絶世の、と付く美少女。

ツイーリツヒを始め、ギルド内の全ての種族の視線が紫苑に集まる。

俺が、行きましようか？

幾重にも重なる剣戟の音色が、夜の森を木霊していた。

時刻でいえば野鳥が羽を休め、肉食動物や魔物が獲物を求めて彷徨う静かな刻限。

だが、そんな静けさを保つ森の一幕で激しい戦闘が行われていた。剣閃が閃き、魔術に造詣が深い者達が呪文を呟き、己が魔力を以って『法則魔術』を完遂させる。

火炎の舌が地面を舐め、極寒の妖精が踊り狂う。対立し合っている者達は少数と多数。

「《我は地を焦がす息吹 我は四大元素の一幕 我は》  
エル

！伏せて！」

学園で統一されている制服を着た亜麻色で二つおさげの女子生徒が叫ぶ。

エルザリースと呼ばれ、前衛で山賊三人を相手取っていた双剣使いの蒼髪少女が咄嗟に身を屈める。

そして、最後の一節が紡がれ、現世うつしよに魔術が顕現する。

「《猛る炎舞の麗人》」

瞬間。

おさげ二つを前に垂らした女子生徒　シンシアの掲げた両掌から人の頭部ほどある五つの炎弾が生まれた。

炎弾は木々を紅く照らしながら目標に向かって飛び出し、エルザリースと対峙していた三人の山賊と、後ろに控えていた二人に着弾した。

瞬時に燃え広がり、絶望の断末魔と共に五つの焼死体を作り出された。

しかし。

まだ安堵するには早すぎる。

なぜなら『山猫の爪』の構成人数全ては無力化できていないのだから。

「シンシアの大馬鹿野郎！俺達まで焼き殺すつもりかっ！」

「あっ！あの、その……ご、御免なさい！」

丸い鼻が特徴的なドワーフの少年がシンシアに向けて怒鳴る。

双剣使いのエルザリースに警告は出したものの他の者に出し忘れていた事に気付いたシンシアは慌てて謝る。

普段であれば絶対犯さない失態。

ひとえに実戦経験の無さから来る視野狭窄であった。  
事実、人を殺したことなど無かったシンシアは、その顔を真っ青に蒼褪めさせ、叱咤が飛ぶまで呆然と自分が作り上げた焼死体を見ていたのだから。

「ガラクの阿呆。僕達が無理やり引つ張ってきたんだからちよつとした失敗ぐらい許してやりなよ。」

それにシンシアは女の子なんだから野郎じゃないよ」

「『ちよつとした』じゃねえよっ！ 見るよこの髪の毛！ 掠ったんだぞ！」

ウオーハンマーを片手に持った身長の低いドワーフの少年　　ガラクがざつくばらんに切られた自身の茶髪を指差す。

その茶髪の毛先には焦げ目が付き、煙が僅かに漂っていた。

エルザリースはガラクの意見を一蹴したが、彼の言い分に他の二人の男子生徒も同意を示す。

「全くだ私の見事な肌が乾燥肌になってしまったらどうしてくれる」

「いやいやキミは蜥蜴人だから元から鱗は乾燥しているよね！」

「ふむ、そうかね？　それは一本取られたな」

蜥蜴をそのまま人型にしたような異形が理知的な態度で冗談を言う。

そんな魔導学院の制服を着たりザードマンに、同じ制服を身に纏う獣人のノツポが頭部に付いた獣耳をせわしく動かして反論する。切れ味の良い言葉のナイフにリザードマンはやれやれと首を左右に振り、流した。

「あはは、でも『山猫の爪』とか言っても大した事なさそうだね。このまま全滅させてクラスの皆を驚かせようよ」

「面白そうじゃねえか、俺にも一枚噛ませろ」

周囲を取り囲む山賊など意に介しないとばかりにエルザリースは能天気な事をのたまう。

丸鼻のドワーフの少年　ガラクもまるで負ける可能性など無いかのようニヤリ、と獰猛に笑う。

ドワーフ種族の特徴である並外れた膂力を用いて超重量級のウォーハンマーを肩に担いだ。

そのエルザリース達のあまりな物言いに、取り囲む山賊達は怒気を撒き散らす。

まるで世間を知らぬ子供の夢物語。

紙に書いた絵空事。

そんな夢見がちな子供に現実という冷や水を被せる為、山賊の頭領が重たい腰を上げた。

「なかなかに愉快な事をほざいてくれるじゃねえか」

「お山の大将のご登場って感じだね。漸くトップが僕等の相手をしてくれるのかな？」

山賊達の奥から姿を見せた頭領。

その姿は一介の山賊風情では決して出せぬ威厳があった。屈強な上背の肉体に、ギラギラと獣のように飢えた眼光。

伸び放題の髭面の中に覗くその瞳の光が印象的な男であった。

数多の傷がついてなお威風堂々たる全身鎧フルプレートアーマーは唯の山賊如きが手に入れられるものではない。

頭領が音もなく、すっ、と片手を翳した。

ただそれだけの動作で統率の取れていなかった匹夫達が一つの生物へと変貌を遂げた。

整然と揃えられた五人の学生達を取り囲む陣形が、獲物の喉笛を食い千切る牙を研ぐ。

急激に様相が変わった山賊達にエルザリースを始めとした魔道学院の生徒達は困惑を隠せないでいた。

「実力を隠してたってわけ？」

「そういうわけじゃ無いさ。こいつ等は誰かが先頭に立ってやらんとともに獲物の狩り方も分らん阿呆共というわけだ。」

それでは、まあ世間の広さってモンを知ってくれや。甘ったれた糞餓鬼共」

翳された片手が無慈悲に下される。

それは合図。

三十を超える人の形をした獣の群れが、一斉に一流の狩人として喉を鳴らした

《ほれ、先行部隊の最後尾が見えたぞ。しかし遅いのう、其処らの犬頭の方がよっぽどマシな走りをしておるといふのに。》

所詮あのガマガエル領主の私兵、練度もひよっ子に毛が生えた程度か》

並みの男が耳元で囁かれたなら骨抜きにされるほど色香の乗った声。

紫苑の細い後ろ腰に携えられた短剣　バルトアンデルスの言葉通り、

シロの背に乗り然程の時間も経たぬ内に馬に乗った集団の最後尾が視界に映った。

交錯の街『ラタトスク』は国境線沿いにあるが故に人通りが多く、落とされる税金も膨大。

その潤沢な資産は街に属している兵士にも十分に還元されている。先を行く各兵士が身に着けている装備はどれをとっても一級品。

ラタトスクの紋章である六本足の栗鼠リスが肩当てに彫られた鎧。

強力な付与魔術エンチャントが施された剣や楯、槍。だが。

一級品の装備を身に着けた中身は凡百以下。

二十以上で構成される隊列は乱れに乱れ、中には満足に馬の手綱をとれぬ輩もいる有り様。

司令官であるう一際立派な鎧を着込んだ男の指揮の声も覇気がなく、全体の士気は底辺。

バルトアンデルスの酷評通り。

強欲で有名なラタトスクの領主の半ば私兵と化している街の兵士達は、傍目から見ても頼りになりそうではなかった。

「隊長！　本当に『山猫の爪』が出たって西の森に行くんですか？

ここ最近街道の商隊を荒らし回っている物騒な連中ツスよ？」

「フンッ、気乗りはせんがな。ギルドからもせつつかれおるから仕

方なくよ」

馬轍の土を叩く音が響く中、街の平和を守る兵士にあるまじき発言が飛び交った。

隊長と呼ばれた口髭を生やした中年男性は、面白くなさそうに鼻で笑い、内情を唾棄した。

そんな中。

馬など比ではない、巨大な影　シロが風の如く隊列を追い抜いていく。

ごう、と風の壁が兵士達の横つ面をしたたかに叩く。

すれ違いざまに巻き起こる暴風に晒され、乗っていた馬全てが白狼王の存在に怯えて暴れ、落馬するものまでいた。

「あれは『少年アリス』じゃねえか!？」

どうどう、と何とか怯える馬を諫めた一人が叫んだ。

その声を皮切りに『黒アリス』、『狼王の君』といった称号を口々に呟き、俄かに色めき立つ隊列。

隊列で唯一落馬した者　部隊の口髭を生やした隊長が言葉になつていない怒鳴り声を上げ、『少年アリス』に対し罵倒している。しかし。

既に白狼王の雄々しい後ろ姿は、遙か遠方。

成金の悪趣味な鎧を身に纏った隊長の罵声は、紫苑の耳を震わせずに虚空を彷徨った

「見えた」

《おうおう、派手にやっておるようじゃな。男は皆殺しに女は慰み物か。山賊に襲われた輩の典型的な末路じゃな》

「バル、少し不謹慎です」

木々の梢が月明かりを遮る森の中、狼王の白き毛並みが疾駆する。向かう視線の先。

紫苑は漸く木々の間から焚火の明りを見つけた。

紫苑の視力では人が居る事は確認できても、状況がどう推移しているか窺い知れなかったが、

無垢な白の剣『バルトアンデルス』の感覚器官は、其処で行われている凄惨な凌辱を正確に把握していた。

すなわちヒトとしての尊厳を踏み躪る蹂躪である。

「うあ……………もう……………ゆるし、て」

「やめて……………ください、もうこれ以上出さないで……………お家に……………かえして」

むせかえる牡の精臭。

ケダモノ達の宴。

その中心で二人の少女が牡の欲望を一身にぶつけられていた。

懇願は下卑た笑い声に掻き消され、ケダモノ達の嗜虐心を刺激するだけに終わる。

純潔を保っていた園は、数えるのも億劫になるほどケダモノに土

足で犯されてしまった。

否。

今もなお凌辱という名の宴は延々と続いている。

空色の髪は白濁とした粘液で汚れ、エルザリースの輝きを失った瞳が虚空を彷徨う。

ふと、視界にとある物体が掠めた。

『それ』は三つの生首。

一つは丸鼻のドワーフ。

一つは緑鱗の蜥蜴人。リザードマン

一つは面長の獣人。

何れもエルザリース、シンシアの仲間であった者たちの生首だった。

首だけになった顔の瞳はどろり、と白く濁り生気を宿していない。当然だ。

胴体と泣き別れになって生きている生物など不死種族か、グールなどのアンデッドぐらいしか居ない。

男達の欲望の捌け口となりえない三人の男子生徒の首無し死体は、其処らにゴミのように打ち捨てられてあった。

「……………ああ……………あ、ああああ」

幾人ものケダモノ達に組み伏せられ、女としての性を貪られているエルザリースの眼から新たな涙滴が止めどなく流れる。

山賊と対峙していた時の勝ち気な威勢など無い。

既に彼女達の心は折られていた。

「もう……………殺して……………」

か細い死への懇願。

それすらもケダモノ達の耳を愉しませる管弦楽にすぎない。

乙女のやわ肉を貪る牡達は、馬鹿笑いを上げ、少女達を嘲笑った。

「はーっはっはっは！ 笑わせるねえ！ 今更殊勝な態度をとつてもおめえらの末路は変わんねえよ！ 俺達に輪姦まわされて、奴隷商に

「

男の言葉は、最後まで言い切られる事は不可能だった。

視界一杯に拡がる白い『何か』。

それがエルザリースの眼の前を通り過ぎた後、残されていたのは『上半身の無い男達の死体』であった。

発声器官ごと消失した下半身だけの死体は、時を刻む事を思い出したかのように生暖かい血を噴出させ崩れ落ちる。

「ヒイエアツ！ 何だ！？ 何だッてんだ一体！？」

「あぐっ！」

運良くエルザリースの身体の下で後ろの排泄口を怒張で貫いていた男が慄く。

無理に動こうとした代償にエルザリースが苦痛の声を上げた。

突然の事態。

シンシアの身体を蹴っていた連中も、離れて肉欲の宴を見ながら酒を飲んでいた連中も驚愕に包まれる。

皆が一斉に白い『何か』が通り過ぎて行った先を目で追う。

其処には絶望が地獄の釜から蓋を開けて山賊達をじつと見ていた。

視線の先に居たのは狼だ。

しかし比率がおかしい。

少なくとも樹齡数十年は下らないであろう森を形作る木々が、何故あれ程まで小さく頼りなく感じるのであろう。

悪戯好きの妖精種に幻術を掛けられているのではないかと、現実を受け入れきれなくて脳裏で疑う山賊も何人が居た。

だが。

ぐちゃぐちゃ、と巨狼の口腔で咀嚼される人体が逃避を許さない。周囲に拡散していく濃密な血臭。

絶対零度のアイスブルーの眼。まなこ

地の底から響くような獣の唸り声に、生物としての生存本能が山賊達の目を覚ました。

「は、白狼王だ！ 『黒アリス』が近くに」

コロン、ポトン。

眼の前の脅威の正体を知っていた山賊の一人が叫ぼうとして、先程の焼き回しのように言葉が途切れた。

まるで椿の華が落ちるように頭部がころり、と身体から離れた。

そして切断面から噴き出す血煙が森の木々を紅く染める。

コロン、ポトン。

今度は椿の華が一斉に落ちた。

エルザリースを犯していた集団の喰い残し、

そして亜麻色の二つお下げをした少女　シンシアを組み敷いていた集団の頭部が地面に落下し、ころころと壊れた玩具のように転がっていく。

植物の茎を切ったように赤い色の液体を溢れさせる首無し死体達。後に残ったモノは、粘性の血糊をぬめり、と月明かりに反射させる周囲の森全体に張り巡らされた金属糸。

それは紫苑が最も得意とする得物であった。

唐突に起こった怪現象に生き残った山賊達が恐慌を来す。

訳の分らぬ事態に腰を抜かす者。

逃げ腰で剣を構える者。

辺り構わず喚き散らす者と様々であった。

情けない部下達を目の当たりにした頭領は、苛立ち紛れに怒声を飛ばす。

ラタトスクの街周囲にこれだけの巨狼は一匹しか居ない。

その主である人間もまた一人。

「手前えがやりやがったのか『少年アリス』ッ！！ 其処に居るんだらう！ 出てきやがれッ！」

頭領が呑みかけの酒瓶を地面に叩きつけて、藪の暗がりを見つめて、

一瞬の後。

すつつ、と暗がりから透けるように白い絹肌を持つ少女 紫苑が音も無く姿を現す。

頭領の取り巻きに居た四人の山賊達は、現れた紫苑の佇まいに息を呑んだ。

なぜならあまりにも美しく、そしてこの血臭漂う惨劇場にそぐわない幼さであったからだ。

樹冠の隙間から差し込む月光をしっかりと浴びる白磁の肌。

黄金比といえる物があるのならば、まさにその体現と言えるだろう美貌の造形。

さあ、と森を吹き抜ける夜風が一つに結わえた濡れ羽色の髪を撫

ぜる。

朱と白と闇。

それらの色彩がこの場を支配していた

「あーあー、酷いもんだぜ。よくまあ、此処まで派手に部下を殺してくれたもんだな」

表面上は不敵に、だが頭領の脳内では如何にしてこの危機的状況を抜け出すのかに容量を割いていた。

なぜならば彼が育て上げた『山猫の爪』全ての戦力を投入しても白狼王一匹に届かない。

それが純然たる事実。

頭領は彼我との戦力差を正確に判断していた。

加えて白狼王の主である得体の知れない『少年アリス』。

こうして相対する前までなら白狼王の力によってギルドを押し上がってきた新進気鋭、と思えた。

だが実物を間近に捉えてその考えは明らかかな間違いだと頭領は確信した。

紫苑の金属系による蜘蛛の巣は脅威、それ以上に。

なんて冷てえ眼をしてやがるんだこの餓鬼。

頭領は、暗がりでも爛々と蒼く輝く瞳に戦慄した。まるで路傍の石を見詰める紫苑の視線。

見た目が十五にも達していない子供が人間に向けられる瞳ではない。

化け物を従えるのは化け物。

そんな考えが頭領の脳裏を過ぎる。

おい、野郎共。

頭領は横目でちらり、と視線を数人の部下に送った。

幾多の悪行を頭領と共に犯してきた彼等は、正確にその視線の意図を汲み取っていた。

すなわち逃亡。

了承の意を伝えるために部下達はこくり、と頷こうとして

出来なかった。

頭領を含めた17人の山賊全ての身体が、本人の意思を裏切り言う事を聞かない。

彼等は一つ、思い違いをしていた。

紫苑は頭領に気配を気取られて姿を現したのではない。

紫苑の糸繰りは闇に紛れる暗殺者の技能。

暗殺者がターゲットに己の身を曝す行為。

それは既に『終わっている』という事に他ならない。

「なっ！ 身体が動かねえ！」

「こっちもだ！ どうなつてやがるんだ！」

「バケモノッ！ こっちに来るんじゃねええ！ ギャアアアアッ

ッ！……」



きを持っていた。

こつん。

そして頭領は下顎に衝撃を受け、脳が揺さぶられる。

何事かと目を向けてみれば、其処には目を見開き己のやった事が信じられないと顔に書いた側近の部下が一人。

部下に殴られたのだと脳が解を導き出した後、頭領の意識は闇に落ちていった

ふう、と紫苑は控えめな溜息を吐いた。

それだけの仕草なのに紫苑がやると、どこか憂いを帯びた色のあ  
るものになってしまう。

頭領を部下の手で失神させた後、紫苑は同じ要領で生き残った部  
下を気絶させていった。

結局生き残った山賊はわずか四人。

両の手足を縄で結び、猿轡を噛ませ、漸く一息。

見渡す周囲の現状は死屍累々。

其処ら中に体が欠損した死体で溢れ返り、泥塗れになった内臓が  
飛び散り、紅い血液が見目豊かな彩りを加えている地獄絵図。

だが、紫苑は気にした風も無く自然体であつた。

齡十五にして『死』を平然と受け止める異常。

死が身近な『蒼の大地』の生まれではなく、平和な日本の本で生まれ育つた者が持ち得ぬ感性。

ならば何故紫苑は此処まで人の死を直視出来るのか。

一つは慣れ。

一つは父親からの遺伝。

そして最後の理由に紫苑の人間性がある。

紫苑という一個の精神は『情が強く』、そして『一個人を形成している世界が狭い』。

世界が狭いが故に紫苑は、その中で生きている親しい人に最大限の愛情を捧げる。

その場所は紫苑にとって日溜まり。

だからこそ紫苑は、日溜まりに帰る為に己の持てる精力を全て費やしている。

地球に、日本に、そしてあの家に紫苑の日溜まりがあるのだから。

ならば、紫苑にとって世界の外側の住人は一体何か。

答えは興味が無いモノだ。

路傍の石に過ぎない存在。

もしソレがラタトスクの知人に危害を加えるような存在だとしたら。

紫苑は全力でソレを排除するだろう。

そして心など痛めない。

路傍の石を除けて心を痛める人間が居ない事と同じなのだから。

《少々、疲れたか？》

「うん、少しだけ。やっぱり魔法みたいな不確定要素があると『糸繰り』も絶対とは言い切れなくなってしまうから」

バルトアンデルスの<sup>わい</sup>勞いの言葉に、紫苑は控えめな笑みを浮かべる。

朝は遺跡探索、夜は山賊退治にと過密な一日を送っている紫苑だ。その疲労は濃い。

紫苑の疲れを感じ取ったシロも小柄な身体に鼻先を擦りつけて労わる。

が、タイミングが悪かった。

シロの口腔内は先程の戦闘で血塗れ。

当然、顔を近づけられた紫苑の嗅覚を強烈な血と臓腑の臭気が襲う。

「あつ……」

しかし紫苑は我慢。

シロのせつかくの好意を無下にする訳にもいかず、酷い臭気に耐えてシロの鼻先を撫でてやった。

《こらシロっ！ 妾の紫苑が辛そうにしておるではないか！ 口の周りを綺麗にして出直さぬか！！》

紫苑一筋なバルトアンデルスがシロの蛮行に一喝。

シユン、とシロは耳を伏せ、しぶしぶと紫苑から離れた。

人の身長もあろうかというフサフサな尻尾も悲しげに頭を垂れる。

「綺麗にしたらまた今度、ね」

紫苑の言葉にシロの尻尾の力が戻る。

ぶんぶん、と風切り音を鳴らし左右に振られる尻尾。

単純なシロにバルトアンデルスは呆れたように呟く。

《全く現金な奴め。凶体ばかりでかくなって頭の方は子供じやのう》  
「そうかな？ 俺は素直で可愛いと思うけど……」

シロ程の巨狼に『可愛い』という感想が出るくらいには紫苑も大概な身内鼻屑である。

さてと、とバルトアンデルス達との会話に区切りをつけ、息抜きを終えた紫苑は、残った作業に取り掛かる。

蒼い瞳を向けた先。

其処にはエルザリースとシンシアが樹に寄り掛かり、二人は外敵から互いを守るように寄り添っていた。

二人の学生の格好は無惨の一言。

学生服であった布切れが僅かに残り、髪、顔問わず身体中のいたる箇所に牡共の欲望の残滓がこびり付いていた。

どの角度から見ても悪漢に襲われた婦女子をこのままの格好で居させる訳にはいかなかった。

ぼつ、と黒い長手袋に包まれた紫苑の掌に、白銀の炎が灯る。

詠唱は無い。

『魔動』によって発生させた炎を紫苑は、迷う事無く二人の被害者に放った。

瞬く間に二人を燃え盛る白銀の炎が包んだ。

しかし、犯され過ぎた二人にその白銀を鎮火する体力など残ってはいない。

身を固くするエルザリースとシンシアであつたが身体を焦がす筈の炎に熱さを感じない。

それどころか陽光を浴びている暖かさを感じていた。

『<sup>エンピリアル</sup>浄火』。

ある意味で冒険者に欠かせない必須魔法の一つ。

その効力は『身体に付いた老廃物や不純物の焼却』。

長期間、体を清められない事が多々ある冒険者 特に女性に重宝されている魔法だ。

全身を包んでいた炎が立ち消えると、こびり付き不快であつた欲望の残滓が綺麗に焼失していた。

紫苑は裸同然である二人に近づくと、腰に巻いてある金刺繍のなされた腰マントを裸体に掛けてやった。

だが、小柄な紫苑の腰マントでは、一人分の布面積しかない。

少し逡巡すると紫苑は手招きでシロを呼び寄せる。

二人は白狼王の威容に怯えを示すが、紫苑は気にした風も無くシロの首 その首輪に付いている荷物を探った。

紫苑がギルドの長期クエストで旅に出る時は、大抵シロの首輪に必需品を持たせてある。

見上げるほどの巨狼であるシロにとって紫苑の荷物など眼に見える負荷にならないのだ。

そして、首輪に取り付けてあるバックからずり、と取りだされる毛布。

紫苑が野宿などで暖を取る為に使用している一般的な防寒具である。

大きさも紫苑より一回り大きい二人を包んでも幾分か余裕が残る。それをバサリと頭から二人の魔導学院生徒に掛けてやった。

これにて紫苑がすべき事は殆ど終わった。

後は亀の歩みより遅い街兵の到着を待つばかり。

「あ……あの……」

「うん？ なんですか？」

毛布に包まれていた片割れ シンシアが弱々しくも紫苑に声をかける。

外見上はエルザリースよりも気弱そうでもシンシアは芯が強い少女だった。

散々悲鳴を上げた喉で発する声は擦れて、震えていたがシンシアはそれでもはつきりと言葉を紡いだ。

「助けてくれて、ありがとうございます」

「はい、どういたしまして」

木々の葉から零れる月明かりに照らされた紫苑の素顔。

その時になって漸くシンシアは自分達を地獄から救い上げてくれた人物が途轍もなく美しい事に気付いた。

紫苑は一日中髪を束ねていた白い紐を解く。  
束縛から解放された漆黒の長い髪が背中に美しく広がる。  
さあ、と森に夜風が吹き、血の臭いを流し、紫苑の黒髪を蠱惑的  
に攫った。

その姿はさながらシンシアの瞳に天使として映った。  
月が天頂で瞬く頃。  
漸く森に兵士達が駆る馬蹄の音が響いてきた

## 第？章『止まり木』

白亜の聖堂。

その形容するに相応しい荘厳かつ巨大な空間だった。

足音を鳴らせば何処までも響きわたる回廊。

余りにも長大な大理石の回廊は終着点を肉眼で確認させない。

回廊を支える柱もまた巨大であった。

遙か上空に伸びる純白の玉柱は回廊を等間隔に装飾し、その背丈で高く存在する天井を支えている。

何処までも続く回廊の最奥　この建造物の核心たる場所に『ソレ』は静かに存在していた。

半球状に大きく開けたその場所には至る所に幾何学的な紋様魔法陣、ルーン文字が散りばめられ、

そのどれもが淡く発光し低い共鳴音を発している。

更に部屋の中央を囲むようにしてそびえ立つ六本の白亜の柱にも余す事無く、紋様が刻まれていた。

そしてその柱の中心。

一段と高く造られた部屋の中心部に『ソレ』が鎮座している。

規格外な程、巨大で曇りなど一切ない透明な結晶。

そのクリスタルは尋常ならざる力によって浮遊していた。

更に無数の幾分か小柄なクリスタルが中央の巨大クリスタルを守護するように浮かんでいる。

そして『ソレ』は巨大クリスタルの胎内に在った。

白の剣。

刀身も柄も全てが無垢な白さを誇る両刃の剣。

剣の銘は『バルトアンデルス』。

この世界 『蒼の大地』 に存在する秘蹟礼装ひせきらいそう最高位の一つにして意思ある剣。

何人なんびとたりとも侵されざる白の祭壇。

『バルトアンデルス』 が安置されている場所である。

その静寂が突如として打ち碎かれる。

最初は些細な変化。

無風である筈の祭壇に風が微かに揺らめき始めた。

徐々に勢力を増していくその風は光の粒子を纏い、また更に強まっていく。

溢れるマナの奔流。

部屋全体が光の粒子 エーテルに覆われる頃には、もはや暴風となつて頑強な柱を揺るがす。

変化はそれだけには止まらない。

床、壁、天井、果ては何も存在しない中空にまで描き連なれていく魔法陣。

それら複雑怪奇にして深淵無辺な紋様は周囲に存在する溢れんばかりのマナを喰らいその体躯に光を宿らせる。

その異様は部屋そのものが巨大な一つの魔法陣に取り込まれている様であつた。

そして。

唐突に起こつた異変は、また唐突に終りに向かつていく。

『バルトアンデルス』 が安置されている空間を飽和状態にしていたエーテル粒子はある一点に向かつて収束する。

巨大クリスタルの前、すなわち、『バルトアンデルス』 の前方に集まつていくエーテルは膨大。

魔導に携わる者が見れば卒倒しかねない程の質と量である。

眼も眩むほどの閃光を放ちながら徐々にそれは人の形を成していった。

そして光が消えたとき。

其処に座り込んでいたのは可憐な黒髪の少女であった。

事態が終息した後、沈黙を保ってきた意思ある剣は初めてその声を発した。

《よくぞ参った異界の者よ。妾の名はバルトアンデルス。妾は秘蹟礼装最高位の一つにしてあらゆる可能性を内包する剣なり。

そなたの万難を排し、三千世界の覇者として導こう。妾を手に取り、覇道を共に往こうぞ》

「嫌です」

にべもなく鈴の転がるような軽やかな声で断られた。

Original Novel

追憶のシオン

第?章『止まり木』

「あらあら、シオンちゃんもう出ちゃうの?」

「はい。昨晚の件でギルドの事務処理も終わって無かったですし、ミーネお婆さんにも薬の材料を届けないといけませんから」

早朝。

ちゅん、ちゅん、と雀に似た朝鳥の鳴く頃。

宿屋『渡り鳥の止まり木』玄関にて、紫苑と細目の女性が話し込んでいた。

女性の名はリアトリア。

緩く三つ編みにして前に垂らされた若葉色の髪。

おそらく夫婦生活の中で育てられたであろう母性溢れる乳房。

その我儘な肉体を貞淑に包む純白のエプロン。

彼女こそ年若い冒険者の熱い視線を日々受けている宿屋『渡り鳥の止まり木』の若女将その人であった。

「昨日の大捕物？ おおとりもの シオンちゃんはお手柄だったそうね」

近所のおばさんネットワークや宿屋に宿泊している冒険者経由で昨晩の事件を聞き及んでいたリアトリア。

えらいえらい、と包容力のある細い目を更に細めて、リアトリアは頭一つ分小さい紫苑の髪を撫でた。

紫苑も嫌がる素振りも見せず、されるがまま。頭に触れる掌の感触を甘受していた。

「あらあら、やだわ私ったら。ごめんねせっかく綺麗にセットした髪を」

「いえ、大丈夫ですよ」

「だめよう、紫苑ちゃんは美人さんだから身嗜みはきちんとしなくちゃ。こつちにいらっしやいな」

撫でていた掌が離れた後、普段通り一つに束ねられていた紫苑の髪型が少々乱れる。

これ幸いとリアトリアは乱れた髪を口実に、紫苑をロビーのソファに座らせる。

その手には既に櫛が常備されていた。  
彼女にとって宿を利用する最年少冒険者の紫苑は、自身の子供同  
然。

ついつい甘やかしたく、そして世話をやきなくなる存在だった。

結わえた紐を解き、紫苑の華奢な背中に黒いビロードが広がる。  
枝毛一つない髪にリアトリアは櫛を通していく。

「ふふ、いつ触ってみてもシオンちゃんの髪の毛はさらさらねー。

私もこんな『娘』が欲しいなあ。」

「俺は男ですよ?」

「旦那様に頑張ってもらおうかしらあ」

すつ、すつ、と櫛が紫苑の髪を整えていく。

リアトリアは鼻歌まじりにご機嫌な様子。

紫苑の指摘にも何の其の。

不意に。

かりかり、とソファー前の窓からささやかな音が響く。

音の発生源を見れば、窓越しに小さく愛くるしい一匹の齧齒類げっしゅいが

此方を見ていた。

縦縞柄の体毛にくりくり、としたまん丸な瞳。

小さな身体には丸められ紐で括られた便箋が取り付けられている。

そして、二股に分かれた尻尾が特徴的な栗鼠リスであった。

この小さな訪問者こそ交錯都市の名の由来になった『ラタトスク

(走り回る出っ歯)』と呼ばれる伝書リスである。

街の住人からは愛称としてラットと呼ばれている。

ラットは窓の横にある彼等専用の出入り口からするり、と小さな

身体を滑り込ませロビーに入ってきた。

そして。

髪を梳かれている紫苑を見つけると一直線に向かってきた。

ラットは紫苑の足元まで来ると器用に脚を駆け上がり、膝の上までよじ登ってきた。

「あら、いつもご苦労様。ラットちゃん、はいお駄賃ね」

すっ、とリアトリアがラットに括り付けられた便箋を取り外し、カウンターのの上に置いてあった瓶の中からナッツを一つまみ掴む。それを掌に乗せ、紫苑の膝の上に居るラットに差し出すと彼は嬉々としてナッツをほっぺに詰め込み始めた。

すぐに頬袋は膨れ、ラットはちっちゃな口をもごもごと動かしナッツを食べる。

その様は非常に愛くるしく、心和むものだった。

『ラトスク（走り回る出っ歯）』は非常に頭が良く、軽い訓練を施せばこうして伝書鳩の真似事も簡単に覚える。

交錯都市に住まう人々が街中を走り回る彼等の労を労う為に、大抵何処の家庭でも木の実を常備している。

それほどまで彼等は交錯都市の人々にとって身近で小さな隣人なのだ。

「この手紙はシオンちゃん宛ね。ギルドからだわ」

「多分、昨晚の件についてだと思います」

はい、とリアトリアが手紙を手渡し、紫苑は手紙の内容を確認する。

綺麗な装飾の成された便箋の内容は、紫苑の予想と変わらず昨夜の

盗賊討伐の後処理についてギルドに顔を出すようにとの旨が書かれてあった。

「では、そろそろ出ますね」

「駄目。もうちょっとだけお姉さんに髪の毛いじらせて、ね？  
ラットちゃんだってシオンちゃんの上でゆっくり食べたいもんね」

席を立とうとした紫苑をリアトリアが肩に手を置き、やんわりと引き留める。

彼女にとって些か紫苑とのスキンシップがまだ足りないようだ。  
結局、紫苑が解放されたのは他の冒険者が起きてくる時間帯になつてからだった。

宿屋『渡り鳥の止まり木』常連の間では良く見られる日常風景である

「あら、シオンちゃんおはよう。聞いたわよ『山猫の爪』を捕まえたんですってね」

「おう！ シオンの坊主じゃねえか！ 今朝仕入れたマンイーターベリーだ、一個もってけ！」

「シオンー！ 今度冒険の話聞かせてー！」

薬草を詰めた紙袋を持つ紫苑に様々なヒト達が話し掛けてくる。その顔のどれもが友好的に笑い、紫苑の『ラタスク』での知名度を如実に表していた。

紫苑はギルドの受付ツイーリツヒに評された通り地元密着型の冒険者である。

基本的に紫苑が受注しているクエストは、  
薬草採集、

街道や森に生息している魔物の間引き、

人探し等、世間一般の人々が冒険者の仕事として想像する華やかなものではない。

先日のシューゲルト遺跡探索のような遠征は例外。

遺跡の数あれど秘蹟礼装が眠る古代遺跡などは早々に発見されないのだ。

故に紫苑はギルドにとある依頼をしている。

それは国が発見していない秘蹟礼装の有益な情報提供者に褒賞を払う内容。

秘蹟礼装自体が減多に見つかるもので無い為、情報が入ってくる時は不定期。

その間、紫苑は街の雑用クエストをこなしているので街人の覚えが良い冒険者となっていた。

紫苑の見目が麗しい事も要因の一つではあるのだが。

紫苑は街人達と挨拶を交わし、商店街を抜けて、裏路地に入っていく。

途端に辺りは薄暗く、街の裏側が姿を見せた。

物陰から紫苑を見つめる者。

檻褸を纏った浮浪者。

道の端に散乱するゴミ溜まり。

多種多様な人種、種族が流れ込む交易都市では必然的に治安も悪くなる。

それを改善するのが街を納める領主の仕事であるのだが、

残念ながら『ラタトスク』の領主は私腹を肥やすのに夢中で街の安寧秩序に興味を示していない。

バルトアンデルスがガマガエル領主と評したトップが変わらない限り、この光景も変わり映えする事は無いだろう。

そして薄暗くじめついた路地裏を抜けた先に、一軒の店が待ち構えている。

年月を感じさせる色褪せた煉瓦造りの佇まい。

建物の壁に伝った蔭。

看板に描かれた毒々しい液体が入った壺の絵。

街一番の薬師ミーネが住まう薬屋『とんがり帽子の薬品店』だ。

こんこん、と紫苑は控えめなノックを打つ。

「ミーネお婆さん、いらつしやいますか？」

僅かの間の後。

古びた扉がぎい、と軋みを上げて一人でに開いた。

紫苑は驚いた様子も無く、ごく自然に店の中に入っていく。

店の中は薬屋、と云うよりは悪い魔法使いの住み家と云った方が適切な妖しげな物品が所狭しと陳列されていた。

商品棚に並べられたイモリの黒焼きや毒々しい輝きを放つマンイ

ーターの樹液、瓶詰めされたスキュラの触手。

壁に掛けられているミノタウルスの頭蓋を始めとした様々な魔物の頭蓋骨。

基本的に死に絶えた魔物の体は魔霊<sup>まれいじゆ</sup>殊となつて、現世には残らないはずのだが、店の主人の知識によってこうしてこの世に留められ商品として売られていた。

そして奥に構えられた木造りのカウンターの席に店の主人がどっしりと座っていた。

その人物は、カウンターの上に乗った透き通った水晶球を見つめていたが、紫苑の入店と共に顔を上げる。

「おおつ、よう来たねえシオン坊や」

「お早う御座います。今日は頼まれていた薬の材料を持ってきました」

「いつも悪いねえ。どれちょっと待ってなさい菓子をやろうじゃないか」

よっこいせ、と年寄りくさい掛け声を出してカウンターから立つミーネお婆さん。

だが、発せられた言葉とは裏腹にミーネは非常に若い容姿をしていた。

決して『お婆さん』と呼称される容姿では無い、若々しい妙齡の女性がミーネである。

頭にすっぽりと被さった特徴的な真っ黒のトンがり帽子に、波立ちウェーブを描く豊かな金髪。

身体の線を隠すように纏った深い藍色のローブ。

そして、エルフのツィーリィツヒと同様にとがった耳が彼女の若さの秘密を示していた。

つまるところミーネはエルフという長命種。

それも、あの皮肉屋のツイーリィツヒのオムツを替えた事があるほど街一番の年長者であった。

「ほれ、最近アタシの鼻ふくろが買ってきたもん珍しい菓子だよ。何でも米という食べ物を粉にして焼いた硬いクッキーらしい。

老人の齒には、ちときついアタシあこの風味が好きなんだがね」  
「あ、お煎餅……？」

ミーネが奥の棚をあさって出してきたのは、木皿に乘せられた『硬いクッキー』。

丸い形に狐色、そして鼻腔を刺激する香ばしい匂い。

それは日本人の紫苑にとって馴染み深いお煎餅であった。

「なんだい？ シオン坊やはこの菓子をしているのかい？」

「あ、はい。俺の故郷に似たような米菓があつて」

「なるほどね、それでシオン坊やはこの菓子は好きなのかい？」

「はい、良く祖父と一緒に食べていた物ですから。この地方で食べられるとは思いませんでした」

顔を嬉しそうに綻ばせ、童女のように微笑む紫苑にミーネはそうかい、と頷いてやった。

さあお食べ、と云うミーネに促されてカウンターの内側の椅子に紫苑は座った。

この席は、ミーネが紫苑専用に用意したものである。年寄りにとって若人わらわとの語らいは楽しいものなのだ。

パリパリ、と暫く煎餅を食む音が店に響く。

紫苑は手でパキリ、と一口サイズにした煎餅を口に運び、

ミーネは豪快に一枚の煎餅をそのまま口にしていた。

「このお煎餅は何処の物なんですか？」

「東の大国『ミッドガルド』の片田舎での郷土菓子さね。だがシオン坊や、ミッドガルドへ行くような事があれば気をつけな。

あそこは人間以外の種族に対してはすべからく排他的たがらね。特に今代の皇帝に即位してからはソレが顕著だ」

「ずずず……、と薬湯を啜りながらミーネは注意を促す。

紫苑もその忠告を真摯に受け止め、頷いた。

そして、紫苑もミーネに倣うように出された薬湯に口付ける。

この薬湯は、紫苑が採集した薬草を蒸して加熱処理をし、天日干しにした物を湯で抽出した飲み物だ。

薬湯と云うだけあって他の者達からは独特の渋みで敬遠されているが、紫苑は何処となく緑茶に似たこの飲み物が好きだった。

「それはそうと、昨夜は大活躍だったじゃないか。

魔導学院生徒の危機にギルド期待の新人『少年アリス』が颯爽と夜を駆ける！

欲望の捌け口に晒された二人の少女は、今宵天使に相見え<sup>あいまみ</sup>た！」

「ひよっとして昨日、『観て』ませんでした？」

まるで時代劇の煽り文句のように紫苑の活躍を表現するミーネに、紫苑は冷静に疑問を呈した。

それほど、ミーネの物言いは現場を見てきたような色合いを醸し出していた。

そして、紫苑がそう思った根拠がもう一つ。

「おや、気づいてたのかい？」

「昨日は街を出たあたりから、誰かの視線がこっちを向いている気

がしたんです」

「ご明察。昨日は星の巡りを見ていた時に、ちょうど屋根と屋根の間を飛び跳ねているシオン坊やが居たのさね。」

これは何かあるな、と睨んで家の水晶球から様子を観察してたのさ」

視線。

母親譲り見目の麗しさは良くも悪くも目立つ。

十年以上もその顔で生きてきた紫苑は、自分の容姿が人に与える印象を理解している。

故に夜道は明るい場所を選んで帰宅していたし、一人で出歩く事はあまりしなかった。

必ずと言っていいほど傍らには祖父か幼馴染みの巴が居た。

だからこそ紫苑は人の視線に敏感だ。

況や、ソレが人通りの無い夜の街道で観られていると自覚したのだから、心当たりは遠見が出来るミーネしかない。

「案の定、シオン坊や大活躍の逮捕劇が見れてアタシあ満足さ。」

しかし、最近の若い娘はだらしないねえ。アタシが若い頃なんぞ、あのくらいの男共相手なら根こそぎ精を搾り取れるっていうのに」

「それをあの二人に求めるのは、ちょっと酷ではありませんか？」

「そうかい？」

「はい。かなり」

明け透けなミーネに、紫苑は恥ずかしさから頬に朱を散らし苦笑い。

この世界 『蒼の大地』では、女性の貞操の危機は地球の比では無いくらいに高い。

理由として魔物の繁殖方法が挙げられる。

魔物の繁殖集団は主に二つ。

雌雄の存在する魔物の交接。

そしてもう一つは、別種族の雌を母体にする異種間での繁殖。

オークの巢で母体となった女性が保護されるといった事は、冒険者の間で良く聞く話題だ。

長い時を生き、性に関して大らかなミーネの話は、ときどき紫苑を困らせる。

加えて今は昨夜の緊急時ではなく、普段の紫苑。

性に疎く、穢れを知らない紫苑にとって些か刺激が強すぎる話題であった。

「よしよし、今度はアタシが三百年前くらいに飼っていた男達の話をしてあげようじゃないか」

「……………あう」

なにせせよ年寄りの昔話は長いと相場が決まっている。

紫苑の苦行は今しばらく続きそうだった

「ご依頼主よりクエスト達成の旨が伝わっています。こちらクエストナンバー58の達成を記した書類になります。

あちらの換金所にて報酬をお受け取りください。お疲れさまでし

た『炎獅子』。

そしておめでとうございますヤドック氏、貴方のギルドランクは今回の成功で『E』になりました」

「や、やったツス！」

ギルドの受付嬢の言葉に、平凡な顔の造りの青年 ヤドックは諸手を挙げて喜ぶ。

クエストの斡旋を受けにきた他の冒険者達は何事かと見るが、それがヤドックだと分かるとクエスト探しに戻る。

頭に巻かれたバンダナが特徴的なヤドックが『炎獅子』アルトリゼィクルスバークの腰巾着という事実は周知。

彼が騒がしいのは何時もの事であった。

「少し落ち着かんか馬鹿者」

「あ、すいやせん姐さん」

そして、浮かれているヤドックを嗜める美女が一人。

燃えるような真紅の髪をポニーテールと同色の瞳。

その身に纏った軽鎧もまた真紅。

彼女こそ紫苑にとつて冒険者の先達であり、ギルドで名を馳せる斧槍使い『炎獅子』ことアルトリゼィクルスバークその人であった。

「だが、おめでとう。漸く半人前から一步踏み出せたんだ。早く私の居る場所まで駆けあがって来い」

「姐さん……はいツス！」

アルトの贅辞にヤドックは感極まって涙ぐむ。

いい年をした大の男が涙目になっている姿は、かなり絵的に厳しいモノがあるのだが、

惚れた弱みか、恋する乙女の色眼鏡が掛っているアルトにはなんと  
もいじらしく、可愛らしい物として映っていた。

仕方の無い奴め、とアルトはその硬質な美貌に笑みを浮かべる。  
と、そこで横から強い視線を感じた。

視線の正体は先の受付嬢。

「……………なんだ」

「いえいえ、若いっていい事ですね『炎獅子』」

眼の前でいちゃついてんじゃねえよ、このスカタン共が。

なぜかアルトには眼の前の受付嬢から発せられた物以外の声が聞  
こえた。

三十路近い受付嬢の精一杯の嫌味であった。

キィ、と両開き扉の片割れが控えめに開かれる。

外からギルドに入ってきたのは、何時もの格好をした紫苑。

紫苑は受付前で立ち話をしているアルト達を見止めると、金刺繍  
の腰マントを翻し近づいて行った。

「アルトさん、ヤドックさん、こんにちは」

「ああシオンか、こんにちは。話は聞いている昨日の夜半は大変だ  
ったそうだな。救助の願いが出た時に、他の大型クランクは居な  
かったのか？」

「残念ながら。居合わせた時には『外套と短剣』や『知識鱗の魔弾』  
といった有名所は軒並み出払っていたみたいで……………」

通常、数十人規模の山賊団を壊滅させるクエストをギルド側は個

人に依頼しない。

アルトリーゼといった『A』を冠する冒険者であるならば話は別だが、本来ギルドランク『C』の紫苑にお鉢が回ってくる依頼ではない。

たとえ本人が望んだとしても、ギルド側の判断で希望を撥ねてしまう。

だが紫苑の場合、特例として『B』以上のクエスト、もしくは複数人で行われるクエストが受注可能な事がある。

『狼王の君』、その通り名が答え。

紫苑に懐いているシロと名付けられた巨狼。

その巨狼は元を辿れば、ラグナロック古代遺跡に住み着いた『名前付き（ネームドモンスター）』である。

強靱な巨軀に、全てを砕く鋭利な牙。

体軀に覆うのは、付与魔術を掛けられた刃物をも通さない白き毛皮。

そして、氷狼フェンリルの系譜を組む『白狼王』の称号。

討伐するには国軍一個師団を投入しなければならぬと囁かれたほどの大魔獣がシロなのだ。

それほどまでに強大な魔物が一年ほど前に、とある新人冒険者に懐いたとの情報はギルド・国問わず波紋を呼んだ。

しかし、国を震撼させた事態は時を経る毎に終息していき、やがて『狼王の君』という二つ名だけが残った。

故に紫苑を現す『少年アリス』、『黒アリス』、そして『狼王の君』の名は、本人が思っている以上に大きい。

『山猫の爪』を単独で壊滅させたとはいえ、名を出せば大半の冒険者は納得してしまうほどネームバリューが『狼王の君』にはあるのだ。

とてもバルトアンデルスに叱咤を受け、しょんぼりしていたシロ

と似ても似つかないほどの評価である。

「それは間が悪いというか、シオンが居てギルド側は助かったというか、困るところだな」

「俺としては街道の治安が守れて良かったと思います」「  
「違いない」

『炎獅子』と『少年アリス』は笑い合う。

くすくす、と笑ったび紫苑の黒髪が、アルトの紅髪が揺れた。

仲の良い姉妹。

他人が傍から見れば、二人をそう称したであろう。

それほどまでに二人の冒険者は、仲睦まじかった。

「それで？ 秘蹟礼装の件も終えたし、シオンは暫くウルドの村に戻るのか？」

「そのつもりです。また秘蹟礼装について案件が来たら宜しくお願  
いします」

「異論は無いが、ちよくちよくこっちにも顔出せ。シオンが相手な  
ら用事が無くても私は歓迎するぞ」

「有難う御座います。あつちで腰を落ち着いたら、また来ます」  
「ああ、そうしておけ」

なにより交易都市だけあって、ラタトスクの売り物は種類が豊富  
だ。

服飾など買い揃えるならば、やはりラタトスクの街の方が断然い  
い。

紫苑がシロに跨って此方に赴く回数は少なくない。

そして、暫く話に花を咲かせた後。

紫苑は手続きへと、引く手数多の人気冒険者アルトは別の依頼へと別れた。

紫苑にとって一週間ぶりになるこの世界での住み家への帰還である。

平面ではなく三次元的に小柄な体躯が躍動する。

木々から幹へ。

枝から枝へ。

梢から地面へ。

紫苑が魔動の蛍火を散らし、縦横無尽に森を駆け廻っていた。突然。

森の奥、葉に遮られ暗がりになっている場所から『鳶』が紫苑に伸びる。

『鳶』は植物とは思えないほどの速度を以って紫苑に迫る。

その脅威に枝を蹴り、他の樹木に飛び移ることによって回避。

獲物を見失った鳶が、一瞬前に紫苑がいた場所に絡みつき、ぎちぎちと強靱な締め付けで樹に悲鳴を上げさせる。

紫苑は蒼穹を満たした蒼い眼差しで樹に絡みついた鳶を捉え、掌に魔動の炎を灯らせた。

『エンレリアル浄火』とは異なる、破壊的な熱量を宿した深紅の炎。

炎を灯った手を蔦めがけ振るう。

放たれた炎は空間を舐める火炎舌となり、蔦に殺到。

一瞬にして真っ黒に焦げた炭へと変貌させた。

《随分と派手にやりおる。まるで親の仇であるな》

「実際にそうならもつと酷いです」

《じゃが容赦がないという点では一緒ではないか》

言いながら紫苑は、先ほどと同様、掌に炎を纏わせ蔦が迫ってきた方角に向けてたなびく火炎を放つ。

何度も、何度も、周囲の空気が熱せられ、陽炎が浮かぶまで。

紫苑が蔦の主を目の敵にしているのは明白であった。

執拗な炎を洗礼を受け、暗がりからついに蔦の本体が狩り立てられ姿を現す。

ずるり、と地面に身体を引き摺らせ、明るい場所に出てきた植物

系の魔物　　マンイーター（人喰い植物）。

その姿は蔦の集合体。

先ほど紫苑を襲撃した蔦がゴム鞠のように寄り集まり、一つの大きな球体として形成された体。

その鞠玉から幾重にも伸びる蔦の触手群。

そして鞠玉の中央、其処には裂け目のように真一文字に開いた口が存在した。

びっしりと口腔に並んだ鋭い歯の列。

紫苑と対峙した魔物がマンイーターと呼ばれる所以であった。

「切っても生えてくるものは苦手です」

口を不満げに可愛く尖らせ、火炎を放つ手を緩めない紫苑。

見ればマンイーターの本体の所々が真っ黒に焦げ、確実に弱らせている事が見て取れた。

炭化した部分からは新たな鳶が伸びてこない。

紫苑は少なからずこの魔物に苦手意識を持っていた。

三本角のミノタウロスや、『山猫の爪』を倒してきた紫苑が、確かにマンイーターは強力な再生能力を持ち、刃物で鳶を切り落としたりとしても、ものの数秒で再生してしまう。

だが、紫苑の苦手意識は別の事に起因していた。

《くく、やはり後ろの純潔を狙われた記憶は拭い切れぬ思い出か。

あの時の紫苑の切羽詰まった顔もなかなか可愛いものであった》

「……バルとは、もう一週間口を聞きません」

《ま、待て！ ちょっとした冗談であろう！ あ、謝るから考え直すのじゃ紫苑！》

可憐な唇をへの字にして不機嫌を露わにする紫苑。  
からかい過ぎたと焦るバルトアンデルス。

マンイーター（人喰い植物）の捕食は二種類の意味を持っている。

一つは当然獲物の体液を搾り取る食事の為の捕食。

そして、もう一つは性的な意味での捕食。

詰まる所、繁殖である。

マンイーターは魔物に分類されている中で珍しく『雄』にも繁殖行動を行う事で知られている。

その方法とは、捕えた獲物の直腸内に受精卵を塗り付けられる事。つまり、後ろの貞操が散らされてしまうのだ。

男女の区別なく。

直腸内壁に塗りたくられた種液は、苗床となった獲物の老廃物を糧に僅か一夜にして成長を始める。

その際に苗床となった宿主に根を張り、身体中の養分を搾り取り、尽くして殺してしまおう。

『マンイーターを見たらまず焼け』と冒険者の間で格言ができるほど蛇蝎の如く嫌われている魔物なのだ。

「あ、シロ」

音も無く、のたうつマンイーターの背後に白い体毛で覆われた巨狼が聳え立っていた。

凍えるようなアイスブルーの瞳で魔物を見据え、唸りを上げるシロ。

主人と慕う紫苑に手を出され、かの白狼王は怒りに打ち震えていた。

『マンイーターを見たらまず焼け』との諺があるが人喰い植物の対処法は炎系統の魔法で無くともよい。

植物の体の大半は水分で構成されている。

ならば凍らせてから砕けばよいのだ。

コオオオ、とシロの巨大な口腔から冷気の煙が揺らめく。魔動が顕現する前兆。

そして、白狼王の絶対零度の咆哮が轟いた。

世界が凍りつく。

木々を、

大気を、  
大地を、

白い死の世界へと塗り替えていく。

白狼王が放った極冷の息吹は、射線上の悉く　その命すらも時  
を止めたように凍らせた。

無論、マンイーターとて例外では無い。

轟いた咆哮の後、完成したのはマンイーターの氷像。

身体の芯まで凍りついた氷像を、シロは前脚を振り上げ、そして  
振り下ろした。

パキーン、と澄んだ音を立てて、氷像は踏み潰され、砕かれた破  
片が宙を舞う。

ばらばらに砕かれたマンイーターの残骸は、やがて淡い光を立ち  
上らせ色の付いた水晶片　まれいじゅ魔霊殊へと形を変えていった。

「シロ、少しやり過ぎです」  
《この阿呆狗め！　いつも加減というものを知れと云っておるだろ  
うが》

主人の仇なす怨敵を仕留め、意気揚々としていたシロに浴びせら  
れたのはささやかな非難だった。

てつきり褒め囃され、鼻先を撫でてくれるとばかり思っていたシ  
ロは、しゅんと頭を垂れ耳を伏せる。

周囲を見れば、白く凍り付いた森。

広葉樹林が内部まで凍結し、樹としての生を終わらせた木々があちらこちらに見受けられた。

立派な環境破壊。

出力を絞った紫苑の炎ならばマンイーターのみを焼き滅ぼすことが出来たのだ。

「でも、有難うシロ。正直助かりました。あの手の魔物はどうにも苦手で……」

《むう……紫苑、妾の時と違ってシロに対してちと甘くないか？

それに今の妾ならば一太刀で彼の魔物を滅せられる。紫苑、妾を抜いてみるがよい》

「ん？」

しゃん、と紫苑は後ろ腰に携帯した鞘からバルトアンデルスを引き抜く。

無骨で肉厚なショートソードの擬態を解いた無垢な白の剣が、紫苑の眼前に掲げられる。

すると。

純潔の白さを保っていた刀身が突如として、漆黒の闇色に塗り潰された。

木漏れ日さえ呑み込む黒。

紫苑はその深い闇の色合いに見覚えがあった。

「あ、『常闇の埋葬』？」

《然り。これならば彼奴の蔦に僅かな切れ込みを入れるだけで滅する事が可能じゃて》

秘跡礼装『常闇の埋葬』の奇跡はマテリアルの情報連結破壊。

言い換えれば斬った対象を蝕む致死の毒である。

その奇跡がバルトアンデルスの刀身に宿っていた。  
否、変化していたのだ。

突然。

紫苑の手に握られバルトアンデルスの刀身が、金属にあるまじき軟性を見せ、蛇の如くしなやかに「伸びた」。

伸びた刀身はそれ自身が意思を持っているかの如く動き、凍結した大樹の一本を易々と両断して見せた。

「ずずん、と倒木する音が森に木霊する。」

変化は素早く顕著に現れた。

大樹の切断面は刀身と同じく黒く染まっており、年輪が目視できない。

そして、切断面の黒が瞬く間に倒れた大樹全体を覆っていき、相当量の質量があつた大樹は「黒い灰」となって風に流された。

それはまさしく秘跡礼装「常闇の埋葬」の奇跡の顕現であつた。

「『千変万化』<sup>せんへんばんか</sup>。相も変わらず使い勝手がいい能力だね」

「へふふ、そうじゃろう、そうじゃろう。妾は紫苑の秘跡礼装じゃからな、この程度できぬしてお主の剣は務まらぬ」

「過大評価ではありませんか？」

「何を言う。惚れた男の為に尽くすのが女というもの。それにな紫苑、良き女とは男を威風堂々たる益荒男まといわに成長させる女の事よ。」

妾を持つに分不相応と思うならば男を磨け。まあ、磨かずともお主は十二分に良き男であるぞ」

褒め殺しの言葉を連発するバルトアンデルスに、紫苑は照れたように控えめに笑う。

口元を白魚のような手で隠して笑う様は、益荒男というにはあまりにも掛け離れていて、一輪の可憐な花と形容した方が相応し過ぎ

た。

「褒め言葉として受け取っておきます……………けど、またラティルスさんに頼まなければならぬ仕事が増えてしまいました」

《人喰い花はある程度群生しておるからな。まだもう二匹や三匹おるだろうのう》

マンイーター（人喰い植物）が単体で発生する例は珍しい。

大抵の場合、複数匹がある程度固まった範囲で発見されることが多い。

ギルドでの討伐依頼の内容も三、四匹を勘定に入れて冒険者のクエストとして掲示板に張り出される事が常だ。

よって駆除に費やす労力も必然的に手間で、面倒な魔物と認知されている。

《気にすることもあるまい。こんな辺鄙な場所で働くことを了承したのじゃ。近辺に出た魔物の討伐も家政婦ハウスキーパーの仕事の内じゃて。

それに奴の実力ならこの程度の魔物に後れを取ることはまずあるまい》

バルトアンデルスは無責任に言うが、紫苑の顔から懸念の影は晴れない。

紫苑は白狼王を見上げる。

視線に気が付いたシロは、大きな尻尾を左右に揺らし紫苑の言葉を待つ。

「シロ、先ほどと同じようにマンイーターが居たら退治してくれませんか？」

言葉の意味を介したシロは、鼻先を紫苑の身体全体に押し付け了

承の意を表す。

すぐさま主人の命を果たす為にシロは臭いを頼りに駆け出して行った。

人喰い植物討伐に白狼王。

一晩も経たぬ内に森中のマンイーターが狩り尽くされる未来が決定していた。

過剰戦力と言える采配にバルトアンデルスが不平を漏らす。

《聊か過保護ではないかのう？ ラティルスとて何も出来ぬ幼子ではないのじゃぞ。年齢を鑑みれば紫苑、お主よりも歳を重ねておるのじゃからな》

「わかっています。わかってはいますけど……………心配です。それにミオだっていますし……………」

バルトアンデルスの指摘は正鵠を射ていた。

それ故に紫苑の反論は弱弱しく、尻すぼみになっていく。

叱られた子供のようにしゅん、と小さくなる紫苑にバルトアンデルスはやれやれと矛を収める。

身内に甘い。

そんな担い手の性格は百も承知。

故に苦言を呈すバルトアンデルスの心情には、好きな子に悪戯したいという理由も隠されていた。

何より普段は凜としてい紫苑が困っている姿は可愛い。

紫苑の愛い姿に秘跡礼装『バルトアンデルス』は家路に着くまで終始ご機嫌であった

森を抜けた先。

其処は開けた湖だった。

陽光をきらきらと反射し、暖かな風が湖面を揺らす穏やかな湖。湖面より覗けば底まで一望できるほどの透明度。

そして湖の水底には巨大な根が幾重にも張り巡らされていた。

その澄んだ湖を地元の者は妖精の住処『ウルドの湖』と呼んだ。

『ウルドの湖』の湖畔には一軒のログハウス（丸太造りの建物が建てられていた。

ログハウスから伸びた煙突からは白い煙が立ち上り、人の営みを感じさせる。

紫苑とバルトアンデルスは、そのログハウス 己が住まいの玄関で立ち止まった。

紫苑の美貌はどこか複雑な感情を滲ませている。

物憂い気な雰囲気です。玄関のドアノブに手を掛けては離す動作を繰り返していた。

《何をしておる、さつさと入らぬか。家人は疾うの昔に帰宅した事を気付いておるぞ》

「……知っています」

家人の一人は耳が良く、もう一人はマナの揺らぎに敏感。

その証拠に家の中から此方に足音が近付いていた。

そして。

紫苑が躊躇していた玄関は、内部から開かれた。

家主の帰宅を出迎えたのは若い女と少女の二人。

二人とも姉妹のように似通った白銀の髪をしており、若い女の方は目が冴えるような白い肌で、少女の方は褐色の肌。

何より目を惹くのは、褐色銀髪の少女が『車椅子に座り、目を包帯で覆っていること』。

包帯の少女は車椅子に座ったまま、紫苑の帰宅を顔を綻ばせながら出迎えた。

「おかえりなさい、シオンさん」

見る者を和ませる柔和な微笑みだった。

紫苑は彼女の笑みにぎこちなく笑って返す。

「……………いま、戻りました」

この場所は暖かくて。

故郷の陽だまりに似すぎていて。

『ただいま』と、言うてはいけない気がした

## 第？章『日溜まり』

「五千万」

凜と響く涼やかな声に、薄暗い会場のざわめきが途絶えた。

今の際まで百、二百と言いつ争っていたオークションに桁が違う額が言い放たれたのだ。

会場の視線が一齐に声の発生源に向けられる。

ほう、と誰ともつかぬ感嘆の溜息が漏れた。

声を発した少女はそれほどまでに麗しかった。

完璧に調和の取れた顔の造形。

卵のようになだらかな丸みを帯びた輪郭。

桜色の花開く前の蕾のような幼い唇<sup>いとけな</sup>。

極上の宝石でも色褪せて見えるほど清廉な輝きを放つ蒼穹色の瞳。絹糸と見紛うばかりに美しい黒髪は、二房に纏められ少女の容姿に良く似合うツインテールにされていた。

そして、少女が身に纏うゴシック調のドレスは、白磁の肌の白さを一際強調していた。

時を止めたように少女の醸し出す美に酔い痴れた会場の人間達は、我に返ると囁き出す。

曰く、何処の貴族の御息女であらせられるか、と。

オークション会場に居る人間は、貴族や大商人はては王族に連なる者まで、何れも財を築いた者達。

皆一様に仮面で顔を隠す。

身元が知られては不味いからだ。

なぜなら此処は『人身売買』のオークション。

会場に居る者達は、同じ穴の貉と云えども極力素顔を見せないに越した事はない。

そんな中で素顔を惜し気もなく晒している少女はあまりにも場違いであった。

「どうしましたか？ 私わたくし以上の金額を提示される方は居ないようですが？」

「……………あ、はい！ 五千以上の方が居なければ世にも珍しいダークエルフとハーフの少女達は其方の麗しい御令嬢の落札されますが、宜しいですか？」

こてん、と小首を傾げ、花も恥じらうツインテールの少女の笑顔に、進行役のタキシードを着込んだ男性は暫し見惚れてしまった。

少女の慮外の可憐さに呆然としていた進行役は、我に返ると声を張り上げる。

だが、少女以上の金額を提示しようとする人間は居なかった。

それもその筈、ツインテールの少女が口にした額は文字通り桁が違う。

一般的な奴隷の購入額を大きく逸脱した金額に競う物好きは現れなかった。

競りに出されているのは盲目のダークエルフと、魔物のハーフ。

二人は明るく照らされた舞台の鉄格子の中で、買い手をただ待つことしか出来ない。

盲目のダークエルフは会場の熱気に怯え、魔物のハーフたる女性はそのようなダークエルフを衆目の視線から護るように寄り添っていた。

カン、カン、と進行役の男性が木槌を打ち鳴らし、二人の奴隷少女の運命が決まる。

「それではこの競りを終了させて頂きます！ 見事落札された麗しい御嬢さんに盛大な拍手を！

続きましては本日のオークションの目玉！ 彼の有名な没落貴族の忘れ形見

競りはまだ続いていた。

二人の奴隷少女を閉じ込めた鉄格子は舞台横に移動させられ、逆側から新たな鉄格子が運び込まれる。

中に居たのはツインテールの少女ほどでは無いが、見目美しい少女。

可愛らしいドレスを着込んだ如何にも男受けの良さそうな娘に会場が沸く。

だが、ツインテールの少女 紫苑は興味を失ったかのように会場を後にした。

一番欲しいと思ったものは手に入れたのだから。

忽然と姿を消した絶世の美少女に、居合わせた貴族の子息や大商人のボンボン息子は慌てた。

当然、お近づきになりたく、あわよくばお持ち帰りをしたいと考えていた目論見は、本人が存在しなければ泡となって消える。

しかし彼らが後日、従者や使いの者に身元を探らせても、紫苑の身元を掴む事は出来なかった。

彼らの頭の中で紫苑は既に貴族の令嬢と等号で結ばれている。それは決して冒険者と結びつかなかった。

彼らがオークション会場に突如として舞い降りた美の妖精と再び巡り合う事は、

よほどの縁がなければ無理だった

がたん、ごとん、と馬車が街道を行く。

空は晴天。

大地と空の境目まで続く街道を、御者は鼻歌を交えながら手綱を握っていた。

陽気な天気とは裏腹に、馬車の中では穏便ではない空気が流れていた。

片側の席には貴族の令嬢然とした格好の紫苑。

対面に座るのは一括で購入したばかりの二人の奴隷。

二人の首元には、行動を制限するルーン文字が刻まれた首輪。

それは奴隷の証だった。

警戒の眼差しで黒ドレスに身を包むんだ紫苑を見つめる魔物のハ

ーフの女性　ラティルス。

狼の魔物とのハーフである彼女は頭部にある獣耳をぴん、と立て、紫苑の一挙一動を逃すまいと金色の視線を注いでいた。

傍らには包帯を巻いた褐色肌の少女。

親鳥が雛を守るように、ラティルスはダークエルフの少女　　三  
オソティスを腕の中に引き寄せている。

「それ。今から外しますから、暴れないで下さいね？」

紫苑はほっそりとした自分の首筋をとんとんと叩き二人に巻かれた首輪を指して言った。

予想の斜め上に跳ねた言葉に、ラティルスは目を瞬かせた。

それも其の筈。

奴隷に巻かれる首輪は、『隷属の楔』<sup>クニク</sup>と呼ばれる人権に唾棄する代物。

輪に書き刻まれた付与魔術は、<sup>エンチャント</sup>主人の意に沿わぬ行動を著しく制限し、

時には電撃や首輪自体が締まり、躰を行うマジックアイテム。だが、これほど奴隷を従わせるのに便利なアイテムは多くはない。その『隷属の楔』<sup>クニク</sup>を外すというのだ。

よほどの物好きか、それとも世間知らずか。

ラティルスは、目の前のお嬢様を見極めあぐねていた。

しかし、結論が出る前に、紫苑は席より立ち上がり、自然な動作でラティルスの首輪にそつ、と手を掛けた。

「『開錠』」

紫苑の掌より蒼い魔力光が溢れ、光の錠前が形成される。

蒼い光を帯びた鍵が首輪に触れ、溶け込むようにして消えた。

カチャ、とい乾いた音共に『隷属の楔』<sup>クニク</sup>に付与された魔法が紐解かれ、単なる首輪に変化する。

紫苑は同様に、両目を包帯で巻いたミオソティスの首輪も無効化した。

「さて、と」

しゅるり、と紫苑は二房に結わえた髪の毛の紐をほどく。

鴉の濡れ羽色をした艶やかな髪が背中に広がり、手慣れた手付きで一本に結わえる。

「紫苑。俺の名前は水鏡紫苑です。まずは自己紹介から始めませんか？」

その瞬間だけは、少女の不釣り合いな一人称は気にならなかった。街道に咲いた一輪の微笑み。

その微笑みに思わず見惚れてしまったラティルスは、知らず自身の名を口にしていった。

「……ラティルス。こっちはミオ、ミオソティス」

二人の名を聞いた瞬間、紫苑は少し意外そうな顔をした。だが、すぐに警戒心を溶かす柔らかな微笑みに戻る。

「良い名前ですね。」

早速ですが一件ほど、お二人に提案があるのですが

「

ハウスキーパー  
家政婦にご興味はありませんか？

それが乙女な少年と、二人の馴れ初めだった。

数か月の時が流れた。

あれから紆余曲折を経たものの、三人は湖畔のログハウスで日々を過ごしていた。

そんな日々の折。

『ウルドの湖』の畔ほとりで紫苑と、両目に包帯を巻いたダークエルフミオソティスは微睡んでいた。

二人が仲睦まじく腰を下ろしている場所は長い『体毛』に覆われた巨大なソファアーだった。

二人の羽毛のような体重を支えるソファアの正体は白狼王ことシロ。

腹這いになったシロは嬉しそうに自身に体重をあずけている紫苑とミオソティスに尻尾を振っている。

湖畔での心穏やかで静かな生活。

その生活に幾分か慣れたミオソティスは、心の袂に秘めた疑問の解を得ようとしていた。

「シオンさん」

「……………ん？ 何、ミオ？」

微睡みに身を委ねていた紫苑が、呼び掛けに長い睫の瞼を開く。

普段は束ねている髪を解き、シロの真っ白な腹に黒いビロードを広げた紫苑。

その顔は年齢相応にあどけなさを感じさせるものだった。

「どうしてシオンさんは私を買われようと思ったんですか？ 私は見ての通り目が見えません。足も不自由だからラテイ姉さんのように家事も出来ません。」

それに私はダークエルフですし……………」

「……………」

ダークエルフとは同族に忌み嫌われる種族。

そもそもこの褐色の肌を持つ長命種の発生は二種類ある。

一つはエルフが闇の魔力に魅入られ、心身ともに堕ちるとその者は闇妖精ダークエルフとなる。

そしてもう一つ。

それは自然発生である。

極稀に母親の体内から産み落とされる稚児が褐色の肌を持つ事がある。

生まれながらにして闇に愛された赤子。

エルフ達はダークエルフを不吉な者として嫌悪する。

忌み子として生まれてしまったダークエルフも例外では無い。

同族殺しは最大の禁忌である為、彼等は忌み子がある程度育つと集落から放逐する。

だが、右も左もわからぬ幼子の放逐は、実質死を意味している。

ミオソティスもこの世に生を受けた直後に忌み子として蔑まされた一人だった。

彼女の場合、実の母親に眼を焼かれ、足の腱を切られて森の中に置き去りにされた。

森を這って進むしかなかったミオソティス。

食べる物など自力で獲れる筈もなく、

空腹で死ぬか、魔物に喰われて死ぬしか未来はなかった。

そんな彼女を救ったのが魔物のハーフであるラティルス。

ミオソティスと一緒に競りにかけられていた女性だった。

「羨ましいって思った」

「え？」

「二人が羨ましいと思ったんですよ」

「羨ましい……ですか？ 私達が？」

予想外の答えに包帯の奥の瞳で困惑するミオソティス。

紫苑はそんなダークエルフの少女に見えずとも首肯した。

「オークション会場の前に俺は二人を見ていました。競売場に運び込まれる馬車の中にラティさんとミオが乗せられていくのを。」

ラティさんはミオを離さないようにきつく抱きしめていた。ミオは腕の中で離れないようにしがみ付いていた」

回想するように紫苑の眼差しが湖面に遠く注がれていた。

湖の上では妖精が秋茜のように楽しそうに飛び回っている。

臉を閉じ、一呼吸を置いて、紫苑はミオソティスに向き直る。

「二人に家族を感じました」

「家族を？」

「そう。髪の色以外似てないけど二人は姉妹みたいでした。だから二人を傍に置いて近くで見たくなった……」

帰りたくても帰れない。

それ故の代替行為。

紫苑の現状を誰よりも知っているバルトアンデルスは、立て掛けられている木の幹で悲しげに陽光を反射させた。

憂いを帯びた紫苑の横顔。

ミオソティスは、紫苑にそんな悲しげな雰囲気を醸し出して欲しくはなかった。

「私では」

「ん？」

「私ではシオンさんの家族になれませんか？」

「……え？」

ミオソティスの一つの提案。

その言葉の意味に理解が及んだ瞬間、くしゃり、と紫苑の顔が歪んだ。

泣きたいような、笑いたいような、形容しがたい感情が紫苑の胸に去来する。

不謹慎ではあるが紫苑はミオソティスの目が見えなくて良かったと今だけ思った。

それだけ酷く歪んだ顔をしているのだから。

気づけばミオソティスが紫苑の顔の輪郭を掌でなぞっていた。まるで紫苑の存在を確かめるように。

そして。

そつ、と紫苑の頭を自身の胸に抱き寄せた。

「あ」

不意の出来事に紫苑の対処は遅れた。

それは、それほどまでに傍らの少女に心を許していた証左。

頬に触れるワンピース越しの柔らかな二つの青い果実の感触。

ふわり、と香る少女特有の甘い体臭。

紫苑の心の空虚を少しでも埋めるように、ミオソティスは腕に更なる力をぎゅっと込めた。

儂い。消えてしまいそうな人。

掻き抱いた紫苑の線の細さにミオソティスは内心で驚く。

そして頼りなさ気な儂いこの身体が自身と、姉のように慕うラテ

イルスを救ってくれたのだと思うと、途端に愛しく思えてくる。

抱く腕に一層力を込める。

この愛おしさが、感謝が、少しでも紫苑の孤独を癒すように。

「……離して」

「だめです」

ピシリ、と殻に亀裂が入る。

この抱擁は毒だ。

しかし甘い毒。

日溜まりであった故郷から放り出された齡十五の少年では抗い難い毒。

淋しい、と感じた回数は数かぞえ切れず。  
帰りたいと、幾千幾億と想いを募らせた。  
強張っていた身体に力が抜けていく。

迷子のような覚束ない腕をミオソティスの背に回した。

「少しだけ……ほんの少しだけでいいから、このままでいさせて下さい」

返答は更なる抱擁で返された。

全てを包み愛す聖母のように。

ミオソティスの胸の鼓動は、とくん、とくん、と紫苑の心の奥に染み渡っていった。

契機が訪れたとすればこの瞬間。

紫苑は蒼の大地で、二つ目の日溜まりを見つけてしまった

Original Novel

追憶のシオン

第？章『日溜まり』

「シオン……起きて」

言葉少なめの目覚ましと、身体を規則正しく揺さぶる手の感触。

ぱちり、と蒼い大粒の瞳が瞼より姿を現した。移った視界に収まっているのは、銀色の髪を短く切り揃えた女性。ベッドの横に立つ女性は、相当長身であった。縦方向に伸びた診療は180cmを軽く超えている。だが、決して大柄では無い。全体的なシルエットはすらり、と細く、女性的なふくよかさに富んでいた。

そして。

その服装は何故か男性物だった。

ネクタイを巻いた男物のワイシャツの上に茶褐色のベスト、そして黒のスラックス。

まるで執事のような格好。

だが、背が高い事も相まって不思議とその格好は獣耳の女性に良く似合っていた。

女性の金色の瞳と、紫苑の蒼色の瞳がぶつかった。

「お早う御座います、ラテイさん」

「おはよう、シオン……こんな所で寝ちや駄目」

獣耳の女性　ラティルスという言葉足らずな指摘に紫苑は、周囲に眼を配る。

油絵の具に絵筆、粘土の切れ端、彫刻刀などなど。

部屋中央の作業台には、作りかけの球体関節人形が安置されている。

此処はログハウスの一室。

紫苑がアトリエとして改修した部屋であり、決して寝室ではない。紫苑の格好も部屋着に厚手の濃紺のエプロンをした状態で就寝に適した格好とはいえなかった。

「お風呂、沸いてる……上がったら朝ご飯にしよう」

「はい、先にお風呂をいただきますね」  
「うん……ミオと待ってる」

ちゃんとした寢床で眠りに着かなかつた為か身体の節々が痛む。些か乱れた黒髪を手櫛で整え、紫苑は絵の具や粘土で汚れたエプロンを脱ぐ。

エプロンの下から現れたのは、簡素な藍色の『着物』。

紫苑の趣味は父親から教わった人形作り。

其処には人形の服飾関係も含まれている。

つまり紫苑が来ている着物は、生地からの自作。

紫苑は日本の現代人にしては珍しく普段着が和装なので、着慣れた着物を時間がある時に裁縫して作ったのだ。

最初は、ミオとラティルスには見慣れぬ民族衣装だったので奇異に見られたが、今ではそんな事はない。

逆にラティルスは、落ち着いた紫苑のしっとり、とした雰囲気相まってよく似合っていると思っっている。

しゅるり、と紫苑は袖の下から何時も髪を結わえている白い紐を取り出す。

その紐を口に咥え、後ろ髪を掻き上げ、淀み無く自慢の黒髪を結い上げた。

髪が湯に浸らない為の措置である。

そして、ほっそりとした白磁のうなじが姿を見せた。

「……どうかした？」

「？ 何がですか？」

訊かれる主語の無い疑問。

要領が掴めぬ紫苑は、疑問符を脳内に浮かばせてラティルスを見

た。  
視線を受けたラティルスは、平素と変わらぬ表情筋の動きが乏しい顔。

「シオン……どこか嬉しそう。何か、いいことあった？」

「そんな顔してました？」

「……うん」

随分前の夢を見ていた気がする。

夢の内容はおぼろげだが、ミオとラティルスが登場していたのを覚えていた。

其れを正直に話す事は、少し気恥ずかしい。

普通の人ならば。

「ラティさんと、ミオの夢を見ました。だからかもしれません」  
「……そう」

髪を結び上げた普段とは違う紫苑が喜色を隠さずに笑う。

朝日に負けぬ朗らかな笑み。

それを真正面から受け止めたラティルスもうつすら口元を上げて微笑み返す。

「じゃあ、今度こそお風呂にいつてきます」

「うん……ゆっくりね」

頭一つ半小さい紫苑がラティルスの隣を通り過ぎ、廊下に出る。脱衣所を目指し、紫苑は板張りの廊下を楚々と歩く。ラティルスが見えぬ位置まで歩いてから紫苑の表情が陰った。

俺は、どうすればいいのかな？ ねえ、バル？

相棒へ心内で問い掛ける。

返事は帰ってこない。

返答を返すバルトアンデルスは、未だアトリエの隅に立て掛けられているのだから。

地球への帰還が優先順位の第一位。

それは揺るがない。

だが。

帰還する時。

『蒼の大地』で見つけた日溜まりをどうするのか、紫苑はまだ決めあぐねていた

カポーン。

紫苑は木箱式の浴槽の中でゆったりと湯に浸かる。

深呼吸をすれば鼻腔に、檜に似た木の香りが広がった。

力を抜き、身体を大きな木風呂で伸ばす。

それだけで体の節々に溜まった疲れが熱いお湯に溶けていくのを感じた。

「んっ……あ、ふうう……」

心地良さから自然と紫苑の口から声が漏れる。

本人は意識していないが多分に色香を含んだ艶のある声だった。結い上げた髪より外気に晒されたうなじ。

そのうなじから玉のような汗が浮かび、結い上げきれなかった髪がしつとりとくつついている。

透き通った白い肌は湯で紅潮し、目に鮮やかな桜色。

ほっそりとした鎖骨が湯面の揺らめきに見え隠れしていた。

《真に良き光景である》

その一言で紫苑の至福は台無しにされた。

木造りの浴室にふよふよ、と浮かぶ純白の剣。

バルトアンデルスが気付かぬ内に、紫苑の癒し空間を侵犯していた。

「何をしているのですか、バル？」

《視姦である》

言い切った。

恥じる部分など一つも無い、と云わんばかりに清々しい自供。

同時に感じるねっとり、とした粘着質な視線に全身が強張る。

さっ、と頭に乗せていた手拭いで大事な部分を覆い隠した。

その瞳には生まれた儘の姿を晒した羞恥が浮かんでいる。だが。

恥じらう紫苑の反応こそバルトアンデルスにとっての甘露。

バルトアンデルスは無駄に鋭敏な感覚器で隠し切れていない紫苑の裸体を余す事無く捉えていた。

ベースが女性人格とは思えない程の助平親父ぶりである。

《むふふ、恥じらいに頬を染める紫苑も格段に愛いのう》

「出て行ってくれませんか？」

《暫しの猶予をくれ》

反省の色を微塵に感じさせぬ返答に、紫苑の蒼い瞳がすうー、と細まる。

紫苑は手拭いで華奢な身体を隠したまま、湯船から片手を伸ばした。

伸ばした先で掴んだものは木桶。

古来より伝わる覗き魔の撃退方法。

紫苑は迷う事無くその方法を選んだ。

「出て行って下さい！」

《ぬおッ！》

スコーン、と乾いた音が浴室に反響した

むすつ、としながらも紫苑は手を動かす。

バルトアンデルスを簀巻きにしたまま放り出し、黙々と朝食を終えた後、再び紫苑は自分のアトリエに来ていた。

人形の個々のパーツは既に完成しているので、後は組み立てと微調整を残すのみ。

次第に紫苑の顔から険が無くなり、作業に没頭していく。

アトリエの隅では車椅子に座ったミオが紫苑の存在を感じていた。ミオは人形を作る紫苑を観察するのが好きだった。

耳で、

鼻で、

肌で。

包帯で覆われた機能しない目の代わりに、ミオはそれらで紫苑の真剣な表情を見ていた。

普段の暖かな紫苑とは違う。

静謐さの漂う空間で、ひたすら人形に向き合う職人。

その横顔に、きゅっ、とワンピースに包まれた身が締め付けられるように感じた。

「……できた」

感無量とばかりに紫苑は深く息を吐いた。

作業台には完成させたばかりの球体関節人形。

完成までに費やした時間は六ヶ月半ほど。

ラタトスクの街に向いても人形用の服など販売していなかった。ので身に着けている白黒のドレスも全て手ずからの作品だ。

作業台の上に寝かされた人形は、今にも動き出しそうな永久の少女性を誇っていた。

豪華なウエーブのかかった金糸の髪。

目に嵌め込まれた透き通った碧の瞳の硝子玉。

作り手の完成に基づかれて配置された顔の造形は見事の一言。

球体関節人形の身を包むモノクロドレスは、フリルをふんだんにあしらわれ、人形の愛らしさを惹き立たせていた。

「完成、したんですか？」

「はい、やっつと」

まさに人形アリスの名に相応しい会心の出来。

紫苑はミオの問いに頷き、渾身の作に満足そうに微笑んだ。

そして。

にやり、と微笑み返された。

悪戯を企む子供のように。

ぱちり、と瞬き一つ。

寝ていた球体関節人形は自らの手で立ち上がった。

「ふむ、素晴らしき匠の業、見事也」

しげしげ、と自分の粘土細工の体を観察した人形は、そう紫苑の作品を評した。

当然話せば唇は動く。

だが、紫苑は瞬きをする瞼にも、喋る口元にもそんな機構を取り付けてはいない。

そしてその声色には聞き覚えがあった。

ぞくり、背筋を舐める艶に富んだ女の声。

それは

「バル、一体今度はなんなんのですか？」

「バルさん……ですか？」

「ふふ、妾もミオ達と同じように生身で紫苑と触れ合ってみたかっ

たからじゃ。

そして、丁度お誂え向きに妾の意識を宿す器が完成したではないか、この機会を逃す訳にはいくまい？」

あどけない少女人形の顔に不釣り合いな不適で不遜な笑み。

くるり、とバルの意識を宿した人形は、作業台で軽やかにターン。ふわり、とフリルの付いた白黒のスカートが花のように丸く咲いた。

そしてバルは、紫苑の細い腰に飛び込んで抱きついた。

紫苑の視点で、腹部に金の髪が揺れる。

猫が主人にじゃれつくような仕草を髣髴とさせた。

「なあ、よいだらう紫苑？ この器、妾にくれぬか？」

子供が親に玩具をねだるような純真さでバルトアンデルスは、紫苑の腰にきゅっと腕を巻き付ける。

紫苑の背丈の半分程度しかない球体関節人形の為、必然的にバルトアンデルスが見上げる形となる。

きらきら、と碧の硝子玉を輝かせる上目遣い。

「いいですよ」

「真か!？」

「こんな事で嘘を吐いても仕方がないですよ」

しょうがない、と溜息を一つ吐いて紫苑は了承の旨を伝えた。

完成したとはいえ、人形の進路は家で飾られるか、街の好事家に売りに出すかしか用途が無い人形。

ならば身内に喜んで貰った方が良いに決まっている。

バルトアンデルスに対しても大概に甘い紫苑だった。

「ただし、もうお風呂を覗かないで下さいね」

「それは殺生である！」

バルトアンデルスの心からの悲痛な叫びが上がる。

紫苑とミオは声を大にして笑った。

これが後に『人形師』<sup>ドールマスター</sup>と紫苑の新たな二つ名が誕生する要因となった出来事であった

朝焼けに朱に染まる『ウルドの湖』。

朝日を背に一人と一体、そして一匹が集う。

一人　紫苑は冒険者としての旅装束。

黒のハイネックインナーに黒シルクの長手袋。

純白の衣地に金刺繍の施された腰マント、そしてその後ろ腰に取り付けられた数個のポーチと、

バルトアンデルスの擬態である無骨なショートソード。

腰マントの合間から見えるショートパンツと黒地のニーソックス、そしてその間僅かに覗く太腿の素肌が眩しい。

一体　バルトアンデルスの意識は紫苑謹製の球体関節人形に宿っていた。

童女程度の背丈から、不釣り合いな色気を醸し出す仕草。

そしてあどけない口元に浮かべた不遜な笑みが奇妙な落差と、魅力を放っている。

一匹　シロこと嘗てのラグナロック迷宮の大魔獣『白狼王』。

人喰い植物を絶滅し終えた彼は、森より姿を現し、

主人に傳く臣下の如く、紫苑とバルトアンデルスの出立を待っていた。

「もう行かれるのですか？」

少女から大人へと転換期を迎えている最中の少女の声が後ろから耳に届く。

振り向けば、ログハウスの玄関から姿を見せる車椅子に乗った少女と、それを押す獣耳の女性。

「はい。今朝方ギルドより召喚状が届きましたから」

疑問に是と答える紫苑。

紫苑の帰還より三日。

伝書箱に届けられた書簡により此度の羽休めは、当人達が想像した以上に短い物になってしまった。

「また遠征は長いものになりそうですか？」

「それは今の段階ではわかりません。長くなりそうならまた伝書鳩を飛ばします」

「……………うん」

紫苑の答えにラティルスの抑揚の無い声が答えた。

「シオン……………また帰ったら、あつたかいご飯作って待ってる」

「楽しみにしてます。また材料を焼いただけの料理は出さないで下さいね？」

「……………シオン、酷い」

「冗談です」

半年前、共同生活を始めた頃に作らせたラティルスの料理は悲惨なものだった。

焦げたナニカ。

そう形容するに相応しい物体に頬が引き攣った思い出も今では懐かしい。

これでは駄目だと一念発起した紫苑が手取り足取り教えること二月。

漸く口にして美味しいといえる物が出来始めた。

今ではラティルスもすっかり料理に嵌り、研鑽に余念が無い。

それは滞在した三日に振舞われた料理で証明されている。

「じゃあ……………いつてらっしゃいシオン」

「いつてらっしゃいシオンさん」

「はい」

いつてきます。

その一言は云えなかった。

異世界に迷い込んだ渡り鳥は、また止まり木を飛び立つ。

帰るべき巣への手段を探して。

羽を休めるだけでなく、  
心に安らぎを感じた事は気付かぬふりをして

## 第？章 『討伐依頼』

様々な息遣いが奔めき合い、紫苑に集まった人数の多さを改めて認識させていた。

人間に始まり、エルフにドワーフ。

小人種に様々な亜人種。

中には妖精等も飛び交っており、まさに種族の垣塙に相応しい様相になっている。

そして。

この場に集った誰もが物々しい装備で身を固めていた。

身の丈ほどの超重量級大槌を担いだ者。

隙間なく付与魔術文字が彫られた全身鎧フルプレートアーマーに身を包んだ者。

長き年月を経た樹木を削り出して作られた魔力帯びる杖を持つ者。

ラタトスクを拠点とする冒険者達の殆どが白亜の建物　ギルド  
のロビーに集結していた。

事の発端は一通の手紙。

『緊急依頼』の四文字が綴られた書簡が冒険者達の元へ届いた事より始まる。

それはギルドから要請される特別な収集状。

文字通り緊急を要する案件がある時にだけ通達される代物。

提示されるクエストは総じて危険度が高い。

だが、齎される見返りも大きい。

故に名を上げたい冒険者達はこぞってギルドに集まっていた。  
灯に惹かれる誘蛾のように。

ギルド職員からの口頭による説明を屈強な冒険者達は今か今かと待ち兼ねていた。

そんな中。

事務室に繋がる扉がカチャリ、と開かれる。

数多の視線が一斉に扉側に注がれる。

現れたのはすらり、と上背のあるエルフの男      ツイーリィツヒ。

ツイーリィツヒは集まった視線など意に反さぬとばかりに丸眼鏡を優雅に指で押し上げ、

カツカツ、とその長い脚で冒険者達の前に立った。

「長い前置きなど性に合わんのでな、要件だけを話す」

これだけラタトスク中の冒険者を前にして物怖じしないギルドの受付に、紫苑は彼らしいと思った。

そして。

ツイーリィツヒは深みのある明瞭な声でクエストの内容を開示した。

「今回の任務は      『吸血姫』の討伐だ」

Original Novel

追憶のシオン

第?章 『討伐依頼』

吸血鬼。

人型魔物の中で特に厄介だと認識されている夜の種族である。

身体能力、

魔力、

知能、全てが優れた夜の支配者。

更に彼等はエルフに並ぶ長命種。

長い時を重ねた個体ほど、より強く、より狡猾になっていく。

そして。

吸血鬼の討伐が厄介と云われる最たる理由は、眷属の増殖速度。

血を飲んだ相手に己の血を分け与える事で眷属にしてしまう吸血

鬼。

その仕組みは眷属にも同様の事が云える。

二体が四体に。

四体が八体に。

八体が十六体に。

親の吸血鬼から系譜が離れる毎に力が弱まるとは云え、ねずみ算式に増えていくその数は脅威。

吸血鬼が襲撃した街が僅か一夜にして死人だらけの街になったなど、風の噂でたまに聞く話だ。

そして此度討伐対象に挙げられるのは名前付きの魔物『吸血姫』ギルドの報告によれば。

ラタトスクの遙か東、南北に分断するオネゲル山脈に連なる山の山村にて、突如として発生した不死者の大群。

不死者の軍勢は近隣の村や町を呑み込んでいき、生者を同類に変

え、その規模を肥大させていく。  
そして。

襲われた村や町にはある共通点が存在した。

それは不死者の群れが襲撃する三日前に村中、あるいは町中の鏡に血文字が浮かび上がってくる怪現象。

血文字で書かれた言葉はただ一つ。

『吸血姫』の一言のみ。

事の真偽は兎も角、生き残った住人から事情聴取した結果、不死者は少なくとも二千は下回らない程の規模。

それだけの物量は純粋な脅威。

早急にギルド側は対処しなくてはならなかった。

なぜなら血で綴られた犯行予告は既にラタトスク中の鏡に出現したのだから

「今回は『吸血姫』の討伐、か……」  
「難しそうですか？」

「ああ。一度私も下級吸血鬼の手に堕ちた街を赴いた事があるのだが……いかなせん数が多すぎてな、

燃やしても燃やしてもグールとなった住人が次々と湧き出してきて随分と手を焼いたものだ」

ラタトスクの商業地区にて買い出しに赴いた紫苑。

その傍らを歩くのは、深紅の髪が日差しに生える麗人　ギルド

ランク『A』のアルトリーゼ。

彼女は自分の体験談を思い出してか、渋い顔をしていた。

「そして私が消耗した所で、漸く事的首謀者が姿を現した。奴は疲

れ果てた私を見て高らかに笑ったよ」

「それでどうなったのですか？」

「いい加減辟易していた私はその癪な笑い声にかちん、ときてな。思わず最大火力でソイツごと街の一角を灰燼にしてしまったよ。」

御蔭でギルドからペナルティが来てな、結局手元に入ってきた報酬はフェアリーの涙程度、笑い話にもならん。

今回はその吸血鬼よりも遥かに強い『吸血姫』だ。手に余る、と云うのが正直な感想だな」

己の失敗談に肩を竦めていたアルトは、『吸血姫』の話題に戻る  
と洪面を更に顕著にした。

『炎獅子』の異名を誇るアルトが渋る程の難クエスト。

二人の後ろで丁稚の如く荷物持ちに従事していた新米冒険者ヤドツクは顔を蒼くした。

「此度は『外套と短剣』も参加するとの事でしたが、  
「確かにゴルデイスのクランは人数も多いが、相手の数も少なくとも二千。厳しいだろうな」

ギルドから渡された資料。

それには既に近くの村々は襲われたと記されていた。

恐らく村人の殆どが動く屍となって討伐隊に牙を剥く事が予想される。

「根本的な解決はやはり親である『吸血姫』の首級を取る事が一番手っ取り早い。が、相手は千年級の真正銘の化け物だ。

国軍の到着を待ってから連携して討伐に赴いた方が確実だろう」

『吸血姫』とは御伽話に登場する悪い吸血鬼のお姫様。

話の中ではとある大国を脅かした魔物として描かれている。

だが、『吸血姫』とは架空の存在ではない。歴として実在する古来の魔物。

『吸血姫』が脅かした大国とは、数百年程前のラタトスクを領土とする『ヴァルハラ共和国』。ならば否が応にも軍を派遣する筈だ。

「だが位置が悪い」

懸念すべきは不死者の発生が国境線に近い事。

「国の賢人議会で日和見な意見が多ければ、国軍の派遣も滞るのは予想に難くないな」

近年では北の『神聖ミッドガルド帝国』との緊張も高まっている。国としてもこの時期に悪戯に相手を刺激したくは無い筈だ。

国の面子と、他国の脅威。

軍の派遣は、この二つの板挟みになっていた。

「シオン、お前は今回の件は降りないのか？ ほとぼりが冷めるまで何処かに避難する選択もあるだろう。」

お前はまだ若い、賊が相手とは訳が違うのだぞ」

「グールの軍勢がこのまま拡大していけば、遠からずこの街の周囲にまで被害が及びます。それは嫌ですから」

「そうか」

「それに」

ぞくり、とアルトの背筋が泡立つ。

内臓を鷲掴む暗い獣の気配。

目の色を変える、と慣用句があるが紫苑は文字通り再現していた。蒼穹色をしていた瞳は、仄暗い海色に。



おねだりを笑顔で一蹴。

バルトアンデルスは唇を尖らせながら触手の詰め込まれた瓶を元あつた場所に戻した。

滑らかに変化するバルトアンデルスの表情。

その表情の変化は、とても人形とは思えないほど豊かだった。

「先程から気にはなっていたが……彼女はお前の使い魔か何かなのか？」

アルトは露出したバルの肘関節や、指関節を注視しながら尋ねる。外気に晒されたそれらの関節は、無機質な球体をしていた。

「いいえ。恩人ですよ、命の」

はしゃぐバルの横顔を、紫苑は慈愛に満ちた表情で見守っていた。その穏やかな顔を見れば、百の言葉で語るより雄弁と気持ち伝わって来る。

「好きなのか、彼女が？」

「それはもう。困らせられる事も多いですが、一緒に居てくれて感謝していますよ、いつも」

本人の前では言いませんが、と紫苑は茶化して付け加えた。

一方で話題の渦中のバルは心底浮かれていた。

なにせ今、バルが意識を移している人形は、愛しき紫苑が丹精を込めて仕上げた器。

そして人形とはいえ人型であるのなら触れ合える。

元の剣でも触れようとすれば出来ない事も無いが、酷く不格好だ。伸ばした刀身でぺたぺた、と頬に触れる光景などシユールを通り越してホラーの領域だ。

だが、人形の器であれば紫苑を抱き締められる。

事実、昨夜はベッドに潜り込み、紫苑に抱かれて休眠状態に入っ  
た。

「あいたっ」

詰まる所、バルは浮かれて周囲の把握が疎かになっていた。

その帰結として通行人にぶつかってしまう。

ましてや今は冒険者達が討伐の準備をしている最中。

必然的に商業地区の人口密度は高まっていた。

「おう、嬢ちゃん済まねえな怪我はねえか？」

慣れぬ人型の為に尻餅をついたバルの遙か頭上より掛けられる声。地の底から這い上がるような野太い声にバルは、上方を振り仰ぐ。

「なんじゃ、ただのオーガか」

「うおい！ 酷でえ云い様だな。こちとら立派な一つ目があるつてのにあんな悪食共と一緒にしねえでくれや」

「だったらそんな粗末な襷褌を着とくのではない。ええい！ 妾の許可なしに触れるなこの筋肉達磨め！ 腕が取れたらどうしてくれる」

三メートルを優に超える巨人族の大男は、ひょい、とバルの小さな体を片掌に乗せて持ち上げた。

そして、ちまちま、と人差し指の腹でドレスに付着した砂を払う。

だがバルからの返答は痛烈な罵倒であった。

「こらバル、親切にしてくれた人になんて事を云うんですか」

「おおう、紫苑。丁度良い所に居るな」

言うが早いか、大きな掌の上から飛び降りた。

白と黒、そして金糸の髪が青空に広がった。

とさり、と重さを感じさせぬ音と共に紫苑の首筋に抱きつく。

紫苑の方もそんなバルを危なげ無く抱えた。

「どうも連れの者がご迷惑をお掛けしたみたいで済みませんでした」  
「なになに気にすんな綺麗な嬢ちゃん。俺の方こそおっかあにちゃん  
と足元を見ろって言われてるんだが、なかなか実践できてなくて  
な。」

お互い様ってやつさ」

ぺこり、とバルを抱えたまま頭を下げる紫苑。

巨人族の男は単眼を弧にして豪快に笑う。

屈強な身体に反して、その笑い顔はどことなく愛嬌のあるものだった。

だが、バルが襤褸と評した通り、その出で立ちはお世辞にも立派  
とは言えない。

裸である。

鉛色をした筋骨隆々な上半身を惜し気も無く晒しているのだ。

数多の傷痕が残る筋肉の塊。

控え目に云っても暑苦しい。

肩に掛けられた革帯に着けられた超々重量級の大槌。

下は体格に合ったズボンと、見た事も無い毛皮の腰蓑。

それらは見る者が見れば、一級品の業物だと看破できるが、いかんせん曝け出された暑苦しい肉体の衝撃が大き過ぎて、第一印象では霞んでしまう。

観察している合間にも大胸筋がピクピク、と動いている。

「久しいな、ゴルデイス」

「『炎獅子』じゃねえか、久しぶりだな。やっと俺んこのクランに入る気になったんか、ん？」

「軽口を並べるな。お前と同じで私も討伐隊に参加する為さ」

「がっはっは、なんだお前もあの中に居たのかよ。他の種族は皆小さくていけねえや。何処に居んのかすぐに分かんなくなっちまう」

巨人族の戦士　　ゴルデイスは大口を開け、さも可笑しいとばかりに笑う。

出店の売り子や、呼び込みが巨人の笑い声に何事かと紫苑達を見ていた。

「『知識鱗の魔弾』連中は　いや、お前に訊いても無駄か」

「なんでえい、云いかけてやめるんじゃねえよ。気になるだろう」

「では今回の件で『知識鱗の魔弾』に関して動向を知っているか？」

「あん？　瞳孔？　あいつらの目ん玉がどうかしたのか？」

「……いや、やはりいい。お前には少しだけ難しかったな」

「おうよ！　さっぱりだ！　がっはっはっは！」

「副リーダーの苦勞が目に見えな……」

巨人族の男は大抵の場合おつむが少々弱い。

ゴルデイスもその御多分に漏れず、アルトの問いに半分の理解も示していなかった。

能天気で威勢の良い答えと、続く野太い大笑い。

アルトは『外套と短剣』の雑務を一手に引き受ける副リーダーの

苦勞を悼んだ。

「あの、アルトさん。もしかしてこの方が」

「ああ、紹介が遅れたな。これが『霜の鉄槌』のゴルデイスだ」

「ま、まじッスか！ まじでこの人が『外套と短剣』のゴルデイス  
「イヴィングっすか！？ すげえっ！！」

ヤドツクが目を見開き、驚愕の叫びを上げる。

そして、憧憬に染まった瞳でゴルデイスを見た。

紫苑もそれに倣い、まじまじと改めてゴルデイスの巨体を眺めた。  
そう。

未だ高笑いを上げる『霜の鉄槌』ことゴルデイスこそ、

ラタトスクに君臨する二大クランの一角『外套と短剣』のトップ。

『特A』ランクと云う本人のギルドランクもさる事ながら、今でも語られる『ギンヌンガガップの大蛇潰し』はあまりにも有名。

冒険者の間で生ける伝説とまで評され、彼の冒険譚に憧れて冒険者になった者まで居るほど大人物なのだ。

「なんだ嬢ちゃん？ がっはっは！ そんなに熱い眼で見てくれるなや。いっくら俺が有名人で男前だからって惚れちゃあいけねえぜ。

なんせ嬢ちゃんじゃ小さすぎらあ。俺の逸物を挿入れたら裂け

「それ以上戯言をほざくとその粗末なものを焼き切るぞ」

調子に乗って紫苑に性的な冗談を口走った瞬間。

アルトの深紅の瞳が縦に割れ、視線で人が殺せそうになる。

すっ、と朱の走った唇の端から憤然の炎をがちろり、と姿を現す。  
弟のように、時には妹のように思っている紫苑が性的な視線に晒される事象など、アルトはとても看過できなかった。

紫苑に抱えられたバルも、肩越しから絶対零度の侮蔑を視線に乗

せた。

二人の女性の蔑視にゴルデイスは顔を蒼くする。

心なしか内股気味に腰が引けている。

男ならば誰もが持つ防衛本能であった。

「お、おう」

「言葉を選んでから物を云え。シオンに悪影響を与えるような事を云うな」

「全くじゃ下郎筋肉達磨め。二度とそのような物言いが出来ぬようにお主の睾丸磨り潰してやろうか」

碾臼すり臼のように拳を握りこむバル。

周囲の空間を歪み、軋んだ音を立てて拳中心に向かって圧縮されていく。

ひゅん、とゴルデイスとヤドツクの玉が縮み上がる。

心底怖ろしい事を平気でのたまうバルに二人の男共は慄いた。

背筋に脂汗が伝う。

お、おっかねえ女共だ。

お、おっかねえッス。

奇しくも二人は同じ想いを胸にしていた。

「か、勘弁してくれ、俺が悪うござんした。この通りだ」

ゴルデイスは巨体を情けなく小さくして、へこへこ、と紫苑に頭を下げる。

其処に『外套と短剣』のトップの威厳は欠片も感じられない。

ヤドックはそんなゴルデイスを失望しなかった。  
寧ろ同情と憐憫の眼差しを彼に送る。  
美女と美幼女人形の視線の圧力はそれほどまでに重かった。

「あの……俺は気にしてませんよ。」

アルトさん、バル。性別を間違われるなんて良くありますし、その……えっちな事も悪気があって仰られた訳では無いみたいですし……」

「当たり前だ。悪気があってほざいたならばその場で首を刎ねていくところだ」

「同意である」

謝罪を受け入れ、助け船を出そうとする紫苑。

その助け船を不要とばかりに二人はばっさり、と切り捨てる

アルトは姫を護衛する近衛騎士の如く前が出る。

バルもより一層首筋に抱き付き、単眼の視界から紫苑を庇護した。

この場合どつすりゃ良いんだよ、おっかあ。

針の筈状態。

処置無しとばかりにゴルデイスは天を仰ぐ。

口は災いの元、と子供の頃に母親に教えられた教訓を、彼はすっかりと忘れていた

「あー兄貴！ 何処ほつき歩いてるのよ！ もうみんな宿舎で待っているの……よって、あら？」

ゴルデイスが途方に暮れる中、突然背後から甲高い声が掛けられた。

其処に居たのはワンピースのような革鎧を身に着け、肩に提げた大き目の革鞆が特徴的な小さな少女。

否、少女というには語弊がある。

若干尖った耳に、よくよく見れば小さいながらも体の造りは成人女性に近いものがある。

童顔の為に判断し難かったが彼女は小人族<sup>ホビット</sup>。

彼等にとって人間の背丈の半分しかない身長であっても成人なのだ。

「モモか！？ 助かった知恵を貸してくれえい」

「なにより藪から棒に」

ゴルデイスが手を差し出すと、モモと呼ばれた小人族はその掌に乗った。

ゴルデイスはモモが乗った手を反対の肩に近づける。

ぴょん、と軽やかなステップで巨人族の大きな肩に腰掛けた。

一連の動作はとても自然に行われた。

まるで長年連れ添った夫婦のように。

「で、何があったのよ。しゃきしゃきと答えなさい。あつちでアンタを睨み付けているアルト達と何か関係があんの？」

ぺちぺち、と毛が一切生えていないゴルデイスの頭を叩いてモモ

が催促する。

ゴルデイスは促されるまま事の始終を話し始めた

んぐんぐ、と可愛らしく喉を動かして、モモは手に持った水筒の中身を飲んでいった。

水筒の中身は上等な酒である。

それがゴルデイスから話を聞いたモモが最初に取った行動。

一気飲みをし終えたモモは、半目で自分達のクランマスターをねめつける。

「ぶっは〜……………アンタはなに初対面の子にセクハラしちゃってくれてんの！　こんの馬鹿リーダー！！」

「あでで、や、やめてくれモモ。俺が悪かったって反省してるから！」

「あ・た・り・ま・え・よ！」

げしげし、と肩に腰掛けながらモモはゴルデイスの頭部をストンピング。

頭蓋骨よ割れる、と云わんばかりの蹴りに堪らずゴルデイスは悲鳴を漏らす。

モモは一頻りスキンヘッドを踏み終えて溜飲を下げた。

すぐさま腰掛けた肩から離れ、巨体を足場にとんとん、と地面に降りてくる。

そして。

「ほんつとにウチの馬鹿リーダーが失礼な事を言っただけでごめんなさい！」

この馬鹿、悪い奴じゃないんだけど頭の回転が人より遅いの、どうか許してやってくれないかしら」

腰を四十五度以上に折った深い謝罪を紫苑にした。

これに紫苑はいささか慌てる。

紫苑としては既に十分な謝意は受け取っており、これ以上は貰い過ぎというもの。

ましてや、当事者ではない者に謝られてはどう対処してよいのか判断に困る。

「いえ、もう十分に謝罪して頂きましたし、許すも何も俺はあまり気にしていませんから。頭を上げてください」

「ほんとっ?」

「はい」

バネ仕掛けのようにぴよこん、と頭を上げるモモ。

紫苑は二人の護衛に守られながらも首肯した。

許しの言葉にモモはほっ、とした様子で笑いながら頭を掻く。

「いやー良かった良かった、人が出来た娘だねえ。アタシの名前はモモ＝フェルベルマイヤー。よかったらキミの名前も教えてよ」

「あ、はい。俺は水鏡紫苑です。紫苑が名前で、水鏡が苗字です」

「ありやりや? 俺? シオン? じゃあキミがアルトが云っていた将来有望で女の子みたいな男の子かな?」

「そっだ」

横からのアルトの肯定に、モモの桃色の髪が驚きに跳ねた。

童顔の大きな瞳がさらに大きく見開かれる。

モモはその小さな体でアルトの脇を擦り抜け、紫苑の両手を取った。

興奮気味にすぴすぴ、と可愛らしく鼻息を荒げている。

「うっわー！ほんとにキミ男の子？初見じゃ絶対に分かんない、うん今見ても男の子だって信じられないよ！」

……っあ！もしかして女の子みたいって言われるの嫌い？」

「いえ、云われ慣れていきますし、それに母の遺伝が濃いこの外見も、俺は結構気に入ってますから」

「へえーシオン君って母親似なんだ。きっとシオン君を大人にしたような人なんだろうねえ」

「はい、町でも評判の美人さんだったと聞き及んでいます」

「そうだよ、その容姿で父親似とか云われたらどんな家系だ！  
って思うもん」

矢継ぎ早に訊かれる質問を、紫苑は丁寧な物腰で答える。

礼儀正しい紫苑に好感を抱いたモモは、それからも次々と質問を  
続けていく。

歳は幾つなのか、

出身地は何処なのか、

髪の手入れはどうやっているのか、等々。

一頻り訊きたい事を終えたモモは、うんうん、と納得するとある  
提案をする。

「シオン君は今時珍しいくらい良い子だね。冒険者にしてはスレて  
ないし……」

よし！丁度お昼時だしお姉さんがこれから食べ物を買ってあげ  
ようじゃないか！何が食べたい？」

「そんな、悪いです」

「若い子が遠慮しなさんな！アタシもアルトと積もる話もあるし  
ね。アルトもそれでいいだろ？」

「構わん」

「よし決定！ あ、リーダーは先に宿舎に帰っていいよ。ちゃんと準備も進めといてね」

さあ行こう、と集団の先頭に立ち、先導していくモモ。  
だが。

それにゴルデイスから待ったが掛けられた。

なぜなら『外套と短剣』が借りている宿舎には、メンバーの殆どが集まっている筈なのだ。

副リーダーが其処に居なくては格好がつかない。

何よりゴルデイスの頭では、討伐の準備と云われても特に思いつくものが無い。

突撃、勝利、宴が座右の銘な巨人族では仕方の無い事なのかもしれない。

体格に見合った巨大な手を小さな肩に乗せて静止を掛けるゴルデイス。

「ちょ、ちょっと待ってくれよモモ。俺は準備なんて云われてもさっぱりだぞ。」

ちゆうか呼びに来たお前も戻らなくていいのかよ？

「ああん？」

意気揚々としていた所で呼び止められ、モモは酷く剣呑な眼差しをゴルデイスに突き刺す。

そして。

克蘭リーダーのおつむの低さを再認識したモモは、頭が痛そうにこめかみを押さえる。

腰に提げた布袋からメモ用紙と羽ペンを引っ張り、すらすらと何かを書き込んでいく。

時折、図体ばかりデカくなりやがって等の悪態もぶつぶつ、と咳いている。

モモはメモを書き終わるとゴルデイスの大きな図体に押し付けた。

「はいこれ。必要な物資と作戦を簡単に書いといたメモ。イエコー  
ル辺りに渡して置けば大丈夫だから失くすんじゃないわよ」

「お、おう。すまねえな」

「後、『吸血姫』の軍勢を迎え撃つ為の砦の建造が必要だから。ち  
やんと分かる人に指示を仰いでから手伝う事、いいわね？」

「へいへい、わかったよ」

「ん、宜しい！ ならさっさと行って来い」

大きさの都合上、モモはゴルデイスの脰（けい）を強かに蹴って送り出  
す。

これ以上蹴られては敵わないとゴルデイスは、巨体を忙しなく動  
かして脱兎の如くその場から離脱した。

その大きな後ろ姿に、モモは腕組みをして一仕事を終えた主婦の  
ように満足そうに笑った。

完全に夫の方が尻に敷かれている夫婦である。

「なんていうかモモさんって」

「うん？」

「ゴルデイスさんの奥さんみたいですね」

「んなつ！？」

紫苑の何気ない一言。

それはモモに多大な揺さぶりを齎した。

「いやいやいや違うんだよシオン君！ 誤解しないでよ！

アイツとは長い間冒険を共にした腐れ縁というか、気の置けない  
仲間というかそんな感じで、

決して男女間という恋愛感情というものはアイツとの間に一切な

いからっ！ その所を勘違いしちゃ駄目だからね！」

「はい、良く分かりました。素敵ですよ、そういう人が居るのって」

「完っ壁に分かってないよね！？ キミ！」

早口言葉の如く弁明を畳み掛けるモモ。

モモの顔は身体に見合った細い首筋まで隠し切れない赤で染まっている。

紫苑は暖簾に腕押しといった笑みで切り返す。

はいはい御馳走様、と云わんばかりの笑顔である。

紫苑もお年頃な年代。

同年代よりは落ち着いているとはいえ他人の色恋沙汰には、人並みに興味津々だった。

「諦めるモモ。こういう事に関してシオンは近所の主婦並みに嗅覚が敏感だ」

「まさかアルト……アンタも？」

「ああ、初見で見抜かれた」

アルトリーゼとモモ。

二人は言葉少なく共感を覚え、同時に互いの同情を交えた。

仲良く肩を落とす二人に紫苑は、あれ、と困ったように微笑む。

そんな中。

未だ抱えられているバルは、主人の首筋に小動物のように鼻先を擦り付けていた。

その表情はまさに至福。

この世の春を一身に謳歌していた

宿屋『渡り鳥の止まり木』にほど近い酒場で、紫苑達一同は親睦を深めていた。

酒場の一角。

漆喰の塗られた丸テーブルを囲み、開かれる四人と一体の酒宴。んぐんぐ、とモモは自身の頭ほどある大ジョッキを景気良く傾けていた。

ジョッキの中に満たされる黄金色の麦酒が、瞬く間に小さな身体に飲み込まれていく。

最後の一滴を飲み干した後、モモは盛大に歓喜の声をこぼす。

「ぷっはー！ 美味しい！ やっぱりお酒は命の源だよ！」

口の周りに白い泡を付けてモモが云った。

その顔はにへら、とだらしなく緩み、彼女がどれほど酒が好きかを如実に表していた。

見た目が子供のモモが大ジョッキを一気飲みして、酒臭い息を漏らす。

日本の常識では、確実に勤労意欲旺盛なお巡りさん職務質問される光景である。

だが『蒼の大地』では、その常識は当て嵌まらない。

なぜなら彼女の種族は、酒豪が多い事で有名な小人族<sup>ホレット</sup>。

モモにとってこの程度の酒はまだまだ序の口だった。

「相も変わらず気持ちのいい飲みっぷりだな」

「アルトさん、杯が空いていますよ、どうぞ」  
「む、すまん」

杯が空になった頃を見計らい、傍らの紫苑が両手で持った酒瓶でアルトにお酌をする。

舌が酒の味を求める絶妙のタイミング。

アルトは言葉少なめに礼を云い、満たされた酒を舐めるように舌先で転がした。

すつ、と紅い唇に吸い込まれていく透明な液体。

モモとは異なる洗練された飲み方。

その姿を目の当たりにしたヤドックは、惚けたようにアルトの横顔を見詰めていた。

穴が開くほど。

「ヤドック。あまり此方ばかり見てくれな。飲み難いではないか」

「あ！ いえ、すんません姐さん」

「ふふ、見るなどは云わん。ただ加減を弁えてくれ」

ほろ酔いに染まった頬に、切れ長の瞳の流し目。

酒の力で口の滑りが良くなったアルトは、普段絶対言わないような事まで口にする。

硬質な美貌がほどけ、流れ出る女の色香。

ヤドックはその違った魅力に石化されたように魅入られた。

絡まる視線に、形成される二人の空間。

そして。

面白くない独り身のモモ。

「ぶーぶー、なんだよ二人していちやついてさ、面白くない。シオン君、アタシにもお酌してくれよう」

「はい、どうぞ」

「いやあ、ありがと、ありがと。シオン君はほんと気が利くし、良い子だねえ。今、フリーなんだよね？」

良ければアタシんとこのクランに入らない？ キミならお姉さん大歓迎だよ」

「申し出は嬉しいのですが、済みません。今は何処のクランにも所属する気がありませんので」

「そっかあ、ざあんねん」

モモの提案をやんわりと断る紫苑。

モモの方も大して期待していなかった様子で、継ぎ足された大ジヨッキを再び傾けた。

一方、モモに揶揄をされたアルトは、咳払いを一つ。

話題替えをする為に、ゴルデイスが答えなかった話題をモモに振った。

「『知識鱗の魔弾』の連中は今回の招集に姿を現さなかったが、何か知っているか、モモ？」

「ああ、それ？ 別に大した事じゃないんだけど、アタシ等のクランと向こうのクランってライバル関係みたいなものでしょ？」

で、こっちに有って、あっちに無い物って大きな手柄な訳よ」

云った後、モモは鳩の手羽先をその小さな口に運ぶ。

じわっ、と噛んだ瞬間に肉汁が口の中いっぱいに広がり、酒の進みを早めた。

モモの説明を聞き、アルトの脳裏に浮かぶ心当たり。

それは詰まる所。

「なるほどな、箔を付けたいと云う事か」

「そゆこと。アタシ等の馬鹿リーダーはあんなでも一応『ギンヌンガガツプの大蛇潰し』って云う大層な名声があるからねえ。」

西のアルフェームで名前付きが出たって噂を聞いて飛んでったそ  
うだよ」

手に付いた手羽先の油をピンクの舌で舐め取るモモ。

時期が悪いな、とアルトは一人ごちた。

独白のように呟かれた言葉にモモも同意する。

なぜなら。

並みの名前付きが霞んで仕舞うほどのビッグネームが今まさにラ  
タトスクに攻め込んでいる途中なのだ。

「『吸血姫』相手に少しでも戦力が欲しいって時なのに、ほんつと  
間が悪いのよねえ」

「全くだな」

「あ、おっじさん！ 麦酒追加に蒸し子ワーム肉のマリネおねが  
ーいー」

陽気で元気な声が酒屋のカウンターまで届く。

店の主人である中年の男性が、モモの大声に負けないくらいの声  
量であいよっ、と注文を受け取った。

おつまみの注文を終えたモモは、ジョッキに残った麦酒をぐい、  
と飲み干した。

「紫苑、妾にも酒を酌するのじゃ」

「……大丈夫なの？」

紫苑の膝上からかけられる妖艶な声。

視線を向ければ、其処に座っているのは、声が外見に一致しない可憐なドレスを身に纏う球体関節人形　バルトアンデルス。

バルの催促に紫苑は不安げに眉を潜めた。

今現在、バルの意識を移している人形を製作したのは紫苑自身。

当然、物を飲食する機構を作っていないと製作者本人である紫苑は知っているが故の質問であった。

だがバルは自信満々といった様子で頷く。

「心配無用である。昨日の内に術式を人形の内側中に刻んでおいた。取り込んだものを分解して微量の魔力にして貯めて置ける術式じゃ」

まあ効率は激烈に悪いがの、とバルは付け加えた。

紫苑もそれならばとバルの差し出してきた杯に、なみなみと蒸留酒を注いだ。

くい、とバルは優雅にそれを呷る。

「美味である。やはり紫苑が手ずから注いだ酒は、天上の美酒より勝る」

「云い過ぎですよ」

「妾にとつては真実よ」

バルの過大な評価を紫苑は面映ゆいと謙遜する。

だが、バルは己の意見を固持した。

嘘偽りの無い賛辞。

心の赴くまま、紫苑は膝の上に乗るバルをきゅっ、と背後から抱き寄せた。

「くく、真に愛い主人よのう」

愉快気にバルはもう一度くい、と杯を呷る。

唇より滑りこむ酔いに誘う液体。

複雑怪奇にして現代魔術師が決して解読できない術式が、粘土細工の体内部に入り込んだ酒を空間に溶かす。

残った微細な魔力を人形の器が、塵を積もらせるように貯めていく。

その感覚を人間にして喻えるのならば。

「五臓六腑に染み渡る、と云ったところかのう」

不敵に口の端を持ち上げる金髪碧眼の人形。

そして、その人形を背後より抱きすくめる長く艶やかな黒髪が美しい乙女な少年。

濃艶と清楚。

人形アリスと少年アリス。

二人の姿は、美しきものの上に更に美しきもの重なる、まさに錦上添花であった

東の空が紫紺に染まる、宵の初め。

精霊灯の仄かな明りが飲食屋の立ち並ぶ道沿いを照らしている。

宴もたけなわに切り上げ、一同は夜気で宴の熱を冷ましていた。

そんな一行の中。

モモは顔を赤く染め、程よく酔いが回っていた。  
吐く息は多大な酒気を纏っている。  
その足取りもどこか覚束なく、見ていて気を揉んでしまう。

「ういー、もう一軒行ってみようかー」

「もうやめんか、羽目を外し過ぎだぞ」

「あはは、御免御免。久しぶりにおいしいお酒が飲めたからねー。  
つい」

アルトが自身の半分程度しかない小さな身体を支え、背中を擦る。  
モモは口をだらしく笑みの形にして、されるが儘。

「ヤドック、私はこの酔っ払いに付き添わねばならないから、シオンを宿まで送ってくれ」

「いえ、泊まっている宿は近くですので其処までして頂かなくとも……」

「何、虫除けと思って気にするな」

紫苑の遠慮を一蹴、ヤドックに送迎を言付ける。

アルトの齒に衣着せぬ物言いに、ヤドックは若干肩を落として落ち込む。

だが、アルトは鞭だけではなく餌の使い方まで心得ていた。

叱られた犬のように頂垂れるヤドックに向けて、アルトは餌を差し向けた。

それも特上と枕詞が付くような。

「帰ったら私の晩酌に付き合え、ヤドック」

「……え？ 良いんツスか？」

「そうでなければ誘わんさ」

「よ、喜んでご一緒しますツスー！」

先程気落ちしていた姿は何処へやら。

背筋を伸ばし、瞳に期待の色を満ちさせてヤドックは元気良く返す。

拳は舞い降りた幸運に感謝をささげるようにぐっ、と握り込まれた。

急激に気分を右肩上がりに軌道修正させたヤドックを、バルは心底呆れた目で見た。

「やれやれであるな。盛りのついた雄ほど扱いの容易いものは無い。ほれ小僧、送り犬の如く妾と紫苑の送迎を務めるがよい」

「了解ツス！ さあシオン、バルさん行くツス」

打てば響く鉄のように、威勢の良い声が返ってくる。

宴の場でバルが一番の年長者という事が発覚した為、ヤドックはバルの事をさん付けた。

「俺はもう虫除けでもなんでも良いツスよー！」

惚れた弱み。

恋とは先に落ちた方が負けなのだ。

浮かれただらしない顔を隠す事もせずにヤドックは先導して歩き出す。

向かう先は紫苑の泊まる宿「渡り鳥の止まり木」。

鼻歌を紡ぎながら歩くヤドックの足取りは、羽のように軽い。ステップを刻む男の足取り。

調子の外れた鼻歌と共に刻まれるそれは甚だ不恰好であった。

そんな恋に盲目な男の姿を紫苑は微笑ましく、バルは馬鹿を見るような眼で見ている。

「一途な方ですよ。ヤドックさんって」  
「……まあ、物は云い様であるな」

紫苑に抱えられて進むバルは言葉を濁す。  
担い手の色合いが変わる瞳には『アレ』はそう映るらしい。

目の前に餌を吊り下げられた犬じゃな。

硝子玉の瞳に映るヤドックを見て、そう結論付けた。

興味の無くなったバルは、球体関節の指で金糸の髪を弄り、空を見上げる。

満天の星々。

そして。

緑に覆われた月が変わらぬ姿で『蒼の大地』を照らしていた

交錯の街『ラタトスク』より離れること東に二十キロ。

日が燦々と降り注ぐトウオネラ平原に描かれた幾重もの陣。

推定で直径十メートルはあろうかというそれを十人単位の魔術師が囲んでいた。

陣を囲むロープを纏った魔術師は口々に呪を紡ぎ、円環にマナを流し込んでいく。

マナは陣に抽入されていき、円環にて循環。

魔術師達の足元の紋様が光を発し、やがて紋様に沿って全体へと満ちる。

地より這い上がる碧のオーロラ。  
奇蹟の具現は一歩手前まで来ていた。

「完成だ！ 皆の者、離れるぞ！」

術者の一人が叫ぶ。

そして。

変化は顕著に、そして迅速に始まった。

緑光に溢れた魔方陣内部の土が盛り上がり、爆発的な速度を以って天を衝く。

地響きと共に完成を果たした土の壁。

ギルド所属の魔術師達が突貫して錬成している対グール戦用の防壁だ。

防壁は平原のあちらこちらで地鳴りを上げて建造されている。

錬成される防壁同士が繋がり合い、一つの長大な関門が形成されていく。

その威容はまさに城壁と云っても過言ではない堅牢さを秘めていた。

「おうい、イエゴール。こっちの木材はどっちに持っていけば良いんだあ？」

防壁を錬成する魔術師の一人の巨人族が近付いていく。

歩く度に地を揺らす巨体。

毛が一切無い頭部に、立派な単眼。

惜し気も無く晒された頑強な鉛色の上半身。

そして。

彼の巨人の代名詞とも云える革帯に提げられた『霜の鉄槌』。

巨人　ゴルデイスは肩に丸太の束を軽々と担いで、魔術師の一人に能天気な調子で尋ねる。

尋ねられた魔術師の男。

よくよく見れば彼の纏うローブは他の者達の物と比べ、細部が違っていた。

シルクのように滑らかな黒の光沢を放つ生地 of 材質は、魔力を弾く三つ目羊の毛皮。

ローブに施された朱系の刺繍は、其れその物が陣を形成し、纏う者のマナ運用効率を増幅させる付与魔術となっている。

逸品のローブを纏う男　イエゴールは顔を隠していたフードを

取り払った。

イエゴールと呼ばれた男の素顔が外気に晒される。

それは一言で言い表すならば精悍。

歳の頃は二十代後半であろうか。

ざつくばらんに短く切り揃えられた黒の短髪。

彫りの深い顔の造形。

ひ弱な魔術師が多い事実を覆すかのような野性味を帯びた鋭い眼光。

そして。

何より眼を惹くのは顔の左半分を覆うびっしり、と生え揃った細かい『鱗』だろつ。

それはイエゴールが蜥蜴人と人間のハーフである証左。

「リーダー、その質問は一分前ほどにも受け付けた筈だが」  
「いやー、悪い悪い。あつちの皆の資材は運び終えちまって、次に何処へ運べばいいか分かんねえんだ」

凄みながら克蘭リーダーを見上げるイエゴール。

彫りの深い顔立ちと、鋭い眼も相まって異様な威圧感を放っていた。

だが。

ゴルデイスは気にした様子も無く、禿げ上がった頭をぺしぺし、と叩いて適当に謝る。

巨人族である彼は大抵の事は気にしない。

またイエゴールの場合、これが普通であり、決して機嫌が悪い訳では無い。

その強面の眼光で子供が泣いている姿は、ラタトスクでは割と良く見られる光景だ。

「次はあちらの櫓に運んでくれ。それと副リーダーはどうしたんだ？」

「ああ、モモか。モモならあつちで『炎獅子』のアルトと世間話でもしてんじゃねえのか？」

酷いんだぜアイツ、無駄に図体がデカイから人の三倍は働けたつてよ。蹴られたケツがまだ痛てえ」

ぼりぼり、と尻を掻きながら愚痴を零すゴルデイス。

彼が片腕で持っている丸太の束を見れば、人の五倍以上は優に働いていそうであった。

尻を掻いた後、ゴルデイスは親指でモモ達が居るであろう方角を指す。

イエゴールがその方角を見れば、其処には目立つ目印があった。  
白。

巨大な白き毛皮の狼が其処に存在していた。  
白い巨狼は気怠そうに地面に伏せ、その周りで紫苑達は談笑していた。

白狼王はイエゴールの視線に気付き、此方に顔を向ける。  
極寒のアイスブルーの視線。

瞬間。

イエゴールは自身が喰い千切られる光景を幻視した。  
存在の格が違う。

どちらが捕食者で、どちらが被捕食者なのか。  
理性ではなく本能で理解した。

気付けばイエゴールの掌にはじっとり、と大量の汗が滲み出ていた。

「おい、大丈夫か、お前え？」

イエゴールの肩にゴルデイスの太い指が乗せられる。  
揺さ振られた振動ではっ、と我に返る。

「……凄まじいな。あれが白狼王か」

「む？ ああ、あの馬鹿でかい犬っころか」

「リーダーはアレに勝つ未来が想像できるか？」

「難しい事を訊くな、イエゴールよ……… そうだな、下手すりゃ  
アレはギンヌンガガップの腐れ蛇より厄介かもしれん。」

ゴルデイスは顎を親指と人差し指で扱きながら答える。  
眼を見開く。

淡々と呟かれた答えにイエゴールは動揺を隠し切れなかった。

『ギンヌンガガップの大蛇潰し』の伝説を目の当たりにした彼だ

からこそ、その言葉の重さを正確に悟った。

大きさを比較すれば、ギンヌンガガツプの大蛇の方が遙かに長大であった。

しかし。

その大蛇ですらゴルデイスが受け継いだ巨人族代々の秘蹟礼装『霜の鉄槌』の前に敗れたのだ。

生ける伝説を以ってしても厄介と云わしめる白狼王。

イエゴールは俄かに信じ難かった。

「そこまでの魔物なのか？」

「ああ、アレはおそらく精霊化するな」

「……………馬鹿な……………いや、そうでなければ国軍一個師団が必要な  
どとは噂されぬ、か」

精霊化。

それは魔動を行使する生物が、より世界への強制力を欲した時の形態である。

魔動が出来るモノ達の中でも一握りの存在が辿り着ける境地。

マテリアルからエーテルへ。

肉体と云う現世へと縛り付ける枷を取り払い、高次の存在へと昇華させる現象。

その状態で行使される魔動はもはや災害の域。

人知を超えた理と寄り添う精霊の獣。

それが精霊化だ。

「だが味方であるのなら、これほどまでに心強い存在は無いな」

イエゴールの視線は、アルト達と談笑する黒髪の少女へと移った。

鴉の濡れ羽色の髪の少女　紫苑。

すなわち白狼王を使役する『狼王の君』。

視線を感じ取った紫苑もシロと同様にイエゴールの方を向く。  
主従で似た反応の良さ。  
そして。

ぺこり、と礼儀正しくお辞儀を送った。  
イエゴールは勘付かれた事に驚きつつも、目礼を返した。

「なあなあ、俺は？ 俺は？」

「……まあ、期待はしているさ、リーダー」

先程白狼王について話していた真剣さはどこへやら。

ゴルデイスは単眼を輝かせて、自身を指差す。

その姿は、まさに図体がでかい餓鬼そのものだった。

そんなゴルデイスに対して、イエゴールの反応はぞんざいそのものであった。

漫才のような遣り取りを二人が行っている最中にも作業は続く。

ほぼラタトスク中の冒険者を総動員しての突貫作業。

主に指揮を執っているのは、『外套と短剣』のクランメンバー。

『外套と短剣』がトウオネラ平原に居る最大規模のクランだからである。

メンバー以外にも様々な冒険者や他のクランが汗水を垂らして防壁の建造に従事していた。

その他にも街の住人が土木作業を手伝い、商人達は自費で炊き出しを行う。

ラタトスクに住まう住人は己の街を守るために今出来る事をする。  
来るべき決戦に向けて

翌朝。

朝日が昇る前の暁刻。

西の空が明るく薄紫に変わりゆく中。

紫苑は一人、昨日の内に錬成された防壁の上で佇んでいた。

今の紫苑は、糸を操る装備である黒シルクの長手袋を身に着けていない。

ノースリーブの黒いインナーから覗く肩から白魚のような指先にかけて姿を見せる白磁の肌。

まだ夜気の冷たさを含んだ風が晒された素肌を撫で、黒絹の髪を悪戯にさらう。

蒼い瞳は、長い睫の瞼で閉ざされている。

「来た」

大気に僅かに混じったざわめき。

閉ざされた瞼がゆっくり、と開く。

瞼より下弦の瞳が姿を見せ、完全に蒼穹の瞳が開かれた。

「バル、お願いします」

《やはり元の装備では持たぬか》

「糸は消耗しやすい道具ですから。流石に今近付いてきている大群相手には些か無理があります」

《あいわかった。妾は紫苑の前に横たわる障害を切り裂く剣也。此度はそなたの『糸』として存分に揮うがよい！》

バルの背中を強く押す声。

瞬間。

後ろ腰のショートソードがぐにやり、と輪郭を歪め、布生地のように平たく変貌する。

まっさらな布状のバルは、紫苑の白磁の両腕に絡み付き、長手袋の様相に落ち着いた。

白から黒へ。

最後に色を変色させ、バルの変化は終わった。

紫苑は柔らかく掌を握り、そして萌芽の如く開き、具合を確かめた。

其処には絶対に消耗しない武具の理想があった。

「いけます」

凜、と力強い紫苑の肯定。

その刹那後。

甲高い鐘の音が平原に響き渡った。

物見櫓より遙か上空で見張りを続けていたフェアリーが、死者の大群を見て取ったのだ。

フェアリーは手に持った杖で力の限り見張り台の警鐘を鳴らす。

死の軍勢は徐々にその威容を示していた。

朝日が昇る西の空。

その陽に照らされ明るくなる東の丘。

だが、全てを包む太陽の光に逆らうかのように、ぽつりぽつりと黒点が東の丘に拡大する。

点々としていた黒点はやがて黒の帯になり、丘を埋め尽くした。すべてがゾンビやグールと云った死の魔物達。

遠雷のような地響きを上げ、死者の集団は生者を喰らいにやっ  
てきた。

今此処に。

決戦の刻が来た

## 第？章『血戦』

一匹の巨大な蛇の如く平原を塗り潰す腐肉の群集。

奴らに存在するものは猛烈な飢餓感のみ。

生者の鮮肉を欲し、喰らい、どうしようも無い飢餓を埋めたいだけ。

親の吸血鬼から遠く離れた末端に過ぎないグールに思考する理性など残されてはいない。

前へ。

ただ前へ。

腐敗した足で進み、臍物を零し、汚臭を撒き散らせ、奴らは只管進む。

死の行軍に巻き込まれた者達は、自身が行軍の構成員となつて規模を膨らませる。

その腐肉の集団は、人間だけで構成されていなかった。

エルフを初めとする様々な亜人種。

そしてオークやゴブリンと云つた数多の魔物達。

中には白狼王並みの大きさの魔物までゾンビとなつて死の行軍に混ざっている。

狂気の行進は親である『吸血姫』を殺さぬ限り止まらない。決して

急増で錬成された防壁の上。

『吸血姫』の大攻勢を阻止するべく集つた千人近い冒険者達は、腐臭撒き散らす大群の数に慄いた。

報告など当てにならない程の数のグール達。

二千どころの問題ではない。  
まさしく数の暴力。  
万を超える数が大拳を成して迫っていた。

多くの冒険者達が尻込みする中。

『外套と短剣』の克蘭メンバーは冷静であった。  
三人一組の魔術師達が同時に詠唱し、一つの奇跡を練り上げる。  
腐肉の軍勢に向けて浮かび上がる巨大魔法陣。

それは防壁の上、至る所で同様に発生した。  
己が魔力を媒介に世界に働きかける『法則魔術』が待機状態で、  
その具現の時を待つ。

「射程圏に入ったッ！ 魔導班一列目！ 射てえええッッ！！」

顔の半分に蜥蜴の鱗が生えた魔術師の男 イエゴールの号令が  
下された。

瞬間。

防壁の上から腐肉の大群に向けて、幾多の魔法陣から無数の火線  
『イフリータ・フレイムタン魔人の火炎舌』が伸びる。

極太の火線は大気を焼き、ゾンビ達犇めく地表に業火の顎を喰い  
付かせた。

鼓膜を炸裂音が引つ叩き、爆炎がゾンビを呑み込み、吹き飛ばす。  
炎に包まれたゾンビ達が宙を舞い、地面に播鉢状のクレーターが  
穿たれ、肉の焦げる臭いが平原に満ちる。

イエゴールの号令の下、放たれた火精霊の息吹。

ゾンビ全体の百分の一にも満たない戦果であったが、それは確かに戦いの狼煙であった。

『吸血姫』対『ラタトスクの冒険者達』の序章。  
そのカーテンコールが燃え盛る炎と肉の焼ける臭いに包まれて、  
始まった

Original Novel

追憶のシオン

第?章『血戦』

「魔導班三列目！ 射てえええツツ！！」

怒声にも似た号令。

刹那の後。

第三射目の『魔人の火炎舌』イフリータ・フレイムタンがゾンビと大地を舐める。  
しかし。

広域殲滅『法則魔術』を以ってしてもゾンビ、グール共の進軍を  
阻み切れない。

火線の範囲外、或いは焼け焦げた同類を踏破して、腐肉の軍勢は  
防壁に迫る。

津波のように迫るゾンビ共を殲滅する為に、後方支援型の魔術師  
以外の冒険者は、防壁の外側で陣を敷いていた。

陣の先頭。

集った討伐隊の大将としてゴルデイスが腕を組んで仁王立ちをし

ていた。

その肩にはモモがちょこん、と座っている。

飲み込まれれば死を意味するゾンビの軍勢を目の当たりにして、ゴルデイスの巨人族の戦士としての血が滾る。

獲物を求め、鋭く細まる一つ目。

口角が吊り上り、獰猛に歯が剥き出される。

「頃合い、か」

「リーダー、アンタちゃんと『抗吸血鬼薬』飲んだの？」

「あん？ こ、こごきゅーけつやくつてなんだそりゃ？」

すつとぼけた答えを返すゴルデイス。

中身の詰まっていないかぼちゃ頭をモモがげし、と足の裏で蹴る。

吸血鬼化を防ぐ特殊な魔力を体内に循環させる『抗吸血鬼薬』を服用していない脳味噌筋肉に、モモは半目で睨み付ける。

眼が完全に据わっていた。

「アンタって奴は……ほんつとどうしようも無いんだから！ ほらサッサと飲む！」

「まつず！ なんだこれ滅茶苦茶まずいぞモモ」

肩に提げた革靴から小瓶を取り出し、無理やり中身の『抗吸血鬼薬』を飲ませるモモ。

あまりの不味さにゴルデイスは抗議の声を上げた。

しかし不平の声をモモは一蹴。

地響きを上げて迫るゾンビの大群を前にしても変わらぬ夫婦漫才。

『外套と短剣』のトップ二人は名に恥じぬ度胸を持っていた。

それが克蘭のメンバーに安心感を与えている事など二人は知らない。

「つべこべゆーな！ 後、アンタは一応討伐隊の大將なんだからビシツと気合の入る言葉を注入すんのっ！ さっさといつものする！」  
「わーかったよ」

これ以上頭部を蹴られては堪らないと、ゴルデイスは姐さん女房の言に唯々諾々と従う。

ぐるり、と陣を敷いた討伐隊を見据えるゴルデイス。

その口角は先程と同様、不敵に吊り上っていた。

まるで負けるとは思っていない不遜な笑み。

巨体から滲み出す覇気。

集った討伐隊は、『霜の鉄槌』ゴルデイスの器の広さを感じざるを得なかった。

そして。

ゴルデイスは肺一杯に空気を吸い込み、叫んだ。

「小難しい事はどうでもいい！！ 目の前に居るのは俺たちの敵だあ！！ ならどうする！？」

『潰せ！！ 潰せ！！ ぶっ潰せ！！！！』

腹の底にびりびり、と響く大声量。

答えたのは、『外套と短剣』。

己の足で大地を踏み鳴らし、己の武器を大地に打ち付ける。

雄々しく勇ましい戦場の聖歌隊。

戦力差十倍。

それがなんだと云うのだ。

我等こそ最強。

遮る物全て悉く粉碎してゆくのが我等。

「いいだろう！ 相手は高々十倍、蹴散らせ！ 踏み荒らせ！ ぶっ潰せッッ！ 野郎共、突っ撃だあああああ！！！！」

『 ツツツ！！！！！！！ 』

瞬間。

戦場が爆発した。

ラタトスク最強クランたる『外套と短剣』の戦士達の咆哮。

声と云うよりは音の壁。

大気が打ち震え、

大地が戦慄く。

否。

『外套と短剣』の戦士だけでは無い。

この場に集った冒険者達が何かに突き動かされるように雄叫びを  
発している。

「よっしゃー！ んじゃ私からも檄を入れてやるわ！」

汚泥のような腐肉の津波に突進していくゴルデイスの肩の上。

ぐびっ、と手に持ったピンクの水筒の中身を一飲み。

モモは手の甲で口を拭いながらやる気に満ちていた。

『野郎共！ 気張んなさい！！』

その言葉を発した瞬間、手の中にあつた細長い水筒が淡い精霊光  
に包まれる。

水筒の外筒に描かれた意匠がモモの魔法を増幅し、奇蹟を伝播さ  
せる。

モモの背後に浮かび上がった薄緑色をした半透明な靄。

薄緑の靄は水筒型の杖がより一層光を放つと、戦場にぱっ、と拡  
散していく。

周囲の者の身体能力を底上げする『精霊魔法』。

その効果は顕著。

靄　大地の精霊が行き届いた範囲内の者達の咆哮はより力強く、ゾンビの群れを踏み荒らしに行く脚はより強靱になっていた。

モモの一番近くにいたゴルデイスも例外では無い。  
寧ろ人一倍『精霊魔法』の恩恵を一身に受けていた。

「おっし、リーダー！　デカいの一発かましてやんなさいっ！」  
「英雄雄おおおおおッッ！！」

一步踏み出す毎に悲鳴を上げる地面。  
二回りも膨れ上がった鉛色の肉體。

そして有り余る筋肉の躍動から振り被られる『霜の鉄槌』。  
秘蹟礼装『霜の鉄槌』は持ち主の意志を反映し、真の姿を顕現させる。

天を衝けと天頂に掲げられた戦鎚は柄の半ばから弾け、幾つもの金属パーツに空中で拡がる。

分かたれた白金のパーツは銀色の魔力線で互いを繋ぎ、描かれるその全容は途轍もなく巨大なハンマー。

莫大なマナを放つ巨大戦鎚は余剰魔力を霜のように辺りに降らしていた。

ずん、と地面を陥没させ、踏み切られた巨人の足。  
跳躍。

目指す着地地点はゾンビ溢れる腐肉の海。  
優に三百キロを超えるゴルデイスの巨軀が宙を駆ける。  
小山のような霜降らすハンマーを掲げて。

「ぶっ潰れるおおおおおッッ」

巨大戦鎚が巨人族の臂力を以って撃ち下ろされる。  
さながら白金の隕石。

瞬間。

トウオネラ平原を局地的な大地震が襲来した

上下に、左右にぐらつくトウオネラ平原。

『霜の鉄鎚』が撃ち下ろされた地点を基点にして、円状に立ち昇る銀のオーロラ。

厚く天を覆う雲を貫き、その眩いオーロラは内部に存在するゾンビ達をミクロ単位で分解していく。

全てが光の中に呑み込まれていく。

まさしく浄化の光。

余波だけで百を超すゾンビの群れが跡形も無く吹き飛んでしまった。  
た。

腐肉の海にぽっかり、と丸い空白が生まれていた。

その神秘的な破壊の光景は、別の地区に居た紫苑の目にもはつきりと映っていた。

目にはモノクル（片眼鏡）のような金の円環魔法陣  
『知識人  
ディテクター・マジック  
の見解』

礼装名『霜の鉄鎚』

約3000年前の魔科学時代後期の土木用携帯重機。

使用者の魔力、緊急時には生命力を吸い上げ発動。

柄の半分から個々のパーツに分解され、巨大なハンマー状の力場を形成する。

物質をエーテルに還元し、持ち運びを容易にする事が出来る。

秘蹟礼装バルトアンデルスの力を借りた『知識人の見解』ディテクト・マジックから詳細な情報が流れ込んで来る。

「あの筋肉達磨が後十人ほど居れば楽が出来そうなのう」

「そうですね。軍の方達は結局間に合わず仕舞いですし」

傍らに佇む金髪碧眼の『人形アリス』　バルが『霜の鉄鎚』が齎す奇蹟を見ながら呟いた。

紫苑も同意。

だが。

それは国の援軍が間に合わぬ状況では、無い物ねだりではない。

「では妾達も始めるとするかの」

「はい……あつ、シロ」

押し寄せてくる腐った津波を前にして、紫苑はふと気付く。  
頭に浮かんだ懸念事項。

呼び掛けに行儀良く座っていたシロは頭を紫苑に近付けた。  
そんなシロに紫苑は人差し指を立てて注意を促す。

「食べちゃ駄目ですよ。お腹壊しちゃいますから」

「ぶふっ……ふ、ふふふふ。妾を笑わせるでないぞ紫苑」

母親のような小言。

吹き出すバル。

注意を促されたシロは情けなく小さく唸り、ふるふる、と頭かぶりを振る。

シロとてあのような腐って臭気を放つゾンビ達を喰らおうとは思っていない。

紫苑はくすり、と笑って顔を引き締める。

「水鏡紫苑、参ります」

そして。

静かに宣言をした。

糸繰りの異端児が戦場へと往く

腐臭漂う戦場は混沌としていた。

剣戟の大合唱。

飛び交う魔術のオーケストラ。

喧騒が土を舞い上げ、血と臓物と腐汁が飛沫として戦場に彩りを加える。

冒険者側は誰も彼も必死だった。

瀑布の如く押し寄せる種族様々なグールとゾンビ達を、斬り裂き、

突き刺し、  
薙ぎ払い、  
焼き焦がし、  
吹き飛ばし、  
凍り付かせる。

元々、魔物であったゾンビやグール以外は魔霊殊とならず、死骸は現世に留まる。  
積み重なっていく死骸の数々。  
だが。

幾ら屍体を再起不能なまでに破壊し尽くしても、次から次へと溢れんばかりの腐肉の群れが寄ってくる。

終わりの見えない戦い。

そして相手は痛みを知らない生者を貪る事しか能の無い動く屍体。嘔せ返る腐臭と相まって確実に冒険者達の気力体力を消耗させていた。

脂ぎった肥満体に豚の頭部を乗せた魔物 オーク。

その豚頭のゾンビが腐った身体で棍棒を横薙ぎに払う。

穴の開いた腹部から撒き散らされる腸と腐った体液。

オークゾンビはそれらを周囲に散乱させながら、他のゾンビを相手取っていた女冒険者に棍棒をブチ当てる。

「ッガー！」

ごつり、と鈍く嫌な音が頭部と棍棒とで奏でられ、女の冒険者は吹き飛ばされた。

地面と顔を強かに打ち付け、横たわる女冒険者。

すぐさま体勢を立て直そうと試みるが、脳を揺さ振られた衝撃で平衡感覚が滅茶苦茶。

歪む視界の中で、豚頭のゾンビがじりじり近付いてくるのが見て取れた。

獲物を求めて彷徨う腐った手。

「い、いやああ」

生きたまま肉を喰られる恐怖に女冒険者は、倒れたまま後退る。

近くに居る他の冒険者達は自分の事で手一杯で彼女まで手が回らない。

そして。

窮地に立たされている女に対して怖気立つ別の恐怖が待っていた。下半身に申し訳程度の襦袢を纏ったオークゾンビ。

その襦袢切れは既に衣類としての機能を果たしておらず、雄の生殖器が外部にはみ出していた。

「う……嘘、なんで……」

血管を浮かび上がらせ、隆々と勃起する豚の一物。びくびく、振るえるソレは女を求めていた。

親の系譜から離れすぎた吸血鬼の劣化コピーのゾンビとグールに理性は無い。

それ故に睡眠欲を満たさなくて良い彼等は、最も強い欲求を満たす為に行動する。

通常の場合、食欲がそれに該当する。

だがオークの場合は異なる。

『性欲豚』と蔑称を持つオークは、並外れた性欲故にゾンビとなつてからでも異常性欲を満たす為に行動していた。

そして目の前には無抵抗となつた牝が一人。

最悪な事に周囲のゾンビは全てオークで構成されていた。

「来ないで！ そんなもの近付けないで！」

顔を真つ青に蒼褪める女冒険者。

じりじり、とにじり寄ってくる『性欲豚』達。

規格外れに長大な幾本もの一物が牝を求めている。

絶望が女冒険者の脳裏を侵食していった。

「豚さん、おいたは駄目ですよ」

唐突。

りん、鈴の転がる可憐な声が、耳朶に触れた。

音も無く、『性欲豚』たるオークゾンビ達に銀線が走る。

頭部に、

首に、

腕に、

脚に、

太腿に、

線は閃として醜悪な身体中を駆け巡った。

刹那の停滞。

そしてオークゾンビ達の人型としての輪郭は、玩具のブロックの如くばらばらに崩れた。

毛足の短い草原に散乱していく十体分のオークだった身体の部品。

切り口は滑らかに鮮やか。

凄まじく鋭利な物でオークゾンビ達は切断し尽されていた。

オークゾンビの肉壁が崩れ落ちた事で、女冒険者は惨状を作り出

した人物を視界に収める事が出来た。

それはあまりにも場にも場にもそぐわない無垢な少女然とした少年であった。

『少年アリス』。

これほど正鵠を射ている異名は他に無い。

そう思えるほど視界の中に入り込んできた少女じみた少年 紫

苑は可憐な一輪の花であった。

「大丈夫ですか？ 戦えないようでしたら壁の向こう側に避難して下さいね」

「あつ……」

口から意味を成さない音が漏れる。

紫苑のつややかな漆黒の髪が翻り、背中を見せるまで女冒険者は惚けてように幼い美貌を凝視し続けていた。

戦場は停滞していない。

紫苑は蒼穹を閉じ込めた蒼の瞳で、喧騒入り乱れる戦場を見据える。

すつ、と掌を地面に向けて、身体の横に肩まで上げられる片腕。

所作は繊細。

小さき獲物を見定めた数多くのゾンビ達が与し易い紫苑に殺到する。

その虚ろな瞳は憐れな供物として紫苑を映していた。

だが、それは悪手にして地獄への片道切符。

花卉ひかりのようにあえかな紫苑の掌が地面より太陽へと顔を覗かせる。そして。

しつとり、と咲いてた花が恥じらうように花卉を閉じた。

瞬間。

糸が引き絞られるキュイツ、とした弦の音共に空間に数多くの銀線が閃く。

垣間見えたものは、蜘蛛の巣の如き無数の糸で形成された切断結界。

寄らば、切る。

その巢に自らの足で踏み入ったゾンビ達の身体に線の閃が描かれ、ばらばら死体に解体されていく。

腕が飛び、

脚が切り落ち、

首が刎ねられる。

一切の戸惑いの無い解体作業。

その悪魔のような糸の妙技に、女冒険者は息も忘れるほどに魅入ってしまふ。

だが尻餅をついていた彼女の脳裏に疑問が過る。

此処は遮蔽物など無い広大な平原。

紫苑が操る糸を引つ掛ける処など存在していない。

到底、陽を僅かに反射して存在を確認できる糸の結界など張れるとは思えなかった。

鎌首をもたげた疑問の答え。

それは宙に無数に浮かぶ小さな魔法陣。

そして。

小さな魔法陣を基点として張られた糸の結界。

透明度が高く視認の困難な小さな魔法陣は、二つの円環が重なるように構成されていた。

その魔法陣に炎や雷と云った超常現象を引き起こす事は出来ない。唯一可能な事柄は現世に物理的に干渉する事。

詰まる所、透明で小さな魔法陣の役割は滑車だ。  
これにより紫苑の糸繰りの精度は格段に跳ね上がる。  
好きな場所に好きなだけ滑車を作れるという事は、武器に糸を扱う者にとって此の上無いアドバンテージ。  
糸に対しても魔動は多大な恩恵を齎していた。

「さて、妾も往くとするかの」

ふわり、と羽のように一本の糸に降り立つ『人形アリス』  
モノクロのドレスを身に纏い、豪華なウェーブが掛かった金髪の人形　バルトアンデルス。

バルはにい、と口角を不敵に持ち上げた。  
張られた糸をたわませ、バルが宙を舞う。

とん、とん、と黒塗りの木靴が一体のゾンビの頭部に乗り、軽い着地。  
白黒のロングスカートの裾を球体関節の手で持ち上げ、次なるゾンビへとステップ。

とん、とん、と軽やかな人形が優雅に踊る。

ゾンビ達の頭部を舞台に行われるダンス。

そして。

球体関節人形は厳かに命じる。

『爆ぜよ』

パンツ、と存外軽い音を鳴らし、バルが足蹴にしたゾンビ達の頭部が弾け飛んだ。

小規模な花火のように四散する脳漿や目玉。

バルは舞踏を続ける。

まるで花畑で戯れる童女のように無邪気に。

『爆ぜよ、爆ぜよ』

とん、と足蹴と同時に腐った頭部に刻まれる術式。

一瞬にして書き込まれる精微な式は、破滅への爆弾。

バルがステップを刻む度、後を追うように破裂音が木霊する。

ゾンビ達が最後に見た光景は、モノクロのスカートから覗く純白。フリルがふんだんにあしらわれたドロワーズであった。

「くく、『爆ぜよ』……む」

愛らしい人形乙女のダンスが止まる。

器用にバルは一体のグールの頭の上で立っていた。

グールは鋤を持ち、質素な麻の服を着ていた。

おそらくは農作業を生業とする者のなれの果て。

頭部に押し掛かれたグールは、バルを排除しようと手を泳がす。

バルはその手をするり、とすり抜け、別のゾンビへと飛び移った。

「紫苑ー、良さ気なグールが居ったぞ」

「大丈夫です」

良さ気と云う意味。

それは腐って無く新鮮だと云う事。

すなわち。

微細な金属糸で操れるだけの神経も筋肉も残っている証。

「もう『ソレ』には糸を取り付けましたから」

紫苑が答えるのと同じ時。

バルが示した男性グールの動きが突如として変貌を遂げる。握っていた鍬を捨て、顎を引き、固く握られた拳。足を肩幅まで開き、ぐっ、と落ちる重心。

左手は狙いをつける為に前へ、握り込まれた右拳は腹横へ。そして。

放たれる神速の正拳突き。

正拳突きは標的となったゾンビの鳩尾を刺さり、背中より突き抜けていた。

男性グールは素早くその腕を引き抜き、腹に風穴の空いたゾンビに上段蹴りを浴びせる。

空手の有段者から見ても惚れ惚れするような上段蹴りがゾンビの頭部に吸い込まれる。

ぐしゃり、と西瓜が潰れるようにゾンビの頭部は、原型を留めずに飛び散った。

ぐらり、と頭を失ったゾンビは糸が切れたように倒れた。

元々、人体は二割程度の筋力しか発揮できないようになっている。これは全開の力を発揮した時。

自身の筋細胞などを傷付けないように無意識化で脳から枷が嵌められているからだ。

しかし。

既に本人が死んでいるゾンビやグール。

そして、紫苑の糸繰りの制御下に置かれている肉体にそんな枷は意味を成さない。

肉体の破壊を恐れない動きは壮絶。

ましてや、紫苑が操れば武術の型すら扱うグールとなる。

更に操る対象は敵側。

冒険者側の損害を気にする必要は無かった。

紫苑の制御下に入ったグールは五体。そのどれもが目覚ましい活躍でゾンビ達の数を減らしていく。同胞の頭を握力で潰し、手刀で腕を斬り飛ばし、回し蹴りで身体のを骨を砕く。紫苑はグール達を操りながらも近寄る亡者共を細切れに解体。バルは軽やかなダンスで爆破。ゴルデイスの様な派手さは無い物の、ただ只管効率的に腐肉の軍勢を殲滅していった

ずん、とその一步で地面が揺れた。ソレの特大の蹄がゾンビを踏み潰し、ぐちゃり、と粘着質な音を立てた。

　　擦じ曲がった二本の角。  
　　理性の無い落ち窪んだ瞳。  
　　不揃いながらも三列に層を成す鋭利な歯群。  
　　体毛の一切無い浅黒い筋肉で覆われた巨軀。  
　　尻尾が大蛇になっている四足歩行の獣。  
現れたソレは、ビヒモスと呼称される巨大魔獣のゾンビだった。

「あれはちょっと骨が折れそうですね」

「なあに、心配要らぬ。デカブツにはデカブツを相手取らせればよい」

浅黒い表皮を持つ巨獣を見上げる紫苑とバル。

紫苑はビヒモスの太い首を切断する事は、少し労力が要ると眉根を顰めた。

だがバルは、我に秘策ありとばかりに自信満々に言い放った。

「シロ！ 遊んでおらんでサッサと来ぬか！」

張り上げられるバルの声。

その声に呼応するかのように、戦場に狼の遠吠えが響いた。突如として視界が真っ白に染まる。

刺すような冷気が紫苑達の居る場所に吹き荒ぶ。だがそれは余波に過ぎない。

凍て付く息吹の直線状に存在していたゾンビやグールは悉く氷像と化して、氷の道のオブジェと化していた。

そして氷で造られたカーペットの先。狼の王が悠然と佇んでいた。

相対する白狼王とビヒモスゾンビ。

両者の体格はほぼ同程度。

先に仕掛けたのはビヒモスゾンビからだった。

鋭利に並ぶ歯列の隙間から腐った息を漏らし、白狼王目掛けて突進する。

その突進の様は、まさに浅黒き丘が押し寄せて来る等しい。迫り来る超重量の弾丸。

対する白狼王は、浅黒い巨弾に対して『動かない』。次瞬。

二つの巨獣は真正面から巨頭をぶつけ合った。  
ゴオンツ、とトウオネラ平原に肉と骨とが衝突し合う音が大きく轟き渡った。

二頭の巨獣は額を擦り合わせ、互いの力を比べていた。  
拮抗は崩れる。

ぐぐつ、と魔動により身体能力を底上げした白狼王が徐々にビヒモスゾンビを押し込んでいく。

ビヒモス側も体毛が無い筋肉を膨張させ、応戦する。

互いの蹄と爪が大地を抉り、行われる力比べ。

このままでは形勢が不利と本能で判断したビヒモスゾンビは、尻尾の大蛇を白狼王に向けて伸ばす。

「グツ……ガツツ!!」

伸びた大蛇の蛇腹は白狼王の首に巻き付き、首の骨を折らんと万力のような締め付けを開始する。

喉を圧迫され、苦しげな声が白狼王より零れる。

首を激しく振って、振り払おうとするが深く食い込んだ蛇腹は容易に緩まない。

「こら！ シロ！ 何を遊んでおるんじゃ、早うやつつけんか！」

「シロー！ 頑張ってくださいー！」

事の成り行きを見守っていた二人の主人は声援を送る。

声援を送りながらも紫苑とバルは、シロの眼下でゾンビ達を殲滅し続けていた。

主人の声援と云う名の命令。

白狼王のアイスブルーの瞳に力が宿る。



次の瞬間。

白狼王の右前脚から『蒼い氷の爪』が形成された。無骨でありながら鋭利な蒼氷の爪。

其の内に収まったマナは、恐ろしく過密にして均一な方向性を示していた。

すなわち斬る。

斬断の為だけに存在し得る爪であった。

そして。

強靱な後ろ足で大地を砕き、巨獣のゾンビに飛び掛かる。

靡く白き体毛。

番えられた矢のように蒼氷の爪が一閃。

腐敗した巨獣を斬り裂く。

抵抗らしき抵抗も無いまま、バターを切るようにするり、と蒼氷の爪はビビモスゾンビの身体を抜けて行った。

衝撃波が突き抜けていき、五条の爪痕が平原を深々と引き裂く。

縦から六等分に分割されたビビモスゾンビ。

忘れたようにビビモスゾンビは切断面より凍り付き始め、六等分に分かたれた氷のオブジェとして戦場に鎮座する。

白狼王はその奇怪なオブジェを後ろ足で蹴り砕く。

ビビモスの氷像は簡単に砕かれ、その大質量は魔獣であるが為に派手な音と共に魔霊殊へと変化していった。

シロが尻尾を振りたくり、主人の元へと凱旋する。

肉球のついた足でゾンビをぶちぶちと潰し、紫苑に近づくグールの群れを見つけては絶対零度のプレスを降らす。

凱旋するシロの跡に残るもの。

それは<sup>ひきがえる</sup>蟊蛙のように潰れたゾンビ達と、氷像と化したグール達だけであった。

「シロ、偉いです。良く頑張りました」

「うむ、見事であった。褒めて遣わそう」

頭を下げたシロの鼻先を紫苑が、かいぐりかいぐり可愛がる。

バルもその功績を褒め称えた。

眼を細め、ぶんぶん、と風切るシロの尻尾。

主人二人の賛辞にシロは、遠吠えをして誇らしげにした。

「全く、お調子者め」

「でも可愛いじゃないですか」

「ではあるのだがの」

呆れたように、しかし我が子を見るような優しげな目でバルは遠吠えをするシロを見る。

紫苑もまた微笑ましげにその美貌を柔らかく緩めた。

二人にとって白狼王とは可愛げのあるペットなのだ。

そんな一人と一体と一匹を、物言わぬ数多の氷像が見続けていた

紫苑達の居る場所から『外套と短剣』を挟んで反対側。冒険者達の右翼。

その場所に『炎獅子』ことアルトリーゼは陣取っていた。

亡者達の所為で澱んだ風が、アルトの深紅の髪を撫でていく。

胸の前で組まれた腕が、ハーフプレート軽鎧越しに豊かな乳房を押し歪めている。

紅玉の瞳はただ硬質に前を見据えていた。

眼前に広がる亡者の群れ。

アルトはその大群を前にして、ふん、と鼻を鳴らした。

洗練された大人の美貌が不快気に歪む。

「つくづく吸血鬼と云う種族は物量戦が好みらしいな」

苛立たしげに唾棄される言葉。

アルトは背中に取り付けられた愛用の斧槍をハルバート片手で抜き放つ。

ぴたり、と機能を損なわれない程度に装飾された斧槍が地面と平行に静止する。

小揺るぎもしない穂先がアルトの膂力を物語っていた。

「ヤドック」

「な、なんツスカ？ 姐さん」

紅玉を瞼で隠し、アルトは静かに呼び掛ける。

既に腐肉の大群に怖気付いているヤドックは、へっぴり腰ながらも返事をした。

「これより混戦になる。私はお前の尻拭いまで手が回らん。一人でもいけるな？」

不器用ながらも気遣いが感じられるアルトの確認。

此処で大丈夫だ、と云えなければ男が廃るというもの。

ヤドックは獅子が描かれたバンダナの結びをきつく締めた。

そして、パン、と頬を両手で叩き気合入魂。

「大丈夫ツスよ姐さん。俺だって伊達に『炎獅子』の付き人をやってませんから。グールの百体や二百体やっつけてやりますよ！」

「ふふ、それは頼もしいな」

おどけたように親指で自分を指し、冗談めかしの誇大広告を行うヤドック。

紅の唇が楽しげに緩む。

ならば是非もなし。

『炎獅子』アルトリーゼ「クルスバーグは紅玉の瞳をゆるやかに開いた。

既にその瞳の瞳孔は、縦方向に割れている。

「ならばヤドック、私から離れておけ。近付くと火傷では済まんぞ」  
離れる、と言い放つアルトの視線は既にヤドックを見ていなかった。

そして。

静かに、荘厳に、鍵なる言霊を真つ赤な唇から紡いだ。

『燃やせ、焰やせ、我は万物全てを灰燼に帰す獅子となる者也』

斧槍の持ち手から炎が生まれる。

炎は二重螺旋を描き、手から穂先に向かい伝わっていく。

二重螺旋の炎は、徐々に径を増してゆき、穂先から更に先へと流れる。

二つの螺旋は互いに絡み合い、一つの形へと精練されていった。形を成した炎は、魔を滅する斬魔刀。

アルトの身の丈ほどある斧槍を柄とし、その先から派生する長大な刀身。

ちりちり、赤白い刀身から発せられる空間を焦がす熱。

その熱気は、ヤドックはおるか右翼を防衛する冒険者全員の肌を熱く撫でた。

……す、すげえッス。

形成された炎の斬魔刀に、ヤドックは口をあんぐり開けて圧倒される。

開けた口から唾液がたちどころに蒸発していくような錯覚。

『炎獅子』の実力は誰よりもヤドックが一番近くで見ていたつもりだった。

だが、今回の件で認識を改めなければ、とヤドックは思う。

ギルド・ランク『A』。

その実力は文字通り桁が違う。

アルトはすっ、斬魔刀を腰だめに構える。

「『炎獅子』アルトリーゼ『クルスバーク、推して参る』」

亡者共の戦場に、焰を纏いし戦乙女が舞う

轟、と長大な焰剣が横薙ぎに空気を焼く。それだけ。

たったそれだけで。

剣の間合いに居た全ての亡者が灰燼に帰した。

もはや燃えるという悠長な話では無い気化。

アルトが自在に操る焰剣に触れたものは、魂すら蒸発してこの世から去る。

「疾ッ！」

アルトの深紅の唇から漏れる鋭い呼気。

断頭台の如く頭上高く大上段に掲げられた焰剣。

熱気と陽炎を残す剣の軌跡。

縄の斬られたギロチンは、三体のグールを唐竹割に両断し、叩き付けられた赤白い刀身から炎の波が発生する。

炎波は波紋状に拡がり、刀身近くの居た腐った死体達を呑み込む。呑み込まれた亡者達を炎が包み燃やした。

寄らば、燃やす。

戦い方は違えど、敵を寄せ付けぬ圧倒的武力は紫苑に通じるものがあつた。

「たかが現世に迷い込んだ亡者共に、今を生きる者達を道連れさせはせん！ 『炎獅子』が焰を以って、冥府に送り返してくれるッ！」

戦乙女が吼える。

美しき肢体に炎の残滓を纏わりつかせ、片手で長大な焰剣を掲げる。

さながら絵画のような情景が其処にあった。

アルトの鼓舞に戦場が沸き立った。

防壁を守る冒険者達は、恐れを知らぬ寡兵となって津波のような腐肉の軍勢へと立ち向かう。

アルトが前へ前へと亡者を焼却、あるいは消却していく中。

勝利の女神を追い求め、低級のギルド・ランクを持つ冒険者達も追従する。

アルトに比べ当然見劣りするものの、彼等は己が技量を存分に揮い、焰剣の取り零した亡者を仕留めていく。

防壁の上に陣取る魔術師達もまたアルトの鼓舞に精神力を漲らせ、雨あられと数々の『法則魔術』にて眼下の仲間を援護する。

異様な熱気に包まれる中。

ヤドツクも戦乙女の鼓舞に、心臓に炎を点火された者の一人だった

この日の為に新調したロングソードを存分に振り回し、緑色の肉体をした魔物　ゴブリンを斬り刻む。

彼とて酔狂で『炎獅子』に弟子として、共に冒険をしているのではない。

その剣捌きは中々に堂に入ったもので、危なげ無く近くのゴブリンゾンビ達を斬り捨てていく。

「へへ、大枚をはたいて買った付与魔術付きのロングソードエンチャントス！  
お前等みたいな雑魚相手には負けないツスよ！」

意気揚々とばかりに新調したばかりのロングソードを振るう。

彫られた付与魔術の術式により、刀身部分が赤熱。

その高温の為に、力を入れずともゾンビの腐った身体を焼き斬つ

ていた。

長剣の効果はアルトの戦闘スタイルを意識したものだ。

獅子を描いたバンダナがはためき、盗賊時代の身軽な身のこなしは、並み以上の活躍を見せていた。

「ちよろいもんツス！」

面白いように倒れてくれるゾンビに、ヤドツクの調子は乗りに乗っていた。

それが悲劇を呼ぶ。

ガキン、と鈍い金属音で受け止められるロングソード。

「へ？」

見れば一体のゴ布林ゾンビ。

手に持った奇妙な形をした短剣でヤドツクの長剣を受け止めていた。

刀身に半分にギザギザした櫛状の峰がある短剣。

ゴ布林ゾンビは峰の凹凸でヤドツクの長剣をかませて止めていた。

奇妙な形の短剣、その名前は『ソードブレイカー』。

バキン、と金属が折れる音が嫌に大きく響いた。

「俺の剣がああああ！ 姐さんとお揃いの武器が折れちまったああああー！！」

お揃いと云うには、天と地ほど能力の差があるが心的外傷を負ったヤドツクは叫び続ける。

彼の脳裏には、金貨が羽をつけて飛び去る光景が浮かんでいた。

だが現実は待ってくれない。

ソードブレイカーで刺突を繰り返すゴブリンゾンビに、ヤドックは慌てて飛び退く。

「この野郎！ よくも姐さんとの絆を」

眼を血走らせ、根も葉もない的外れの言葉を吐き捨て、ヤドックはゴブリンを睨み付けた。

両腰から肉厚のダガーを二本抜き放つ。

ゾンビやグール相手には聊か心許ないが、相手取る敵が一体ならばどうとでもなる。

ヤドックは獲らぬ狸の皮算用の如く、頭で結論付けていた。にやり、と対峙する表情の無いゾンビが笑った気がした。

途端。

一体、また一体、とゴブリンゾンビの増援が来る。

徒党を組む知恵が残っているように、ゴブリンゾンビは瞬く間にヤドックの手に負えない数に膨れ上がった。

その並んだ緑色の醜い顔の数に、片方の口角を盛大に引きつらせるヤドック。

とても間合いの狭いダガーでは、捌き切れない数。

手に持った二本の肉厚ダガーがとても頼りないように感じられた。不利と判断したヤドックは、周囲で戦う冒険者達に救援を求める。

「だ、だれか使っていない予備の武器があったら貸してくれッス！」

だが現実は無慈悲であった。

「いやー、あいにく持っていないなー」

「そうだねー。残念だねー。力になれない俺達を許してくれ」

「彼女持ちはモゲロ！」

不運な事に、周囲に居た冒険者は独り身の者達。

彼等が出陣前のアルトとヤドックの遣り取りを見ていた。

にべもなく爽やかな笑顔、一人は呪詛に満ちた般若の顔で要求を断られる。

彼等 独身貴族の腰には丈夫そうなロングソードが輝いていた。

「ちよっ！ 薄情者ー！ うわっ危なっ！」

ヒュン、と飛び掛かってきたゴブリンゾンビの短剣が前髪を掠める。

避け切れなかった前髪が数本、宙に散った。

その後もひょえー、などと奇声を発しながらもヤドックは複数で襲い掛かってくるゴブリン達の猛攻を受け流していく。

時にダガーでいなし、

時に無様に転がりながらも凶刃を躲す。

半泣きになりながらも、必死でゴブリンゾンビ達を相手取っていた。

死ねない理由があるのだ。

こんな場所で野垂れ死になどできない胸に秘めた宣誓。

「俺は！ 俺は！！」

きつ、とヤドックの瞳に力が宿る。

二匹同時に飛び掛かってきたゴブリンゾンビに対して、

先頭の一匹を蹴り飛ばし、流れるような円の動きでもう一匹の首筋にダガーを突き立てた。

洗練されていない無骨な動作であったが力強さがあった。

そして。

ヤドックが吼えた。

「姐さんのおっぱいを揉みしだくまで絶対に死ねないんツスよおお  
おおおツツ!!」

あの見事な巨乳である。

普段は軽鎧に隠れて人目に晒される事は無いが、見事にたわわに  
実ったアルトの胸は見事の一言。

インナーを内部から押し広げる水蜜桃の価値は重い。

無論、物理的な意味合いでもだ。

男からは称賛の、女からは侮蔑の視線がヤドックに注がれる。

ヤドックの漢らしい咆哮に、先頭の一角で大爆発が巻き起こった。  
直後。

天に向かい伸びる炎の竜巻。

その炎渦竜巻の中心部で『炎獅子』アルトリーゼはわなわな、と  
四肢を震わせた。

美貌は今にも火が吹き出しそうなほど真っ赤に染まっている。

「あのっ馬鹿弟子がああああああッ!!! 帰ったら折檻  
だツツ!!」

照れ隠しの炎の渦が戦場に荒れ狂う。

炎熱の竜巻はゾンビ達を盛大に巻き込み、ついでに近くに居た冒  
険者にも軽い火傷を負わせて駆け抜けた。

巻き込まれた方は堪ったものではない。

ヤドックは本人が意図しない処で戦功を挙げていた。

どちらにせよ後で勃発するであろう痴話喧嘩は、白狼王でも食え  
そうにないものであった

「あの……往来で恥ずかしい事、叫んじやいやですよ？」  
「同意である」

言葉は鈴、雰囲気は大和撫子、音楽は糸の滑る音。

ヤドックが頭上を見上げれば、遙か高い防壁の上から一輪の花

『黒アリス』達が舞い降りて来ていた。

刹那。

重力に身を任せる『黒アリス』 紫苑の黒い長手袋の指先から  
繋がる無数の糸が閃く。

網とまでは云えなくとも十二分に密度の濃い糸の密集域がゴブリ  
ンゾンビに向かって殺到する。

てんもうかいがい  
天網恢恢、疎にして漏らさず。

糸はそれ自体が意思を持つかのように、正確無比にゴブリン達の  
身体を細切れに解体していった。

金刺繍の腰マントがスカートのように広がる。

ふわ、ふわ、と羽のように軽い着地音。

紫苑とバルは、張り巡らした糸の上に着地した。

どよめく周囲の冒険者達。

瞬く間にはらばら死体にされたゴブリン達。

その事実が驚愕が隠し切れないヤドックは、傍目から見れば宙に  
浮いている二人を見て目を剥いた。

「し、ししシオン！ それにバルさんも！？」

なんで上から降ってきたんですか！？ 二人は左翼側を護っていたんじゃないんツスカ！？ っていうかなんで空に浮かんでるんすか！？」

「五月蠅いぞ、小僧。男なればどっしり、と腰を据えて鷹揚に構えておれ」

取り乱すヤドツクに、バルは半目でねめつける。

そして、男とはどうあるべきかの気構えを説いた。

続く紫苑は矢継ぎ早に齎された質問に、一つ一つ丁寧に答えていく。

「張った糸に乗っているからですよ、ヤドツクさん。

左翼は比較的に攻勢が穏やかでしたのでシロに任せて、此方に防壁の上を伝って加勢をしに来ました。中央は

不自然に言葉を切り、紫苑は防壁中央部の陣に視線を向けた。

遠くより立ち昇る銀色のオーロラと轟音。

そして、断続的に続く地面の横揺れと縦揺れが『霜の鉄鎚』の苛烈さを伝えてきた。

加えて一騎当千の猛者蔓延る『外套と短剣』の克蘭メンバー。援軍として加わる要素が無い。

「大丈夫なようですので」

「た、確かに……」

「ふむ、小僧。ちとこっちに来やれ」

張った糸から飛び降り、バルは地に足を着けた。

そして。

ドン、と黒塗りの木靴で黄土色の土が剥き出した地面を踏み鳴らした。

途端に木靴を基点として幾何学模様の円環陣が浮かび上がり、錬成光が迸る。

陣の中央部。

土が吸い寄せられるように盛り上がり、一本の特徴的な剣が形成されていく。

対象を撫で切る為に、緩やかに反り返った片刃の刀身。  
刀身の反りとは反対方向に反った柄部分グリップ。

それは地球に存在するペルシャと云う国の代表的な刀剣だった。

バルは錬成した湾刀を引き抜く。

と云うよりは体躯の問題故に両手で抱え、おずおず、と近付いて来たヤドックに自らが手渡す。

「ほれ、妾が貴様に手ずから剣を下賜してやるうぞ。有り難く受け取るがよい」

「い、良いんツスカ？ こんな上等そうな剣を貰っちゃって？」

「なあに、元を辿ればただの土くれに過ぎん。遠慮などせずに使っがよい。」

それに素は土くれといえ、貴様が持っている半ばより折れた鈍なまくらよりはずつと丈夫ぞ」

「マジツスカ！？」

「虚言など云つてどうする。小僧、貴様あれだけの大言を吐いたのだ。それに見合う活躍を期待しておるぞ」

にやり、と愛らしい顔に不釣り合いな不敵な笑みを浮かべ、武勳を期待するバル。

大言とはアルトのおっぱい云々の事である。

無我夢中だったとは云え、いまさらになってヤドックは己が吐いた戯言を後悔し始めた。

若干顔色が青くなり、胃がきりきり、と痛む。

「では妾達の役割を果たすとするかのう、紫苑」  
「はい」

糸が囁く微かな音が鳴り、更に巡る糸の檻。

朝陽が鋭利な蜘蛛の巣を僅かに反射していた。

「おお。忘れておったわ、小僧」

ふと、バルの脳裏に思い至る事柄。

バルは頭だけで振り返り、肩越しにヤドックを硝子玉の瞳で映す。碧の瞳にバンダナの青年が見えた。

「その湾刀の広義の名はシャムシール。別の名は『獅子の尾』じゃ。貴様にお似合いの名じゃな」

言い放たれた言葉の意味が、ヤドックの胸に染み込む。

ヤドックは奇妙な形の曲刀をじっ、と見た。

憧憬を注ぐ人物の二つ名は『炎獅子』。

そして、手の内に握られた湾刀の名は『獅子の尾』。

ぐっ、と湾刀を握る力が込められる。

「バルさん！ ありがとうございますッス！」

「くく、礼など不要。貴様は『獅子の尾』の名に恥じめ武功を打ち立てて見せよ」

「はいッス！！」

腰を九十度に折り、深くお辞儀をするヤドック。

くつくつ、と喉を鳴らしバルは愉快気に笑う。

その笑いは、面白い玩具を見つけた童女そのものであった

戦線が開かれてから既に半刻。

トウオネラ平原を埋め尽くしていた亡者の海は、半数までにその数を減らしていた。

だが、その代償として冒険者側の負傷者も多く、疲弊の色合いも濃い。

そんな消耗戦の中。

個人で凄まじいまでの殲滅数を誇る冒険者が居た。

「ふんッ！」

大跳躍。

深紅のポニーテールが重力より解き放たれた人影に追従する。

空に跳ねたアルトの眼前に巨大な顔面が出現。

落ち窪んだ虚無の瞳。

擦じ曲がった禍々しい一対の角。

多重に列の成す鋭利な牙の群集。

目と鼻の先に近付いたビヒモスゾンビの顔面に長大な焰剣を一刀両断。

ビヒモスの頭蓋を縦一文字に叩き斬った。

頭部に刻まれた裂け目のような深い斬り痕より、業火が吹き出す。

頭蓋を真つ二つに割られるという致命傷を負ったビヒモスゾンビはその機能を停止させ、ゆっくりと巨軀を横倒しに崩れ落ちる。アルトのしなやかな脚線が地面に到達し、着地した瞬間。ズズン、とビヒモスゾンビの亡骸が盛大に大地を揺るがした。

「相変わらず手際が良すぎるな、シオン」

女性にしては幾分低い落ち着いたコントラルトの声色。

アルトは着地地点の周囲の状況を見て取って云った。

散乱した亡者達の手や足と云ったパーツ。

夥しい量の臓腑と五体不満足の亡骸。

腐肉と化した魔物は、淡い光を伴い輪郭を曖昧にして魔霊殊と化していた。

その量が多すぎて、辺りは仄かな光を放つ絨毯となっていた。

惨状を作り出した人物　紫苑はいつもと変わらぬ柔らかな物腰でアルトの褒め言葉に返す。

「アルトさんこそ、相変わらず綺麗で力強い戦いぶりですよ」

「綺麗は余計だ、馬鹿者」

「ですが、アルトさんみたいな女性をきつと巴御前と云うのでしょ  
うね」

「巴御前？」

「はい。俺の元居た場所に昔実在していた女傑の名前です」

云った後に紫苑は、何処か遠くに想いを馳せている、そんな眼を  
していた。

巴　それは地球での幼馴染の名前。

不意に込み上げてくる望郷の念に、紫苑はそつと蓋をした。

今は干渉に浸るような時ではない。

糸を操る故に、直接戦う者より疲弊の色が薄い紫苑が殲滅を続行

しよつとした瞬間。

ぴり、と空気に緊迫が生まれた。

「戦場の風向きが変わったな」

空を見上げ、紫苑の傍らに控えるバルが重々しく呟いた。

その言は正鵠を射ていたものであった。

突如。

見上げた天空が『血色』に染まった

トウオネラ平原に建造された防壁の部位で、最も激戦区である中央部。

在り得ない事に、中央では戦闘が停止されていた。  
なぜならば。

戦場の土煙で煤けた空が『血色』に染まった瞬間。

食欲を欲求として侵略、前進していた腐肉の大群が無防備にその  
進撃を止めたからだ。

更に奇怪な出来事は続く。

冒険者達の攻勢に無防備な姿勢を見せていた腐肉の海が突然『割  
れた』のだ。

神話の中での奇蹟の如く。

腐った海が一条に割れ、現れた血と臓物と肉で構成された壁の間

に続く一本の道。

道の壁となつてゐるゾンビ達から赤い紅い煙が立ち昇つていた。赤い煙の正体、それは『血液』。亡者となつた彼等の体内から蒸気の如く血が抜き取られ、空に舞う。

突如として空が『血色』に染まつた原因は、彼等の血液が大氣中に散布されたからに他ならない。

そして、亡者達から搾取された血液は、天空の一点に収束していった。

天頂に浮き、揺らめく赤い液体。

あまりにも巨大な球体であり、空にもう一つの太陽が出現したと錯覚してしまう。

そして。

血の太陽の下部。

続いていく亡者達の道の先に、怪現象の元凶が居た。

佇んでいたのは一人の女。

手入れの行き届いた紫色の髪は、後頭部で見事に編み込まれ、その上にはレースのあしらわれた純白のヘッドドレス。

質素ながらも上質な生地で作られた黒のワンピースのエプロンドレス。

長袖の袖口は品の良いカフスボタンできっちり留められ、そつ無く格式あるヴィクトリアン調のメイド服を着こなしていた。

腐臭漂う戦場に現れた一人のメイド。

それは水彩画の上に無理やり貼り絵をしたような異質さ。

メイドは銀縁眼鏡を隔てた理知的な光を放つ紫紺の瞳で、冒険者達に対峙した。

そして。

清楚さを醸すロングスカートの裾をちょん、と指で持ち上げ、お手本のような完璧すぎる一礼をした。

「お初にお目にかかります勇壮な冒険者の皆様方。

私は『吸血姫』マルヴァ様に使えるメイドの一人、ラヴァテラと申します。以後よしなにお願致します」

貼り付けられたような微笑み。

無機質なツクリモノめいた笑顔に、言い知れぬ戦慄が駆け抜けた

## 第？章『吸血姫』

亡者より立ち昇る血煙。

空の血色が濃くなる度、躰の水分が枯渇していく亡者達は、徐々に骨と皮だけの異形に成り果てていく。

からから、と渴いて完成を見るのは、列を成すミイラの大群。

骨の怪物『スケルトン』にも成りきれぬ憐れな骸達。

彼等から血を搾り取った血の太陽は、更に巨大に禍々しく、そして艶めかしく地上の生物を照らす。

血の太陽の真下。

ミイラと化した骸の海が割れて出来た黄泉路の先。

ラヴァテラと名乗った紫髪のメイドは、銀縁眼鏡を指先で押し上げ、宣言する。

「では主命により僭越ながら選定させて頂きます 皆様方の

中に『英雄』となられる方がいらっしゃるかどうかを」

要領を得ない言葉の直後。

ラヴァテラは何処からか取り出した細身なナイフで、己の頸動脈を切り裂いた。

白い襟から覗く首筋から吹き出す血の噴水。

突然のラヴァテラの凶行に冒険者側は当惑して息を飲む。

血の噴水は重力に逆らい、血の太陽へと吸い込まれていった。

頸動脈から噴出する血を意に介さず、ラヴァテラはスカートのポケットから品の良いハンカチを取り出す。

すつ、とハンカチで首筋の切り傷をなぞるとピタリ、と赤い噴水が止んだ。

ハンカチが首より除かれる。

露わになった首には傷痕など存在しない綺麗な肌があった。

「ご安心を。皆様方の力量を試すだけの實力は我が主マルヴァ様よりお墨付きを頂いております。

私、血の扱いは得意ですので」

どくん、と血の太陽が脈動する。

それは不穏な胎動を想起させた。

そして、討伐隊が見守る中。

血の太陽が『弾けた』

Original Novel

追憶のシオン

第？章『吸血姫』

四方八方。

あめあられ雨霰と撃ち出される血液の弾丸。

空間を埋め尽くす勢いで発射された血の弾は、一人一人を殺傷してあまる威力を内包していた。

圧倒的な速度が付加された液体は、それだけで凶器と化す。地面を穿ち、

防壁を陥没させ、  
被弾した冒険者に風穴を空ける。  
更に無尽蔵ともいえる弾薬庫が宙に浮いているのだ。  
途切れる事を知らない血液の弾丸は、容赦の一欠けらも無く、冒  
険者達を襲う。

『精霊さん！ 固くてでっかい盾お願い！』

即座にゴルデイスの肩に搭乗したモモが反応。  
精霊に思考を伝達させ、『精霊魔法』を行使。

周囲の仲間一人一人の眼前に、薄緑色の半透明の膜を発生させた。

「リーダー、アタシの結界でも長く持たないわよ！ サーチアンド  
デストロイ！ このまま突っ込みなさい！」

「おっしやあああああ！！ 任せとけ！」

半透明の膜に途切れる事の無い弾丸が次々と着弾。

血液の弾丸が着弾した箇所から亀裂が結界に生じる。

モモの号令がゴルデイスの単純明快な闘争本能に火を点ける。

飛び交う血液が弾丸ならば、ゴルデイスはまさしく砲弾。

被弾を恐れないミイラ達が行く手を阻むが鎧袖一触。

『霜の鉄鎚』の一振りで亡者の壁を粉碎し、紫髪のメイド  
ヴァテラに肉薄する。

「流石『霜の鉄鎚』のゴルデイス様でいらっしやいます。世評に違  
わぬ勇猛果敢なお方です 　　ですが」

ラヴァテラの瞳が紫紺から真紅へ。

『魅了の魔眼』と呼ばれる吸血鬼特有の能力が行使される。

吸血鬼の真紅の瞳と、巨人族の単眼が交錯した瞬間。

ゴルデイスの意識を甘い靄が包み込む。

一種の催眠状態に陥った巨体は突貫を止め、亡者の海に無防備な姿を曝け出す。

すぐさま身体中の水分を失ったミイラ達が、砂糖に群がる蟻のよう  
うにゴルデイスの巨軀に喰い付く。

「アンタって奴は、なに他の女の色仕掛けに鼻の下伸ばしてんのよ  
ツツー!!」

「ぶべっ!!」

裏拳一発。

強烈な一撃がゴルデイスの鼻っ面に痛打する。

めきより、とモモの小さな拳が岩のようにごつい顔に『めり込む』

ぶぱっ、と鼻穴から血飛沫が待った。

意識を包んでいた甘い靄が晴れ、ゴルデイスの単眼に理性の光が  
戻る。

「おおおおおおっ! 滅茶苦茶痛えええ、鼻がひん曲がる!」

「アンタの不細工な鼻なんて今はどうでもいいの! とりあえず前  
見なさい前! それと足に喰い付かれてるわよ!」

「おおっ! ふん!!」

鼻息荒く、ゴルデイスは浅黒い筋肉を隆起させ、鉄の塊のような  
剛腕で力瘤を作りポーピング。

ダブルバイセップス。

持ち上がった両腕に引つ張られる形でゴルデイスの逞しい胸筋が、  
美しい逆三角形を描く。

そして。

モモが前方に張った薄緑色の結界に亀裂が拡がり、決壊した。

棒立ちのゴルデイス達に血液の弾丸が殺到する。

「うわっ、気持ち悪い」

うげ、とモモは淑女にあるまじき悲鳴を零した。

隆々と筋肉を膨張させたゴルデイスの肉体に血弾が幾つも被弾。

しかし、鉛を幾重にも張り合わせた肉体を損傷させる事は出来ず、トマトが投げ付けられたように浅黒い肌を染め上げた。

脚に張り付いていた亡者達の噛み付きも、膨張した筋肉が邪魔をして大した損傷を与えられない。

ちなみに。

肩に腰掛けていているモモは、ちゃっかり自分専用の強固な結界を張って難を逃れていた。

「非常識な身体をお持ちのようで、些か驚きました」

「ふふん、どんなもんよ」

銀縁眼鏡の奥の瞳を少し見開き、驚きを外部に漏らすラヴァテラ。その反応に気を良くしたゴルデイスは、半身になり胸筋の厚みを強調するサイドチェストを披露。

自慢げに歯を見せるゴルデイスだが、鼻からはだくだくと鼻血が流れている。

びきびき、と浅黒い筋肉がひくつく様は只管気持ち悪い。

だが『外套の短剣』の男性メンバーからは称賛が巻き起こる。

「流石、兄貴だぜ。あの攻撃にもびくともしない鋼の肉体！」

「鍛え抜かれた筋肉は化け物共の歯も寄せ付けない！」

「筋っ肉！ 筋っ肉！ 筋っ肉！ 筋っ肉！」

音頭をとる筋肉讃歌。

暑苦しい。

途轍もなく暑苦しい。

しかし、ミイラ達の殲滅効率は不思議と上昇していく。数少ない『外套と短剣』の女性メンバーは、また始まったのか、と云う冷やかな目で沸き立つ男衆を蔑視する。

「やめなさいよ、気持ち悪いッッ！」

「ぐべっ！」

次は膝が良い角度で入った。

深く、抉り込むように、阿呆面にめり込んだモモの小さな膝。

今度の痛打は余程効いたのか、ゴルデイスは鼻を押さえて暫し悶絶。

痛みに苛まされるクランリーダを放っておいて、モモは真面目な顔でラヴァテラと視線を交錯させる。

無論、無策と云う愚は犯さない。

周囲の精霊に頼み、精神的な耐性を底上げしてからの対峙である。

「うちの馬鹿リーダーが見苦しい所を見せたわね」

「いえ、お気になさらず　しかし困りましたわ。其方の殿方

には血弾が力不足のよう。

ならば趣向を変えてこういったのはどうでしょう？」

パチン、と病的に白いラヴァテラの指が鳴る。

血弾の雨が止み、血の太陽が再度脈動する。

そして血の太陽表面に、無数の刃が生まれた。

針千本のように刃が突き出した血の太陽は、発射の号笛を待ち、物言わず宙を佇む。

しかし。

「今だツ！ 射てええええええッ！！」

高く聳え立つ防壁の上。

三人一組で練り上げた魔法陣が、イエゴールの合図の下、火線を吐き出す。

合わせて五つの『魔人の火炎舌』イフリータ・フレイムタンがラヴァテラに膨大な熱量を以って殺到する。

「それは少々危のうございます」

前を指す人差し指。

瞬間。

ラヴァテラを取り囲むようにして血色の魔法陣が幾重にも現界。

それは大気を舞う血霧で描かれた魔法陣。

血液と云う魔術にとって良質な触媒を用いて編み込まれる防御結界は強固そのもの。

ラヴァテラに襲い掛かる五つの火炎舌は、その血で構成された魔法陣に阻まれた。

後に残るは、無傷なメイドが一人。

「化け物め。平原に満ちた血煙は既に奴の手中か」

「良い一手です。これは返礼、どうぞお受け取りください」

憎々しげに防壁の上からラヴァテラを睨み付けるイエゴール。

対するラヴァテラはあくまで涼しげな顔を崩さない。

パチン、と指が鳴らされる。

引き絞られた弦から矢が飛び出すように、数え切れない刃が撃ち出された

ラヴァテラ率いる亡者の群れと、冒険者達の戦争は千日手の様子を呈してきた。

追うゴルデイスと、逃げるラヴァテラ。

赤く顔を染める空の下で行われる鬼ごっこ。

空からは絶えず血の太陽より撃ち出されている細長い菱形の刃。

「邪魔くせえ！」

ミイラの壁を蹴散らし肉薄するゴルデイス。

だがラヴァテラは『霜の鉄鎚』の間合いには決して足を踏み入れず、遠距離戦に徹する。

吸血鬼特有の超人的身体能力を駆使して、亡者達を骨の壁とし、一足一刀の間合いから逃げ続ける。

加えてラヴァテラは、大気に充満する血霧を利用し、至る場所で『法則魔術』の陣を敷き、魔法を顕現させる。

時に頭上に、

時にゴルデイスの背後に。

血で描かれた陣から撃ち出されるは、極大の血槍。

如何なゴルデイスの鋼の肉体と云えど、大質量を伴った鋭利な穂先には耐えられない。

ゴルデイスは獣じみた本能で死角からの攻勢を察知。

「ちっ」

舌打ち一つ。

強靱な臂力に後押された『霜の鉄鎚』を小枝のように軽々と振り回した。

周囲に居たミイラも巻き添えにして、背後から顕現した極大の血槍をへし折った。

固定された形を崩壊に導かれ、多量の血液に還元される血槍。空より降り頻る菱形の刃は、全てモモが紡ぎだす結界で阻んでいく。

「これも防ぎますか……些か自信を失くしてしまいますね」

「ちよろちよると、うざってえ。よう吸血鬼の嬢ちゃん、そろそろ鬼ごっこを止めて正面から殴り合わねえか？」

「ふふ、お戯れを。私のような細腕では、貴方様のような逞しい方の相手は務まりませんわ」

果し合いの誘いをラヴァテラは涼やかに流す。

如何な超人的身体能力を保有するとはいえ、ミノタウロスと素手で渡り合える巨人族相手では分が悪すぎる。

そして、ラヴァテラの本来の目的はあくまで選定。主命を全うする彼女に、血が滾る感覚など必要なかった。

戦局が動いた瞬間は唐突。

骨と皮で構成された動く壁を斬り抜け、一人の若者が飛び出した。

「化け物め！ 覚悟っ！」

額に『外套と短剣』のマークを彫った額当てを巻き、胴体に纏うは魔白銀製のハーフプレート。

軽やかな彼の動きを阻害しないように、関節部を排除し、独自に改造された軽鎧が、赤くにじんだ陽光を反射させた。顔立ちは、若竹を連想させる涼やかな青年だった。

「馬鹿つ、ベルホルト！ やめなさい！」

「ベルホルト！ 手前えの敵う相手じゃねえ、よさねえかつ！」

『外套と短剣』のトップである二人の静止の声が重なる。

しかし、血気盛んな若者にその声は響かない。

ただ前を見据え、手に握る魔白銀の直剣を吸血鬼メイドに向け、突進する。

鋭い。

しなやかで若い肉体から生じる速度は、目を見張るほどの俊敏さであった。

だが、それ故に単調。

半身となったラヴァテラにいと也容易く避けられる。

必殺の一撃と確信していたベルホルドの身体は、慣性に流される。

ラヴァテラは体勢を無様に崩したベルホルドの手首を掴まれる。

ぎりぎり、と締め付けてくる人外の握力に、ベルホルドは激痛から手に握った直剣を取り零してしまった。

「ぐああああっ！」

「若く勇敢な方。それはとても素敵な美德です。けれどもそれ故に見誤りましたね」

手首より生ずる激痛に苦悶の表情を浮かべるベルホルド。

ラヴァテラは自ら猛獣の前進み出た小動物を見るような視線を眼鏡越しに送った。

沸き出す嗜虐心は紫紺の瞳を真紅へと変質させる。  
睦言を交わすようにラヴァテラは、そっ、とベルホルドの耳元に唇を寄せた。

「でも私は貴方様のような無鉄砲さは嫌いではありませんよ。そんな若人わかしゅに良い事を教えて差し上げます。

私は他の吸血鬼と違って口以外からでも吸血が出来るのです。そう  
例えば肌からでも」

「うわあああああっ！」

絶叫が響き渡る。

掴まれた手首を中心に赤い筋が浮き出て、凄まじい速度で多量の血液がラヴァテラの掌に吸血されていく。

見る間に身体中の水分が吸われ、肌はかさつき、唇は干乾びる。

若竹を想起させる青年は、無残にも枯れ木の如くその姿を変質させていく。

「ああああ粗相をしてしまいましたね」

「ああ……………あああ……………」

びくびく、と痙攣を繰り返すベルホルド。

血を掌で吸われながらベルホルドは、ズボンの股間部を大きく膨らましていた。

そして絶頂でズボンを濡らす。

吸血鬼の吸血行為とは下僕 すなわち同族を増やす生殖行為と同義。

それは吸われる側に性的快楽を齎すものであった。

くすくす、とラヴァテラは手中に収まった獲物のよがり姿を見て上品に嗤う。

一人の若者が吸血の魔物に吸い尽くされた。



「しゃらくせええええ！！ 『霜の鉄鎚』 ぶちかますぞッ！！」

秘蹟礼装『霜の鉄鎚』が半ばから弾け、巨大な戦鎚の力場を形成する。

ゴルデイスは血の極大曲刀を迎え撃つように、起動状態の『霜の鉄鎚』を掬い上げるように振り切った。

血の曲刀と巨大戦鎚。

共に尺度を大きく違えた武器同士の激突。

軍配は秘蹟礼装『霜の鉄鎚』に上がった。

バンツ、と鼓膜を揺さ振る破裂音と共に弾けた血の極大曲刀。

多量の血飛沫が空に舞い上がり、『霜の鉄鎚』の一撃に大部分がエーテルに還元されていく。

白銀の光が満ちる中、ゴルデイスは返す刀で『霜の鉄鎚』を振り下ろす。

一足。

僅か一足でラヴァテラとの距離を零にまで縮め、振り下ろされる死を齎す古代遺物。

刹那。

二度目の轟音と同時に大地震がトウオネラ平原を揺るがした。

ゴルデイスの怒りに呼応するかのように『霜の鉄鎚』は、光の力強さを増す。

余波が亡者共を呑み込み白銀の光の粒子へと還元していく。

呑み込まれた亡者の中には、ベルホルドであった死骸もあった。

鎮魂のように天へと伸びる銀のオーロラ。

「どんなもんよ」

「ええ、大変素晴らしい一撃でした」

ばちばち、と控えめな称賛の拍手。

怜悯な声に即座に反応。

ばつ、と頭を上げたゴルデイスが見たものは、遠くで亡者達に囲まれ、傷一つ無く佇むラヴァテラ。

足元には血色の魔法陣。

その魔法陣の術式が意味する所は、短距離間の空間転移。

先程の一瞬でラヴァテラは、即座に陣を編み、『霜の鉄鎚』の効果範囲外まで逃れていた。

「もはや選定は済みました」

厳かにラヴァテラは宣言する。

唐突。

巨大な血色の円環魔法陣がトウオネラ平原に三つ描かれ始める。

右翼、中央、左翼。

それぞれを基点として血液の術式が円を描く。

素は多量の亡者。

触媒は彼等の血液。

そして綿密に描かれていく紋様は、『召喚』の術式。

血色の巨大魔法陣の上に居た亡者達は、溶けるように陣に吸収されていく。

赤く、紅く、朱く。

亡者達を取り込んだ魔法陣は、毒々しくその赤みを妖しく増し、光り輝く。

「破城鎚の巨人、焰の獅子、糸繰る乙女。以上の三名を我が主マルヴァ様の下へ招待いたします。」

お付の方もご同行されて結構ですので、「ご安心を」

朗々とラヴァテラは芝居がかったように言葉を紡ぐ。  
不思議とその声は、戦場全体へと木霊した。

亡者の魂を呼び水にし、血色の巨大魔法陣が起動する。

陣の中からゆっくり、と浮かび上がってくる小山の如き異形。

頭部は奇妙なほど白い骨が剥き出しになった魔物の頭蓋骨。

巨軀を形作っている素材は、幾百、幾千もの亡者達の躰。

そのどれもが苦悶の表情のまままで固まり、背筋を凍らす妖しげな印象を与えていた。

そして、白狼王ですら子犬のように見えてしまふ巨軀の四本腕の人型。

人型であるからこそ近似的な嫌悪感を先立たせる醜悪な魔物だった。

生物として在り得ない巨大さ。

その規模に違いに惚け取られた一瞬の隙に、ゴルデイスの足元より血の魔法陣が描かれる。

「ちっ、しまった！ モモ！」

「え！？ きゃあ！」

不測の事態。

判断は刹那。

ゴルデイスは相棒の胴体を片手で鷲掴み。

そのまま、モモを軽々とぬいぐるみのように後ろに放り投げ、陣の外に避難させた。

宙を舞う目立つピンク。

瞬間。

真紅の光が辺りを包み、『外套と短剣』のクランリーダー・ゴルデイスの姿が忽然と消えた。

「ば、馬鹿リーダー……」

呆然とモモは、ゴルデイスが掻き消えた魔法陣を見詰めた。

既に役目を果たした血色の魔法陣は、徐々に輪郭を滲ませ痕跡を失くしていく。

ゴルデイスを転移させた張本人であるラヴァテラも何時の間にか姿を隠していた。

「ふんっ」

パン、と小さな両手で自身の頬を叩くモモ。

自失している暇など有りはしない。

リーダーが消えた以上、クランの統率はモモの双肩に掛かっていくのだから。

「とりあえず、このデカブツを倒してからウチの馬鹿リーダーを迎えに行くわよ」

鬼と一寸法師。

それだけ尺度が違う両者の体格差。

モモは首が痛くなるほど天に向かい聳え立つ四本腕の異形を睨んだ。

モモの戦意に反応して周囲に薄緑や青緑の光が踊り舞う。

彼女の慕う精霊達のやる気は満ち満ちていた。

ホビット族の矮小な体軀に似合わぬ胆力。

モモは一身これ胆なり

ゴルデイスが転移魔法陣に呑み込まれた時とほぼ同時刻。  
防壁右翼にて。

頭上より降り注ぐ長い菱形の血刃を避けながら、ミイラ達を殲滅  
していた紫苑とアルト。

『少年アリス』の繰る糸が閃けば、幾多の亡者が切り刻まれ、  
『炎獅子』の焰剣が薙ぎ払われれば、無数の亡者が焼失する。

一騎当千の活躍ぶりを見せる二人の足元に、突如として転移の魔  
法陣が敷かれる。

バルも巻き添えを食う形で魔法陣内部に居た。

『つ』

二人は息を呑む。

紫苑は瞬時に最も頼りにしている相方　バルと視線を交錯させ  
た。

絡み合う蒼穹の瞳と、硝子玉の瞳。

バル、レジストは？

なに、折角の招待。このまま身を任せ、親玉の貌でも見物し  
に赴いてやるうではないか。

交錯は一瞬。

バルの真意を汲み取った紫苑は、こくり、と頷く。  
以心伝心。

にやり、とバルは妖艶な笑みを濃くする。

懸念事項を一つ挙げるとすれば現世へと顕現した三体の巨大な體こゝろの怪物。  
體こゝろの怪物。

故に紫苑は、頼れる身内に後顧の憂いを断つてもらおう。

「シロ、後をお願いします！」

「シロ、妾が許す！ 全力を以ってして戦場の覇者となれ！」

亡者葬めく地獄に咲いた一輪の花である紫苑。

その輪郭が滲み、陽炎の如く真紅の光と共に消失していく。

身体が完全に消え得る前に、紫苑は狼王の遠吠えを聞いた。

力強い遠吠えに安心した紫苑は柔らかい笑みを浮かべる。

そして。

二人と一体の姿は、完全にトウオネラ平原から存在を消した。

「姐さん！？ 姐さああああん！！」

ただ一人。

事態に着いていけないヤドツクの悲痛な叫びが木霊した

アルトとゴルデイス。

二人が強制転移された場所は、森の開けた広場。

瑞々しく森の澄んだ空気。

蒼く澄み切った空が顔を出し、禍々しく血に染まった空は影も形も無かった。

「此処は、一体？」

ハルバート  
斧槍を油断無く構え、真紅の瞳で周囲を観察した。

大振りの焰剣を霧散させ、不測の事態に対応できる通常状態へと戻す。

アルトの疑問の声に返事を返したのは、二人の背後からであった。

「此処はニルヴァリア山の麓。ヘトラ村の近くの森です」

「手前え、どういう事だ？ 俺達を親玉の所へ連れて行くつもりじやなかったのか？」

木の陰から青白い肌を浮かび上がらせ、姿を現す一介の吸血メイド　ラヴァテラ。

素早く振り返ったゴルデイスは、クランメンバーの怨敵に向けて歯を剥き出し、剣呑な眼差しを向ける。

だが、ラヴァテラは黙して語らず。

眼鏡の奥に隠された真意は、推し測れるものではなかった。

「ヘトラ……最初に『吸血姫』の惨禍に巻き込まれた村、か」

「然様でございます、焰の獅子。我が主マルヴァ様のお屋敷もこの近くでございます　ですが、会う事は叶いません」

すう、とラヴァテラの紫紺の瞳が細まる。

色の抜け落ちた能面の表情筋。

臨戦態勢に入るラヴァテラに、高位のギルド・ランクを保有する二人は己が得物を油断無く構えた。

「アナタ方には此処で果てて頂きます」

「解せんな。貴様の主とやらは我らを招待しているのではなかったのか？」

疑問を呈すアルト。

一つ一つの事象を繋ぎ合せて行けばラヴァテラの行動は、極めて不可解。

今迄の言を信じるとしたら、彼女の役割は『吸血姫』の下へ英傑を連れてくる道先案内人。

ならば此処でアルト達を始末する行為は、親である『吸血姫』の意向に逆らう背信行為。

己の立場を危ぶめても独断に走るラヴァテラの意図が掴めない。

「その答えは、私を打倒し得たらお答えしましょう」

あくまで真意を曝け出さない一介の従者。

細身のナイフを取り出し、ラヴァテラは自身の頸動脈を断ち切る。宙に薔薇の如く咲く血飛沫。

それが戦闘開始の幕開け。

まず、初めに飛び出したのは『霜の鉄鎚』ゴルデイス。

人間離れた巨人族の脚力を以って、僅か三足でラヴァテラとの距離を零に縮める。

猛然と向かう巨軀に、吸血メイドの瞳が血の色に染まる。

それは『魅了の魔眼』フラッティ・アイズの真紅。

「しゃらくせええええ！今の俺にそんなチャチな眼が通じるかああああ！！！」

「ええ、存じております。ですから私が行つのは貴方様のお怒りの後押し」

心臓が縮み上がるゴルデイスの咆哮を真正面から受け止めても、涼やかに受け流す『吸血姫』の従者。

真紅の瞳と単眼が再び絡み合う。

瞬間。

ゴルデイスの視界が真っ赤になった。

腹の底からどろどろ、と湧き上がってくる怒りの感情。

思考回路を焼く凄然な憤怒は、破壊衝動へと昇華されていく。

「うがガアアアアアアアツツ!!」

単眼に正気の光を失われていく。

ゴルデイスはその超人的な膂力を存分に揮い、怨敵に『霜の鉄鎚』を振り下ろした。

だが、怒りに身を任せる攻撃は、酷く単調。

ラヴァテラは軽く後ろにステップをするだけで、空気が唸りを上げる鎚を躲した。

秀麗な鼻梁の先を通過していく『霜の鉄鎚』。

ハンマー部分が地面に叩き付けられた瞬間。

起動状態で無いにも関わらず局所的に大地が揺れた。

「ふふ、やはりあのホビット族の女性が居らねば魔眼に抗えませんか。

ではお仲間同士で死力を尽くして殺し合ってくださいませ。私は糸繰る乙女をお向かいに参らねばなりませんので」

スカートを指で持ち上げ優雅な一礼。

ラヴァテラの足元には、何時の間にか転移用の魔法陣が描かれて

いた。

首筋を切り裂き、血を大量にばら撒いたのは、この布石の為。ラヴァテラの身体が薄れ、現世との境界が曖昧になる。

「待て！ 貴様、シオンを先に」

「ええ、その通りです。屠り易い相手から潰していくのが戦の定石。後程お会いしましょう、焰の獅子」

アルトの焦燥を煽る言葉を置き去りに、ラヴァテラの姿形は完全に魔法陣へと消えた。

弟のように、妹のように慕っている紫苑に迫る毒牙。

看過できぬ事態にアルトは、すぐさまラヴァテラの後を追おうとした。

近くは『吸血姫』の屋敷が在るとラヴァテラ自身が云っていた。

ならば、そう遠くない場所に紫苑も転移して来た筈だ。

だが。

アルトの前に立ちほだかる巨大な人影。

その巨大な人影　ゴルデイスが吼えた。

ゴルデイスの単眼に、理性は一欠けらも残されていなかった。

「ガアアアアアアッ！！」

「ちっ、この馬鹿者が。まんまと相手の策に嵌りおって、サッサと目を覚ませ！」

撃ち下ろされる鉄鎚と、掬い上げられる斧槍。

打ち合った箇所から衝撃波が奔り、森の広場を震撼させる。

草が弾け、木々が恐れ慄く。

『炎獅子』と『霜の鉄鎚』。

共に高位の冒険者二人は、本意ではない争いを強いられる事となった

紫苑とバルが転移されて吐き出された先。

それは閑散とした村であった。

人の気配の無い寂れた雰囲気醸し出す、レンガ造りの家々。居るべき筈の家畜が居ない家畜小屋。

何処にでもありそうな絵に描いた寒村であったが、ぼつかり、と生物の存在だけがキャンパスから抜け落ちていた。

想像していた元凶の居城との差異に、紫苑は少々困惑気に柳眉を八の字に曲げる。

「うーん、なんだか肩透かしを食らった感じです。

クラスの子が話していたアニメだと魔王が薄ら笑いを浮かべて待ち構えている筈なんですが……居ませんよね」

「紫苑よ、それはちとべた過ぎる展開ではないかの」

「そうですね？」

「うむ」

今時の世代にしては珍しく、ゲームやアニメに興味の無い紫苑の想像力などそんなものである。

どこか抜けた遣り取りをする一人と一体。

近くに脅威となり得る存在が無いため、何時も通りの和やかな紫苑達であった。

「だがのう、妖しげな場所は早々に見つけてある」

バルは球体関節の指で、閑散とした村の奥を指差した。奥には村を囲むように森が生い茂る。

だが、其処に意識を割いてみれば確かに存在する違和。精巧な騙し絵のような錯覚を、その森からは感じられた。

「確かに凡百の徒であれば騙されたであろう結界よ。だが妾にしてみれば子供の拙作。妾を騙すのであれば、もう千年は研鑽せねばならぬな」

バルはおもむろに違和を感じる境目まで歩みを進める。

そして。

境目の空間を握り潰した。

ビシリ。

指先で空間に穴を空け、其処を基点として鏡に走った罅のように空間に刻まれる亀裂。

在り得ない異常現象。

だが、バルは臆する事無く力任せに手を引き抜いた。

「ふん」

鏡のように破片を撒き散らし、割れる風景。

風景の破片は雲の如く霧散していき、虚像の奥からは真実の風景があった。

整地された森の小道。

その小道より先に見える古びていながらも立派な佇まいを誇る屋敷。

バルは遠くに建つ屋敷に、口角を上げて不遜な笑みを浮かべる。

「あれが『吸血姫』とやらの居城か。なかなか、どうして風流と云うものを分かつておるではないか」

小道を往き、見えてくる屋敷の全容にバルは称賛の言葉を贈る。重厚な鉄製の門を抜けた先。

それほど見事な庭園が眼前に広がっていた。

中央に配置された清水湛える豪華な意匠の噴水。

整然と刈り揃えられた庭の芝生。

等間隔に植樹された庭木。

色とりどりの花壇の花々が訪れた者の目を楽しませていた。

唐突。

西洋庭園に眼を奪われていた紫苑の脳裏に、一本の糸が幻想される。

幻想された糸はたわんでおり、それが徐々に張りつめていく。

そして、脳裏の糸がピン、と張った瞬間。

紫苑は即座にバルを抱え、その場を飛び退った。

紫苑が飛び退いた空間を、血のナイフの群れが突き刺さる。

「おおおう、随分な持て成しであるな、メイドよ」

「……………予想外でした。まさか私の張った幻覚結界が破られるとは」

「くく、何やらあの程度の杜撰な術式で自負を持っておるようだが、思い上がりも甚だしい。」

まあ、こんな辺鄙な場所に引き籠っておれば、井の中の蛙であるのも頷けるがのう」

「……………苦言、痛み入ります」

植樹された木の陰から姿を現す一人のメイド。  
後ろで編み上げられた紫の髪。

格式高いヴィクトリアン調のメイド服。

吸血メイド　ラヴァテラは表情を隠す鉄扉面の下で苦々しく思  
う。

本来であれば紫苑達をヘトラの村で始末する手筈であった。

だが、『少年アリス』は主の住まう屋敷に、足を踏み入れてしま  
った。

ならば主が気付く前に、最速の一手を以って一瞬で片を付ける。

ラヴァテラはそう結論付け、ぐっ、重心を屈めた。

しかし。

紫苑は球体関節人形を抱えたまま、虚空に視線を漂わせた。

「見られていますね」

「ちょうど小道に踏み入った直後からであるな。好奇心を隠そうと  
もせん輩じゃ」

鈴の声と、妖艶な声。

二人の言葉にメイド服に包まれた身体が硬直する。

眼鏡の奥の瞳が動揺に揺れた。

気付かれている？

ラヴァテラがそう思った瞬間。

楽しげな声が西洋庭園に木霊した。

『ラヴァテラ、何をやっているの？　ワタシは貴女に客人の送迎を  
頼んだ筈なのだけれども？』

姿を見せずに耳朵を打つ『吸血姫』の声。

百年単位で齢を重ねている夜の支配者。  
それにしては存外、響いてきた声は幼い少女のものであった。

「お叱りは如何様でも」

『まあ、いいわ。早く来て下さった方達を案内してあげて。貴女への罰は後で言い渡すわ』

「畏まりました」

待ち切れないといった心声を乗せて宣うのたま『吸血姫』。

ラヴァテラは屋敷に向けて一礼。

感情の悟れない無表情になり、紫苑達の方を振り向いた。

そして、最初に謝罪の言葉を掛け、深々と頭を下げた。

「数々の御無礼を申し訳ありませんでした。お怒りが収まらないようでしたら後程、私めの身体を好きになさっても構いません。どうか着いて来てくれませんか？」

百八十度違うラヴァテラの対応。

紫苑は些か面喰らったように大きな蒼い瞳を更に大きくして驚きを現した。

バルの方は不遜な態度を崩さずにラヴァテラの謝罪を受けた。

「よい。不問に致してやるから疾くと案内致せ。もとより妾達の目的は、戦を起こした首謀者の貌を見物しに来た事であるからな」

「有難うございます。では『吸血姫』マルヴァ様の不肖の従者ラヴァテラがお二人の案内を務めさせていただきます。

御二方のお名前を伺っても宜しいでしょうか」

罪を問わないと云うバルに、ラヴァテラは再度礼をする。

「紫苑。水鏡紫苑です」

「バルトアンデルスじゃ」

「有難うございます。此方でございます」

吸血メイドを先頭に、二人は壮観な庭園を抜けていき、古びていながらも尊厳な屋敷の正面扉に立った。

キィ、と観音開きになっている扉を開き、中へと促す。

屋敷の内装は豪奢でありながら、センス溢れるものであった。

精霊光を乱反射させる煌びやかなシャンデリア。

匠の繊維技術で機織られた毛足の長い見目美しい絨毯。

館の主の感性の良さを如実に現す調度品の数々。

そして。

屋敷を入って真正面。

真紅に伸びるレッドカーペットに沿った巨大な中央階段の先。

此度の戦争の首謀者である『吸血姫』の尊顔があった。

目を奪ったのは赤。

覗き込めばどこまでも深く落ちてゆきそうなワインレッドの瞳。

背中を大きく開けた真っ赤なフリルをふんだんにあしらったドレス。

開いた部分から見える陶磁器のように滑らかな白い背中から生えている蝙蝠の羽。

瞳の色の対比のように髪色は、癖の無い腰まで伸びた真っ青なサファイアの髪。

永遠の少女性を体現したような完璧でかつ愛らしい容姿。

お伽話から切り取られたお姫様　そんな印象を覚えた。

「ようこそ私の館へ、可愛らしい英雄さん。私と　　殺し合い  
ませんか？」

『吸血姫』たる幼き少女は、外見に反するようじに狂氣じみて嘯つ。  
三日月のようじに裂けた口が笑みの形をとる。  
今此処に、『少年アリス』と『吸血姫』が邂逅を果たした

## 第？章 『英雄アリス』

骸體かたいの幽暗な口腔が、申し合わせたかのように一斉に開かれる。ぼっかり、と暗闇が覗く三つの大口。

其処から魔動の光が満ちていく。ヒイイイ……、と破壊的な力が口腔内で凝縮され、不吉とも思える色合いになっていた。

「不味い！ 全班、障壁を展開せよ！！」

イエゴールの一刻を争う焦燥の音が響く。そして。

魔動が光線として放たれた。

一切の音が消えて、三条の光線が目を焦がすほどに戦場を照らす。放たれた光線は、魔導班が援護している防壁に直撃。

その爆裂音は着弾地点付近に居た冒険者、亡者の全ての断末魔を掻き消した。

大鳴動と共に超圧縮されたマナが、破壊と云う名の暴力を撒き散らす。

跡に残るは、黒煙を上げる大きく抉られた防壁と、大量の瓦礫。そして、肉の焼ける臭い漂わせる焼死体だけだった。

白狼王は、背後で巻き起こった大破壊を意に介さず、ただ前を見据える。

聳えるは四本腕と云う異形の骸體かたい。

小山のような巨躯の人型は、白狼王を見て勝ち誇るようからから、と頭蓋骨を震わして嗤う。

目玉の存在しない虚無の空洞は、白狼王の矮小さを嘲っていた。



上げ呟いた。

そして、膨大なマナの胎動がぴりぴり、と鱗に覆われた頬を引き  
攣らせる。

イエゴールはマナの巨塊とも云える方向へと首を向ける。

其処に、戦場の覇者が居た。

トウオネラ平原を覆い尽くした光が晴れる。

痛覚を刺激する氷点下の気温が支配する中。

其処には、氷のクレーターがあつた。

擂鉢状に抉られた地面ごと凍り尽くされた異様な光景。

その中心部で『精霊化』した白狼王が、王者の如く威風堂々と足  
を大地に着けていた。

蒼い氷狼。

白き毛皮の面影は無く、牙も、爪も、瞳も、尻尾も、全てが蒼氷  
で構成された全身。

つるり、と半透明な氷は、白狼王の息遣いの度、自然に上下する。  
其処に氷特有の固さは見受けられない。

有機物のような滑らかさを想起させる氷で形作られた巨狼。

その体軀には、常にマナの暴風を纏わりつかせ、静かに冷たく対  
峙する髑髏くわいこの異形を見据えていた。

「カタカタカタ」

顎の骨を打ち鳴らし、四本腕の髑髏が大地を踏み鳴らし、白狼王  
に接近。

その太く巨大な四本の腕を駆使し、白狼王に掴み掛ろうとした。  
しかし。

人など簡単に握り潰せそうな掌が暴風のマナ圏内に接触した瞬間、パキ、と玩具が壊れる音を鳴らし、四つの肩辺りまで腕が芯まで凍り付いた。

生じた事態を把握できない<sup>たれいん</sup>髑髏の怪物は、半ば呆然と白く凍結した腕を見ていた。

白狼王は、自分に向けられている掌に僅か苛立ち、咆哮する。

「ガアッ！」

蒼氷で作られた口腔から撃ち出される空気の大砲。

魔動により超圧縮された空気の弾丸が、四本腕の異形の胸元にぶち当たる。

衝撃に巨体の足が地面から離れた。

ふわり、と後ろに浮いて流される二十メートル級の巨軀。

その拍子に四本腕が肩口より取れ、仲良く空を舞っていった。

巨体が地鳴りを上げて、大地へと帰還を果たす。

既にその身体は満身創痍。

まず腕が無い。

子供が悪戯に虫の手足をもぎ取ったように、辺りに散らばった凍結した腕の残骸。

落下の衝撃で腕としての形状を留めているものは殆ど無い。

そして白狼王の咆哮をまともに受けた胸部の被害も甚大であった。空気の弾丸が接触した箇所が徐々に凍り付いていき、細胞の大部分が壊死凍結している。

たった一撃。

そう、たった一撃で白狼王は存在の違いをまざまざと見せつけていた。

これが白狼王。

王国の精鋭一個師団を死兵としなければ討伐不可能と云わしめた古えの魔獣。

集った冒険者達は口を半開きのまま固まっていた。

絶望の象徴であつた髑髏の異形。

その怪物の一体がいと也容易く行動不能に追いやられたのだ。

我知らず冒険者達は、勝利の光明を見た。

『ルオオオオオオオオン』

白狼王は天空を見上げ、遠く鳴いた。

蒼氷の瞳が空の彼方を見据え、大規模な魔動を行使する。

予兆は無く、ただ静か。

嵐の前の静けさのように、耳鳴りがするほど静謐な空気だった。しんしん、と降り続けている雪が淡く発光し、白狼王の周囲だけ幻想的な雰囲気にも包まれる。

遠目より見ていたモモに精霊達が囁きかける。

今から白狼王が成そうとしている魔動の全容。

その規模、威力にモモの顔が蒼褪めた。

「イエゴールっ！！ 滅茶苦茶ヤバイのが来る。全魔導班に防護結界を張らせて！ 特に左翼、中央が危ない！」

大きく叫んだ直後。

モモも『精霊魔法』を最大限に発揮する。

『精霊さん！ とにかくすっごい盾でみんなを護って！ あのワンのちゃんの魔動を防げるくらいなのやつー！』

トウオネラ平原全土に存在する精霊に対して行われるモモの呼び掛け。

無理無理、と首を横に振るイメージを送って来る風の精霊。出来る限りやってみる、と寡黙に答える土の精霊。

防壁に陣を敷く冒険者達の合間を精霊達が駆け抜け、茶色や薄緑、青緑と云った色とりどりの防護膜が張られていく。

特に左翼、中央部の冒険者には多重に膜が張られる。

「魔導班は各自結界魔法を展開、手の空いた者は他の者にも随時張っていけ！」

イエゴールの号令の下、更に生き残った魔術師組がその上から結界魔法を上乗せしていく。

本能が警鐘を鳴らす。

亡者共でも髑髏の怪物でも無く、あの氷の巨狼が最も危険な存在だと。

盾を持つ者は、盾を前面に押し出し、

盾すら持たぬ者は、防護膜の中で体を小さくして衝撃に備える。

そして。

『天』が墜ちてきた。

巨大な杭が雪ちらつかせる厚い雲を纏って打ち落とされる。

それは大気の巨杭。

成層圏の更にも 中間圏の - 百度にも低下する大気の気温を更

に減少させて、地表へと一気に撃ち付ける極大規模の魔動。

まさしく神の息吹。

墜ちてきた『天』は髑髏の異形に直撃。

絶対零度に程近くなった大気が一瞬にして巨軀を凍結せしめて、撃ち付けられる空気の壁により氷像は圧壊させられる。

原型など留める暇を与えずに消滅。

塵芥は吹き荒ぶダイヤモンドダストの一部となって地表を駆け抜ける。

地表を舐め上げる凍える風は、水蒸気を瞬時に凍り尽くし、真っ白な神風となって全ての生物に吹き荒れる。

ただ余波。

それだけで防護膜を張っていた冒険者を除く、殆どの亡者達を氷像にしてしまった。

中央部に居た四本腕の髑髏の怪物も、脚が凍り付き、動きを静止させていた。

空気を吸うだけで肺が凍える中。

モモは白狼王が引き起こした災害の爪痕を見た。

静止。

あれほど騒がしかった戦場の全てが時を止めたように静止していた。

「なんちゅうデタラメよ……」

吐いた息は白く、出た言葉は呆然の色合いを含んでいる。

トウオネラ平原全てを白く染め、王の如く佇む白狼を見て、モモはこの戦いの勝利を確信した

Original Novel

追憶のシオン

第？章『英雄アリス』

吹き抜けの二階に繋がる中央階段の上で『吸血姫』は、来訪者を  
歓待する。

階段の上で手摺に手を掛ける『吸血姫』と、一階の紫苑。

それは取るに足らない人間と云う存在を吸血鬼が見下している構  
図でもあった。

「貴方、お名前は？」

「紫苑、水鏡紫苑です」

「みかがみ……しおん。不思議な響きのお名前ね。申し遅れました  
わ、ワタシの名はマルヴァ「ローゼンクロイツ」。

人はワタシの事を『吸血姫』なんて呼びもしますけど」

くすくす、とおかしそうに笑うマルヴァ。

マルヴァが肩を震わして笑ったび、ふわふわ、と腰まで伸びたサ  
ファイアの髪が柔らかく揺れる。

『吸血姫』たる彼女は、心底紫苑との対話を楽しんでいるよう  
であった。

『少年アリス』と『吸血姫』。

誰もが見惚れるほど二人は愛らしく、掛け値無しの美少女達であ  
った。

互いが異なる少女性を持ち合わせ、それ故に互いの少女性を強調  
し合う二人。

『少年アリス』は和の美しさ。

『吸血姫』は洋の可憐さ。

バルトアンデルスも、ラヴァテラも入って来られない二人の少女  
の世界。

其処には少女異常性愛者さえ手を出す事が憚れる神聖さすら醸し出されていた。

「ねえ、シオン。貴方は化け物が最も輝く時は、どんな時かご存知かしら？」

友達と話す気軽さで謎かけが真つ赤なベリーの唇から齧される。紫苑の桜色の唇は黙して閉ざされたまま。マルヴァは気にする事無く朗々と己の考えを述べていく。

「ワタシは思うの。化け物が最も輝く時、それは英雄に殺される時じゃないかしらって。」

だってそうでしょ？ 吟遊詩人が謳う英雄譚の一番盛り上がる場面はいつも英雄が化け物を打倒する時。

彼等が持つ破邪の剣が化け物の心臓を刺し貫く瞬間、民衆は歓喜し、拍手喝采する。化け物は英雄に殺されるべきなのよ」

両手を広げ、踊るように言葉を紡いでいくマルヴァ。

その姿はとっておきの自慢話を話す童女のようにであった。

ただ一人。

陰に控えるラヴァテラだけが、主人の狂態を悲哀に想い、銀縁眼鏡の奥に隠された瞳を伏せていた。

「だからね、シオン。」

私と 殺し合いをしましょう？」

マルヴァにとってお遊戯のお誘いと、死闘への誘いは同義。

小さな掌が、手を取られる時を待つように差し出された。

紫苑はその手に向けて黒シルクの手袋に包まれた掌を伸ばす。

二つの掌は届かない。

だが意志は伝わる。

問答は無用。

どちらも引く事は無いと紫苑は、確信めいた予感を感じていた。故に。

お相手します。

了承の意を蒼の瞳に乗せて伝える。

にっこり、とマルヴァは花開く笑みを浮かべた。

おままごとの殺し合いが始まる

紅と蒼。

二つの視線が交わる。

千変万化の色合いを持つ紫苑の瞳と、吸い込まれそうなほど深みを帯びたマルヴァの瞳。

魅了の効果を持った真紅の瞳を直視しても、紫苑の正気の光は一片も曇らない。

「あは」

予想と違わぬ紫苑の精神力に、無邪気に微笑みを浮かべるマルヴァ。

誰もが愛さずにはいられない食虫花。  
彼女が意図せずともその笑みは余人を魅了する。

「やっぱりシオンは素敵ね。ただの人間ならすぐに人形のように従順になりますのに、とても強い精神の在り様」

上弦の三日月の如く細くなる真紅の眼。  
その瞳の瞳孔が縦に裂ける。  
刹那。

紫苑の脳裏に最大級の警鐘が鳴る。  
たわんだ糸がぴん、と張る緊張感。

紫苑は反射的にその場から飛び退いた。  
黒革製のブーツが絨毯を離れた瞬間。

空間が塵気楼のように揺らめき、ボツ、と二メートル程の光球が紫苑の居た空間に突如として出現する。

光球の周りには真紅の術式が刻まれた帯が多重に展開され、表面を常に回転、流動している。

生じた光球は、一定時間その場に残留し続け、やがて径を萎ませ消失した。

光球があつた空間跡には何も存在していなかった。

真紅の帯が流動していた光球と接触した部分。

絨毯と床は、空間ごと真球に『削り取られて』いた。

相手の防御など無視した完全な一方通行な攻撃方法。

発動に詠唱など不要。

『吸血姫』である彼女が睨み付ければ、即座に発動すると云う工程にも満たない条件。

予兆は空間の僅かな揺らめきのみ。

「やっぱり」

素敵」

うつとり、と頬に手を添え、顔を紅潮させてマルヴァアが呟く。  
視界の中の紫苑は、美しく流麗な黒髪を翻し、油断無くマルヴァアを見据える。

その真剣な蒼の視線が堪らない。  
マルヴァアは女の秘部が熱く火照るのを感じた。

「あら？」

感じる清流の如く自然な殺意。

人外の動体視力が視界の隅で閃くモノを見い出す。  
身を翻し、漆黒の蝙蝠の翼でマルヴァアは宙を舞う。

だが一步遅かった。

先程の返礼とばかりに闇色の糸が閃き、マルヴァアの華奢な腕に線が走る。

そして、半ばよりズレ落ち、泣き別れになるマルヴァアの右腕。  
ぼとり、と無造作にマルヴァアの腕が敷かれた絨毯の上に落ちる。  
切断面より立ち昇る黒い煙。

絨毯の上に落ちた腕は、情報連結破壊により瞬時に黒い灰へと化す。

マルヴァアの二の腕の切断面も黒煙がぶすぶす、と燻り存在情報が破壊されていく。

吸血鬼が保有する高い抗魔力の為、黒い灰の侵食は緩やか。

「ふふ、そうですね。ワタシだけズルをするのは不平等ですものね」

朗らかに幼い顔つきを緩ませてマルヴァアは笑う。

マルヴァアは切断面を興味深く観察した後、無事な方の腕の爪を伸ばし、身に着けたドレスごと肩口より腕を斬り落とした。

闇色の系の正体。

それは『千変万化』の能力を持つバルトアンデルス本体が秘蹟礼装『常闇の埋葬』をコピーした結果だ。

魔力を送り込んだ闇色の系に傷を負わされた者は、存在情報が連結的に破壊されていき、この世から黒き灰となって消え失せる。

先程のマルヴァのようにすぐさま切除しなければ、掠り傷さえ致命傷になる反則業。

マルヴァの空間削岩能力に匹敵するほどの凶悪さであった。  
ぶるり、と『吸血姫』の肢体に震えが走る。

「嗚呼、なんて　　甘美。死への恐怖が、生の尊さを再認識させるこの瞬間。堪りませんわ」

無くなった肩口より突然、蝙蝠が大量に出現。

蝙蝠達はマルヴァの腕が存在していた場所に凝り固まり、やがて元の腕と寸分違わぬ白磁の腕に変化した。

マルヴァは紅いドレスごと再生した腕で身悶えする身体を抱き締める。

童女の表情に不釣り合いな艶が乗っていた。

少女の貌に垣間見せる情婦のような色のある妖艶な狂気。

アンバランス故の倒錯的な魅力溢れる艶姿。

紅いルージュを引いた唇が三日月形に『割れる』。

「もっと、もっと！　ワタシに生の素晴らしさを実感させて、シオン！」

「ご随意に」

「ふふ、つれないのね」

いっそ冷ややかに紫苑は、興奮するマルヴァの求めを受け流す。

殺し合いにそんな情緒は不要とばかりに紫苑は、口数を極端に減らしていた。

今の紫苑の表情は、氷から掘り出した彫刻より凝り固まっている。闇色の糸が屋敷の中で幾重にも閃く。

紫苑が無詠唱で設置した透明な魔法陣の滑車を活用して糸の檻を張り巡らせる。

寄らば切り、触れれば死。

宙へと飛ぶ『吸血姫』専用の鳥籠。

「お上手なのね。ならワタシも

」

パチン、と主従で同じ合図の仕方。

マルヴァが白魚のような細い指を鳴らした直後、彼女の足元の影がざわめき、膨張した。

膨張した影が弾け、十数本の影の触手が伸びる。

影で構成された触手の先端は、鋭利に尖っているもの、禍々しい刃が付いているものなど様々。

影の特性の為、伸縮自在の触手群が次々と糸の籠を破壊していく。鋭利な切れ味とはいえ所詮は糸。

張り巡らされた闇色の糸は、ぷつんぷつん、と次々に影の禍々しい刃によって切断されていった。

「吸血鬼とは闇に属する種族。故にこんな事も出来ますのよ」

宙に浮かぶマルヴァの影より生じた触手群が、勢いそのままに紫苑に向けて進路を変更した。

中空より降ってくる視界を埋め尽くす影の触手。

それは十数本もの有線の兵器。

尖った先端が突き、影の刃がしなり、触手の本体が薙ぎ払われる。紫苑は間断無く迫る影の触手群を避ける、避ける、避ける。

時に張った糸の上を滑り、  
時に側転、バク転、宙返りを駆使して、  
時に糸を以って触手を切断し、  
紫苑は迫り来る触手群を軽業師のように避け続ける。

だが。

完全に避け続ける事は出来ないのか、見る間に紫苑の身体に手傷が増えていった。

剥き出しになった白い肩に影の刃が掠り、赤い線から血が滴る。

細く伸びた影の尖端が、太腿の皮を抉る。

紙一重ながらも致命傷を避けていく紫苑。

しかし、間断無く続く影の攻勢は、少しずつ紫苑の華奢な体軀を朱に染めていった。

「頃合いか。妾も参戦するかのう」

バルは観戦を止め、重たい腰を上げた。

威風堂々たる獅子の鬣のような金髪を手で後ろに流し、影の触手入り乱れる死地に歩みを進める。

気負いなど無く、ちよつと其処まで散歩しに行くかのような気軽な。

そのバルの軽い足取りを止めたのは、首筋に突き付けられたひんやりとしたナイフの冷たさだった。

「無粋な奴よの。妾の行く手を阻むとは」

「申し訳ございませんが、貴女様を主の下へ行かせる訳にはいきません」

首筋にナイフを突き付けられたまま、バルは振り返る。

不機嫌な視線の先に居た者は、『吸血姫』の従者マルヴァ。

バルは臆する事無く、会話を続ける。

「貴様、妾達以外も主の命令で呼び寄せておきながら別々の場所に転移させおつたの。そして今もまた妾の邪魔に入る。」

「其処までして『吸血姫』とやらに生きて欲しいのかえ？」

「当たり前でございます」

「じゃが　貴様の主は、死に魅入られておるようだ。いや、もはや死に場所を探しておる、と云った方が適切か」

ひゅつ、と確信を突かれたラヴァテラは息を呑んだ。

眼鏡の奥にある伶俐な瞳が、初めて拳動不審気に揺れる。

張り付けた従者の仮面が剥がれ掛けたラヴァテラ。

くく、とバルはその様子を見て満足そうに喉の奥で笑い、溜飲を下ろした。

バルはどっかり、と軽い体重を柱に預けて観戦体勢に入る。

「まあ良いさ。貴様がそうまでして主の存命を望むというのなら妾も大人しく見ていようではないか。」

「じゃが、あれしきの影で妾の紫苑を御せると思っでないぞ」

「何を仰って　」

ラヴァテラの言葉は最後まで言い切られる事は無かった。  
視神経より脳に入ってきた情報。  
その中に思いがけない光景が映り込んでいたからだ。

「妾の担い手は、貴様が思うより甘い相手ではないぞ」

幾本もの触手の大攻勢に晒されている紫苑。  
しかし。

何時の間にか、紫苑を追い回す無数の触手群は、その柔肌に傷付ける事はおろか、触れる事すら出来なくなっていた。  
禍々しき刃も、刺し貫く鋭利な尖端も、全て危なげなく回避している。

紫苑の『線糸』は神経に微細な金属糸を用いて直接干渉する。

それは人体の構造に熟知していなければ成しえない御業。

転じて云えば、それは紫苑自身の身体にも当て嵌る。

自分の身体故にもっとも把握しているのは紫苑自身。

つまり紫苑は、自身の身体を完全掌握できる。

ミリ単位の精微な筋肉の操作、時には限界を超えた機動まで。

残すは、攻撃に対する微調整のみ。

それが済めば、針の穴を通すような剣が峰の攻勢にも紙一重で回避し続ける事が可能となる。

「素敵ね。シオン、ワタシの眷属にならなくて？ 貴方ならば百年の時を退屈せずに済みそう」

「謹んで遠慮します」

「ふふ、残念ね」

守勢から攻勢へ転ずる瞬間は一瞬。

紫苑は、四方から迫ってくる触手を回避する為に開いた空間  
宙へと跳んだ。

だが、其処は逃げ場の無い袋小路。

足場の無い中空は、触手にとって格好の的だった。

「シオン！ それからどうするの？ 死んじゃう？ ねえ、死んじ  
ゃうの！？」

「ごうします」

交差した両腕。

それが勢い良く左右に広げられた。

黒い長手袋の指先から繋がる闇色の糸の集合体。

キュイ、と絞られる糸の音が屋敷内に木霊し、紫苑の周囲を数え  
切れない闇色の糸が閃く。

瞬間。

マルヴァの影から生じる全ての触手群が切断され尽くした。

縦横無尽、不規則に動き回る触手をタイミングよく設置した糸で  
断ち切るといふ神業。

紫苑はそれをやってのけた。

そして紫苑は足元に展開した物質に干渉する魔法陣で宙に留まる。

「あは、あはははははははは！ 素敵！ 素敵ね！ ねえ、どうや  
ったの？ ねえ、教えて！」

答えはマルヴァの眼前に迫る糸の密集域にて返された。

迫り来る情報連結破壊因子の壁。

マルヴァは狂笑を張り付けたまま空間を削る魔眼を発動させる。

瞳孔が縦に裂けた双眸がどくん、と脈動する。

闇色の糸を巻き込み、空間が滲み、そして光球が全てを呑み込ん

だ。

初撃と異なる四メートル級の大きさの光球。

蠢く真紅の紋様の帯が収束していき、空間内の物質を全て削り取った。

「次はワタシの順番ですわね」

そして奏でられる光球の輪唱。カノン

空間の僅かな『滲み』と、相手の『害意の糸』に反応し、紫苑は容赦なく物質世界を削り取っていく光球から逃れる。

魔法陣と糸を足場に三次元的な動きで逃げる紫苑と、追走する数多の光球。

指揮者は『少年アリス』、『吸血姫』によって奏でられるのは世界を削る音楽。

瞬く間に屋敷内の物体は真球状に削り取られていく。

絨毯も、

柱も、

階段も、

調度品の壺も、

果ては天井までも避け続ける紫苑を追従し、光球は削り取っていく。

紫苑とて黙って逃げ続けている訳でない。

避け続ける最中に、闇色の糸を閃かせ、切断線が『吸血姫』を強襲する。

牙を剥く紫苑の反撃をマルヴァは、時に避け、時に影の触手にて迎撃する。

互いが互いに一撃必殺の攻撃の応酬を繰り返していた。

その戦闘は、さながら相手の喉笛に牙を突き立て合う獣同士の戦

いであつた。

「シオン。ワタシは今とっても楽しいですわ。僅かの見落としさえ刹那の死に繋がる舞踏会。

ワタシ、この素晴らしい時間を共に過ごす貴方の事をもっと知りたくなつて来ましたわ。

貴方はどんな事が好きなのかしら？ 趣味は？ 嫌いなものは？ 紅茶は好き？ ワタシはアールグレイに血を少量、隠し味に落とす紅茶が好きですの。

ねえ、貴方の事を教えて下さらない？」

「俺も貴女の事が知りたいです。

癖は？ 隙の生じる予備動作は？ 貴女を倒す全ての事を知りた

い

「まあ」

紫苑の物騒な答えに、マルヴァは初恋を知った少女のように頬に朱を散らす。

想い人の殺戮乙女が自分だけを見詰めていてくれる。

今日のドレスは変じゃないかしら。

髪型は乱れてないかしら。

恋人を前にする彼女のようにマルヴァは恥ずかしがった。

とん、と紫苑の繰る糸に追いやられたマルヴァは一階の地面へと足を着けた。

それは緻密に編み上げられた罠。

誘い込まれたマルヴァの頭上、其処には燦然と精霊灯の光が乱反射に煌めくシャンデリア。

そのシャンデリアの上には紫苑が軽やかに乗っていた。

奇しくも最初の構図と上下が反転。

見下ろす『少年アリス』と、見上げる『吸血姫』。  
バターを切るよりも容易く紫苑は、シャンデリアを吊り下げている鎖を鋼糸で切断した。

「綺麗な」

視界を埋め尽くす魅力的なカットが成された硝子の中の灯火。百を超える精霊灯の照明が美しく配置された豪華なシャンデリアが、マルヴァの小さな身体に降り注いだ。  
ぐちゃり、と肉を潰す生々しい音は、屋敷中に響いた硝子の砕ける音に掻き消された。

ふわり、と羽のように無音で一階に舞い降りる紫苑。

油断は無い。

ただ、静かに紫苑はシャンデリアが落下したエントランス中央を見据えていた。

「主マルヴァは……いえ、私達吸血鬼はあの程度では死に切れません」

抑揚に乏しいラヴァテラの耳朵を打つ。

直後。

血の霧と共に大量の蝙蝠がシャンデリアの残骸から吹き出す。  
血霧と蝙蝠は列を成し、天井付近へと集い、一つの赤黒い暗黒へと変わっていった。

赤黒い暗黒はやがて人の形を成し、それはサファイアの髪靡かせる『吸血姫』へと変貌した。

初見と変わらぬ傷一つ無い愛らしくも怖ろしい少女。

残骸と成り果ててなおも光源の役目を果たすシャンデリアがマル

ヴァの影を天井に伸ばす。

「ふふ、我が屋敷のシャンデリアは意外と痛いのですわね、初めて知りましたわ。でもそれでは足りませんの、シオン。」

吸血鬼を殺すには、『ここ』。見えますか、シオン？ ちゃんと『ここ』を抉って下さらなければ死ねませんのよ」

マルヴァは膨らみかけた蕾の左胸の上に、そつ、と真紅のフリルに包まれた手を乗せた。

血の気の無い手が、乳房の丸みを強調するようにドレスをなぞる。熱に浮かされた視線は片時も紫苑から外れない。

情事の際に睦言を交わす男女のようにマルヴァは紫苑を見詰める。そして。

「もう一曲、踊りましょう　ね、シオン？」

瞳孔が割れた。

世界が滲む。

天上に伸びたマルヴァの影が蠢き、影の触手が頭上より降り注ぐ。世界を削り取っていく光球と、影の触手が生み出す二重奏。

単純に考えて手数が倍になった攻勢に、紫苑はその場から緊急離脱。

直後に光球が発生し、マテリアルを削り取り、消失させる。

『害意の糸』に反応して逃れた紫苑を、上空より距離を詰める無数の触手群が飛来する。

「その形は、嫌いです」

僅かに発露された嫌悪感。

人喰い植物マン・イーターの鳶の形状に酷似した触腕は、紫苑の生理的な忌避感

を刺激していた。

バックステップで跳び退りながら片腕を振るう。

空間の至る箇所に設置してあった糸が、迫る影の触手群を切り刻んでいく。

切られた触手達は黒灰と化し、残った数は片手で足りるほど僅か。紫苑は迫り来る脅威に向かって飛び跳ね、討ち漏らした触手を避ける。

尖端が黒革のブーツの下を潜り抜け地面を穿つ。

紫苑が足を着けたのは、触手の幹。

その上を『少年アリス』が走り抜ける。

「勇ましいですわね……………けど、そう簡単な事ではなくってよ」  
「っ」

ゾクリ、と駆け抜ける悪寒。

ピン、と脳裏に浮かぶ糸が張り詰め、脅威の到来を紫苑に告げる。視界に捉えたマルヴァの姿が滲む。

否。

滲んでいるのは、紫苑の周囲の空間。

刹那。

考えるより早く。

脊髄反射の領域。

蹴り足に魔動を発動、全速力で横に跳んだ。

膨れ上がる大規模な光の球。

膨張し続けるソレは、紫苑の身体に追従する黒髪の毛先を呑み込んだ。

「危ないですわ。まだダンスは続いていますわよ」

空中で大きく体勢を崩した紫苑に、更に追い打ちをかける影の触

手の増援部隊。

足元に展開するは物理干渉の魔法陣。

黒髪を束ねた頭は地面、ニーソックスに包まれた細い脚は天井。

上下逆さのまま跳ねる、跳ねる跳ねる。

天地は引つ繰り返り、三半規管を掻き乱しながら、展開した魔法陣を蹴り続ける。

紫苑を追い続ける幾多の死神の鎌。

頬を影の刃が掠める。

光球が物質を削る甲高い音が肌を撫でる。

極度の緊張。

ただ一度もミスの許されない怒涛の回避。

そして。

「あは」

目と鼻の先に『吸血姫』の愛らしい笑みがあつた。

「ステップを間違えましたわね」

空気を押し潰して放たれる右ストレート。

吸血鬼の超人的な身体能力を加味された拳が、紫苑を強襲。

バキッ、と豪拳と胴体の合間に捻じ込んだ左腕から骨の碎ける音がした。

魔動で底上げされた防御を紙のように突き抜けてくる吸血鬼の肉弾戦。

「  
がっ」

そのまま紫苑はボールのように弾き飛ばされ、進行方向の柱に華奢な身体を激突させた。

紫苑と激突した太い柱に大きな亀裂が走り、支えの無い身体はどさり、と絨毯の上に落ちた。

擦子の切れたぜんまい人形のように力無く紫苑は地面に倒れ伏す。しかし。

紫苑は気力と、己に『繰糸くりいと』を使用し、無理矢理立ち上がった。全身に走る激痛は、意志の力で無視。

左腕は曲がってはいけない方向に曲がりながらも、大粒の蒼き瞳からは戦意の陰りは見受けられない。

「ふむ、王手かの」

柱の一本に体重を預け、腕を組んでいたバルがぼつり、と零した

昔の話だ。

だが色褪せていない大切な記憶。

胡坐を掻いた異国の男とその膝の上に美しい少女が居た。

「敵対する障害に容赦など無用だ」

穏やかな子守歌のようにその声は染み入ってきた。

古き日本家屋の縁側。

異国の香り纏わせる男の膝の上で、幼い紫苑は微睡むように男の低く安心する声を聴いていた。

「人間性、背景、思想。障害となるモノの邪魔な事など一片たりとも考えるな。最大効率で障害を排除しろ。でなければお前は後悔する」

実の息子に対して話す内容ではない。  
不穏にて物騒。

だが、幼き紫苑と同じ色合いの蒼い瞳は、とても優しげに膝上で丸まる息子を見ていた。

表し方はとても不器用。  
注がれる慈愛の眼差し。

それは殺人マシンでは無く、一介の父親が持つ暖かな瞳であった。

「紫苑、お前の性質は妻によく似ている。愛する者に対する病的な執着心」

「私が教えた糸の業は、平和なこの国では不用の長物でしかないかもしれない」

「だが、使うと決めたなら迷うな、業が鈍る……………寝たのか」

気付けば膝上の紫苑は規則正しい寝息をついていた。

枕は厚い胸板。

とくん、とくん、と鼓動する父の心臓の音。

羊水に揺蕩う胎児のように幼い紫苑は安心しきっていた。

それは普通の家庭とは異なる歪な親子関係だったのかもしれない。  
だが。

紫苑にとっては何よりもかけがえの無い思い出の「コマだった

「ワタシの腕が骨を叩き折る瞬間。一瞬にも満たない刹那に切られていたのね。本当に貴方は想像の外へと抜けていく人ね、シオン」

言葉を紡いでいるマルヴァの右腕。

肘の下の部分から大きく切断されかけており、皮膚とドレスの布地だけで繋がっている状態。

次はどんな手段で殺しに来てくれるのか。

マルヴァの期待に満ちた瞳は、物欲しげに紫苑の拳動を待っていた。

「もうそろそろ、終わりですよ」

「そうかしら？ 残念ね、楽しい時間はすぐに過ぎ去ってしまう」

「そういうものですよ」

「そういうものかしら」

舞踏会の終わりの始まり。

左腕は折れ、身体中が軋みの悲鳴を喚く中。

紫苑は動いた。

我武者羅に逃げ惑っていた訳では無い。

全ては、この時の為の布石。

詰め将棋の如く、一手、また一手と積み上げてきた勝利への道筋。

「『千変万化』。気をつけよ、『吸血姫』。妾本体が成す糸は、光の屈折率すら変化させるぞ」

前触れ無く、『吸血姫』の片脚がぶつり、と身体から離れた。

宙より落ちてくる少女のおみ足は、捨てられた玩具のように地面に転がった。

「え？」

予想だにしなかった突然の事態。

切断された左脚の切断面より滴る血液が、宙で線のように伝い、見えない鋼糸の存在を主張していた。

視界に入らない不可視の糸。

それは屋敷中の至る所に設置されてあった。

配置を把握しているのは『少年アリス』ただ一人のみ。

マルヴァの口角が知らず持ち上がる。

湧き上がる感情は喜悅。

トランポリンのように糸の上を跳ね、向かってくる紫苑に最大限の笑顔を浮かべた。

「いいわ、シオン！ 貴方って本当に素晴らしいお人ね！ フィナ

ーレは盛大に、華やかに幕を引きましょー！」

光球が喝采して数多に顕現する。

影の触手がミュージカルの如く舞台を華々しく飾る。

大量に入り乱れる触手群を、不可視の糸で切り裂き、活路となる道筋を切り開く。

光球すら直感で避け続け、ついに紫苑は『吸血姫』の前に躍り出た。

「きつとここまで来てくれると信じていましたわ」

世界が滲む。

今まで最大規模の空間の歪みが発生した。

すぐさま離脱しなければ消滅を意味する効果範囲の最中。

紫苑にバルの力強い後押しの声が届く。

《往け！ 紫苑》

「はい！」

理由など問うまでも無い。

絶対的な信頼関係。

紫苑は迷いを捨て、『吸血姫』へと直進する。

真紅の帯が蠢く光球が紫苑の体軀を呑み込んだ

「シオン……まだ踊りきっていませんのよ。貴方もワタシを殺してくれませんか？」

高揚から一転。

マルヴァの眼は、気の遠くなるほどの年月を生きた者の空虚を映し出していた。

『吸血姫』は生に飽いている。

生きる事に執着心が無いと云ってもよい。

だからこそ破滅的な言動で紫苑との殺し合いを楽しんでいた。

そして、殺してくれる相手が脱落した今、退廃的な雰囲気纏わせ、瞳は空虚に穿たれる。

しかし。

マルヴァは異変に気付く。

収縮して、いかない？

本来であれば径を萎め、消滅する筈の光球が未だにその場で留まっている異常。

その異常を皮切りに事態は加速的に進んでいく。

ビシリ、と光球に罅が走る。

罅は亀裂へ。

光球全体を蝕みながら全体へと拡がっていった。

「戯けが。『吸血姫』とやら、貴様は何度『ソレ』を妾の前で見せた。」

虚仮威しが通じる刻限はとうに過ぎとるわ！」

バルトアンデルスの矜持が吼えた。

そして。

物質世界を容赦無く削る筈の光球が 弾けた。

飛び出すは、束ねた黒髪を靡かせ空を駆ける『少年アリス』。

眉目秀麗な美貌はただ前を見据え、一点を注視する。

紫苑の姿を認識したマルヴアの表情が喜悦で歪む。  
それは恋い焦がれ続け、狂愛の域にまで達した激情。  
「終幕を下ろす使者がマルヴアの懐に踏み込んだ。」

「あははははははっ！ 貴方って最高に最高ね、シオン！」

マルヴアの無事な方の左手の爪が鋭利に伸びる。

飛び込んできた美少女然とした少年を、その爪で切り裂く為に。  
だが。

それは無駄な足掻き。

この一瞬の時の為に紫苑は動き続けていた。

驚異的な再生能力を持つ『吸血姫』の前に手の内を完全に曝け出す事は愚策。

確実な殺害方法は心臓を抉り出す事。

それが『常闇の埋葬』ならばなお確実である。

既にチェス盤の盤面は詰んでいた。

「動かないで下さい 狙いが、違えてしまっ」

凜、と終わりを告げる声は、酷く耳心地が良い物だった。

振り下ろす筈であった爪は、マルヴアの意志に反して止まる。

筋肉が脳からの指令を拒んで見せ、外部からの電気信号に無理やり従わされてしまう。

『繰糸』がマルヴアの小さな身体を縫い付けた。

糸の術中に嵌る美しき蝶。

紫苑はこの刹那の瞬間を待ち望んでいた。

そして。

バルトアンデルス本体である黒の長手袋が、光を嫌悪する闇色に

染まる。

『常闇の埋葬』の性質を付加され、硬質化した貫手。ぞぶり、とそれが吸い込まれるように『吸血姫』の心臓を貫いた。

「あ……………終わってしまいましたの、ね」

こぶ、とマルヴァの真つ赤な唇から鮮血が漏れる。

名残惜しむ言葉と、どこか安心した少女の儂い笑み。チエックメイト。

キング（吸血鬼）はポーン（人間）によって討ち取られた

「何故　　こんな事を起こそうと思ったのですか？」

傍らには『人形アリス』。

紫苑はただ真つ直ぐに視線を逸らさず一組の主従を見ていた。

ぼつり、と零された疑問の声は、廃墟と見紛うほど荒れ果てた屋敷によく響いた。

疑問を投げ掛けた先。

其処には古えの化け物　『吸血姫』の末期の姿があった。

千切れかけた右腕に、太腿から先がない左脚。

絨毯の上に拡がっていく血溜まり。  
地面へと流れる、淡く螢火のように光を反射させるサファイアの  
髪。

そして、破れた左胸の心臓から立ち昇る黒い灰煙。  
ラヴァテラに抱き抱えられながら横になり、静かに終わりの時を  
待っていた。

その顔に浮かぶ感情は、酷く穏やかなものであった。

「そうね……ねえ、シオン。貴方は気の遠くなるほど歳月を生きる  
という意味が分かるかしら？」

「……いいえ、分からないです」

「ふふ、そうよね、その方がいいわ……きつと」

口から滴る血に咽ながら、マルヴァは問うた。

答えを持ち合わせない紫苑は、静かに首を振る。

戦闘の際、鬼神の如き戦いぶりを見せていた本人とは思えない素  
直で年齢相応に幼さを感じさせる応対。

マルヴァはそんな紫苑に優しいげな笑顔を向ける。

その微笑みは今まで浮かべた表情の中で一番素敵だと思えた。

「生きるという事は素晴らしい事。でも、度を過ぎてしまえば人な  
らざる者達の精神を蝕んでいく猛毒。

身を焼き滅ぼす怒りも、心が碎かれる慟哭の季節も時間と共に風  
化されていってしまう。

やがては歓喜も、憤怒も、悲嘆も、全てが他人事のように思えて  
しまう風が訪れる　　ワタシはね、シオン。生きる事に飽きて  
しまったの」

「なら、誰にも迷惑をかけないで自害すればよかったのではありま  
せんか？」

「ふ、ふ……ふふふ。手厳しいですね、耳が痛いすわ」

愛くるしい桜色の蕾から痛烈な毒を吐く紫苑。

自分の言い分を快刀乱麻真つ二つに両断した紫苑に、マルヴァはあらあら、とやんちゃな子供を見守る大人な顔を見せる。

死の際で剥き出される本質。

今、紫苑と対面している彼女こそが本当のマルヴァ＝ローゼンクロイツその人なのであろう。

「けれども、貴方は何を馬鹿な、と笑うかもしれませんがワタシは死ぬ事が怖かったの。

生に飽いていながら、心の最も底で死に怯えている。そんな弱い化け物なのよ、私は」

「矛盾し、歪な本性よの『吸血姫』」

「ええ。その通りね、お人形さん」

「だが実に人らしい矛盾を孕んだ本性。何が貴様を其処まで恐怖させる？」

「……」

バルの言葉の後。

下りる僅かな沈黙の帳。

遠くを見詰め、遙か昔の景色を回顧するようにマルヴァは喉を震わした。

「……『龍』、かしらね」

『龍』。

それは蒼の大地を生きとし生けるものにとつてとても大きな意味合いを持つ単語。

『龍』とは、爬虫類に似た巨大な体躯に、蝙蝠のような翼を持ち、灼熱のブレスを吐く種族の事、では無い。

ならば『龍』とは何か。

それは、ある事が可能な個体に贈られる称号である。そのある事とは 単体での文明の破壊だ。

千年周期で訪れる蒼の大地の黄昏。

大陸は燃え、万物が津波に吞まれ、樹の根が覆い尽くす天変地異の数々。

そうやって蒼の大地の文明は、破壊され続けてきた。

『秘蹟礼装』とは、その破壊された文明の遺物なのだ。

『龍』が何時から存在しているのか、正確に記述されている文献は皆無。

だが、蒼の大地には、確かに『龍』の存在が四柱ほど確認されている。

『龍炎』、『巨龍』、『龍樹』、『狂い龍』の四柱。

いずれの『龍』も対峙すれば、人も魔物も取るに足らない存在だと突き付けられる圧倒的存在の格を保有している。

地域によっては『龍』を神として信仰している部族も居るほどのだ。

「『龍炎』レーヴァリア・ルティン。もう色褪せてしまった遙か昔の記憶の中で未だワタシの脳裏に残る鮮烈な炎。

息を吸うだけで焼ける肺。燃える大陸。見渡す限りの景色はドロドロに溶けた大地。その光景を見る眼さえあまりの熱で失明してしまつような地獄。

そんな世界を『龍』はただの一息で作り上げてしまつ。

若輩だったワタシの根幹に色濃く刻まれた恐怖は、数百年経つた今でも残っている」

「それが貴様の矛盾の原因、か」

「ええ……笑ってしまうでしょ。吸血鬼であるワタシがよりもよつて『龍』に恐怖を植えつけられるなんて存在意義の放棄よ」

「笑わぬさ。もとよりそれは真祖の役割である」

バルの言葉に、少し驚いたように眼を見開くマルヴァ。

だが、何処か納得したようにマルヴァは、目の前に立つ球体関節人形を見た。

球体関節の身体をよくよく注目してみれば、其処には失伝された魔法術式がびっしりと隙間無く刻まれているのが見て取れる。

「貴女『も』秘蹟礼装だったのですわね」

「正確には今、紫苑が身に着けておる長手袋が妾の本体よ。この器は妾の担い手　紫苑手製のものである」

「あら、シオンは素敵な特技をお持ちなのね」

「当然である。妾の担い手ぞ」

「……ええ、それなら当然ですわね」

くつくつ、とバルが愉快気に咽喉を鳴らし、

くすくす、とマルヴァも釣られて笑う。

「お人形さん、貴女のお名前を訊かせてもらえるかしら？」

「バルトアンデルスじゃ。妾の名前を胸に刻んで冥府に逝くがよい」

くるり、とバルは踵を返し、出口の正面扉へと歩を進める。

紫苑も主従にぺこり、と一礼してバルの三步後ろを楚々と歩いて追う。

一つに束ねられた後髪が歩く度に左右に柔らかく揺れる。

その大和撫子な後姿にマルヴァの声が掛けられる。

「シオン。ワタシを殺してくださって　　ありがとう」

殺人の肯定。

ブーツの歩みはその謝意の言葉に止まる。

だが紫苑は振り返らずに正面扉へと向かった。  
開け放たれる正面扉。

差し込む陽の光が、二人を包み、後姿が逆光になる。

「ああ、そうそう忘れておったわ」

くるり、と肩越しに振り返るバル。

その顔は逆光で視認できなかつたが、雰囲気は悪巧みをしている  
子供のように感じられた。

「勘違いしておるようだから言っておくがの。妾の紫苑の性別は男  
ぞ」

「え？」

思いもよらない慮外な言葉

きよとん、と可愛らしく目を瞬かせる『吸血姫』。

バルはにんまり、と悪戯鬼のように口元を歪め、扉を閉じた

「春風のように騒がしくも清々しい方達でしたわね」  
「はい、マルヴァ様」

心臓から灰煙を上げる最中、マルヴァは出て行った紫苑達の感想を零した。

ラヴァテラは床に横たわる主の上半身を抱きかかえながら同意を示す。

長年連れ添ってきた主従の惜別。

それは母娘の別れにも似ていて。

終わりの時は刻一刻と近付いていた。

「ラヴァテラ……………ワタシを殺しなさいと命じた時。貴女は何て

云ったか覚えているかしら？」

「……………はい」

それは数百年程遡った昔。

『吸血姫』は己の従者に命じて自殺を図った。

だが絶対遵守である筈の命令は実行されなかった。

他ならぬ従者の意志によって。

「『死ぬと仰れば、喜んで心臓を抉りだしましょう』」

親である吸血鬼の命令は絶対。

逆らうという事は、存在意義の否定。

「『犯されると仰れば、浮浪者達にも身体を開きましょう』」

だが、ラヴァテラはその命令に逆らった。

存在意義の否定、それは吸血鬼にとって死を意味する愚行。

身体の内側から腐り落ち、崩壊していく引き金。

それでもラヴァテラは、その命令に命懸けで抗った。

「『ですが、その御命令だけは聞けません』」

ラヴァテラは、マルヴァを深く愛していたから。

「あの時は本当に驚いたわ。朽ちゆく身体を気にする事もしないでただ真っ直ぐ直立不動でワタシを見続けるのだから。」

ワタシが命令を撤回しなければ貴女は、今頃骨だけになっていたのよ?」

「申し訳御座いませんでした。ですが、やはり今でもあの御命令だけは、私には不可能です。例え、この身が朽ち果てようとも」

「ふふ、もういいのよ。貴女の愛が成せる技ですものね。でも、今から云う命令だけは絶対に聞き容れなさい」

マルヴァの顔が真剣なものになり、抱える従者を見上げた。

ただ一点。

眼鏡の奥にある紫紺の瞳を逸らさずに見詰めていた。

ラヴァテラも主人の最後の命令を拝命する為に、主の眼を見詰め耳を傾ける。

その見つめ合っていた時間は、長かったようで、一瞬だったかもしれない。

やがて、マルヴァの幼くも真っ赤な唇から言葉が齧られる。

「ラヴァテラ　ワタシの血を吸いなさい」

吐き出された言葉は、ゆっくりとラヴァテラに浸透していった。

親である吸血鬼が死滅は、その吸血鬼の系譜全体の死滅。

死滅の運命から逃れるうる方法の一つ。

子の吸血鬼が、親の吸血鬼の血を吸う事だ。

その意味する所は、完全なる単体の吸血鬼としての独立。

マルヴァの能力を継承し、新たな『吸血姫』として産声を上げる事である。

だが。

「私は……私はマルヴァ様と一緒に死にとつございます」

ぱたぱたと滂沱の涙がマルヴァの頬を濡らす。

感情の細波が押し寄せ、ラヴァテラ本人にさえもその大粒の涙を止める術が無い。

泣き崩れるラヴァテラに、マルヴァはそつ、と左手を伸ばす。

小さな親指でラヴァテラの頬を伝う涙滴を拭う。

「駄目よ、それは駄目。ラヴァテラ、お願いだからワタシの云う事を聞いて頂戴」

「……………」

「貴女にはまだ精一杯生きて欲しいの」

「……………」

「ね、ラヴァテラ？」

「……………はい」

途切れ途切れになりながらも、ラヴァテラは承諾した。

マルヴァは慈母のような優しい笑みを見せ、顎を上げ真っ白な咽喉元を晒す。

ラヴァテラはその首筋に顔を寄せ、

口付けのように、

懺悔のように、

呪いのように、

祈りのように、

牙を突き立て、血を吸った。

ぷつりと細い首筋の皮膚を突き破り、暖かな血潮が口内へと広がる。

ラヴァテラはマルヴァの一部であった血液をゆっくり、と嚙下し

た。

「……いい子ね。これで貴女は自由」

神聖な儀式。

当人達にとつて長い長い吸血が終わった。

首筋から離れたラヴァテラの口元をすっ、と一条の血が伝う。彼女の涙と血に塗れた顔は、とても美しかった。

「好きな場所へ行き、

好きな場所で生き、

好きな場所を逝きなさい」

「マルヴァ様、こんな時にまで言葉遊びをなさらなくても」

「ふふ、貴女だつてこんな時にまでそんな野暮な呼び方をしているじゃない。ワタシと貴女との間にはもう何の強制力も無いのよ」

最期くらい堅苦しい呼び方はやめて、とマルヴァは笑う。

ラヴァテラの目頭に熱がこもる。

云うべき言葉があつた。

それはマルヴァが期待し、ラヴァテラが云いたかつた呼び方。二人の絆を示す言葉を、ラヴァテラは心を籠めて送った。

「おやすみなさいませ、お母様」

「ええ………先に逝っているわ、ワタシの愛しい娘」

そして。

穏やかに古えの化け物『吸血姫』は、息を引き取った。

抗魔力が途絶え、『常闇の埋葬』の奇蹟がマルヴァの身体を黒き灰へと変えていく。

マルヴァの輪郭を保ってきた身体がさらさら、と灰になっていく。

ラヴァテラの手より零れ落ちていく黒き灰。  
やがて、小さな体躯が全て灰になり『吸血姫』の存在は完全にこ  
の世から消滅した。  
黒い灰が舞い上がる。  
それは、とてもとても悲しく、厳かな光景だった

あとがき

### 【マルヴア】

語源：花の銭葵属ゼニアオイの学名Malvaから  
花言葉：『母の愛』、説得、信念

### 【ラヴァテラ】

語源：花葵属ハナアオイの学名Lavateraから  
花言葉：『奉仕の精神』

## 第？章『宴』

終幕は下ろされた。

広大な土地の大半が凍り付いたトウオネラ平原。

『吸血姫』の死と共に亡者達の動きがぴたり、と止まった。

突然の事に戸惑う冒険者達。

だが、そんな彼等を気にする事無く、動く屍は次々と親の吸血鬼の呪縛が解かれ、本当の意味での屍に変わっていく。

人間も、ドワーフも、オークも、ゴブリンも、ビヒモスも。

幾千もの骨を打ち鳴らし、崩れ落ちていく。

『吸血姫』の系譜は、例外無く、等しく安らぎの死が与えられていた。

濃厚な死の気配が、空が青に変わっていくと共に晴れていく。  
照らされる万の死者の墓標。

「……………勝ったの、か？」

呆然と戦場の誰かが呟いた。

その言葉は、ストン、と素直に冒険者達の腑に落ちた。

ふつふつ、と満身創痕の身体から沸き上がる激情に一人の冒険者が吼えた。

「勝った……………勝ったんだ。俺達は勝ったんだあああああつ！！」

「そつだ、俺達は勝ったんだ！」

「イイツヤハウウウ！！ 『吸血姫』がなんだってんだ、俺達のリーダーを甘く見るんじゃないやねええ！！」

咆哮を皮切りに、方々で上がる勝鬨<sup>かちどき</sup>。

瀑布のような声の洪水がトウオネラ平原を震撼させる。

感極まって泣き出す者。

呆然と声の津波に身を浸す者。

隣に居た冒険者にキスの雨を降らす者。

歡喜の発露の仕方は十人十色。

そんな中、人より頭一つ二つ分ほど小さなホビット族の女性  
モモは血色に曇った空から真つ青な快晴に変わった空を見ていた。  
喧騒に塗れた風が、短いピンク色の髪を撫でるように攫う。

「あの馬鹿がやってくれたのね　　っえ？」

モモは齎された勝利がゴルデイスの手のものだと思っていた。  
しかし。

風の精霊が違うよー、と暢気に知らせてくる。

悪戯っ子の氣質が強い風の精霊は、次々とゴルデイスの醜態とも  
云える報告をモモにしてくる。

それはもう嬉々として。

初めは困惑気味だったモモも、風の精霊の話聞く内に目が完全  
に据わっていった。

「へえー、それじゃあウチの馬鹿リーダーは魅了されて大暴れして  
ただけ、と……………ふふ、うふふふ」

前髪に隠れ見えなくなるモモの顔。

その姿のまま肩を揺らして笑うモモは、とても不気味であった。  
まるで嵐の前の静けさ。

「あんの馬鹿リーダーああああああっ!!」

天を衝く咆哮が木霊した。

モモの怒りに呼応して周囲の精霊も四方八方に拡散し、小規模な衝撃波が吹き荒れる。

何事かと『外套と短剣』のメンバーが目を開くが、気焔をちっこい身体中から上げているモモを見て得心する。

ああ、またリーダーが何かやらかしたな、と。

モモの激憤の咆哮に、遠く離れて精霊化していたシロはビクン、となり咄嗟に精霊化を解いた。

シロが彼女の怒声にバルの折檻の声を彷彿とさせたのは完全に余談である。

ゴルデイスの折檻が決定した瞬間だった

彩色豊かな花壇に目を楽しませながら、紫苑は西洋庭園を歩く。

折れた左腕は、黒シルクの長手袋全体が硬質化し、現在添え木として機能していた。

紫苑はふと、手入れの行き届いた西洋庭園を見渡した。

清水を静かに湛える噴水。

外で茶を楽しむ為に配置されたティーテーブル。

歩みを進める紫苑とバルしか生きている者の気配の無い綺麗な庭。主人が居なくなってしまうた抜け殻の箱庭。

紫苑は吸血鬼の主従が此処で過ごしてきたであろう日常に想いを馳せていた。

「一つ、訊いてもいいですか？」

「む？ 遠慮せずとも良いぞ、何でも妾に訊くがよい」

ぼつり、と遠くにある白いティーテーブルを見ながら紫苑が零した。

「バルが話していた『真祖』って一体どういったものなのですか？」

「そのことが」

ふむ、とバルは球体関節の指を顎に置き、言葉を思案するように間も置いた。

言葉の吟味を済ませたバルは結論から話し始める。

「端的に申せば、生きた秘蹟礼装じゃな」

「生きている？」

「然り。妾のように無機物に人格を宿している訳では無く、人工的な生物として製造された秘蹟礼装。」

近い言葉で表すならアンドロイドやサイボーグと云った所じゃな。その一つに始まりの吸血鬼 『真祖』が含まれておる」

生体秘蹟礼装。

最も有名処を挙げるとすれば『神聖ミッドガルド帝国』の『月読みの巫女』。

稀有とされる未来視の奇蹟を行使できる生きた秘蹟礼装と云われている。

幼い少女の外見と、額に埋め込まれた第三の眼。

風の噂では皇帝の寵愛を一身に受け、政にも彼女の予言は深く食

い込んでいるという。

では、『真祖』が製造された理念、その目的とは。

「龍殺し　それが生体秘蹟礼装『真祖』の至上目的であり存在理由レゾンデールじゃな」

「可能、なのですか？　そんなことが」

龍殺しの単語に紫苑は大きな瞳をぱちくり、とさせて質問する。

文明を滅ぼす事が出来る個体を倒せる光景が紫苑には想像できなかった。

バルは肩を竦め、鼻で笑う。

尊大な態度であるが、バルが行うと自然と様になっていた。

「無理じゃな。自己再生に自己進化を有しておるようじゃが、千の時を経てもどの龍にも至らぬ。万の時を経て漸く足元と云った所か」

バルは長き年月の時を封印されていながら驚くほど博識だ。

その知識の出所は『遠見の法』で観測した情報である。

巨大水晶に嚴重に封印されている中、バルトアンデルスが遠見の法で蓄えてきた知識。

それは並大抵の長命種よりも深く、また膨大な量であった。

まさに蒼の大地の生き字引と云える存在がバルトアンデルスなのである。

「吸血鬼も元を辿れば『真祖』の系譜。それ故に『龍』の打倒を目的として掲げておる輩もおる事にはおるが、少数派じゃ。

時の移ろいと共に、血を分かつ毎に親である『真祖』の至上目的は子の代で薄れ、今の世に蔓延る吸血鬼という魔物として人を襲うようになったのじゃ」

祖母が孫に云って聞かせるように、バルは紫苑に『真祖』の事について語った。

『真祖』が製造された時は、今から遡ること四千年前程だという事。

ローゼンクロイツの家名は、『真祖』が生み出した四代家系の一つである事。

真祖の生死は不明である事。

話している内に二人は、屋敷の門の前に来ていた。見上げるほど高く、立派な門構えの鉄製の門。

門の向こう側。

森を切り開き、ある程度舗装された道の先に二つの人影が見えた。真紅の髪の女性に、巨人族の大柄な身体。

アルトリーゼとゴルデイスの二人であった。

走り寄ってくる二人組に紫苑は折れていない右腕を振って、無事を知らせた。

「シオン、無事か!？」

「えっと、はい。何とか『吸血姫』は倒す事が出来ました」

「……そうか、お前が無事で何よりだ」

「あの、アルトさん？ ゴルデイスさんは一体如何したのですか？」

きゅっ、と紫苑の手を両手で包み安否を気遣うアルト。

紫苑は過保護な姉のようなアルトに無事を伝えながらも、視界の端に映る巨人が気になってた。

ぼこぼこである。

特に顔面が酷い。

元々、大きかったゴルデイスの顔は二倍以上に膨れ上がり、岩のようにごっごっ、と膨れ上がっていた。

青痣だらけのゴルデイスは、傍目から見ても紫苑より重体であった。

何故か重症のゴルデイスを心配する紫苑を余所に、アルトはふんと不機嫌極まった様子で鼻を鳴らす。

「気にするな、其処で転んだだけだ」

「大方、あの従者に操られておった所をアルトに殴り起こされたのであるう」

転んだにしては顔周辺の損傷が激し過ぎる。

おなざりな説明をするアルトに、バルは見て来たように的確な補足を付け加える。

その言はまさに正鵠を射ていた。

『魅了の魔眼』<sup>フラッティ・アイズ</sup>の術中に嵌った者の対処法は、強い外的要因によるシヨック療法。

詰まり、魅了された者を殴打すればよいのだ。

<sup>ハルバート</sup>斧槍を小枝のように軽々と振り回すアルトの膂力から繰り出される拳。

魔眼の魅了を解く為、空気が唸りを上げる豪拳が幾度もゴルデイスの顔面に突き刺さる。

それ程までに吸血鬼メイド　ラヴァテラの掛けた魅了は深かったのだ。

結果、腫れと内出血に彩られた不細工なオブジェが完成したのであった。

「そ、そんな事より『吸血姫』をやったってのはマジか？」

「はい。危ない所も多々ありましたが、なんとか」

ぼん、と大きな掌が紫苑の頭に乗せられた。

掌の持ち主は巨人族の戦士　ゴルデイス。

「やるじゃねえか、シオンの坊主。大金星だ」

ぐりぐり、と乱雑に大きな掌は、紫苑の天使の輪が光る黒髪を撫でた。

ちらり、と上目遣いでゴルデイスを見るが、誰？ と云いたくなるほど前に見た顔の造形を留めていない。

寧ろヒトの顔は、これ程までに膨れ上がる物なのかと『少年アリス』は密かに慄いた。

「このうつけ者め！ 粗野な手付きで『妾』の紫苑の髪に触れるでない、折角の御髪おみかみが台無しになってしまつたではないか！」  
「おつとワリい」

バルの一喝にゴルデイスは乗せていた掌を離す。

頭全体を覆っていた掌がどかされると綺麗に整えられていた紫苑の黒髪が、少し乱れ髪となっていた。

元が流れるようにとても美しい髪だけに、ちよつとの乱れでもかなり目立つ。

紫苑は一旦結わえていた紐を解き、さっさつ、と手櫛で乱れ髪を梳くしる。

指通りの滑らかな毛髪は、それだけで元に戻った。

「繊細さに欠ける奴め」

「全くじゃ。紫苑の髪は絹織物なんぞよりよほど優美。貴様がおいそれと触つてよい代物ではない」

「あの、別に其処まで大した物では……」

過剰気味に賛美するバルの物言いに、紫苑は面映ゆそうに謙遜。そしてさりげなく助け船を出す。

だが聞き入れて貰えずに無視される。

説教を食らっているゴルデイスも『吸血姫』討伐に関しては全く役に立っていないので強くは出れない。

加えて、もし出ようものなら。

「ほら、シオンの坊主もいって云っているんだしよ

「ハッ、ようもまあ抜け抜けとそんな口が叩けるもんじゃのうデカブツ。図体ばかりデカくても糞の役にも立たぬではないか」

「精神修養が足らぬから魅了などと云う小手先の技に引つ掛かる。

全く貴様という奴はモモが居なければどうしようもない独活どっくわくの大木だな」

「妾の紫苑が『吸血姫』と命懸けの殺し合いをしておった時に貴様は何をしておった？ どうせ阿呆のように暴れておっただけじゃろう。」

情けない。従者の方を足止めする事は疎おろか、アルトにまで手を煩わせおつてからに」

「大体貴様はモモに多大な気苦労を背負わせすぎているのを自覚しているのか？ 貴様の考え無しの行動の尻拭いはモモに向かうのだぞ。」

少しは日頃の感謝なりお礼なりをするのが普通ではないか」

女性陣の辛辣極まりない毒舌に晒される。

低級魔法の速射のような罵詈雑言の嵐。

バルは尊大に踏ん反り返り、アルトは両腕を胸の前で組み、朱の唇から毒を吐く。

精神薄弱な男が二人の苛烈な言論の暴力を受ければ、それだけで精神的外傷を深く抉り込まれるであろう。

幸いな事に鈍いゴルデイスは、キンキンと叫ぶ女性陣に弱り切った顔で頭髮の無い頭を掻くだけであった。

ゴルデイスの大きな単眼が紫苑に助けを求め視線を送る。

「シオンの坊主からもなんとか云って

唐突。

世界が『虹の極彩色』に包まれた。

青空であつた天空が一瞬にして虹色に染まり、精神を酷く犯すマ  
ーブル状に流動し蠢く。

虹色に変貌した空が、西洋庭園を、花壇を、森を、道を、紫苑達  
を不可解な光で照らす。

そして、遠方より聞こえ出る<sup>いす</sup>単調なフルートの音と下劣な太鼓の  
音。

冒瀆的な音楽が耳を舐め、脳を揺り籠に乗せ、不規則に揺らす。

「『狂い龍』だッ！ 目を閉じろッ！！」

アルトが焦燥感に駆られながら大きく叫んだ。

彼女の切れ長の目は、絶対に開かぬようきつくきつく閉じられて  
いた。

あまりに強く瞼が閉じている為、眉間に深い皺が刻まれる。

ゴルデイスもアルトに云われる前から単眼を閉じ、絶対に空を見  
ぬよう下に顔を向けていた。

『狂い龍』。

それを指す正式な名前は無い。

蒼の大地に生きる住人が最も遭遇しやすく、身近に居る見てはな  
らない隣人。

他の『龍』達が深く休眠をしている中、彼の『狂い龍』だけは悠  
然と空を漂う。

狂い龍を見てはいけない。

狂い龍を語ってはいけない。  
狂い龍を描いてはいけない。  
狂い龍を書いてはいけない。  
狂い龍を彫ってはいけない。  
狂い龍を歌ってはいけない。

狂い龍の名を読んではいけない。  
狂い龍は常に冒瀆的に下劣に不快に嗤う。

ただ見るだけで精神を犯し尽され、塩の柱となってしまう絶対的に狂った存在。

感受性の強い者であれば、その不愉快な口から発せられる冒瀆的な音楽だけで発狂してしまう。

空が虹色に染まったのなら人も動物も魔物も地に平伏し、耳を塞ぎ、目を閉じ、『狂い龍』が去るまで怯えなければならぬ。

それが『狂い龍』。

大空を雄々しく羽ばたく飛蜥蜴ですら忌避し、畏れる狂気。

一説には唯一神ティアラスと太古の昔に覇権を争った外なる神と云われているが定かではない。

単調なフルートと下劣な太鼓が織りなす金切り声に似た不協和音。精神を外界へと連れ去ろうとする音楽が徐々に近づいて来た。

天空は増々毒々しい極彩色に彩られ、その中心に『狂い龍』と呼ばれる存在が宙を泳いでいた。

誰もが大地へと平伏する中。

唯一、一人と一体が空を仰いでいた。

紫苑とバルトアンデルスである。

紫苑はその深い蒼眼で虹色の心臓部を見ていた。

大粒の瞳内部に映し出される異形の『龍』。  
それは海洋を優雅に泳ぐ海鷗魚エイに似た十二力であった。  
平たい漆黒の体表は、常に流動しており、膿のような気泡が膨らんだり破裂したりしている。

汚泥のように泡立つ身体から飛び出した手は、病的に白く、骨と皮と不愉快で構成されていた。

そして。

海鷗魚エイの身体に付いた不似合いな『仮面』。

ぬめり、と不気味なほど白い仮面に開いた三つの穴。

虚ろな暗がりを中心に秘めた眼孔と口孔。

『狂い龍』はその虚ろな二つ孔で地上を見詰めていた。

一目見れば、たちまち発狂するか、塩の柱になるほどの精神的汚染が直視した紫苑を襲う。

しかし。

紫苑の精神は揺るがない。

「やっぱり、ちょっと気持ち悪いですね」

「くく、其れだけで済むのは紫苑だけじゃ」

ぼつり、と空を見仰いだまま紫苑が感想を零す

バルが零された言葉に対して愉快気に喉を鳴らす。

紫苑が蒼の大地に召喚されて、これで二度目になる『狂い龍』との邂逅。

仮面に開いた落ち窪んだ眼窩と、蒼穹の瞳が交錯した気がした。

やがて『狂い龍』は冒瀆的な音楽を撒き散らし、悠然と去っていく。

虹の極彩色の空が緩やかに遠ざかる。

脳を掻き乱すフルートと太鼓の音が聞こえなくなるまで、

虹色が見えなくなるまで、  
紫苑は『狂い龍』の混沌たる汚泥の身体を見続けていた。

「しかし、良くもまあ続くものじゃ。それほどまでにあの『女狐』  
が恋しいか、狂い龍よ？」

傍らでバルは紫苑にも聞こえない声量で言葉を吐露する。

その視線の先は担い手と同じく、『狂い龍』の去る空を見ていた

## Original Novel

追憶のシオン

第？章『宴』

パチリ、と目が開いた。

開けた視界に映ったものは、此方を上から覗き込む金髪碧眼の少  
女のあどけない顔。

覆い被さる形でバルがベッドの上で目覚めた紫苑の顔を堪能して  
いた。

硝子玉の瞳と視線がかち合う。

にんまり、と細まる少女人形の目が紫苑の寝覚めを祝福していた。

「ようやっと起きたか、紫苑」

ぱふん、と軽い重さが紫苑の胸に押し掛かり、バルが白磁の首筋に顔をうずめる。

緩くウェーブを描く豪華な金髪が首筋をくすぐったく撫でる。

紫苑はモノクロのドレスに包まれた背中に手を回そうとした。

だが、先の戦いで左腕が折れている事を思い出し、持ち上げかけた左腕をベッドに下ろした。

そして、無事な方の右腕でそつ、とあやすようにバルの背中を叩いた。

ぼん、ぼん、と。

「えつと、此処は……………『渡り鳥の止まり木』、ですか？」

「然り。中々に盛大な戦であったからのう、疲れてしまっても無理はない。寝入った紫苑をアルトがおぶさって此処まで運んだのじゃ」

「そう、でした」

紫苑は力を抜いてお日様の匂い香るシーツに体重を預ける。

脳裏には意識が落ちる直前の事が浮かんできた。

連戦で体力、精神共に疲弊し、ふらついていた紫苑を見兼ねたアルトが背を貸してくれた事。

遠慮するも半ば強引に背負われ、歩く度に優しく揺れる振動が睡魔を誘い、やがて完全に寝入ってしまった事。

「後でお礼を云いにいかないと駄目ですね」

「うむう……………まあ、そうじゃのう」

ぼんぼん、と背をあやしている内に、今度はバルの方が猫のように丸まってしまふ。

子供のように鼻先を首筋に擦り付けながらバルは、紫苑の匂いを楽しむ。

よいしょ、と控えめな掛け声と共に紫苑が上半身をベッドから起

こす。

無論、バルを片腕に抱えたままである。

既にほどかれていた黒髪が拳動に合わせてしなやかに拡がった。

「外が少し、賑やかですね」

窓の外から聞こえる街の喧騒。

薄暗くなったラタトスクの街では人の喧騒が絶えないが、聞こえてくる喧騒は熱気に満ちて、平時より些か活気がある。

客間である二階の窓からは、精霊灯が明るく外を照らし、野太い歌声や笑い声が満ちていた。

紫苑の胸に張り付いたまま、バルが疑問についての解を話す。

「そうさな、刻限で云えば既に宵の口。今は戦っておった者達が『吸血姫』討伐の祝杯を皆で開けておる所よ。

街の者も大盤振る舞いでな、酒精の入った輩共が大方馬鹿騒ぎでもしておるのであるうよ。行ってみるかえ？」

「はい」

「うむ、良き返事である。やはり主役が居らねば祭りは盛り上がりぬであるうからな」

覇気があるというよりは、たおやかな肯定の返事。

バルは破顔一笑。

快く紫苑の同意を喜んだ

ぐびっ、ぐびっ、と小さな喉が景気良く動き、琥珀色の液体を胃袋に送り込んでいく。

樽型のジョッキの中身を一気に飲みしたホビット族の女性　モモ

「フェルベルマイヤーは盛大に酒臭い息を吐く。

モモの現在の格好は、非常にラフな物であった。

ワンピース型の革鎧は装備していない。

ピンクを基調としたＴシャツに、プリーツの入ったチエックの膝丈スカート。

Ｔシャツの胸元にはホーンラビットと呼ばれる角の生えた生き物をデフォルメした可愛いアプリケが取り付けられていた。

おそらくホビットとラビットを掛けているのであろう。

「ぶっはー！ー！！　くうー、生き返るわー！」

口の周りに付いた麦酒の泡を豪快に手の甲で拭い、喉を焼くアルコールに酔い痴れる。

カア、と臓腑が熱くなり、陽気な気分を満たす頭。

だが。

「なあ、モモよー。俺はいつまでこの体勢でいりゃあ良いんだ？」

「ああん？」

場所は、ラタトスクの中央広場。

ラタトスクを象徴する栗鼠リスが象られた噴水を輪の中心に、冒険者達がどんちゃん騒ぎを起こしていた。

若いも古いも関係無く、男も女も種族さえも越えて集まった者達は一緒に浮かれていた。

中央広場にはここぞとばかりに出店が立ち並び、『吸血姫』の軍

勢に打ち勝った者達へ大盤振る舞い。

裸踊りを敢行する者。

突如としてストリップショーを始める者。

露出度が高くなった女に眼を釘付けにする者。

今回の武勇を語る者。

ひたすら酒と肴を飲食する者。

各々が皆、笑みを浮かべ、宴を楽しんでいた。

ただ一人を除いて。

現在、モモは地べたに座っている訳では無い。

もっと上等な『モノ』を椅子にしていた。

「アンタ、シオン君やアルトに迷惑掛けただけで何にも役に立っていないんですってね!!」

「……まあ」

「じゃあ黙って椅子になつてなさい。勿論酒を飲むのも禁止、つま

みだけは別に食べてもいいわ」

「……生き殺しじゃねえか」

「何か云った？」

「何にも云ってねえよ!!」

モモは据わった目で『椅子』　胡坐をかいたゴルデイスをねめつける。

その眼光にゴルデイスはリーダーとしての威厳をかなぐり捨てて唯々諾々と従うしかなくなってしまう。

わかれば良い、とモモは満足そうに溜飲を下げ、空になったジョッキに麦酒を部下に注いで貰い、『椅子』に背を預けた。

そしてご機嫌な様子で今度は、ちびちび、と酒盛りを再開した。しかし。

徐々にモモは臀部に違和感を感じてきた。

盛り上がってくる熱い肉の隆起。

冷めた目でモモは、ゴルデイス兼椅子に振り返る。

「アンタ、さつきからお尻に固い物があたってるんだけど、これはナニ？」

「いやー、その、なんだ？ おめえがいちいち動くから仕方ねえだろうがよ、生理現象だ、生理現象」

「ふーん」

興味を失くしたモモはふい、と向き直り再び酒盛りを始める。

ゴルデイスからはモモのピンクの髪が酒を飲む度に揺れていた。

所在なさ気に単眼を逸らしていたゴルデイスはほっ、と胸を撫で下ろした。

今日のモモは酒の回りが早いようだ。

このまま済し崩し的に誤魔化せる。

ゴルデイスは根拠も無く確信した。

その自惚れが決定的な隙を生じさせた。

「って、何そんなモノおつきくしてんのよっ！ アンタのデカイモ

ノなんて『まだ』入らないわよー！！」

「おげらっ！！」

不意打ちのアップパーカットが顎を強かに打ち据えた。

下顎から脳にかけて突き抜ける衝撃。

巨大なゴルデイスの上半身は堪らずノックダウン。

地面へと盛大に倒れた。

まだ！？

まだ、なんだ……

頑張れ副リーダー超頑張れ。

息を荒げてゴルデイスを見下ろすモモに、取り巻きで見ていた『外套と短剣』の面子は各々の感想を内心で漏らす。

モモがゴルデイスに恋慕している事はクラン全体での周知の事実。知らぬはゴルデイス本人のみ。

戦闘以外の方面ではゴルデイス以上に人望の厚いモモに、『外套と短剣』のメンバーは声無きエールを送る。

種族を超えた愛が育まれる日は、そう遠くないのかもしれない

俄かに酒宴の一角が騒がしくなる。

どよめきにゴルデイスを昏倒させたモモその一角に目を向ける。

モモが目を向けた先で色めき立つ人波が割れた。

割れた人垣の奥。

現れた人物を見て、モモは色めきたった喧騒の原因を見つけた。

ほう、と誰かが感嘆の吐息を零した。

否、零さずにはいられなかった。

人垣の奥から歩いてきたのは、童話の中だけに存在する永遠の少女 アリス。

さらり、と艶やかな絹髪は、歩く度にビロードのように広がる。その美しく、あどけない顔に浮かんでいる表情は柔和で優しい。少し大きめの長袖の簡素なシャツに身を包んでいるものの、それは少女の可憐さを損なう要素にはなり得ない。

寧ろ素朴な服装故に少女自身の魅力が際立っていた。

一つだけ、アリスにそぐわない物があるとしたならば、

それは折れた左腕を首から吊った三角巾であろうか。

華奢な少女を痛々しく彩る三角巾。

しかし、それは少女の儂さを想起させる役割も持っていた。

そして、傍らには人形アリスであるバルが寄り添って歩いていた。

「こんばんは、モモさん。御無事で何よりです」

「えっ、あ、うん……… ってシオン君!？」

「はい、そうですよ？」

「うわー、全然気付かなかったよ。髪を下ろすだけでこども印象が変わるもんなんだねー」

宴に参加した者達の注目を一身に集めたアリスの正体。

それは髪を下ろした紫苑であった。

モモはゴルデイスの胡坐の上に座ったままアリスの正体に驚きを露わにする。

ゴルデイスは胡坐をかけたまま、上半身は地面に大の字で伸びていた。

どっ、と宴の会場が沸いた。

『吸血姫』討伐の立役者の登場である。

より一層賑やかになった喧騒の風の中。

二人は何気ない話に花を咲かせる。

「なにぶん腕がこうなってしまったので、自分独りでは結えなくて」「そっか。じゃあさ、モモお姉さんが結んであえようか?」

「ずずい、とモモが紫苑に顔を近付ける。

桃色の髪から女性特有の甘い香りが鼻先を掠めた。

酒精により上気したモモの身体からは、本人の意思に関わらず異性を引き付けるような誘蛾な雰囲気が出ていた。

「いえ、そこまでして頂かなくとも……」

「良いつて、良いつて。アそれにタシの髪は結構短いでしょ? だからシオン君みたく長い髪はちよっと弄ってみたいの」

モモは自身の桃髪の毛先をくるくると指に巻き付けて遊ぶ。

確かにモモの髪は肩口で切り揃えられており、髪型のバリエーションを楽しむには長さが足りない。

その点で云えば、紫苑の黒髪は最上の素材であった。

「それでは、お願いしても良いですか?」

「勿論っ!」

「む、妾も紫苑の髪を弄りたいぞ」

「ならバルさんも一緒にどうかかな?」

「うむ、随伴しようぞ」「」

モモは小さな手で紫苑の手を引き、噴水広場のベンチに促す。

モモの女性としての感性が紫苑を地べたに座らせる事を良しとしなかつた為の措置だ。

之がゴルデイス辺りなら平気で怪我人の紫苑に対して地面に座る事を促したのである。

「うっわ……………す!」

ベンチの上で膝立ちになり、横に腰を下ろした紫苑の髪を手櫛で梳くしつたモモの口から感嘆の息が漏れる。

指と指の間を水のように流れていく絹髪の感触。

それはまるで川のせせらぎの中に居る感覚をモモに齎した。

女性としての嫉妬より先に感動すら覚えるその髪質に、モモはただ圧倒された。

髪を結わうという目的を忘れて、モモは無言で紫苑の髪を指で染しんだ。

紫苑を挟んで反対側に居るバルも同じような調子だった。

「……」

「……」

「あの、モモさん？」

「はえっ！ な、何かな、シオン君？」

「いえ、急かすようで申し訳ないのですが、まだかなと思ひまして」

「あ、ああ御免ね。ちよつと想像していたよりも遥かに綺麗な髪だったもんで、思わず堪能しちゃったわ。

毎日何処の洗髪剤を使っているの？ 『妖精の化粧台』とか？

興味が尽きないわ」

直球な物言いに、紫苑は面映ゆそうに頬を少し朱に染めて、口元を綻はせた。

そして、モモの称賛の言葉になぜかバルが胸を張った。

「ふふん、当然じゃ。紫苑の髪は妾が製造した特性のトリートメントで毛先までばつちりキューティクルを保たれてるのじゃ。

この髪質は当たり前前の帰結、むしろ必然と云えよう」

秘蹟礼装バルトアンデルスの能力は『千変万化』。

現在は力の全容は休眠状態なれど覚醒すれば森羅万象を悉く塗り替えていく魔性の神器。

行使している現象は、漏れ出ている力の一端。

その力の一端を応用すれば変化は自身の身に留まらず、ある程度の融通も効く。

つまり。

そこらに散逸する土塊や、木々などからも紫苑の髪質を保つトリートメントを精製する事が可能。

専らバルは、ウルドの湖の水を変化させてそういった化粧水やらを精製している。

こと紫苑の美貌を保つ為ならばバルは労力を惜しまないのである。著しく使い方を間違っていると思えないでもないが。

「いいなあ、アタシもそのトリートメント一度使ってみたいかな」

「ふむ、其処まで云うのであれば少し分けてやるうか？」

「いいの!？」

「うむ、其処まで手間の掛かる訳でも無いからのう。それに肌に合わぬようならば止めてしまえば良いしの」

「ありがとっ！バルさん」

冒険者と云う堅気の職ではないとはいえモモも女性である。

美容に気を使う事は至極当然。

バルの提案に二の句を告げずに飛びついて反応してきた。

「では紫苑も待ち草臥れておるようじゃし、早々に髪を結わえろとしよう」

「あっごめんね、シオン君。長々と話し込んでちゃって」

「いえいえ、気にしてませんよ」

小さな体を更に小さくして申し訳なさそうに謝るモモ。

謝罪を紫苑は軽く受け入れる。

「しかし、どういった髪型にするべきか、聊か迷うものではあるな」  
「あっ、それはちょっと分かるかも。折角だから何時もとは違う髪型にしたいわ」

むむ、と二人で眉を寄せて考え込む。

その間にもモモとバルの指はすっ、すっ、と手櫛で紫苑の髪を梳いていた。

それから数分間、二人は己を意見を出し合い、漸く一つの髪型に纏まった。

頭の高い位置で結い上げられた黒髪。

一房に纏められた後ろ髪を括っているのは淡い水色を基調とした水玉模様のシユシユ。

モモが選んだ髪型は、括った後ろ髪が馬の尻尾のように垂れているポニーテールだった。

結わえられた髪から除く白いうなじが仄かな色香を醸し出していた。

「何時ものとは違うがこれはこれで新鮮な感じがするのう」

「アルトさんとお揃いですね」

「確かにね」

髪型は同じだが与える印象は正反対と云っても良かった。

アルトの見目鮮やかな燃える印象とは異なり、紫苑のポニーテールは落ち着いてしっとりとした印象を第三者に与える。

ふと、紫苑は話題の渦中の人が宴の輪の中に居ない事を気付いた。

「そついえばアルトさんは何処に？」

「ああ、アレね。たぶんあっちの方に

」

モモが指を指してアルトが居るであろう方向を示す。

見ればその先に燃えるような紅の髪を見つける事が出来た。

遠目から見ても目立つ紅髪。

酒の席と云う事でアルトも軽鎧を脱ぎ去り、黒革製のパンツルックで身を包んでいた。

硬質な美貌と長身も相まって、その服の取り合わせはとても様になっている。

しかし。

遠目から見えるアルトの機嫌は、傍目から見てもよろしく無い物だと観測できた。

アルトはすらり、としたレザーパンツを穿いた脚を伸ばし、仁王立ちで腕組みをしている。

そしてそのアルトが見下ろす先には、正座のまま肩を小さくする獅子の刺繍をしたバンダナの青年 ヤドック。

「中々に小気味の良い啖呵であったが、些か雅に欠けておつたな」

「あれでもう少し言葉を選んだ宣言であれば格好が付いたんですけどね」

「アルトの腰巾着君は何て云つたの？」

興味深々といった様子で紫苑の隣のベンチに腰掛けたモモが尋ねる。

痴話喧嘩は犬も喰わぬと云うが、質実剛健なアルトがやっているとなれば珍しさの方が際立つ。

防衛線中央に居たモモからでは、ヤドックが吼えた男の叫びの内容までは届いていなかったのだ。

「あの小僧はアルトの乳を揉みしだくまでは死んでも死に切れんと  
吼えたのだ。ようもまあ戦場で恥ずかしげも無く其処まで云えるも  
のじゃのう」

一瞬モモはきよとん、とした。

だが次の瞬間、盛大に吹き出して、お腹を抱えながら大笑いをし  
初めた。

「あーはっはっはっ！ なによそれ！ 男ってほんつとに馬鹿ちん  
が多いのね」

よほど笑いのツボに入ったのか、モモは笑い続けて息が続かなく  
なっても苦しそうに笑った。

紫苑はそんなモモのちっちゃな背中を擦りながら笑いの波が過ぎ  
るの待つ。

「あー笑った笑った。なるほどね、つまりアルトのアレは照れ隠し  
も兼ねてって訳ね」

「俺もそう思います」

「いやー、結構長い間アルトと友人関係やってるけど漸くあの子に  
も春が来たんだねえ。てつきりアタシはアルトより腕っ節が強い奴  
に惚れると思ってたんだけどね」

「ヤドックさんは素敵な方ですよ。今はちよつと情けないですけど、  
誠実で一途なお人です」

「あーなるほど。そういえばあの子、直球勝負の褒め言葉に弱いも  
んね、納得」

紫苑が説明するヤドックの為人ひとねらひに得心するモモ。

今はガミガミ、とアルトの説教の雷を受けているヤドックである  
が顔は悪くない。

盗賊から足を洗ってまで『炎獅子』の付き人として同行しているのだ。

その心根の思慕の念は相当な物だろう。

ヤドツクの秋波を四六時中浴びせられたアルトが彼を男として意識するのも無理からぬ事だった。

二人と一体はベンチに腰掛け、痴話喧嘩を肴に談笑していると宴の席が急に慌ただしくなってきた。

騒がしくも賑やかな祭りの喧騒とは異なる物々しい物騒な喧騒。

噴水広場に交錯する道の一つから街の兵士が列を成して現れたのだ。

兵士達が現れた路の先に在るのは領主の館。

彼等は半ば領主の私兵と化している憲兵だった。

領主の趣味なのか、金銀の装飾がふんだんに凝らされた悪趣味な鎧を纏う街兵達。

突然の闖入者に宴の陽気は露と消え、荒くれ者達の視線を一身に浴びる事となる。

兵士達の隊長と思われる口髭を蓄えた中年男性に兵士の一人が耳打ち。

憲兵の隊長　　パウル「カルステニウスは広場の一角、紫苑の姿

を目に収めると口髭が乗った口角をにやり、と厭らしく歪めた。

そして、憲兵団を引き連れ、大人数で紫苑達の座るベンチを取り囲んだ。

「何用じゃ？ そのような物々しき出で立ちで宴の席に参じるのは無粋であろう」

「これは失礼した人形のお嬢さん（フロイライン）。だが分かって欲しい、此方も任務で仕方無くなのだ」

バルの揶揄に、軽薄な笑みを浮かべ軽く流すパウル。

くすんだ金色の口髭をパウルは箆手を纏った人差し指と親指で扱き、ねつとり、とした視線で紫苑を舐め回す。

そして。

ほう、と感嘆ともつかぬ息を漏らす。

パウルは何時の間にか極上の美術品を品定めするような視線を紫苑に送っていた。

「では早速用件を云わせてもらおう。この街の領主であられるバノン「ティボー」様が今回の『吸血姫』討伐の立役者『少年アリス』殿の活躍に大変感激されている。

バノン様は自ら賛辞の言葉と共に此度の小さな英雄殿に褒美を与えたいと申している。

よって今から我等と共に領主様の館にご同行願えないだろうか？  
「今から、ですか？ 随分と急なですね」

紫苑が辺りを見渡すと、宴の参加者達が何事かと紫苑を取り巻く憲兵団を見ていた。

その視線はお世辞にも好意的なものではない。

明らかかな侮蔑と嫌悪の入り混じった視線の針の筵。

当然である。

なぜなら彼等は街を護るといふ名目の下、一切『吸血姫』討伐に参加していないのだから。

街の住民の安全の為と云い張りながら、街の外壁内部に閉じ籠っていた彼等を誰が好意的な目で見ようか。

元より碌な働きをしないで威張り散らす憲兵団の評価は、地の底まで落ちていた。

更に年端も行かぬ紫苑を大人数で取り囲んでの出頭要請。明らかに威圧の意味を込められた人数調整であった。

「おい、手前えら。こちらら今酒をかつ喰らいながら馬鹿騒ぎをやつてんだ。つまんねえ事で水を差すんじゃねえよ」

「あざいいっ！」

ぬう、と憲兵団の背後から立ち昇る巨体の影。

その巨体　ゴルデイスが目剣呑な光を湛えながら、兵士の一人の肩に大きな掌を乗せる。

すると、人外の握力で金属製の肩当てが粘土のようにひしゃげ、兵士が痛みに苦悶の表情のまま崩れ落ちる。

ゴルデイスは冷たく単眼でその兵士を一瞥した後、大樽を片手で握ってその中身を豪快に飲む。

そして、口の端から垂れた酒を乱雑に手の甲で拭い、憲兵団の隊長　バウルを見据えた。

「何だね君は？　我々の邪魔をしないで貰いたいのだがね」

「ハッ、良く言っぜ。餓鬼一人相手にこんだけの頭数ぞろぞろと引き連れて何をしようってんだ。

腰抜け共は大人しく家に帰っておっかあの乳でも吸ってりゃあいんだ」

どつ、とゴルデイスの物言いに宴の席に笑いの波が押し寄せた。  
噴水広場の方々から野次の声上がる。

「いいぞー、リーダーもつと云つてやれー！」

「美味しい酒飲んでる時に辛気臭せえ面見せに来てんじゃねえぞ腰抜け共！」

「帰れ！ 帰れ！」

野次と共に空になった酒瓶等が憲兵団に向かって投げ付けられる。

『外套と短剣』や討伐に参加した冒険者達からしたら悪者は憲兵団の方だ。

広場に集まった街の住人達からの目も冷ややか。

街の人々も誰が功労者で誰が臆病者なのか知っていた。

加えて、小柄な紫苑と更に小さなバルとモモを囲っている憲兵団達は、お世辞にも良い印象を受けないのも原因の一つであった。

「どつやら我等はあまり歓迎されていないようだ。『少年アリス』殿、今日の所は一旦引き揚げ、後日改めて伺います」

「おう、腰抜け共はさっさと尻尾をまくって帰りやがれてんだ」

バウルは飛び交う空瓶を籠手で弾きながら、憲兵団に帰還を促す。踏ん反り返るゴルデイスは、手をしっし、と振りながら彼等の退去を急かす。

苦虫を噛み潰したような表情が彼等に浮かぶ。

領主のお零れを授かる事で甘い汁を吸ってきた彼等にとって街人と冒険者から受ける仕打ちは耐え難い物であった。

一流の装備に身を包んだ尊大な虚栄心が憲兵団の心内を大いに苛んだ。

「どのような用件だったと思いますか？」

「さてな、じゃが予想は容易いのもう。此度は共和国の怨敵を討つたという大きな功績じゃ。」

なのにその首級を挙げたのが外部の者　方々を渡り歩く冒険者であるならば国としての面子が保てん。

況してやあのガマガエル領主は己が身の可愛さに身の回りを私兵で固めて引き籠っておっただけじゃ」

何時の間にかバルは、小柄な人形の体で紫苑の膝を占領していた。緩くウェーブを描く豪華な髪を折れていない方の手で紫苑が梳る。

「何、それじゃあシオン君の手柄を横取るうって腹積もりなの!？」

「其処までではあるまい。在るまいが、虚偽の報告を国に行う為に口裏合わせはやりそうではあるのう。」

例えば『吸血姫』討伐は紫苑と憲兵団の精鋭が協力して行った、と云った所か」

「俺としては八方丸く収まるのであれば構わないのですが、けれども俺だけの問題ではありませんし、それでは討伐隊に参加した人達が納得しかねるのでは？」

「ちよつとシオン君はそれでいいの!？　頑張ったのに分の称賛が何にもしていない阿呆に流れて行っちゃうんだよ!？」

くるくる、と金糸の髪の毛先を弄びながら事なげも無く云うバル。更に榮譽を欲しがらない無欲な紫苑に、モモは目を剥いて声を荒げる。

「紫苑にとって榮譽や他人の称賛など価値の位置付けが低いのはじやよ。のう紫苑、幾千幾万の人々の感謝と妾一人からの礼、どちらに価値が在る？」

「バルからの『ありがとう』の方が嬉しいです」

「そらみた事か。無論、妾とて其処までしよるならば看過出来ぬさ。さりとして全ては憶測、始まっておらねば動けぬ」

耳元で即答した紫苑の答えにバルは機嫌を良くする。

云わされた紫苑は、分かりきった事を云わせないで下さい、と少し恥ずかしげだ。

モモは手慰みをしているバルの目を見た。

すう、と細くなった碧の硝子玉。

成程、一番の年長者が此処まで一人に過保護なのだ。ならば心配無いだろう、とモモは自信を納得させた。

「まあでも困った事があつたら何時でも云つてね。リーダーが迷惑かけたお詫びもあるし、『外套と短剣』は全面的にシオン君を味方するよ！」

「其処までして頂かなくとも」

「くく、その言葉を待っておった」

遠慮をする紫苑とは対照的に言質を取つたと悪い笑みを浮かべるバル。

モモは内心でちよつと先走つたかも、と後悔する。

「まあ、期待しておるぞ、副リーダー殿」

「ま、任せない！」

どん、と小さな胸をやけっぱち気味に叩くモモ。

安請け合いからとんだ気苦労を背負い込んでしまったモモであった

宴の後日。

紫苑達はラタトスクで一番立派な屋敷　領主の館に招待されていた。

早朝、わざわざ『渡り鳥の止まり木』に使者を送りつけての手の込みよう。

よほど重要な話でもあるのだろう、と紫苑は先を案内する老執事の燕尾服を見ながらつらつら、と考えていた。

館の内装は、ガマガエル領主の嗜好をふんだんに反映し、華美で豪奢でそして悪趣味であった。

至る所に美術品が無秩序に並び、調律が取れていない。住む者によって此処まで変わるのか、と紫苑は『吸血姫』の館を比較対象に思い浮かべていた。

紫苑の現在の服装は、何時もの冒険者としての装いだ。

黒のハイネックのインナーで華奢な身体を覆い、黒シルクの長手袋。

純白を基調とした金刺繍が施された腰マントをたなびかせ、ニーソックスに包まれた細い脚を進める。

天使の輪を艶やかに反射させる黒髪は、昨夜のポニーテールと違い首の後ろで一つに結わえられている。

不調率な屋敷の中で、紫苑とバルの空間だけが浮き彫りになって

いる。

二人が醸し出す清楚で神秘的ともいえる雰囲気。

「此方で御座います」

白髪と真っ白な口髭を蓄えた老執事が、赤い絨毯の先の扉を恭しく開く。

部屋内は客人を迎える為の応接間になっていた。

通路と同様に税を凝らしたような豪華で華美な調度品に内装。

そして。

奥側のソファアールでは一人の男が紫苑達の来訪を待っていた。

醜い。

一言でそのソファアールに座る男を現すのならば、まさにそれに尽きた。

自らの贅をその肉体に蓄えているのでは無いかと思うほど、ぶくぶく、と太った身体。

頭髪は禿げかかり、顎が首の肉に隠れ見えなくなってしまっている。

忙しなく動く目はギョロギョロ、とじていてバルが『ガマガエル』と評すのも無理からぬ風体であった。

そのガマガエルが上質な服に通している姿は奇妙を飛び越えて、滑稽と云えた。

ボンレスハムのように服を押し広げたガマガエル領主が、紫苑の入室に喜色を現して迎え入れる。

「おお！ 朝早くに良く来てくれた。噂はかねがね聞いているよ」  
少年アリス『君』

贅肉が立ち上がる。

ぎしり、と酷くソファアールが軋む音が部屋に響いた。

「立ち話もなんだ、さあ遠慮せず座ってくれたまえ」

紫苑に席を勧めながら、領主　デイモン「ソールズベリ・ラタトリアス伯爵はギョロついた目つきで紫苑の肢体を舐め回すように見た。

上から下へ、余す所無く視姦するような好色を帯びた視線。

紫苑と初対面で相対する男の反応は大抵二種類に分かれる。

その浮世離れした美貌に一步引いてしまつか、逆に男としての性を隠し切れないかのどちらかである。

デイモンの場合後者であった。

紫苑を前にして、頭の中で穢れ無き紫苑を汚す下卑た妄想をしていた。

「領主様、其方の方は？」

デイモンに促され、臀部が深くまで沈み込む座り心地の良いソファに腰を下ろす紫苑。

鈴の転がる声で紫苑は室内に居たもう一人の人物の事を尋ねる。

蒼の視線の先。

部屋の壁際には陰が人の形を模ったような人物が音も無く佇んでいた。

実用性一辺倒に傾いた黒装束。

重心が全くぶれない如才無い自然な立ち姿。

長身瘦躯ながら鍛え抜かれた肉体は、黒装束の上からも見て取れまるで一振りの刀のような鋭さを感じさせていた。

そして。

黒装束の男の特徴として最も目に付くのは、その頭部を覆う黒い覆面であろう。

僅かに露出した目元から覗く眼光は鋭く、後は完全に頭部を覆い

尽くした黒覆面。

まさに物語に登場するような暗殺者<sup>アサシン</sup>然とした男が其処に居た。

「ああ、彼の事は気にしないでくれ。領主ともなると色々と厄介事が多くてね、彼には私の身边を警護するよう雇った護衛だよ。」

『影坊主』と云えば君達も聞き覚えがあるのではないかね？」

領主の放った『影坊主』と云う単語に紫苑は僅かに目を見開く。

『影坊主』シエイド。

畑違いの冒険者ですら聞き覚えのある傭兵の名だ。

傭兵ギルドの中で最高位である『特A』ランクを保有する数少ない傭兵の一人。

知名度で云えば『霜の鉄鎚』ゴルデイスの方に軍配が上がるが、シエイドが単独で打ち立ててきた武勲や栄誉はゴルデイスのそれと遜色は無い。

そう、『単独』でだ。

『影坊主』たる彼は特定のクランに所属してはいない。

ゴルデイスの評価には少なからずクランでの功績も含まれているが、彼にはそれが無い。

つまり、『影坊主』シエイドは独力で『特A』まで登り詰めた実力者と云う事になるのだ。

ぺこり、と紫苑は『影坊主』に会釈をする。

だが、シエイドは微動だにせず反応を返さない。

その反応に紫苑本人で無く、バルが不機嫌を露わにする。

「ふん！ なんじゃい陰気な奴だの。紫苑が折角挨拶をしているのに無視するとは不届き者め」

「こら、バル駄目ですよ」

「はは、気を悪くさせてしまったようですまないね。彼は仕事の事以外では滅多に喋らないのでね、あまり気にしないでくれ」

そうは云うもののデイモンの額には盛大な汗。

上物のハンカチでその汗を拭う。

『特A』クラス、しかも冒険者よりもならず者の多い傭兵相手にここまで悪態を吐けるバルに、デイモンは少なからず戦慄した。

「今回の『吸血姫』討伐、君は実に素晴らしい活躍振りをしてくれたそうだね、話は聞いているよ。この街の領主として改めて礼を云おう」

「いえ、私は討伐隊の皆が切り開いてくれた血路を走っただけに過ぎません。その言葉は今回討伐隊に参加した人達云ってあげて下さい」

硝子のテーブルを挟んでの対話。

街一番の権力者の会談と云う事で、紫苑の一人称は『私』だ。

唯一男らしかった一人称さえ変えてしまえば、紫苑が男だと判別する事は不可能になる。

「おや、そうかね？ はは、『少年アリス』君はとても謙虚な性格の持ち主だね。だが、最大の功労者は紛れも無く君だ。

何か望む者は無いね？ 私も領主として出来うる限り期待に添え

ようじゃ

「まわりくどい」

びしゃり、とバルが領主の口上を斬って捨てた。

脚を組み、頬杖を突いた尊大な態度。

どう考えても目上の前にする仕草では無い。

だが、バルトアンデルスが行えば、それは自然。

「君は？」

「バルトアンデルスじゃ。この名、しかと胸に刻みつけておけ」

話を遮られ不愉快気にデイモンはギョロついた目をバルに向ける。だが、バルはそんな視線など何処吹く風。

「それで、まわりくどいとはどういった意味だね？」

「そのままの意味じゃ。賄賂を褒章と耳触りの良い言葉で置き換えるのではないわ。どうせ対価を要求する腹積もりなのであるっ？」

ならば疾くとせよ。妾達に貴様の戯言を無駄に聞く時間など無いわ

「……なるほど」

デイモンの目つきが変容する。

贅肉に覆われた不格好な肉体の中で、その眼だけやけにぎらつく。伊達に海千山千の貴族の社交界を渡り歩いていないという事をその眼に含んだ光が雄弁に語っていた。

「では単刀直入云おうか」

顔の前で手を組み、前のめりになってデイモンが切り出す。

「金か？ 女か？ それとも秘蹟礼装かね？」

「……」

「君の事は少々調べさせてもらったよ、『少年アリス』君。拠点としている場所は『ウルドの村』。

ギルドに冒険者として登録をして僅か一年間でランク『C』に登り詰めた期待の逸材。

今回の功績を讃え、ギルドとしては『B』の称号を与えるつもり

らしいがね。

用いる武装は主に鉄で作られた糸。

たかが糸でどうやって相手を倒すのか、これには私も大いに興味があるがね。

そして、君はギルドに対して奇妙な依頼をしている。破格の報酬と共に種類問わず秘蹟礼装の情報を求める依頼」

朗々と紫苑の個人情報と並べていくデモン。

お前の欲しい物は分かっている、と云わんばかりの嫌らしい表情で紫苑を覗き見る。

「君さえ良ければ私のコレクションの中の秘蹟礼装を譲渡しても良いと思っっている。」

ただ君はほんの少し王都から視察目的で来る騎士団に口添えをしてくれるだけで良い。

『吸血姫』討伐は憲兵団から派遣された精鋭と共に為した、とね「お断りします」

今度はバルでは無く、姿勢良くソファに座っていた紫苑がぴりやり、と云ってのけた。

紫苑は真つ直ぐデモンの瞳を見て、デモンは紫苑の深い蒼玉の瞳に目を奪われた。

「先程申しましたとおり此度の功績は私だけのものではありません。そして真実を偽り、虚偽を口にする事は、戦いで血を流した人達全てに対する裏切り。」

私にはそんな不誠実な事をするなど出来ません。私は領主様から何も求められませんでした。ただ労いのお言葉を聞いただけです。どうかそれでご容赦ください」

紫苑は領主からの要求をなかつた事にし、頭を下げた。ぎしり、デイモンはソファアの背凭れに体重を預ける。

梃子でも動かない様子の紫苑に、彼は何を云っても無駄だと悟つたのだらう。

一瞬、苦虫を噛み潰したような表情が過る。

しかし、それも束の間。

眉間を脂肪に塗れた太い指で揉み解し、不愉快な顔を覆い隠した。

「……そうかね、分かった。爺、客人がお帰りだ。見送つて差し上げなさい」

ちりん、とデイモンがテーブルの上にあつた呼び鈴を鳴らす。

応接間の扉が開かれ、屋敷の老執事が紫苑達を待つていた。

一礼をして、席を立つ二人の後姿。

その背中にデイモンはもう一つ用意をしてあつた札を切る。

「ああ、『少年アリス』君。君が居を構えている『ウルドの村』には、ダークエルフと魔物のハーフが住みついていてらしいね。

何が起こるか分からない世の中だ、若い身空の二人が危険に晒されなければ良いと私は心底思うよ」

それは脅し文句であつた。

そして同時に禁じ手。

絶対に切つてはならない札でもあつた。

背中越しに紫苑の気配がぞろり、と剥がれ落ち、異質な顔を覗かせる。

腐り落ちた果実が放つような濃密で豊潤で噎せ返る死の香り。

いち早く紫苑の異変を察知した『影坊主』が領主の身を護ろうと動く。

だが。

「動くな」

その一言で全ての者が静止した。

肉眼での目視が不可能な微細の金属系による肉体への強制干渉。

既に紫苑達二人を除くこの場に居る者全員の肉体は本人の命令系統を外れ『少年アリス』の意の儘になっていた。

金属系は憐れな獲物の脊髄深くまで差し込まれ、紫苑が意識しさえすれば『魔動』により過負荷の電流が神経幹の中枢神経を再起不能なまですたずたに破壊し尽くす。

行き着く果ては、首から下が麻痺し、二度と動かぬ不随の一生。

その境界線の一步手前。

此岸と彼岸。

引き返すも、乗り越えるも紫苑の心の匙加減一つ。

「な、なんだこれは身体が動かぬ!？」

「……」

豚に良く似たガマガエルが人の言葉で喚き散らす。

耳障りな音が酷く紫苑を不快にさせた。

『影坊主』は紫苑の背中を油断無く睨み付け、窮地の逆転を図る。見えない蜘蛛の巣に捕えられた二匹の心情など紫苑はお構いなく、ゆったり、とした動作で振り返る。

外面だけを見れば絶世の見返り美人と称されるだろう。

だが、瞳の輝きが獲物達の肝を凍り付かせた。

汚泥のように濁る蒼い瞳が無感動に二匹を見ていた。

くすりと紫苑が口角を持ち上げるだけの笑みを作った。

「領主様は冗談がお上手なのですね」

そして紫苑は本当に、不思議そうに尋ねた。

死体がどうやってそれをやるというのですか？

紫苑達は誰の見送りも無く、自分の足で領主の館を去って行った。紫苑の華奢な背中が見えなくなってから数分。漸くデイモンは身体が戻っている事に気が付いた。そして。

どっ、と汗が吹き出しその場にへたり込んだ。

彼は未だ自分の首と身体が繋がっている事が信じられなかった。

「ぜえ、はあっ……………はあ、はあ、な、何なのだあの化け物は…

…」

脂汗と冷や汗が止まらない。

美しいと思っていた蒼い瞳が泡立つ汚泥のような仄暗さを宿した

途端。

眼が合ったデモンは死を想起した。  
あれは人の形をしたナニカであった。

「……化生の類、だな」

「き、貴様、何をしておった！ 高い金を払って貴様を雇っているのは何のためだ！ 糞の役にも立たないではないかっ！」

今まで一言も喋らなかった『影坊主』シエイドが初めて言葉を口にした。

矛先を見つけた領主は苛立ちの捌け口として怒鳴り散らす。

だが、『影坊主』にその怒鳴り声は柳に風。

雇い主とはいえ敬意を払う間柄ではない。

「ふ、ふん！ まあ、良い。所詮奴も情の通った人間。脅す内容は幾らでもある」

「……止めておけ。無闇に藪を突いて魔獣を出す事も無いだろう。アレは刺し違えても貴様の命を奪いに来るぞ」

『影坊主』シエイドが冷静になれ、とデモンを諭す。

だが、頭に血が上ったデモンは、その意見を聞き入れない。  
苛立たしげに怒鳴る。

「黙れっ！ ぐふふ、手始めに奴の大事にしているハーフとダーク  
エルフを」

激昂した後に醜悪に咽喉を鳴らし笑うデモン。

直後。

ぱち、と静電気の火花が弾ける音。

ぷつん、とナニカが切れる感覚をデモンは感じた。

不自然に途切れる領主の言葉にシェイドはいぶかしげに思い、彼を見た。

ぐらり、と贅肉の塊であるディモンの肉体が傾く。

「がはっ」

受け身すら取れていない無様な倒れ方。

だが不思議とディモンは痛みを感じなかった。

それも当然。

首の骨　脊柱の全ての部位。

頸椎、胸椎、腰椎、仙椎、尾椎、それら全てが過電流を流され、

再起不能なまで破壊され尽くしているのだから。

全身麻痺を初め、呼吸筋すら麻痺し、自発的な呼吸すら儘ならぬ  
い。

かろうじて首から上が動くが、その口から意味のある言葉を発する事は不可能。

酸素を求める魚のように口を開閉させるのみであった。

だが、そんな無様を晒しても肺が求める酸素は一向に入ってこない。  
い。

やがて、ラタトスクの領主であるディモン「ソールズベリ・ラタトリアス伯爵の意識は闇に墜ちていった。

永久に覚める事の無い闇へと

交錯の都市『ラタトスク』での宴は二日間にも及んだ。

実際の所は『外套と短剣』のメンバーを主導としてまだまだ続き  
そうではあったが、

紫苑はそれに参加する事無く脱兎の如く『ウルドの湖』にとんぼ  
返りをしていた。

今迄貯め込んでいた秘蹟礼装『バルトアンデルス』のマナを使用  
しての『空間転移』。

その甲斐あつてか、数分と経たずにラティルスとミオソティス両  
名の無事な顔が確認できた。

現在。

紫苑とバルは小春日和の中、シロのふさふさした背中に跨り、ゆ  
つたりと雑木林の散歩道を進んでいた。

シロの散歩を兼ねた『ウルドの湖』周辺地域の巡回であった。

主人達に乗せたシロは、折れた腕の具合を見て上に乗る紫苑に負  
担の掛からぬように慎重に歩く。

風が林の木々を揺らし、春の香りを運び鼻先を掠める。

時折見かけるフェアリーは羽ばたく蝶と戯れて遊んでいた。

時間がゆつくりと流れる中。

一人と一体と一匹は道なりを進み、道が二股に分かれている場所  
まで辿り着いていた。

片方が『ウルドの湖』に通ずる道。

もう片方が小さな村落『ウルドの村』に通ずる道。

不図。

紫苑は雑木林の中から観察するような目を感じ、視線の先に向く。

シロは生き物の気配を感じ、低く唸り始めた。

領主の差し金か、はたまた夜盗の類か。

「どなたですか？」

その一言で気配がざわつく。  
存在を看破された事で発せられた動揺。  
それは姿を見せぬナニカが居る裏付けでもあった。

蝙蝠が一匹、雑木林から羽ばたいた。  
否。

一匹ではなかった。  
蝙蝠は瞬く間にその数を増やしていき、夥しい数の影がウルドの湖付近の林を黒く覆う。

そして、蝙蝠達は渦を巻くように一点に収束していき一つの形を成す。

目の前で目まぐるしく起こる変化に紫苑とバルは見覚えがあった。  
それは吸血鬼の登場。

「覗き見の非礼、大変失礼しましたミカガミ・シオン様」

突如として現れた一介の吸血鬼。

身に着けるはヴィクトリアン調の格式高いメイド服。  
後頭部で複雑に編み込まれた雅な紫色の結い髪。  
それは『吸血姫』唯一の従者　ラヴァテラであった。  
ラヴァテラは謝罪を口にし、深々と頭を下げた。  
油断無く紫苑はラヴァテラを見やる。

「……仇討ち、ですか？」

剣呑になる雰囲気の中、ラヴァテラは紫苑の質問に頭を振る。かぶり

そしてラヴァテラは、紫苑達の前に現れた真意を口にする。

「我が主は死を望まれていました。死に魅入られた主を現世へと引き留めていたのは単に私の我儘で御座います。」

ですが、幾ら私が此方側へ引き戻そうとも我が主マルヴァ様は終演を望んでおられた。焼かれると分かっているながらも火に飛び込む誘蛾の如く、飛び込まざるを得ない。

私は主の切なる願いを叶えて下さった貴方様達を害する気など毛頭御座いません」

「ならば何用ぞ？」

バルが改めて問う。

親である『吸血姫』を討ち取った紫苑達の前に姿を現した理由を。ラヴァテラは鼻先に掛けられた銀縁眼鏡を指先でくい、と押し上げた。

そして紫紺の瞳で真っ直ぐ紫苑達の瞳と交錯する。

「結論から申します。今は亡きマルヴァ様の恩人であるお二人方への御恩返しにございます」

「御恩返し……」

予想だにしない答えに紫苑は戸惑う。

理解できない。

紫苑がラヴァテラと同じ立場であれば不可能だ。

必ず大切な人を奪った者に復讐を決意するであろう。

故にラヴァテラの発した答えは、紫苑にとって不可解であり理解の難しい物であった。

ラヴァテラは最初に不死者溢れる戦場でしたように、スカートの

端を摘み完璧な一礼をして見せた。

ミカガミ・シオン様、メイドを一人仕えさせてみては如何ですか？

## 第?章『宴』（後書き）

これで『吸血姫』編はほぼ終了となります。

いかがだったでしょうか？

個人的には本編で初めて登場した『龍』の圧倒的な存在感を表せたら良いな、と思っています。

『狂い龍』の元となったモノは、分かっている人も多いと思います  
がクトゥルフ神話に登場する邪神です。

次回からより新展開に入っていきたいと思えます。

新章からのキーワードは『キチ○イシスターさん』です。

お楽しみにしてください。

## 第？章『姉妹』

東の山々の頂から朝陽が昇る。

柔らかく全てを包み込む光が景色をオレンジ色に染めていく。

それは交錯都市ラタトスクも例外では無く、人々は日の出と共に営みを始めていた。

そして、それは日々の勉学に励む魔導学院の生徒達も同様である。ラタトスクの都市内で、一際小高い位置で街を見下ろす時を指す長針と短針。

その不揃いな一対の針を支える巨大な時計台を中心として翼のように広がる重厚な建物。

国立ブローサムス魔導学院。

大魔導師ブローサムスが後世に自分の魔術的知識を伝える為に、約200年前に設立した歴史ある建物だ。

呪式を計算され尽くして建築された学舎は、月日を経ても衰えず、今もなおその威容をラタトスクの街を訪れる者達に示している。

ブローサムス魔導学院は歴史だけの学院ではない。

赤茶けた煉瓦造りの校舎から毎年多数の優秀な人材を輩出している。

王城に仕える騎士、王宮魔術師、または世界を股に掛ける冒険者、その他にも学者といった知識人等。

学院の教育を受けて世に出る人材の種類は多種多様。

そして。

在籍している生徒達の種族も千差万別。

エルフやドワーフ等と云ったポピュラーな種族を初めとし、リザードマンや獣人族と云った亜人種も数多く在籍している。

そんな国立ブローサム魔導学院の敷地内に建てられた学生寮の一室。

高級宿と比べても遜色無い豪華な内装の二人部屋にも等しく太陽の光は差し込む。

しかし。

部屋の空気は、外の清々しい朝と対称的に澱んでいた。

部屋に二つ配置されたシングルベッドの一つ。

ベッドの上の住人が澱んだ空気の発信源であった。

虚空を見詰める焦点の合わない瞳。

もう何日も手入れをしていないのか、艶を失った蒼色の髪。

それが魔導学院に席を置く年若い少女　エルザリースの惨憺たる現状であった。

「エル、起きてる」

相部屋の住人の片割れが控え目にドアを開け、生気を感じさせないエルザリースに声を掛ける。

きめ細かい茶髪をおさげにして肩の前から垂らした見目麗しい少女　シンシア。

入室したシンシアは、エルフ族特有の二等辺三角形の耳を萎れさせながら、友人であるエルザリースの変わらない憔悴ぶりに心を痛めた。

シンシアは朝早くから摘んできた花を花瓶に飾った。

そして。

エルザリースが上半身を起こしているベッドの縁に腰掛ける。

そつ、と少女達の手が重なる。

触れ合う手から伝わる感触にエルザリースはビクリ、と肩を跳ねさせた。

「嫌ッ！」

変化は顕著。

拒絶の声を皮切りにエルザリースがシンシアの手を強かに撥ね退ける。

己を抱き締めるように小さく肩を抱き、不自然な程に呼吸を乱す。エルザリースの脳裏にあの忌まわしい夜の出来事が甦っていた。幾つもの無遠慮な男の腕が迫り、抵抗する自分を押さえつける。股を強制的に開かせられ、18年間純潔を保っていた秘部がいつも簡単に散らされた。

おぞましい剛直が何度も内臓を引く抜くかのように身体の中を往復する。

男達の下卑た笑い声。

それら全てがエルザリースの心に深く色濃い傷痕を残していた。

「エル、私よ。シンシアよ」

「……あ」

「大丈夫、大丈夫だからね」

「シン……シア、シンシア！」

焦点の合っていないかった瞳が確かに同居人を見た。

エルザリースは親を見つけた迷い子のようにシンシアに抱き付いた。

ぎゅっ、と怯える手でシンシアの服を掴む。

押し付けられた顔でエルフ特有の均整のとれた乳房が柔らかく歪んだ。

勝気でちよつとお調子者であったエルザリースの変わり様。

厳然たる事実が重くシンシアの心に押し掛かる。

「……………」

「……」  
「……落ち着いた？」

小さく胸の中で顔を頷かせるエルザリース。  
その様は夜に怯える子供を想起させた。

「……………うん」

こくり、と弱々しく頷く。

涙を指で拭い、エルザリースは顔を上げる。

その時。

バン、と相部屋の扉が勢い良く開かれた。

開け放たれた扉から顔を覗かせた人物は、学院指定の制服　淡い茶を基調としたブレザーと白の二重ラインが入った同色のボックスプリーツを穿いた女生徒であった。

その女生徒の出現により部屋に滞留した空気が一変。

夏の日差しを一身に受けたように、青々とした生命の澆刺とした息吹が扉を開けた女生徒から発せられている。

仕立ての良いブラウスと制服を内から押し上げる年齢を鑑みれば発育の良い双子山。

陽の光を吸収したかのような金色の長い髪は、毛先に近付くほどに縦ロールが巻かれ、彼女は肩にかかった毛髪を演劇の芝居のように手の甲で払った。

つん、と澄ました小生意気な表情であったが、覇気と自信に満ち溢れた碧の瞳にはお似合いであった。

突然の闖入者は、改造されてミニになった学校指定のスカートを翻し、つつつか、とシンシア達に歩み寄る。

そして、エルザリースが乗るベッドの傍まで来ると、見下ろしながら鼻を鳴らした。

「まあまあ、なんて様ですの、エルザリースさん。たかが賊如きに敗北を帰するなど私に対する侮辱」

「ソプラさんっ！」

傷心のエルザリースに向けて辛辣な言葉を突き刺す女生徒　ソプラの暴言にシンシアが声を荒げる。

エルザリース達のグループが愚策な独断専行を行い、班員の半分を失った失態は魔導学院の生徒達にとって周知の事実であった。

二人が賊の慰み者になった事実は伏せられているが、憶測が飛び交い、好奇の目が二人を無遠慮に視姦する事は防ぎようが無い。

当人達が塞ぎ込んで、部屋から出ない事も学院のゴシップに拍車を掛ける役割になっていた。

ソプラは険しくなる非難の視線を意に介さず、エルザリースに対し言葉を重ねる。

「あまつさえ今の貴女の体たらくは一体なんですか？　講義に出席せず、同室の方に身の回りを世話させて良い御身分ですことね。」

言葉の棘に塗った毒は軽蔑。

だが、ソプラの放った言葉の棘は、エルザリースの内に沈んだ反骨心に火を灯す切っ掛けとなった。

僅かに生気が戻った瞳。

シンシアの腕に抱かれながら、エルザリースの瞳は確然とソプラの不遜な瞳に焦点を合わせた。

「君に……………僕達の何が分かるっていうのさ」

ぼつり、とか細く消え入りそうな小声。

ソプラの耳は、その反骨心を原動力とした反抗を確かに拾い上げた。

「分かる訳がありませんわ。負け犬根性が染み付いた貴女と高貴な出の私。『龍』とゴ布林程も違いますわ。」

まあ、以前の貴女であればそんな差などお構いなしに歯向かって来ましたから、見所はありましたけど。」

とにかく、貴女は私の宿敵ライバルという名誉有る地位にいらつしやるのですから、それ相應の振る舞いをしなければならぬのです」

だんだんと矢継ぎ早に言葉を連ねていくソプラ。

次第に類は紅潮してゆき、先ほどの早口とは打って変わり、歯切れが悪くなる。

「だ、だからそのですわね……あれですわよ、あれ！ ……………元気をお出しになって下さいまし」

よほどその言葉を掛ける事が気恥ずかしかったのか、最後の方になると殆ど蚊の鳴く声になっていた。

シンシアは余程予想外だったのか鳩が豆鉄砲を喰らったような顔でソプラを凝視し、エルザリースもぽかん、と口を開けた。

二人の意外な物を見たという表情に、ソプラは顔を更に朱に染めて照れ隠しの猛抗議をする。

「な、何ですの、そのお顔は！？ ただ貴女がそんな調子だと私の調子も崩れてしまうのでとっと持ち直して貰いたいと云いたいだけですわ。」

べ、別に貴女の事を心配している訳ではありません事よ。其処の所をお間違いないようにっ！」

むきー、とばかりに声を大にして自ら盛大な墓穴を掘っていくソプラ。

元々エルザリースとソプラの学院内での関係は良好と云える物では無い。

元来勝気な性格で思った事がすぐに口に出るエルザリースに、貴族の娘で高慢ちきな性質<sup>たち</sup>であるソプラ。

衝突は必然。

学院内では二人が言い争う姿が頻繁に目撃され、それを止めるのがシンシアとソプラの取り巻きの役割であった。

不倶戴天の敵とまでも行かずともライバル関係にあったソプラ。

その彼女が傷心のエルザリースを励ますなど想像だに出来なかった光景だった。

故に。

「ク」

子供のような言い訳がましい建前を並べるソプラと普段の彼女のギャップに思わず笑いが込み上げてくる。

エルザリースが『山猫の爪』敗北以来、初めて笑みを浮かべた。

口元を歪めるだけの不格好な笑いであったが、それでも確かな喜びの感情の発露。

それを目敏く見つけたソプラが更に吼えた。

「い、今笑いましたね！？ 折角私が心配して励ましに来て差し上げたのに……………あ……………」

狼狽が頂点に達しに遂に本音が口を突いて出てきてしまう。

慌てて取り繕うとするソプラにエルザリースの言葉が重なる。

「ち、違いますのよ！ これは、えっと……………そのソプラ」

「何ですの！？ 今忙し」

「

「ありがとね……ちょっと元気でした」

混じり気の無い純粹な感謝。

ぼ、と音が鳴るくらいソプラの顔面が赤くなる。

普段はいがみ合っているだけの二人なのでソプラはエルザリースの微笑みを直視した事が無い。

野に自生した白い蕾の花咲きにきゅん、と胸が高鳴る。

なまじ能力が高い分、同世代の男子を見下している節があるソプラは百合の気がある女生徒であった。

そして今のエルザリースの顔は、彼女の心臓を鷲掴みにしていた。

「ふんっ！ それでいいのです。そんな事よりも救出依頼を承って下さった『少年アリス』様に直接お礼を云ったのですか？

学院からは職員の先生が感謝状を送ったそうですが、貴方達はどうなのですか？」

耳の先まで真っ赤にしたソプラが誤魔化そうとしどろもどろに話題の転換を試みようとした。

指摘にエルザリース達は、困難な緊急依頼を受け、見事自分達を救出してくれた『少年アリス』に対してのお礼を失念していた事に気が付かされた。

無論、救出された当初は心に負った傷が深すぎてお礼どころでは無く、そして幾日も経たぬ内に『吸血姫』の大侵攻。

優秀な人材を輩出しているとはいえ、学院側が教育課程で尻に卵の殻が付いた半人前のひよっ子を前線に投入させる訳が無い。

ソプラを初めとした魔導学院生徒達は『吸血姫』の侵攻時、疎開若しくは寮からの外出を禁止されていた。

「嗚呼、私も一目『少年アリス』様の麗しい御姿を拝見したかったですわ。」

そして噂では並み居る不死者の群れを一騎当千の勇猛さで薙ぎ倒していき、遂には『吸血姫』を単独で討伐されたらしいですわ」

うつとり、と頬に手を添え、妄想の世界に突入するソプラ。

些か奇異に映る態度ではあるが、学院内ではソプラと同様に『少年アリス』の熱心なファンは少なくない人数が居る。

一年ほど前に突如として名を台頭させて来た若手のホープ『少年アリス』。

魔導学院高等部の生徒よりも年齢は低いが、その実力は確か。

破竹の勢いで次々と功績を上げていき、ギルドランク『C』を獲得。

今回の『吸血姫』討伐の件でランク『B』は確実にされている。

『白狼王』を従える神秘性。

糸を用いた優美で芸術的な戦闘スタイル。

そして。

『少年アリス』が学院内の子女に人気の最たる理由は、その容姿にある。

並みの美少女など歯牙にもかけない整い過ぎた美貌。

それらの事実<sup>に</sup>尾ひれが付け加えられ、年若い子女の妄想を膨らませる過剰なスパイスとなっていた。

「これを御覧なさい。新聞部の知り合いから無理を云って譲って頂いた『少年アリス』様を移した幻光石ですよ」

胸ポケットから取り出したのは、ルーン文字で加工がされた平べった石ころであった。

『幻光石』とは魔力を込めると、一瞬強い光を発し、映像を記憶できる不思議な特性を持つ石の事である。

その原石を付与<sup>エンチャント</sup>魔術師がルーン文字等で更に加工し、地球の写真機のような機能を持たせている。

ソプラは記憶した映像を出す為に、術式の一部に魔力を流す。すると、『幻光石』に彫られた陣の中心部が発光。切り取られた立体映像が掌サイズで発現した。

「本当に美しい御姿。噂に違わぬ艶やかな黒髪に蒼穹を抱いた深い瞳。躍動感溢れるまさにベストショットです。良い仕事してますわっ！」

きゃあきゃあ、とはしゃぐソプラ。

その姿は新しい玩具を買ってもらった童女そのもの。

映し出された映像は、『少年アリス』が両腕を振るい、周囲のゾンビ達を数多のパーツに切り裂いている一場面

腐肉と少女。

醜と美。

泥中から花開く蓮の如く、『幻光石』の中に収まった『少年アリス』は幼げな美貌を際立たせていた。

「よって！ 貴女達は『少年アリス』様の下に赴き、直接お礼を言うべきなのです。」

それにこんな空気の籠った部屋に居ては気分が萎えてしまいます。お礼と共に添える菓子折は、このソプラ「クルスバーク」にお任せあれ！ すぐに最高級の物を用意させますわ！」

びし、と音が鳴りそうなほど二人を指差し、腰に手を当てたソプラが唐突で強引に予定を決定する。

その内容は、二人を心配しているのか、己の欲望に忠実なのか良く分からないものであった。

流れに付いていけないエルザリースとシンシア。

だが、ソプラの御蔭で完全に部屋に満ちた澱んだ雰囲気は払拭されていた。

これがソプラなりの冴えたやり方、なのかもしれない

Original Novel

追憶のシオン

第?章『姉妹』

心地良い微睡から意識が浮上していく。

小鳥の囀りを音楽とし、少女の目が覚めた。  
しかし。

少女の視界は常闇に閉ざされ、その瞳は絶対に色彩の世界を映し出さない。

「…………ミオ、起きた？」

聞きなれた身近な声色が耳朶をくすぐった。

肌を感じる温もりと匂いがその人物をラティルスだと確信させてくれる。

少女　ミオソティスが上半身を起こすと、背中を支えるラティルスの介助が入った。

起き上がる拍子に長い銀系の髪が柔らかくミオソティスの背中を撫でた。

「おはようございます、ラティ姉さん」

「…………うん、おはよう」

ラティルスが居るであろう場所に顔を向き、朝の挨拶。それを受けたラティルスも『焼け爛れて皮膚がケロイド状になった両目』を見て挨拶を返す。

「……待ってて」

「はい」

二人が眠っていたベッドの傍、サイドテーブルの上に置いてある包帯をラティルスは手に取る。

そして、ラティルスは軽々とミオソティスを横抱き。

体格に大きな違いがあるとはいえ、ラティルスは羽毛を持ち歩いているように重心がぶれない。

ラティルスは持ち上げた妹を部屋の隅に置いてあつた木製車椅子まで運んだ。

そつ、と壊れ物を扱う手付きで椅子にお尻を座らせる。

車椅子の取っ手を握り、フローリングに木製の車輪を転がしながらラティルスは妹姫を運ぶ。

部屋を通り、廊下を出て、洗面所へ。

洗面所に着くと、其処には程良い温度に暖まった湯の入った木桶が置かれてあつた。

傍らには丁寧に綺麗なタオル。

その準備の良さに、ラティルスはピクリ、と片眉を跳ね上げた。

別に機嫌が悪い訳では無い。

この癖は彼女が申し訳無さを感じた時に頻繁にやる癖だつた。

準備をしてくれた人物に心内で感謝し、ラティルスはミオソティスの顔を濡れたタオルで拭って綺麗にする。

そして、部屋から持ってきた包帯を手に取り、きつく締めすぎな

いようにケロイド状になっている両目部分を巻いていく。  
何年も続く血の繋がらない姉妹の朝の習慣だ。

「……終わった、きつくない？」

「はい、大丈夫です。いつもすみません、姉さん」

「……それは云わないお約束」

この冗談も毎朝の習慣、決まり文句。

くすり、と褐色の人差し指を口元で躍らせミオソティスが笑う。  
釣られてラティルスの口元が緩く弧を描いた

二人で簡単な朝の身支度を整えると、リビングルームが何時もより騒がしい。

びくびく、と喧騒にラティルスの頭の上の獣耳が震える。

そういえば、と思い当たる節があった。

昨日の内に突然紫苑から紹介されたメイド。

リビングルームに続くドアノブを捻ると、其処には予想違わない人物が居た。

「ですから、朝食の準備などは全て私にお任せ下さい。シオン様の左腕のお怪我に障ります。どうか座ってお待ちになられて下さい」

「……ですが、ラヴァテラさんは調味料や調理器具の配置をご存じ

ないのでしょうか？ 邪魔にならない程度にはお手伝いしたいのですが」

「お心遣い有難う御座います。しかしこのような仕事を仕える主にさせてしまつてはメイドの名折れ。私の事はお気になさらずご自愛を。」

それと、先程も申し上げましたが私の事はどうかラヴァテラ、と呼び捨てになさつて下さい」

「年上の方にそれはちよつと……」

朝餉の香り漂う室内に入ると、キッチンで藍色の着物を来た紫苑と、丸眼鏡を掛け、紫紺の髪を後で編み込んだメイドが口論をしていた。

言い争つと云うよりは、互いの領分を決めかねている為に擦れ違いが起こっているようであった。

モノクロドレスを着たバルは、そんな二人を面白そうに口元を弧にしながらテーブルに座っている。

「良いではないか紫苑。メイドとして雇つたのは此方側なのじゃ。まずはどの程度出来るものか好きにやらせてみるのも面白い」

「バルがそういうのでしたら……ラヴァテラさん、お願いします」「お任せ下さい」

後ろ髪を引かれながら紫苑はしぶしぶ、とバルの意見に従つた。

ラヴァテラの方も呼び方に不満があつたが、先程の焼き回しになると思いこの件について保留にした。

互いが落とし所を見つけた後は早かつた。

紫苑達はまざまざ、とラヴァテラの家事技能の有能さを見せ付けられた。

早い。

全ての作業が早いのだ。

既に下拵えをしてあった野菜のブイヨンスープを初めに、色とりどりの野菜が盛り付けられていくサラダ、特製のドレッシング。

香ばしい匂いが漂うバゲット。

紫苑も把握していない素材は、なんとラヴァテラの『影』から出現し、次々と食欲そそのかる料理へ調理されていく。

更にはラヴァテラが調理や盛り付けをしている最中に、床から伸びた『影』がテーブルクロスを整え、紫苑達の為に椅子を引く。

気が付けばテーブルの上にワゴンより運ばれた食器と朝食が配膳され、促されるままに紫苑達は席に着いていた。

無駄が一切無い、完璧さ。

「……すっぴん」

平坦ながらも親しい人間が聞けば十分驚いていると分かる声色で驚くラティルス。

確かに、と紫苑は全面的に同意する。

少なからず料理技能には自信があったが、ラヴァテラの手際の良さ、技術の多さの前では霞んでしまう。

「本日は皆様の普段の朝食が不明だった為、一般的な朝食メニューに致しました。何か不備があればお申し付けください」

「ふむ、では頂こうかの」

一つ頷くとバルは、焼き上がりフレンチトーストにされたバゲットをナイフで一口サイズに切り分け、フォークで口に運ぶ。

作法は完璧。

噛みしめた瞬間、もっちりとした触感が口を楽しませる。

瞬間、卵液と砂糖とバターが染み込んだバゲットの味がふんわりと広がった。

「ふむ、見事である」

「恐れ入ります」

口元をナプキンで慎ましやかに拭き、簡潔な感想を述べる。

その極自然で慇懃無礼な振る舞いに、ラヴァテラは肅々と完璧な一礼で返した。

二人の遣り取りを皮切りに本格的な朝食が始まった。

「……ミオ、あーんして」

平坦な声で開口を促すラティルス。

手に握られたフアークの尖端には、瑞々しい野菜がゴマ風味のドレッシングに絡められていた。

ミオソティスの蕾の唇が小さいながらも精一杯開き、空いた口腔にサラダが吸い込まれる。

その一連の動作は、親鳥が雛に食べ物に分け与えているような印象を与えた。

「おいしい、です」

エルフに多く見られる菜食主義者。

その御多分に漏れず、ベジタリアンであるミオソティスは口元を綻ばせた。

和気藹々と進む朝食風景。  
しかし。

違和を醸し出す要因が一人居た。  
勿論、ラヴァテラである。

「あの、ラヴァテラさん？ 一緒に食べないのですか？」

物言わず、紫苑の席から左後ろに直立不動で控える女使用人は違和感の塊だった。

少なくとも紫苑が住まうログハウスは上流階級の人物が生活するような建物では無い。

建前上、ラティルスを家事手伝い（ハウスキーパー）として雇っているが、

実際の所、紫苑も気が付けば掃除や洗濯、調理といった主な家事をしてしまうので、彼女へ回される仕事の量は少ない。

ラティルスにとって最も比率が多い家事と云えば、ミオソティスの身の回りの世話である。

そんな中、現れた完全無欠吸血鬼メイドであるラヴァテラ。

格式高いヴィクトリアン調のメイド服を着こなし、紫苑を主として仕える姿勢はこのログハウス内でも奇異に映った。

「使用人は普通主人と席を共にする事はありません。シオン様達が食べ終わるまで後ろで控えている事も仕事なのです」

眉一つ動かさず、ラヴァテラは予め用意していたかのように答えを返す。

だが、その回答は紫苑にとって不満であつたらしく、少し困り顔になつていた。

そこで助け船を出したのはバルであつた。

「『郷に入つては郷に従え』。処変われば品も変わる。

仕えておる主人がストレスを感じておるぞ、慣習などに固執せず  
に最上の奉仕を行うのが真の使用人と云うものぞ。

早々に席に着くが良い。妾が許す」

吸血鬼メイドが主人と仰ぐ紫苑よりも主人らしい物言いでバルが

諭す。

ですが、とラヴァテラは続けようとしたが食卓の視線が全て自身に向いている事に気が付いた。

多勢に無勢。

この状況で己の意見を通そうとするほどラヴァテラは強情では無い。

結局、降参の白旗を上げざるを得なかった。

「失礼致します」

長方形のテーブルの長い辺には、各ペアが出来ており、ラヴァテラは短い辺に面した側に腰を下ろす。

真っ直ぐ伸びた背筋に、些か居心地の悪い光を灯す紫紺の瞳。

ラヴァテラが席に着いた事を確認すると、紫苑は僅かに顔を緩め、食事に取り掛かる。

紫苑が食事に手を付けた後、ラヴァテラもぎこちなく朝食を口に入れ始めた。

和服を着た日本人形のような少年と、本物の西洋人形である秘蹟礼装。

盲目のダークエルフと、魔物と人の合いの子である獣耳女性。

そんな個性豊かで奇妙な組み合わせの食卓に、この日から吸血鬼メイドが加わる事となった

む、とラティルスが小さく唸った。

洗濯籠に入れて置いた衣類が何処にも見当たらない。

燦々と洗濯日和の太陽が外を照らしているが、洗濯物が無ければ意味が無い。

小首を傾げながら外を見渡せば、湖畔の近くの木々に取り付けてある物干し縄に、既に洗い終わった衣類が干されてあった。

紫苑が寝間着として使っている肌襦袢も丁寧に風通しの良い日陰で陰干しされていた。

むむ、とラティルスがまた小さく唸った。

次は家の掃除と思い立ち、掃除用具入れを覗いてみたが肝心の箒が影も形も無い。

おかしい、と家の中を探し回っていると、まだ見慣れていないメイド服が忙しく動いていた。

それは紛れも無く新入りであるラヴァテラの後ろ姿だった。

ロングスカートに長袖の肌の露出が極端に少ないエプロンドレス。白手袋に包まれた手には、ラティルスが探し求めていた箒が握られていた。

「……掃除、ラティがやる」

抑揚の乏しい要求に吸血鬼メイドは掃除の手を止め、振り向く。

ラティルスの金の瞳が、ラヴァテラの紫紺の瞳と眼鏡越しに向かい合った。

「いえ、これは私の仕事ですのでラティルス様の手を煩わせる訳にはいきません」

「ダメ……ラティ、ハウスキーパー。だからラティの仕事」

ぴしゃり、と取り付く島も無く断られ、ラティルスは内心でちょっと不機嫌になりつつあった。

己の領分を取られまいと朝方の紫苑と同様にきっぱりと告げた。ラティルスの資格好も見れば、確かに執事の服装であり、使用人のもの。

女性にしてはかなりの長身の部類に入る身体に纏った男性物のワイシャツ。

襟元を引き締める紐ネクタイ。

茶褐色の落ち着いた色合いのベストを身に着けた着こなしは中々様になっていた。

「ハウスキーパー、ですか。失礼ながら私にはラティルス様がその仕事を全う出来ているように思えません」

「……どういう事」

片眉を器用に動かし、眼鏡を指で押し上げたラヴァテラは否定的であった。

その言葉に漸くラティルスの内面が表面上に浮かび上がった。表情筋に出た感情の名は不機嫌。

「では云わせて頂きます。私は百年近くメイドとして別の主人に仕えて参りましたが、使用人は主人より遅く寝て、主人より早く起きる事が常識です。

遅く起きるなどもつての外、在り得ません。昨日から様子を見ておりましたが、ラティルス様はその従者としての常識を分かっておられるとは思えません。

ですのでこれからは、ラティルス様はミオソティス様の御傍に居てもらって結構です。

この家の家事全般　掃除、洗濯、炊事、その他の雑事全てを私

が引き受けます 私、メイドですので」

「ダメ……ラティはシオンに任されてる。だからラティがやる……  
……それに近くの魔物退治も大事な仕事……出来るの？」

形勢はラヴァテラの方に傾いていた。

理路整然と事実を並べるラヴァテラには百年間培ってきた経験が  
確固としてある。

一方で、ラティルスには半年足らずの使用人としての実務経験し  
か無い。

更に、その実務経験すら危うい。

紫苑とラティルス達の距離は近すぎるのだ。

雇い主と使用人の境界が曖昧で、殆ど身内と云って良い状況。

もはやハウスキーパーとは建前で、紫苑達は共同生活を送ってい  
ると表現した方が正しい。

「出来ます」

「……なら、試す」

「それでラティルス様がご満足頂けるのでしたら」

即答された是の回答。

それを挑発と受け取ったのか、ラティルスの金色の瞳が細く吸血  
鬼メイドを射抜く。

ただし、二人の間に流れる空気は、決して陰険と云った感じでは  
無かった。

近い表現で表すならば子供が玩具を取り合っている状況。

ラヴァテラからすれば不本意な表現であるが、ラティルスからす  
れば横から掠め取られた玩具 家事仕事を取り返したいだけなの  
であった。

ラティルス足元から白い冷気が漂い始め、ぱきん、と右手から氷で構成された爪が肥大化する。

ラヴァテラの影が奇妙に蠢き、盛り上がってくる。

一色触発。

しかし。

「ラティ姉さん、何をしているんですか？」

廊下の曲がり角。

木製の車椅子を転がすミオソティスが姿を出し、二人の行動を阻害した。

「？」

包帯に巻かれた視線が姉とメイド、交互に注がれる。

褐色の肌を舐めるのは、攻撃性のマナの残滓。

割って入ってきた形の自分に対して、二人の戸惑いを感じ取った

ミオソティスは、大凡の状況を把握した。

そして。

「喧嘩は だめですよ？」

轟、と空気が圧迫された。

座ったままの体勢。

黒色に彩られて揺らぐミオソティスの周囲の景色。

幼い体軀から発せられる規格外の魔力が物理的な圧力を持って、年長組に叩き付けられる。

その息が苦しくなる圧迫感に、ラティルスは頭の上の獣耳をぺたんと伏せ、ラヴァテラは眼鏡を押し上げて動揺を押し殺した。

「……別に喧嘩じゃ」  
「だめ、ですよ？」

念を押す言葉に傾げられた小首。

ラティルスの弁解はソレに封殺された。

ただでさえ膨大な純正ダークエルフの魔力が更に濃密に垂れ流される。

更に密度の増した魔力は、重力が二倍になった錯覚すら起こさせる。

言い知れぬ威圧感に二人は、首を縦に振らざるを得なかった

活気が満ち溢れているラタトスクの中央通り。

時刻は正午に近付き、人々の喧騒は増々賑やかになっていた。

道にはみ出すほど所狭しと並べられた新鮮な野菜と果物が入った木箱。

肉屋の店先で並べられている部位ごとに切り分けられた肉、肉、肉。

安い、速い、旨いが自慢の大衆食堂では看板娘が慌ただしく店内を駆けずり回っている。

そんなお昼の中央通りを魔導学院の三人娘が歩いていた。

「近頃はピエット通りの『小人のオープン』の新作チーズケーキが絶品なのです。生地の中に練り込まれた濃厚なチーズの甘さ、さらりと口の中で溶けて消える後味。」

流石ラツセラル山で放牧された羊のミルクを使っているだけの事はありますわ。

あなた方も機会があれば行って食して御覧なさい。絶対気に入りますから」

ほっぺが落ちる美味しさですわ、と顔を綻ばせながら学院の女生徒で最近人気のお菓子屋の説明をするソプラ。

自慢の巻き髪を揺らしながらの熱弁は、かなりの熱の入りようだった。

その勢いある説明に身を晒すのはシンシアとエルザリース。

だが、エルザリースの方はソプラの熱弁を耳から耳へと聞き流していた。

否。

正確に云えば聞いている余裕が無かった。

「エル、大丈夫？ 辛かったら戻ってもいいんだよ。お礼はまた今度にしよ？」

「……」

ふるふる、と蒼髪の毛先を揺らして提案を断るエルザリース。

人通りの多い中央通りで、エルザリースは男性と擦れ違う度、大声を聞く度に身体を竦めさせ、隣を歩くシンシアの腕にしがみ付いていた。

無視された形となったソプラは若干の不機嫌顔。

しかし、宿敵の重傷な様子に肩を落として仕方が無いとばかりに気持ちを切り替えた。

そして。

「ほらエルザリースさん、お手を出しなさいな」  
「……ありがとう」

おずおず、といった様子で差し出された手を取るエルザリース。  
生来の勝気さが鳴りを潜めた小動物的な宿敵の態度は、ソプラの嗜好の中心点を貫いていた。

『妹』。

そう今のエルザリースの振る舞いはソプラが描く理想の妹像に限りなく近かった。

クルスバーク家の一番末の三女として生まれたソプラ。

上の二人の姉はソプラに対して優しくはあったが、彼女は妹が欲しかった。

付け加えるのであれば庇護欲をくすぐって、お姉ちゃんお姉ちゃんと呼びかけて来るような妹が。

そつ、と二人の手が繋がれる。

エルザリースの方が背が引くので、構図としては丁度姉が妹の手を引いているようにも見えなくはない。

「よ、宜しい！ で、ではしっかりと離れないように付いて来るのですよ」

「……うん」

良い。

予想以上に良い。

ソプラは心内で叫んだ。

なんだこの可愛い生き物は。

今現在のソプラは、普段見せないエルザリースのギャップに悶え

させられていた。

「おい、聞いたかよ領主の噂」

「ああ、何でも二日前あたりから変死体で見付かったそうだよ」

「死因は心臓発作ですつて。そりゃあ、あれだけブクブクと私腹と脂肪を増やしてれば無理は無いわよ」

思わぬ所で長年の夢が叶いつつあるソプラを余所に、街の人々が最近のゴシツプを互いに囁き合っていた。

内容は『領主の変死』。

広いラタトスクの街と云えども領主の死とニュースは一大事。

どこもかしこもその話題で持ちきりであった。

「傭兵ギルドの『影坊主』を用心棒にしたのに、肝心の自分が心臓発作になってりゃあ意味無いな」

「全くだな」

一方でその一大ニュースを初めて知った人物も居る。

部屋で引き籠っていたエルザリースと、その世話を甲斐甲斐しくしていたシンシアの二人だ。

「あの、ソプラさん。本当なんですか？ 領主様が亡くなられたのは？」

「あら御存知ありませんでしたの？ 今、ラタトスクでは何処も彼処もその話題一色ですよ。」

第一発見者は専属契約で身の回りを警護させていた傭兵ギルドラック『A』の『影坊主』

彼の証言によれば朝に朝に來客があり、その來客が帰った直後に急に苦しみだして事切れたそうですわ。

医者が死体を調べてみても魔術や呪いと云った類は確認できず、

外傷も無し。なので今は心臓発作と云う事で一応の落着は済んだそうですわ」

「良く其処まで詳しく知ってますね」

機嫌が良いソプラは、自分の知っている範囲の情報を淀み無く云っていく。

その情報量の多さにシンシアは感心していた。

だが一介の学生が知り得る範囲を逸脱している。

疑問が顔に出ていたのか、ソプラは僅かな苦笑を浮かべシンシアの疑問を氷解させた。

「まあこれでもクルスバークの跡取りですから、学生の身でもいろんな時事が耳に届きますの」

「そっか、ソプラさんは貴族でしたね、あれ？ でも確かソプラさんはお姉さんが二人居たんじゃ」

「一番上の姉は冒険者であっちへふらふら、二番目の姉は騎士団でかなり上の地位に居ますからとても直ぐに止めれる状況ではありませんわ。」

だから三女の私にお鉢が回ってきましたの」

ふふ、と笑みを湛えながら姉妹の事を話すソプラの顔はとても誇らしげだった。

その横顔だけで彼女が姉達をどう思っているのか第三者でも窺い知れた。

「騎士団って『バル・イス聖騎士団』ですか！？ ソプラさんのお姉さんってもの凄く優秀な方なんですね」

『バル・イス聖騎士団』。

それはヴァルハラ共和国が誇る最高の精鋭部隊にして共和国の威

光の象徴。

最も強く。

最も気高く。

最も礼節に富んだ最高の剣にして最高の盾。

それがバル・イス聖騎士団。

ヴァルハラ共和国中の子供達の憧れであり、入団する事が騎士としての最高の榮譽であるとも云われている。

「当然ですわ！ 私の自慢のお姉さまなのですから。それに一番上のアルトお姉さまも凄いですのよ。」

貴女もラタトスクに住んでいるのであれば聞いたことがあるでしょう？ 『炎獅子』アルトリーゼ「クルスバーグを！」

シンシアが憧憬の念を瞳に乗せ、ソプラが自慢げにその柔らかかな双子山を張る。

ぷるん、と山が揺れた。

そして。

高らかに紡がれた言葉は、『少年アリス』に馴染み深い名前であった

ブローサムス魔導学院在籍の三人娘は、馬車に揺られ、ウルドの村で降りた。

そして、その足でウルドの湖に続く細い道を歩いていった。

道の両脇には、樹齢を重ねた木々が立ち並び、葉の擦れ合う音が森の中を木霊する。

鬱蒼とした雰囲気の森では無い。

ウルドの湖近くの森は、木漏れ日が辺りを照らす静かな場所であった。

「ウルドの湖は透明度の高いとても綺麗な湖と聞き及んでいますわ。そんな湖畔で住んでいらっしゃる『少年アリス』様のセンスもきつと素敵に違いありません！」

早くお逢いしたいですわー！」

道すがら歩きながらソプラは、因果関係が薄い事柄まで『少年アリス』を褒め称える材料にしてしまう。

馬車での移動中ほぼ同じ調子のソプラに同級生の二人は呆れを取り越して少し辟易としていた。

「でも水の匂いも近くなってきましたし、そろそろ着く頃ではないでしょうか？」

「うん、だね」

調子を取り戻してきたエルザリースがシンシアの言葉に同意を示す。

ソプラの陽の気質に当てられ続けた彼女の精神は、間違いなく良い方向に向かっていた。

三人寄れば姦しい。

その諺に偽りは無く、三人娘は賑やかに細道を進んでいた。其処へ。

「アウン」

ぼつかり、と開いた口腔が視界を遮った。

突如森から巨軀を現した白い影の大口。

人一人など容易く噛み千切ってしまえる鋭い牙の列。

そして伝説の魔獣たる『白狼王』の放つ圧倒的で次元が違う存在感。

三人娘は我を忘れた。

脳が視覚から伝達される情報を拒否していた。

それは魔導学院の生徒として、否、生物として致命的なミス。

脅威を前にして呆然自失になるなど愚行以外の何物でも無い。

しかしそれで良かった。

なぜならば

「シロ、少し待ってください」

飼い主がすぐ現れたのだから。

揺れる木漏れ日を受けて光を優しく反射させる黒の絹髪。

欠伸をしていたシロへと歩むたび、一束に結わえた後ろ髪の毛先

が左右に漕いだ。

深い藍色をした着物で、線の細い身体を包んだ『少年アリス』

紫苑が其処に居た。

まるで物語の世界から迷い込んだかのように、在り得ないくらい

美しい少女然とした少年。

そう魔導学院の三人娘の目には映った。

「……………」

「……………」

「……………」

言葉も出なかった。

半ば白狼王との遭遇以上に意識を彼方に飛ばしている三人に、紫苑は緩やかに視線を向ける。

大粒の空の宝石が彼女達を視界に捉えた。

「此処の近辺に何か御用ですか？」

三人娘が着ている制服姿に紫苑は学院の課外授業の一環かな、と当たりを付けて質問を投げかけた。

耳をくすぐる声の旋律に漸くソプラが我に返る。

「な」

「な？」

ぶるぶる、と何かに堪えるようにソプラの体が震えていた。

ついでに胸部に付いた二つの果実も揺れていた。

そして、弾けた。

「生『少年アリス』ですわー！ー！！」

ファン魂の咆哮。

次いで姉である『炎獅子』もかくやと云わんばかりの踏み込みからソプラの姿が掻き消える。

十数歩の間合いを僅か一足で踏破し、紫苑の直前で急激な静止。

ソプラの通った軌跡では土煙が舞い上がっていた。

むんず、とソプラは紫苑の両手を取った。

近距離に白狼王が居るが視界と意識の外である。

「お、お、おおお初に御目にかかります、わ、わわ私ソプラィクル

スバークと申しますわ。

『少年アリス』様御逢いに出来て光栄です、あ、あのサインを頂いても宜しいでしょうかしら」

とても台無しな自己紹介だった。

うわぁ、とシンシアのみならずエルザリースも学友の狂態に些か引き気味。

そんな観覧者を余所に、紫苑が驚きから平静へと調子を取り戻してきた。

そして、何故だか緊張気味の年上にくすり、と笑みを漏らし丁寧な態度で応対する。

「はい、初めまして。俺の事を知っていらっしゃるようですが、水鏡紫苑です。

サインを書くのは吝かではないのですが、俺の物なんて書くほど大層な物じゃありませんよ」

「いえいえいえいえ、そんな事ありませんわっ！」

吐息が吹きかかる至近距離。

ソプラは紫苑の謙遜に、首がもげそうなほど横に振り回して否定する。

高速で動く視界の中でも焦点は、紫苑の顔を捉えて離さないのは流石であった。

「立ち話もなんですので、家に寄っていきますか？」

「是非！！」

結わえた黒髪が小首を傾げた拍子に柔らかく弧を描く。

年上と年下。

生じる身長差故に見上げる形となった紫苑に、ソプラは満面の笑

みで答える。

完全に独断。

連れの意見は考慮の彼方である。

では此方にどうぞ、と離れて先を案内する紫苑の背中。

着物の襟から時たま覗くうなじをソプラはくわっ、と見開き凝視する。

変態と云う名の淑女。

学院内での高貴な幻想がガラガラ、と脆く崩れ去っていく音をシンシアとエルザリースの二人は確かに聞いた。

「ところで」

「はひっ！」

紫苑が急に立ち止まり、振り返った。

その拍子に憧れの『少年アリス』をねっとり盗み見ていたソプラの肩が跳ねる。

「クルスバーグさんは、アルトリーゼ「クルスバーグさんの親類の方ですか？」

「あ、はい。確かにアルトお姉さまは私の姉ですわ。『少年アリス様はアルトお姉さまを御存知なのですか？』

「紫苑、と呼び捨てで良いですよ。俺の方が年下ですし」「では私もソプラ、と呼び下さい」

呼び方を交換。

些細な事でもソプラは紫苑との距離が近くなったと感じ、表情に喜色を示す。

そして焦点は戻る。

「アルトさんとは良く連れだつて冒険をさせて頂いてます。とても経験豊富でいつも助けられていますよ」

「そうだったのですか。世間とは案外狭い物ですわね。まさか紫苑様とお姉さまが既知の中なんて、

……………なぜ云つて下さらなかつたのですかアルトお姉さま。そうと知つてましたら色々融通してもらつて生『少年アリス』様のグツズを手に入れる事が出来たのに！」

後半部分は紫苑の聞こえない声量で盛大に悔しがるソプラ。

仮に知り合いだという事を教えていても、アルトの性格からして紫苑の私物をこの性格が残念な妹に横流しする事は在り得なかつた。放つておけば地団太を踏みそうな縦巻きロールの魔導学院生。

なんだか見てて飽きない彼女が可笑しくて、エルザリースはまたくすつ、と笑いを噛み殺した。

些か衝撃的で珍妙。

それが『少年アリス』と『魔導学院三人娘』の出会い方だった

第？章『姉妹』（後書き）

これで溜め込んでいたストックが切れました。  
これからは一か月に1、2話のペースで更新していきたいと思いま  
す。

## 第??章 『バル・イス聖騎士団』

「どうぞ」

「あ、どうも有り難う御座います」

コトリ、と湯気漂う紅茶を洗練された動きでテーブルに置いていくメイド。

ソーサーに置かれた緋色の液体は、鼻腔をくすぐる豊かな香りを燻らせる。

テーブルの上のカップは四つ。

藍の着物姿の紫苑を対面に、ブローサムス魔導学院の三人娘が来る形で席に着いていた。

す、と紫苑が淹れられた紅茶に口を付ける。

緋色の液体が小振りな唇に流れた。

口を湿らせた紫苑の視線が三人娘に向く。

「今日はどのような用で此方に？」

開口一番の質問。

促されて答える人物はおさげの女生徒　シンシア。

ソプラは憧れである紫苑の所作に見蕩れていた。

「あ、あの、えっと。私シンシアと云います。先日は隣のエルザリス共々危ない所を助けて頂き有難う御座いました」  
「ありがとうございます、御座いました」

シンシアが頭を下げ、エルザリスも親友に倣い謝意を示す。

「それと本来であれば直ぐにでも私達自身がお礼を申し上げなければならなかったのに遅くなって済みませんでした」

これはほんの気持ちです、とシンシアは高級菓子の入った箱をテーブルに置き、再び深々と頭を下げた。

出された菓子箱は、ソプラが急遽取り寄せた創業三十年になるラタトスクの老舗高級菓子店の物だ。

紫苑は魔導学院の制服姿から三人の用件が何か、半ば予想出来ていたので慌てた様子も無く対応する。

「いえ、魔導学院の先生から直接お二人が来られない事情はお聞きしていましたから、あまり気にしないで下さい。

それについて最近までは大きなゴタゴタもありましたから、無理はありませんよ」

大きなゴタゴタとは、もちろん『吸血姫』の騒動の事だ。街を挙げての大防衛戦。

決戦の日を前後して数日間は一交錯都市の機能が一時麻痺したほど。とてもお礼を云いに来られる状況では無い。

「そう云って貰えると助かります」

ほっ、とした様子で胸を撫で下ろすシンシア。

冷めない内にどうぞ、美味しいですよ、と勧める家主にシンシアは其処で自身の喉が渴いている事に気付いた。

云われるままに紅茶に口を付ける。

「おいしい」

思わず、本心からの言葉が口から零れ出た。

その言葉に紫苑は頬を綻ばせる。

まだ僅かしか経ってはいないが、家事を積極的に取り組んでいる家のメイドを褒められて悪い気はしない。

それは、働く経緯が複雑であれでもだ。

「はい、ラヴァテラさんが淹れてくれる紅茶はとても美味しいんですよ」

「恐縮です。本日は私の自宅より取り寄せた茶葉を使用しております。ウバの春摘み新茶ですので香りを楽しめるストレートでお淹れしました」

紫苑の背後に控える吸血鬼メイド　ラヴァテラが静淑に礼をする。

彼女の云う通り、紅茶に使用された茶葉は吸血姫の館、その庭園の一角で栽培された物だ。

それはラヴァテラの数少ない趣味の一つ。

『法則魔術』で茶葉周囲の環境を操作し、数十年の研究を積んで育てられた茶葉の紅茶は絶品。

その味わいは、今は亡き『吸血姫』も舌鼓を打つほど。

茶葉の原産地を知る筈の無い三人娘は最高級品の豊かな味わいに酔い痴れ、

何時の間にかメイドが給仕してきた焼き菓子の甘味に頬を蕩けさせる。

「このスコーンもとても絶品ですわ。バターの味わいと口の中でホロホロ、と溶けていく口当たり。家のパティシエの中にもこれ程の物を作れる物は居まわせんわ」

テーブルに置かれた色取り取りの果物のジャムからブルーベリーをスコーンに乗せたソプラが絶賛の嵐を浴びせる。  
それに対し、

「それは良かった」

と、紫苑が微笑めば彼女にとって最高の茶会となる。

ログハウスに赴いた用件も終わり、アフターヌーンティーの効力も借りて初見の緊張も程良く解け、談笑は和やかに進んでいった。

中心の話題は主に紫苑の事だ。

冒険者になつた経緯。

髪の毛はどうやって手入れしているのか。

如何にして糸を武器に操っているのか。

中には紫苑の出身地を訊く質問もあったが、異世界から召喚された事は云わずばかりして答えていく。

女が三人寄れば姦しい。

聞き上手で、美少女然とした紫苑が其処に加われれば尚更である。

わいわい、と娘達が茶会の花を咲かせる中でただ一人 エルザリースだけが深刻な顔で作っていた。

そして。

「ではシューゲルト遺跡には地下に神殿が御座いまし

「あのっ！！」

ソプラの言葉を遮り、エルザリースの声がログハウスに反響した。会話への闖入者にソプラは抗議の声を挙げるが、それも遮られる。

「まあ！ 何ですのエルザリースさん。今は私が紫苑様と  
「僕とツ！ 僕と手合わせをして下さいッ！！」

口から齎されたのは思いも寄らぬ申し出だった。

申し込まれた紫苑は突然すぎる事態にきよとん、と目を大きくし、ソプラも突拍子の無い学友に言葉を失くした。

気圧されそうになる剣幕。

紫苑が確認に問う。

「えっと、どうしても、ですか？」

「はい！ お願いします！」

何故。

そう問えば答えが返ってくるだろう。

だが、紫苑はエルザリースの瞳の奥に、真摯で真剣な光を見て取った。

その光に、紫苑は彼女がそうしなければならぬのだろうと悟る。故に。

「 良いですよ」

こくん、と相手の瞳を見据え、頷いた

Original Novel

追憶のシオン

第？章『バル・イス聖騎士団』

さわさわ、とウルドの湖を囲う木々の葉擦れの音色が耳を掠める。湖の畔の開けた場所で、エルザリース、シンシア、そしてソプラが居た。

ソプラは柳眉を逆立てて憤懣やる方無いとばかりに睨み、シンシアは困惑半分心配半分の気持ちでエルザリースを見ていた。

「全く、どういう事ですの！ 説明してくださいまし、エルザリースさん！！」

ギルドランク『B』の『少年アリス』との手合わせ。

それに向けて柔軟体操をしていたエルザリースに怒気を含んだ声が浴びせ掛けられる。

怒声に乗じてカールが巻いている金の毛先が揺れた。

「紫苑様と手合わせをするなんて羨ま　もといご迷惑になるではありませんか！　ご自分が何の目的で此処に来たのか、本当に分かっていますか！？」

本音がちよつと漏れつつもソプラは至極全うな事をのたまう。

つかつか、とソプラが足取り荒くエルザリースに歩み寄り、とすとす、と彼女の比較的薄い胸を指で突いた。

それは私に対する嫌味か、と内心思うもエルザリースに二言は無

い。  
「うん。僕にとって必要な事なんだ」

そう真剣な目で見つめられるとソプラは何も云えなくなる。

彼女の口の栓を締めるだけの圧力がその瞳に存在していた。暫く両者は見詰めた後、先に折れた方はソプラだった。盛大な溜息、そして。

「 分かりました。ですが一つだけ云わせて下さい」

打って変わり今度はソプラが真摯な光を瞳に灯す。そして心配げな表情で苦言を呈す。まるで遠方に往く妹を見送る姉のように。

「相手は私達半人前が背伸びをしても叶うような人ではありません。ましてや貴女はあの日以来碌に運動もしていないのでしょうか？だから、無茶だけはしないで下さいまし 約束してくださいさ  
い」

野花のようにエルザリースの頬が緩んだ。

面映ゆそうに、可笑しそうに。

「まさかソプラから僕を心配する言葉が出るなんて、ね」

「まあ！ 私は真剣に」

「うん、分かってる。だからありがとう。約束するよ、無茶だけは絶対にしないって」

エルザリースは腰に交差させてベルトで取り付けてある双剣の柄を撫でた。

長年に渡り彼女と共に歩んできた相棒。

その行為がエルザリースの中の緊張を解してくれる。

かちやり、とエルザリースの決意の言葉を合図にしたかのように

ログハウスの正面扉が開かれた。

姿を見せるのは『少年アリス』。

先程談笑していた時とは異なり、纏う装束は冒険時の物。

ノースリーブの肌に密着した黒のハイネックインナーに、黒シルクの長手袋。

丈夫な生地の短パンからすらり、と覗く脚を包むは縁に白色の線が入った黒を基調としたニーソックス。

歩く度に空気を含んだ金刺繍の腰マントが揺れていた。

とんとん、と出入り口の木製階段を下りる姿は、何処か浮世離れして三人娘の眼に映った。

僅かに頬に散らされた赤みが紫苑を現実の存在だと認識させた。

「準備は、宜しいですか？」

「はい、何時でも」

グツ、と腰を低くしエルザリースが構える。

手に持つは双剣と長さが同一の木の棒。

対する紫苑は無手で対峙する。

其処へ、タイミング良く新たな観覧者達が森へ続く小道からやって来た。

「おうおう、何とも面白そうな事をしておるのう」

「……む」

「シオンさん、お客さんですか？」

先頭を球体関節人形であるバルトアンデルス、ミオソティスの乗る木製車椅子を押すのはラティルス。

そして最後尾にはしてバルトアンデルス達に影を差すのは、白狼王のシロ。

異種混合な一行の登場。

それに一番過敏な反応を見せた人物は、意外な事に三人娘の中で最もおとなしそうなシンシアだった。

「ッ、ダークエルフ!? な、なんでこんな所につ!」

狼狽を露わにするシンシア。

視線の先に辿れば、其処には車椅子に座る盲目の少女　ミオソテイスの姿。

シンシアの瞳には多大な怯え、そして僅かな嫌悪があった。

エルフという種族にとってダークエルフとは忌避すべき存在。

蔑み、嫌悪し、排除すべき対象。

そう親から、同族から、幼い頃から教え込まれてきた。

それが掟だからである。

だが、その反応が気に食わぬ者達がこの場には多数居た。

「あ、?」

雰囲気を変貌した。

重苦しく物理的な重圧すら有るのではと錯覚してしまう空気。

低くドスの効いた声を零したバルトアンデルスを筆頭に、握っている車椅子の持ち手をみしり、と軋ませるラティルス。

そして紫苑すらも瞳を濁らせ塵芥を見る眼で、失言を漏らしたシンシアを視界に収めていた。

そして渦中のミオソテイスは、何処か諦めたような儂い自嘲の笑

みを口元に浮かべていた。

一転して四面楚歌。

あまりの雰囲気の変わり様に、すぐさまシンシアは己の犯した失態に気が付いた。

「その眼、気に食わぬな。貴様、何故そのような眼をミオに向けお

る？ 何故そのような眼にミオが晒されなければならない。  
愉快ではないのう。至極、不愉快である」

ねっとり、と背筋にそって冷たい舌を這わすような声色。  
シンシアは四方から突き刺さる敵愾心に身を竦める。

何故自分が咎められているのか。

答えは分かっている。

初対面の相手に明らかに失礼極まりない態度を取ってしまった事  
だ。

だが、幼き頃より培われてきた慣習という名のシミは、早々に拭  
い去れるものでは無い。

「あの、わ、私は……その……」

「ふん」

小動物の如く怯えるシンシア。

やがてバルは鼻を一つ鳴らし、つまらぬ物を見る眼で彼女を一瞥。  
踵を返し、ログハウスへと人形の脚相応の短い歩幅を進める。

「興が削がれてしもうたわ。紫苑、適当に相手をしたら疾くと戻っ  
てくるがよい。ただし、其奴には我が家の敷居を跨がせるではない  
ぞ。

ラテイ往くぞ、此処の空気は不味い」

歩く毎に荒く翻る白黒のフリルの施されたスカートがバルの機嫌  
の如実に表していた。

ラテイルスも後に続く。

ただ、一瞬。

温度の無い金の瞳を細くして、シンシアを一瞥した

知識としては知っていた。

だが現実には、知識だけでは想像もつかない程の情報の波を以って押し寄せてくる。

差別という名の謂われ無き迫害意識。

ただダークエルフだからと云うだけで腫れ物に触るかのような態度。

そして、それがミオソティスに向けられたという事実。

紫苑の心の奥底に去来する不快な虫唾は、耐え難い。

「済みませんが、早く終わらせましょう。その方が俺も貴女方も都合が良いでしょうから」

紫苑の言葉にシンシアは何かを云いたそうな顔をする。

しかし、言葉は喉を通らずに霧散した。

紫苑とて一刻たりともこの苦虫を噛み潰さなければならぬ空間に居たくは無かった。

魔導学院の三人娘も、紫苑の機微を察していた。

否。

コミュニケーション障害で無ければ誰でも察せられるほど、現在の畔の空気は最悪であった。

そして。

慌てて二本の棒を逆手に持って構えるエルザリースに向かい、紫苑は驚くほど無造作に間合いを詰めていった。

其処に踏み込みや、歩法といった高尚な技術は絶無。

ただ単純に歩いて近づく。

それだけ。

舐められてる？ それとも頭に血が昇っているの？

経験の浅いエルザリースがそう考えるのも無理からぬことであつた。

だが事実は異なる。

あまりにも彼女の想像とは食い違いが生じていた。

既に極細の金属糸がエルザリースの身体中に刺さっているのだ。

俎板の上の魚。

料理人の思惑次第で如何様にも料理できる状態だった。

「　　ッ、ハアアアアアッ！！」

一步。

革製ブーツの爪先が、エルザリースの二刀の制空圏内に踏み入つた。

瞬間、エルザリースの踏み込みと雄叫びが同調した。

開いていた距離は零へ。

何度も反復運動をしたであろうその動作は淀み無く、滑らかに、

そして瞬時に行われた。

後は双剣を模した棒による連撃を叩き込んで終わり。

だが。

甘い妄想だ。

「次、頑張つて下さい」

玉音と共に、水平に弧を描いて虚空を泳ぐ右腕。

ばっ、とエルザリースの両腕が左右に引つ張られ、その場で縫い付けられる。

驚愕に眼を見開き、原因を見やれば両の手首に知らぬ間に絡まった糸。

その視界に蓋をするように紫苑の左掌が添えられる。

さらり、と肌を滑る長手袋の上質な感触が、エルザリースにとってやけに印象的だった。

「でも余所見は、減点一ですよ」

次瞬。

脚を掬われ、エルザリースの視界で天地が逆転を果たした。

刹那の浮遊感。

終わりは、背中を『蒼の大地』に強かに叩き付けられる衝撃で告げられた。

「かはッ！」

合気に似た投げ技。

一分にも満たない僅かな時間での決着。

模擬戦の幕引きは、『糸繰り』を使うまでも無く、予定調和に降ろされた

ぼつかり、と葉を茂らす木々に縁取られて口を開いた空。

小春日和に誘われて自然の額縁の中を鳥達が飛び回る。

仰向けに大の字で倒れているエルザリースは、その視界に映る景色をぼんやりと見つめていた。

身体を苛む虚脱感。

やはり、と思う諦観に似た気持ち。

「やっぱり、負けちゃったかー」

仰向けのまま瞳は空へ、身体は大地に、エルザリースは気の抜けた眩きを唇から零した。

どうにも、暫くは起き上がる気力すらも湧かない。

赤子の手を捻るよりも容易く。

そんな決着であった。

「はは……」

乾いた笑い声は、皮肉なくらい青すぎる空へと溶けて消えた。

手合わせの前は、或いはとも考えた。

だが、一矢報いられるのではないかと云う幻想は物の見事に打ち碎かれた。

『少年アリス』よりも一つでも優れている点を見つけられたのなら。

その事実を糧に、また頑張れたのかもしれない。

エルザリースの夢想は泡沫のように儂い物であった。

「……なっさけないなー、僕………やめちゃおう、かな？」

瞳に映る青空が水を含み過ぎた水彩画のように滲む。  
零れないようにエルザリースは、両腕を翳そうとする。  
だが。

滲んだ視界が隠れ切る前に、影が差し込む。

抜けるような青空を背に、今のエルザリースには憎たらしいほど  
整った顔が映った。

そして、彼女のはしばみ色の瞳と、空色の瞳が正面衝突を起こした。

「……………なに？」

「ーから鍛え直したいのであれば、ウルドの村に住んでいる樵きこりのへ  
ルメスさんと云う方を訪ねてみて下さい。

駆け出しの頃は、俺もその方に教わりましたから」

言い終わり、紫苑の顔はまた唐突に視界から消えた。

慌てて上半身を起こせば、既に紫苑は踵を返し、ログハウスへと  
歩を進めていた。

小さくなる背中をエルザリースは呆然と見続けた。

云いたい事だけ云って去る。

しかも相手の反応も見ずに。

気を遣われた？

思考が追いついた瞬間、エルザリースは急激に顔面温度が上昇し  
ている事を自覚した。

泣き顔を見られた事。

自分の方が年上なのに気を配られた事。

しかも冒険者になる夢を諦めようとする自分に対して、その言葉

はとても

「ずるい、でしょ」

不機嫌なものにも関わらず、打ちのめした相手への補いも忘れない。器量良し、実績有り、そして気配り上手と来れば魔導学院の女生徒も騒ぐ筈だ。

「ふ、ふふ」

エルザリースの中心部。

心の奥深くで熱が生まれた。

ふつふつ、と滾る『魔人の火炎舌』イフリータ・フレイムタンよりも熱い火溜まりだ。それは恋等という生温い感情では無い。

いつか一泡吹かしてやる。

エルザリース本来の気質。

強い反骨精神から起因する感情であった。

「ふんっ！」

脚を天に持ち上げ、掌を頭の横の位置の地面へ。

そして気合と共に手のバネの力で跳ね起きる。

制服のボックスプリーツスカートが捲られ、中の三角地帯が垣間見えようがお構いなし。

豪快に華麗に立ち上がったエルザリースは、小さくなった背中に向かって叫ぶ。

「次は！ 次は絶対に勝つからねッ！！」

今のままでは遠い目標だ。

紫苑には『糸繰り』という反則業が存在しているから不可能にすら近い宣言。

それでも。

それでも紫苑の後ろ姿を見るエルザリースの表情は、覇気に満ち満ちていた。

大見得を切った宣言に、紫苑が少しだけ振り返る。

その口元がほんの一瞬だけ柔らかくなったのは、エルザリースの気のせいだったのかもしれない

彼の三人娘が去ってから数刻。

紫苑とミオソティスが連れ立って畔の短い草が生い茂る場所に座っていた。

二人の傍らにはミオソティスの木製車椅子。

互いに言葉を交わさずに、ただ傍で寄り添い合う。時間がゆったり、と流れていた。

「失礼します」

紫苑とミオソティスの二人が真っ白な毛皮のソファアに寄り掛かっている時に、『彼女』の聲が耳朶をくすぐった。

太陽の光が木々を照らし、必然的に作り出される影の一つが盛り上がる。

そして影が一步、光溢れる世界に踏み出すと影は泡のように溶けて消え、残ったのは吸血鬼メイドが一人。

それは樹木の影を媒介にした転移魔術だった。

マナの動きに機敏なミオソティスは、メイドの登場に肩を跳ねさせて驚いた。

だが。

「アウン」

突如として姿を現したラヴァテラを意に介した様子も無く、紫苑達が寄り掛かっている毛皮のソファアが大きな欠伸を一つ。

マイペースでのんびり屋さんなシロに毒気を抜かれ、二人の忘れな草達はくすくす、と笑い合う。

触れ合った肩が互いに揺れた。

シロは笑う主人達が嬉しいのか、巨大なふさふさ尻尾をバタバタ、と振り回していた。

「シロさんは、本当にのほほんさんですね」

「全くです」

そう云って花々が風に戯れるように、また二人はシロを見て笑みを零した。

一頻り笑い合った後を見計らい、ラヴァテラが再び声を掛ける。場の雰囲気を変えない絶妙な声掛けのタイミングだった。

「宜しいでしょうか」

「はい、お待たせしました」

白い手袋に包まれた手を身体の前で組み、静かに控えていたラヴァテラが一步前に入る。

瞬間、音も無く彼女の影から手を模した影が伸び、その手に握られているのは装飾の施された手紙。

ラヴァテラは洗練された動作でその手紙を紫苑に手渡し、一步引いた。

「先程伝書鳩で届いたばかりで手紙です。冒険者ギルドからの急ぎの用件で御座います」

紫苑が受け取った手紙を見やれば、確かに冒険者ギルドの印が押されている事が確認できる。

そしてその表側には聖ティアラス共通言語で『至急』と書かれてあった。

渡された手紙の封を解こうと紫苑が立ち上がる。

確か、自室にはペーパーナイフが有った筈だと。

だが、それにラヴァテラが待ったを掛ける。

「お任せ下さい、シオン様」

トブン、とラヴァテラの地面の影が水面の如く揺れ、内面から細長い棒状の物体が飛び出す。

彼女は飛び出して来たソレを危なげ無く白手袋に包まれた手で掴み取った。

ソレの正体は、影が形作ったナイフ。

手紙を、とラヴァテラに促されるまま紫苑は封がしてある手紙を渡した。

す、とラヴァテラが淀み無く、迷い無く、影のナイフを封に通す。

一振り。

たったそれだけでラヴァテラは、見事に手紙の封を開けて見せた。

「あ」

其処ではたと紫苑は思い至る。

影の手と、影のナイフ。

そして脳裏に甦る真紅のドレスに、サファイアの髪を持つ吸血鬼の御姫様。

紛れも無くラヴァテラが使用していたのは『吸血姫』の固有技能だった。

親から子に受け継がれた御業。

その親を殺した人物は、紫苑自身。

「そのような顔をなさらないで下さい」

「……………今更かもしれませんが、ラヴァテラさんはこれで良かったのですか？ 俺にはとても考えられそうにはありません。大切な人を殺した相手と一緒に居るなんて」

え、と事情を知らないミオソティスが小さく戸惑いを零す。

知らず紫苑の表情筋は、心の根を現すかのように複雑に歪んでいた。

ただ、その深い海色の瞳だけは、ラヴァテラを離さずに捉えている。

「何時かは……………来なければならぬ最期の時でした。お母様の死は、シオン様がお生まれになるもう何十年も前から覚悟をしております。

だから、シオン様 誇って下さい」

「え？」

「それが私のお母様に対する手向けになります」

宝物の触る手付きで胸に手を当て、独白のように言葉が紡がれた後、眼鏡越しに紫紺の輝きが紫苑を真っ直ぐに見詰めた。

十秒、或いはそれ以上に二人は見詰め合っていたかもしれない。少なくとも紫苑にはとても長い刻に感じられた。

そして。

「ラヴァテラさんは、とても……とても……とても難しい事を云うのですね。殺した人の娘を前にして誇れ、なんて」

触れれば壊れてしまいそうなくらい、紫苑は儂く微笑んだ。

敵同士ならば良かった。

赤の他人のままならば良かった。

そうすれば痛痒も、心を乱す波紋も感じる事など無く居られた。しかし。

触れ合ってしまった。

同じ時間を共に過ごしてしまった。

ラヴァテラという個人が既に、ほんの僅か紫苑の世界の一部分となっていた。

「でも、貴女がそれを望むなら　誇ります。水鏡紫苑は、マ

ルヴァと云う最も偉大で気高い吸血鬼の姫君を滅した事を生涯誇り続けます。

他の誰でも無い俺自身がそう決めました」

掌を心臓の上に。

魂に刻み込まれる宣誓。

ざあ、と葉擦れの音色が木霊し、風が二人の間を悪戯に通り抜けた。

その瞬間。

ふっ、とラヴァテラが仮面のように固い表情を緩め、口元だけで笑みを形作った。

蕾が綻ぶような、雪解けのような微笑。

それはラヴァテラが共同生活を送り、初めて表に出した喜びの感情であった。

「その御言葉、心の奥底より嬉しく思います」

そして。

ラヴァテラは何時ものように、完璧で流麗な一礼をした

「貴重なお時間を取らせてしまい、申し訳が有りません」  
「いえ、お互いにとって大切な事でしたから。こう云ってはあれですが、なんだかラヴァテラさんとの距離が近くなった気がします」  
「そう仰って頂けると幸いです。私もシオン様の事が今まで以上に近しく感じられます」

云った後に互い笑みを交わし合う。

紫苑はひっそり、と月下美人が花開くように。

ラヴァテラは雪下から芽吹くように。

本人同士にとっての通過儀礼は、確かに二人の心的距離を近い

物にしていた。

「シオン様。お手紙の内容をご確認されては如何でしょうか？」

指摘を受けて紫苑はそういえば、と冒険者ギルドからの手紙の存在を思い出した。

封書に記載された『至急』の文字は、まさしく急ぎの用件であるう。

紫苑は手に挟んだ封書から中の便箋を抜き取り、内容を確認し始めた。

瞳が便箋に記載された文字の羅列を追う。

時を経る毎に紫苑の顔付きが真剣になっていく。

その様子を場の雰囲気で敏感に感じ取ったのはミオソティス。

「またすぐに行ってしまうのですか？」

「はい、巡り合わせの良いというか、悪いというか」

ちらり、と紫苑は困った風にラヴァテラを見やった。

「我が主マルヴァ様の事についての用向きでしょうか？」

ラヴァテラの問いに頷いて肯定の意を示す。

彼女はその事について表情を崩さず、事実をありのままに受け止めている様子だった。

「王都から『吸血姫』事件について事情聴取をする為に聖騎士団の方が来られるそうなので、一度ラタトスクに来て欲しいとの旨が書いてありました。」

それと今回の件は『ラストワルツ・フュルツェン吸血姫円舞曲』と呼ばれるようになったそうです。なんだか名付けた人は、詩人さんですね」

「そうですね。マルヴァ様は踊りが堪能でしたので相応しい名だと  
思います」

ラストワルツ・ブラッドプリンセス  
『吸血姫円舞曲』。

そのフリーズがラヴァテラの記憶の琴線に触れた。  
まだラヴァテラが吸血鬼に成り立ての頃まで遡る。

淑女たる者という口癖と共にマルヴァは、様々な事をラヴァテラ  
に教え込んだ。

盤上の駒遊び（チェス）、

ワインの味わい方、

ナイフ捌き、

高度な法則魔術等々。

本当に様々な事をラヴァテラに手ずから教えた。

母が娘に教えるように。

舞踏もその一つだった。

踊る相手は勿論『吸血姫』マルヴァ自身。

成程、母の最期を飾る相応しい歴史的事件の名ではないか。

母の名が後世にまで語り継がれる。

吟遊詩人が唄い継ぐ限り、人々は『吸血姫』の事を忘れない。

ラヴァテラにとってそれは素晴らしい事に思えた。

「シオン様、留守はお任せ下さい」

「はい、宜しく願います」

「ミオソティス様、少し失礼を致します」

おもむろにラヴァテラはミオソティスに近付き、彼女を横抱きに  
抱き抱えた。

紫苑と同程度の体格である褐色の身体は、驚くほど軽々と持ち上

げられた。

のしり、と寄り掛かる者が居なくなった毛皮のソファアが立ち上がる。

隆々とした巨体の瞳は、紫苑の出立をしかと理解していた。

「シオンさん」

メイドの介護により木製車椅子に寄せられたミオソティスが紫苑の名を呼ぶ。

まっすぐ伸ばした背筋。

膝の上で重ねられた掌。

褐色の肌に巻かれた包帯の奥が紫苑を見ていた。

「傍に居てくれて嬉しかったです。私なら大丈夫です。

此処には、シオンさんが返ってくるこの場所には、ダークエルフだけでは無い私自身として接してくれる優しい人達が居ますから」

だから私は大丈夫です。

幸せそうに。

今が本当に幸せそうにミオソティスは、紫苑に告げる。

ミオソティスにとって同族の差別など心を痛める理由にはならない。

紫苑に買われ、今という時間を好きな人達と過ごさせている。

それは二度の奇蹟。

三度目を望まなくて良いほどの奇蹟だった。

「そう 良かったです」

笑顔は伝染する。

紫苑はミオソティスに日溜まりの笑顔でそう答えた

夕焼けの斜陽が交錯都市を染める。

街の中心部。

夕日の色合いを投影する水が吹き出す噴水広場で、一人の女性が街の子供達と戯れていた。

否。

戯れていたという表現には語弊がある。

よく観察してみればベンチに座る女性を子供達が一方的に纏わり付いている、と云った方がより近い表現だった。

「すっげー！！ ねえちゃん、騎士団の人なんだー！！」

「すごい、すごい」

「お姉ちゃんつよいのー？」

子供特有の底無しの元気。

それを一身に受ける女性の容姿は、とても整った物だった。外見から判断できる歳の頃は十七、八だろうか。

すっ、と通った鼻梁に、切れ長の瞳。

若草色の髪の毛はとても長く、腰まで後ろに流してある。

その若草の上に女性は、青いリボン紐が付いた濃紺のベレー帽を被っていた。

そして。

彼女が纏う服装は女性らしさを醸しながらも戦装束であった。寒色系のフリルスカートワンピースの上に着込んだコルセットに似た軍服。

腕と脚には女性的な丸みを帯びた銀の輝きを放つガントレットとレギンス。

傍らには彼女の背丈ほどある細身の十字槍がベンチに立て掛けてある。

極めつけは、彼女の二の腕に巻かれた腕章である。

それには彼女　メルトラルトがバル・イス聖騎士団の副団長だという証であった。

しかし。

「あゝソレ重たいから危ないよ」

メルトラルトには誇り高き聖騎士団の威厳が、壊滅的に足りてなかった。

黙っていれば硬質的な美貌も、彼女が常に眠たげな目をしているのでその役割を果たしていない。

獲物である十字槍を勝手に持とうとした男の子に対しても、間延びした口調で注意を促すだけ。

「ねえちゃん、ねえちゃん！　その腕に付けてあるやつ見せて、見せて！」

「んゝ、良いよ」

少し小首を捻り、若草色をした長髪を揺らした後、メルトラルトは軽い調子で了承。

聖騎士団の証である腕章を子供に手渡した。

「おおー！ すっげー、カッコいいー！」

「僕も見せてー」

「私も見たい、見たい！」

手に入れた憧れの聖騎士団の腕章を夕日に掲げてはしゃぐ男の子。それに子供達がわいわい、と群がる。

メルトラルトはそんなラタトスクの子供達を相も変わらず眠たげな目でのんびりと見ていた。

暫くして、クロウと呼ばれる真っ黒な鳥が鳴く時刻になり、子供達は一人、また一人と家路へと着いていった。

やっとのんびりできる、と座ったまま身体を伸ばす。

瞳は終始半目のままだ。

すると其処に長い長い夕日の影と共に、慣れ親しんだ声が聞こえてきた。

「相変わらずだな、メルトラルト。私はお前が本当に騎士団で副团长を務められているのか心配でならんよ」

「や、姉さん、久しぶり」

ベンチの背後から現れたのは夕陽よりもなお紅い髪。

事前に気配に気付いていたのか、メルトラルトは驚く事も無く、挨拶を交わす。

今の紅髪の女性は、冒険時の装束とは異なり軽装だった。

メルトラルトと同じくガントレットとレギンスを付けたのみ。

相違点はその防具が燃えるような真紅だと云う事。

後は飾り気の無い服装。

「まあ壮健そうで何よりだ。此方には『吸血姫』の件でか？」

「ん、それと領主の変死についての調査と引継ぎまでの事務処理。まあ領主については魔術の痕跡も無いから殆ど病死で間違いないって報告が届いてる」

成程、と紅髪の女性が一つ頷く。

そして彼女はメルトラルトに良く似た硬質の美貌を少し緩める。細くなった目元が妹を慈愛に満ちて映していた。

「ならば久々に三人揃うか。お前は宿を既に取っているのか？」

「ん、暫くは領主館で部下と寝泊り。でも時間なら作れるよ？」

「それは僥倖」

腕組みをした紅髪の女性が、メルトラルトが告げた言葉に口角を上げた。

「ソプラが寂しがってたよ？ 姉さんは街に居るのに会いに来てくれないって」

「アイツとてもう十八だろう。姉離れが出来ぬ歳では無い。それにそう学院まで用事も無いのに足を向ける訳には行かぬさ」

そう云って肩を竦める。

その仕草がやけに様になっていた。

それに、と彼女は続ける。

「私はこれでもそこそこ有名だからな。学院に赴けば噂も立つ。それがお前達の母親の耳に入れば良い顔をしないだろう？」

垣間見せた寂しげな表情。

紅髪の女性とメルトラルトは、腹違いの姉妹だった。

流れるしめやかな空気。

しかし、メルトラルトの口から爆弾が投下され、湿った雰囲気を打ち壊した。

「後、姉さんに恋人が出来たからみたいだから早く紹介して欲しいって手紙に書いてた」

「ぐっ！ な、何！？ 何故アイツがソレを知っている！？ だ、大体勘違いしているぞ、あの馬鹿者は恋人では無く単なる弟子だッ！！」

「通りで仲良さそうに歩いてたって書いてた。後、あの馬鹿者って誰？」

「ぬぐッ」

口を滑らし、致命的な墓穴を掘ってしまった紅髪の女性。

メルトラルトは眠たげな半目ではあったが、その奥の瞳は興味深げな光が見え隠れしていた。

やはり彼女も姉の恋人が気になる様子だった。

だが。

副団長、と遠くで大きく呼ぶ声が聞こえた。

声のする方を二人で見れば、噴水広場に続く石畳の通りの先。

聖騎士団の格好と腕章をした若い男性が二人の下へ向かって走って来ている。

「また仕事をさばらないで下さいっ！！」

「……」

「……」

叫ばれた内容で姉妹の間に地獄のような沈黙が降りた。

眠たげな目をしながら居心地悪げな妹。

ぼつり、と姉が小さく呟く。

「……さぼったのか？」

「……」

「……仕事、さぼったのか？」

「……ちよこつと」

文字通りの鉄の拳骨が、ベレー帽越しに落とされた。

頭蓋と鉄。

二つを強かに撃ち付けられる音が夕暮れ時の噴水広場に木霊した。

「このっ、大馬鹿者がッ！！」

「あうっ、頭が痛いっ」

烈火の如く怒りを露わにする紅髪の女性。

紅に染まるポニーテールを揺らめかせ、背後で怒気の気炎が燃え立つ。

一方で傍から見ても痛々しい拳骨を喰らったメルトラルトは、その場で蹲り、眼の端に涙を溜めていた。

それから始まる姉の長き説教地獄。

漸く噴水広場に辿り着いた聖騎士団員は、目の前で繰り広げられている光景に目を白黒させた。

何故か正座をしている自分達の副団長。

その副団長に良く似た顔立ちの女性が腕を組み、怒涛の言葉責めをしている。

これがアルトリーゼ「クルスバークとメルトラルト」クルスバークの姉妹間で頻繁に見られる何時もの光景であった

あとがき

『クルスバーク三姉妹の名前』

・アルトリゼ アルト

・メルトラルト コントラルト

・ソプラ ソプラノ

このように音楽用語になっています。  
気付いた人は居るかな？

## 第??章 『母親』

「やゝ、一仕事終わり〜」

「貴様は何も働いては無いだろうが」

ぐでー、と黒革張りのソファーに寝転がり軟体生物のように力を抜くメルトラルト。

硝子テーブルを挟んだ対面で長い脚を組んで座り、妹の醜態と職務怠慢ぶりを窺めるアルト。

二人が現在居る場所は、冒険者ギルド・ラタスク支部の応接間。理由は『吸血姫』討伐の事情聴取の為だ。

だがメルトラルトが直接聴取を執り行ったわけでは決して無い。

「あはは、良いんですよ、クルスバーク副団長のお姉さん。副団長付きの補佐官となった時からこの程度は想定無いですから」

「家の妹が本当に申し訳無い」

「いえいえ」

メルトラルトがだれているソファーの横に立つ聖騎士団員の青年。歳の頃はメルトラルトとさほど変わり無いであろうまだ年若い顔立ち。

顔の作りは柔らかく、年上の女性に人気のある甘いマスクだった。

しかし、優男風な外見と細身でありながらも魔銀製の鎧を着込んで芯が一切ぶれないのは流石と云った所か。

そして。

『炎獅子』に頭を下げられている茶髪の彼こそメルトラルトの代わりに事情聴取を執り行なったその人であった。

「でもやはり直接『吸血姫』に相對した『少年アリス』が来てくれない事には、詳細を聞けそうにもありませんね」

「すまんな」

「いえ無理も無いですよ。『ギンヌンガガップの大蛇潰し』で知られる『霜の鉄鎚』ゴルデイスを相手取っていた訳ですし。

しかし流石副団長のお姉さんですね。操られていたとはいえ彼ほどの冒険者を相手にしても一切手傷を負っていないのですから」

「まあ、単純に暴れるだけの輩にそうそう遅れを取りはしないさ」

謙遜でも無く、純然たる事実。

故に尊敬の念を込めるメルトラルト付きの補佐官　フェイランの視線を軽く受け流すアルト。

美しい脚線美を誇る足を組み、腕組みをしてソファアに佇むアルトにフェイランは一種の感動を覚えていた。

似た顔立ちの姉妹なのに、性格が違えばこうも違うのか、と。方々凜然とした態度を崩さない姉。

方や呆然とした態度を貫く妹。

正反対だ。

容姿以外で血の繋がりを疑ってしまうくらいには、二人の性格は掛け離れていた。

「メルトラルト」

姉妹の神秘を目の当たりにしていたフェイランにアルトの妹を呼ぶ声が耳を打った。

何事かと思えば、眉間には若干の皺が寄っている。

顰めた硬質の双眸は、妹のある一点に注がれていた。

「しゃんとしる馬鹿者。スカートが乱れているぞ。部下とはいえ此処には男の眼もあるのだぞ」

「平気平気」。いつつこんな感じだもん。姉さんこそ、そんなにおっぱい強調したらフェイ君の目に毒だよ」  
「む」

間延びしたメルトラルトの切り返しにフェイランの眼が彷徨う。ちらちら、と視線を這わせれば、聖騎士団で鍛えられた動体視力があられもない映像を運んでくる。

捲れたワンピースのフリルスカートの中から覗くメルトラルトの太腿。

組んだ腕に乗り、前に突き出される形となったアルトの双丘。更に。

姉と同じく豊かな果実を実らせるメルトラルトの乳房はうつ伏せの為、ソファアで柔らかく形を変えている。

これ以上は駄目だ、とフェイランは目を背け、横を向いた。其処にアルトからの一言が降る。

「ふん、エロめ」

「あんまりフェイ君苛めないでね。良い子だから」

「確かにまだ垢抜けては居ないようだが、入団して幾つだ？」

「んと、確か二年」

メルトラルトは眠たげな目のまま姉の質問に答える。

アルトが視界に話題の人物を移すと、其処には顔を若干朱に染めて明後日の方向を向くフェイランの姿。

「そ、そんな事よりも『少年アリス』はどんな人物なんでしょうか？ 『白狼王』を使役しているとの噂は王都まで届いておりますし、トウオネラ平原の殆どを凍り付かせた破壊痕を見た時は流石に背筋が震えました。あれが数日経つての状態なんてとても信じられませんか」

露骨に話題を逸らそうとするフェイランに、苛めすぎたか、とアルトは矛槍を収める事にした。

僅かな間だが確信が一つ。

それはこの青年が妹に思慕の念を抱いている事。

女の勘がその事実を告げていた。

しかし。

「随分とまあ難攻不落の砦に挑んだものだ」

「あ、あの何か？」

「いや何でもなし。それよりシオンの事についてだったか……ふむ、一言で云えば『少年アリス』、この一言に尽きるな。」

誰が名付けたか知らないがなかなか上手い事を云う」

フェイランの追及を無造作に躲し、アルトは暫し黙考する。

『少年アリス』、『黒アリス』、『狼王の君』。

知人である紫苑を表す二つ名は、およそ三つ。

どれもが女性的な意味合いを持っている語句が含まれているのは流石と云うか、当然と云うか。

兎に角、紫苑を客観的に見た時、第一に目を惹くのは容姿に間違いないであろう。

「あの、済みません。全く分からないのですが」

「まあ、こればかりは口で説明するよりは実物を見た方がよほど早いのだがな。」

要はシオン お前の云う『少年アリス』は男でありながら容姿は少女のようなのさ。それも初見ではまず分からん程の、な。

実際私も未だにシオンが男だとは見えん」

「まさか、本当ですか？」

アルトの説明にフェイランは些か懐疑的だった。彼の人生経験の中でそのような人物に会った事は過去現在において一切無い。

第二次性徴が始まっていない頃であればまだしも、人間である『少年アリス』の年齢は十五歳前後と調査してある。

故にフェイランはアルトの言を多少の誇張表現が入ったものだと結論付けた。

其処へ。

コンコン、と応接間の扉をノックする音が響く。

「失礼します。『少年アリス』様がお見えになりました」

「ん、わかった。通して」

「畏まりました」

ギルドの女性職員が入室し、『少年アリス』来訪の旨を伝えた

## Original Novel

### 追憶のシオン

#### 第??章『母親』

ちよこん、と応接間のソファーに座らされた紫苑。

傍らには尊大な態度で踏ん返り返る秘蹟礼装で球体関節人形なバ

ル。

一人と一体が腰掛けてもソファーには、まだ幾分か余裕がある。そのソファーの余白が紫苑の幼い身体を強調しているようであった。

「あの、何か？」

ちりん、と鈴の転がる声で紫苑は先程から頻りに視線を送ってくる人物に尋ねた。

その人物　フェイランは、紫苑入室から現在まで目を擦ったり、白黒させたりと忙しなかった。

理由は言わずもがな。

ある意味で紫苑との邂逅は、未知との遭遇に近い物があった。

「い、いえ失礼しました！　何でも御座いません」

「おい下郎。あまり妾の紫苑に不躰な視線を送るでないぞ」

「こら、バル」

じろり、とねめつけ、辛辣な言葉を吐き掛けるバルを紫苑が窘める。

紫苑としては十数年もの間で慣れ親しんだ反応なので特に思う所は無い。

逆に柔らかな表情を崩さずに尋ねてみる。

「やはり物珍しいですか、俺の顔は？」

「え、俺？　いえ、あの」

質問にしどろもどろになってしまうフェイラン。

誇張表現と思っていたアルトの言葉がその通り、否、それ以上になつて現実の物となつたのだ。

フエイランの動揺は暫く収まりそうに無かった。  
くすり、と紫苑はそんな彼の様子に控えめな微笑みを零した。  
その拍子に部屋の照明を艶やかに反射する長い黒髪が揺れる。

「ふん、私の云う通りだっただろう」  
「すごい。本当に女の子の顔だ」

壁際に腕を組んで寄り掛かっているアルトが口の端を上げ、少し得意げになって云う。

その姉の言葉に対面のソファでメルトラルトも同意。  
間延びした感嘆の声を上げ、ぱちぱち、と手を叩いた。

そのままメルトラルトは硝子テーブルに両腕を付き、まじまじと紫苑の顔を観察する。

前のめりになった体制。

二つの水蜜桃を二の腕がきゅっ、と寄せて、背中のならかなラインを強調させていた。

「ふん。ぶにぶに、ぶにぶに」  
「あ、あの……？」

何を思ったのか、メルトラルトは半目で紫苑の頬を突き始めた。  
しっとりとした絹肌が指先で押され、離れる時には瑞々しい果実のような張りがあつた。

別の場所ではたわわに実り、お椀型になった双子桃がぶるんぶるん、と突く度に重たそうに揺れる。

だが、メルトラルトの奇行が唐突に終わる。  
他ならぬ姉の手によって。

「止めぬか、愚妹が」  
「あいたっ」

「わざわざ出向いて貰ったんだ。無駄な時間をシオンに使わせるな」  
目に余る行為に、アルトは妹の頭部を強かに叩く事によって強制終了させた。

暫し痛みに堪えた後。

これ以上怒られては堪らないと、殴られた拍子にずれたベレー帽を直し、メルトラルトは居住まいを正した。

「ん、初めまして『少年アリス』君。私はメルトラルト「クルスバ」グだよ。一応バル・イス聖騎士団の副団長だよ」

「ご丁寧にどうも。俺は御存知かと思いますが水鏡紫苑です。宜しくお願いします」

瞼が半分落ちてしているメルトラルトの自己紹介は、その肩書きに似合わぬ気の抜ける物だった。

それに対し、紫苑はきちんと背筋を伸ばし、お手本のような一礼で初対面の挨拶を交わす。

アルトは、その光景を見ながら年下の紫苑の方がしっかりと礼儀を弁えている事実にも、軽く絶望した。

「アルトさん、一つお訊きしても良いですか？」

「む、なんだ」

「此方の方はひょっとして」

「ああ、気が付いたか。恥ずかしながらコイツは見ての通り私の妹だ」

よほど嫌なのか、アルトの紹介は、ぞんざいで投げ遣りな風だった。

世間一般では最上級の名誉である聖騎士団副団長としての肩書きは、姉の前では紙屑も同然。

長年連れ立ってきたアルトには何らプラス修正にならなかった。

「この方もアルトさんの妹さんだったのですね」

「む？」

「およ？」

美貌の姉妹はびっくり、と反応を示す。

紫苑の言い回しは、彼女達の末妹を示唆している内容。  
つまり。

「ソプラに会った事があるのか、シオン」

「はい、今日のお昼過ぎ頃に尋ねて来られて、少しばかりお話をさせて貰いました」

「世間って案外狭いね」

其処から会話の花が開く。

ソプラとの出逢いの事。

何故ソプラが紫苑を訪ねて来たのかと云う事。

紫苑が『山猫の爪』を討伐した際に、救出した女生徒の友人だと答えると二人は納得の色を見せた。

更に話題は二転三転して行く。

近年の情勢。

アルトの恋人であるヤドックの恋の進展。

聖騎士団の規律が厳しい事について。

果ては近頃ラタトスクにオープンした美味しいレストランの事等々。

話題は次から次へと湯水のように沸いてきた。

朗らかに談笑し合う三人と一体。

その間、何故かフェイランは紅茶と茶菓子を給仕する役割を担っていた。

これでは駄目だ。

若き聖騎士団員フェイランは心内で叫んだ。

このままでは職務である『吸血姫』討伐の件も話題の一つとして終わってしまう。

ぐっ、と握り込んだ手に汗が滲む。

だが云わなければ。

その強迫観念とも置き換えられる焦燥感が彼を駆り立てた。

「メルトラルト副団長！ 時間も押してますから聴取を行いたいのですが」

麗しい女性達の話し声がびたり、と止んだ。

視線がフェイランに集中する。

四対の瞳に注目され、気圧されそうになるがフェイランは丹田に力を込めてぐっ、と堪える。

生唾を嚥下し、沙汰を待った。

「ん」

部下の申し出にメルトラルトは考える素振りを見せる。

ルージュを引いたような赤い唇に指先を当て思案する仕草にフェイランの焦点は知らずその唇に吸い込まれていた。

そして。

ぼん、とメルトラルトが手を叩いた。

「良いよ良いよ、フェイ君。私がやっておくから」

眠たげな瞼を崩さず、メルトラルトはひらひら、と手を振って提

案をやんわりと跳ね退ける。

くるり、と向き直り彼女はお茶菓子に出されたクッキーに手を伸ばす。

思考の翼は既に先程の会話の続きに向いていた。

ならば、とフェイランは伝家の宝刀を抜いた。

「でしたらメルトラルト副団長、調書の作成に自分は一切手伝いませるのでご容赦ください」

快刀乱麻。

反応は劇的であった。

「そ、それはちょっと困る」

事務仕事の殆どを補佐であるフェイランに任せきりのメルトラルトは焦る。

最近では何時筆を持ったかさえ記憶が曖昧だ。

更にメルトラルトは文字列が続く書類を見ると条件反射的に瞼が落ちる。

そんな体たらくの彼女に調書の作成は、まさに苦行。

「なら話の腰を折って申し訳ありませんが、自分がミカガミ・シオン殿に聴取を行って良いですね」

「ん、任せる」

即答だった。

アルトは妹の日頃の職務怠慢に改めて頭を抱え。

紫苑はその横で、脳内で築いていたバル・イス聖騎士団のイメージを壊されていた。

「書類仕事って大変なんですね」  
「遣り方さえ分かれば猿でも出来るわ」

紫苑のフォローは、バルの言葉の刃によってにべ無く斬り捨てられた

フェイランによる事情聴取は恙無く終わった。  
と云っても紫苑が全てを離れた訳では無い。

『吸血姫』の血と力を継承した吸血鬼メイド、ラヴァテラ＝ローゼンクロイツ。

その存在については、聴取の中で伝えなかった。

『吸血姫』の消滅に伴い、彼女の全ての系譜は死滅した。

そう共和国の賢人議会に報告される事になるだろう。

出なければラヴァテラが平穏な生活を送る事など出来はしないのだから。

すっかり日も暮れ、精霊灯のランプが街に灯る時刻。

冒険者ギルドの建物の前で聖騎士団の二人は、紫苑達の見送りをしていた。

ギルド建物の扉から漏れた明りが、紫苑達に影を作っていた。

「貴重な時間を取って頂き有難う御座いました。自分はこれから調書の作成に入りますのでお疲れ様です」

「妹を扱き使ってくれても構わなので、とりあえずこの馬鹿に仕事をさせてやってくれ」

「はは」

心底疲れたようにアルトはフェイランに言付けた。

今日一日で妹が戦闘面以外で如何に無能なのかが身に染みて分かっってしまった彼女の苦悩は深い。

酷く精神的に疲労しているアルトに掛ける言葉は無く、フェイランは乾いた笑いを零すのみ。

「あつ」

「えつと、ご愁傷様です？」

「まあ、責務を放棄して上に居られぬという事じゃな。励めよ小娘」

打ち拉がれ頭を垂れているメルトラルト。

落ち込む彼女に紫苑の励ましののような言葉と、バルの格言じみた言葉が贈られた。

「そろそろ行くか。では妹を頼んだぞ、フェイランとやら」

「はい！ お任せ下さい、お義姉さん！」

「ええ、フェイ君までそんな事を云うの？」

「い、いえそれは」

「後でお礼するから、書類仕事だけは勘弁して〜」

「お、お礼!？」

真紅のポニーテールを翻し、『炎獅子』が冒険者ギルドを去る。

『少年アリス』と秘蹟礼装『バルトアンデルス』がそれに続く。遠くなる背後から、聖騎士団員二人の掛け合いが聞こえていた。

思わずアルトは、顔に手を当て、腹の底から深い深い息を吐かねばならなかった。

「あの愚妹に百分の一でも良いからシオンの真面目さの分けてやりたいな」

呟かれた愚痴は、暫くラタトスクに漂いそうなほど重苦しかった

「部屋は空いていないですか、やっぱり」

「御免ねー、シオンちゃん。今日は特にお客さんが多くて部屋がいっぱいな」

紫苑の少々落胆した声が控え目に響いた。

宿屋『渡り鳥の止まり木』の受付カウンター。

若女将リアトリアが細い眼を更に細めて帳簿と睨めっこしていた。しかし、幾ら宿帳を睨み付けようと其処に記載されている物に変わりはない。

即ち満部屋という事実。

あらあらどうしましょう、と掌を頬に当てて困り果てるリアトリア。

「時期が悪いな。『吸血姫円舞曲』のせいで一時ラタトスクの都市機能が麻痺していたから、反動で今の時期は何処も人でごった返しているぞ」

隣でアルトが現在の交錯都市ラタトスクの内情を説明してくれた。紫苑とバルは、ウルドの村から一直線に冒険者ギルドへ向かった為、予め宿を予約する事が出来ていなかった。

かと云って今から宿探しをするのでは状況があまり芳しくない。

「仕方あるまい。何処ぞで宿を見つけるよりシロに乗って帰る方が良からう」

「あら、それは危ないわよ」

「うむ、幾ら『白狼王』が居るとはいえ、無駄に危険を冒す必要は無い」

切り替えの早いバルに、二人の大人が待ったを掛ける。

年齢を鑑みれば紫苑はまだ十五。

冒険者としてある程度実績を収めているとはいえ、彼女達の常識と感性が、夜闇の中に放り出す事を是としなかった。

「でも、今から宿を探すにしても少し遅すぎますし」

「私の部屋に言えば良い。少し手狭になっってしまうが、シオン位なら十分なスペースがある。奥方もそれで良いか？」

「うーん、宿側としてはお客さんにあまりそういった事をして欲しくは無いのだけれども……………そうだ！」

名案を思い付いた、とリアトリアの眼が僅かに見開かれる。

そのままパタパタ、とスリッパを鳴らし受付けカウンターから出てきた。

紫苑の横まで近付くと、柔らかく長手袋越しの手を両手で包み込

む。

そして、顔を寄せて一言。

「シオンちゃん、私の部屋に来ない？」

まるでそれが最適解であるようにリアトリアは目を輝かせて云った。

「え、でもご迷惑では」

「良いの良いの。シオンちゃんみたいな可愛い子が泊まってくれらなら主人だつてきつと喜んでくれるわ。」

そうしましょ、そうしましょ」

既にリアトリアの中で紫苑の宿泊は決定事項になっていた。

紫苑の遠慮は言い切る前に押し潰される。

そのままぐいぐい、と繋がれた手を引っ張られ、リアトリア夫妻の居住スペースへと連れて行かれそうになる。

何処にそんな力があるのか、リアトリアの紫苑を引く力はかなり強い。

巨人族の力でもびくともしなさそうなオーラが出ていた。

紫苑は珍しくどうしたらよいか分からない、といった表情。

故に、先輩冒険者に向けて捨てられた子犬のような目線を送った。

「折角の好意だ。甘えておけ」

しかしアルトの答えは無情。

部屋の奥へ消えていく悲しげな紫苑の表情が、やけにアルトの脳裏にこびり付いた。

後に残るは無人の受付カウンター。

従業員の居なくなつたロビーにアルトは大丈夫なのだろうか、と

今更ながら懸念を抱かざるを得なかった。

「しかし珍しいな。シオンがあればほど途方に暮れる姿なぞついぞ想像だにしなかった」

「あれで紫苑は母親と云うものを知らぬからの」「む?」

「紫苑の母君は、紫苑を生んですぐに亡くなったそうじゃ。故に紫苑にとって、ああいった自分を娘のように接してくる者は未知。大方どう対処してよいか分からぬのじゃろうよ」

訳知り顔でバルは肩を竦めた

『水鏡百合香』。

それが紫苑の母の名だった。

涼やかで、たおやかな身体の線。

黒曜石のように深い色合いを放つ大粒の瞳。

流れるように長い絹の黒髪。

一房に結わえられた黒絹から覗くうなじからは匂い立つ女の香。

まるで精巧な日本人形を人間にし、そのまま大人にしたかのよう  
な完璧な美貌。

大和撫子。

その言葉が誰よりも似合う女だった。

開け放たれた窓から風が迷い込んでいた。  
迷い風が悪戯にカーテンをそよがせる。

室内にポツリ、と一つだけ据えられたベッド。

その上で『彼女』が窓の外を見ていた。

簡素な作りの病院服を纏い、物憂げに空を見る彼女の横顔は儂く、  
百合の花のように美しかった。

そして。

その腕で抱かれているのは、タオルに包まれた赤ん坊。

彼女　百合香は腕の揺り籠ですやすや、と夢の中にいる赤ん坊  
を時折、慈愛に満ちた瞳で見詰めていた。

「身体の具合はどうだ」

突然。

たった二人だけの世界に音も無く現れた侵入者。

だがその侵入者は決して招かぬざる客ではない。

寧ろ恋人のように、夫のように、恋い焦がれ待ち侘びた人物であ  
った。

その証左。

振り向いた百合香の顔に、花咲くように色が灯る。

色の名は愛。

「あなた。変わりませんね、そうやってすぐ気配を消して  
背後に立つ癖」

「最早半ば習慣付いている物だからな。直せと云われても早々無理  
だ」

「直さなくても良いですよ。それを含めて愛していますもの」

百合香の黒曜石の瞳に、夫が映っている。  
深い。

大空を凝縮して硝子玉に収めたかのような、そんな宝石の瞳を持つ男だった。

日本人とは異なる彫の深い顔立ちの男は、百合香の傍らに近付き、抱かれる赤ん坊の頭を撫でた。

「お医者様が云うにはもう 長くは無imiたい」

透明だった。

小振りな桜色の唇から奏でられた声は、あまりにも透き通っていた。

そして。

その内容は、残酷で約束された別離を意味していた。

「そう、か………私は、私には何が出来るだろうか。私に別の生き方を教えてくれたのはお前だ。人を愛する事も、人に愛される事も。」

どうすれば良い、どうすれば私はお前に報いられるだろうか？」

絞り出された声は、静かに、その裏側では慟哭に満ちていた。

人を殺める以外に術を知らなかった機械人形。

それが彼だ。

彼を機械人形から人間に戻したのも百合香なら、彼を苦惱させているのも百合香。

百合香は、目の前で標を失った迷い子のような夫に、くすり、と蕾のような笑いを漏らす。

「仕方の無い人。此処に居るではありませんか」

そう云つて、百合香は腕の揺り籠の中身を見た。  
其処には二人の愛の結晶が安らかに眠っていた。

百合香は自分達の愛しい子に向けて微笑みかけると、夫にも微笑みかける。

「この子を愛してあげて下さい。不器用でも、不格好でも、精一杯愛してあげて下さい。この子が誰かを愛せるように。」

そうしたのなら、あなたは立派な父親ですよ」

「そうか……そうだったな。私は、その子を愛せるのだったな」

「はい。大丈夫、私を愛してくれたのですから心配なんかしていませんよ」

そう云つて百合香は柔らかく目を細める。

男の暗く長い血塗られた道程の中で差し込んだ光。

二人が初めて出逢つた時のように彼女は笑っていた。

そして、大事な宝物を見せる子供のように彼女は言葉を紡ぐ。

「紫苑。この子の名を紫苑と名付けましょう」

「確か、忘れな草の別名だったか」

「はい、ヨーロッパのお話で有名な忘れな草とは別物ですけど。花言葉は『君を忘れず』。」

ふふ、こうしておけばあなたがこの子の名前を呼ぶ度に私を思い出してくれるでしょう?」

「これからの人生でお前の事を忘れる時など有りはしない」

口説き文句じみた言葉を平然と吐く紫苑の父親。

百合香は真顔でそんなことを云う夫に頬に朱を散らしながら面映ゆそうにしていた。

「紫苑という花は踏まれても、自分で立ち上がる事が出来る強い花。

「この子にもそうなって欲しいです」  
「なるさ。私とお前の子なのだから」

そして、百合香は窓に切り取られた遠くの空を見上げた。  
穏やかな午後の日差し。

遠くで病院の庭に植えられた樹の葉擦れの音色。

白く清潔すぎる病室。

腕の中には愛する人との愛しい子。

嗚呼、幸せだ、と心から思う、想う、オモウ。

「ねえ、あなた。私はそろそろ逝きます」

「……ああ」

また、迷い込んだ風が百合香の黒い髪を攫った。

百合香の匂いが風に乗って男の下へと届く。

まるで、証を残すように、自分の物だと主張するように。

「この子が一人でも大丈夫になるまで育ったのなら  
あなたは迎えに来ます」  
私は、

ぞつ、とするほどに凄艶な黒百合の髪。

深い、深すぎる濁った黒曜石の双眸の深淵。

病的なまでに繊細で白い絹肌。

紫苑をそのまま成長させたような絶世の美。

その口から、呪いのように言の葉が紡がれる。

呪縛の遺言に紫苑の父親は穏やかな笑みを浮かべた。

「ああ、その時を楽しみにしているよ、百合香」

心の奥底から言葉。

紡がれた宣誓に百合香はまた日溜まりのような微笑みを湛えていた。

その後。

容体が急変した百合香は、間もなくこの世を去った。

百合香の死から十数年の時が流れ、赤ん坊だった紫苑が母親の面影を色濃く残し、蝶が羽化するように可憐に成長した。

そして。

今日のような穏やかな日の中で、紫苑の父親も眠るように、穏やかに亡くなった。

原因不明の急死。

まるでそれは百合香があの日と迎えに来たような死だった

暖かく包まれていた温度が逃げる。

喪失感で紫苑は目を覚ました。

瞼が仲良くしそうになるのを我慢してシーツから潜り出る。

カーテンの閉まった窓は薄暗く、まだ朝日も出ていない時刻と云う事が分かる。

半身を起すと、母親譲りの漆黒の髪がさらり、とパジャマ越しの背中に流れた。

「あらあら御免ね、シオンちゃん。起しちゃったかしら」

眠け眼まなこの中で、細目の女性　リアトリアが包容力のある微笑みを浮かべている。

徐々に頭のもやが晴れてくると紫苑は昨晚の事を思い出した。

「お早う御座います、リアトリアさん。そういえば昨日泊めて頂いたでしたね」

「はい、おはよう、シオンちゃん。眠たかったらまだ寝ても良いのよ」

「いえ、何か手伝える事が有るのですしたら、お手伝いさせて欲しいです」

紫苑の申し出に、リアトリアは傍目からでも分かる程に笑みを濃くする。

娘のように可愛がっている紫苑の申し出は、それだけでリアトリアにとって感動の琴線に触れる物があった。

かと云って何をさせればよいものか。

うーん、と人差し指を顎に当て、リアトリアは些か考えた後。

「それじゃ、シオンちゃん。お客様に出す朝食の準備を手伝ってもらっても良いかしら？」

「はい、喜んで」

「んふふ」

リアトリアはおもむろに紫苑の頭を抱き寄せた。

夫婦生活で豊かに実った乳房が紫苑の顔を半ばまで埋める。

リアトリアは双子山から顔を出した黒髪の頭を、良い子良い子するように撫でた。

突然の事に紫苑が戸惑いの声を零す。

「あ、あの？」

「よしっ！ シオンちゃんの元気も貰ったし、リアトリアさん頑張っちゃうぞっ！」

むん、と年齢に見合わない可愛らしい気合。

鼻歌交じりに下ろした若葉色の髪を三つ編みに編んでいく。

そして。

リアトリアは紫苑が居るにも関わらずパジャマのボタンに手を掛ける。

紫苑は咄嗟にベッドの上で回れ右をした。

衣擦れの音が室内に響き、ぱさり、とリアトリアの上着がはだけ落ちた。

就寝時に下着を付ける習慣が無いリアトリアの重量感ある双子山の、つん、とピンクに染まった頂きが外気に触れる。

「ふんふんふん、あら？」

娘のような子との朝食づくりを想像してひたすら上機嫌だったり  
アトリアが背中を見せる紫苑に気が付いた。

余った袖からちよこ、と顔を出した指先。

リアトリアの私物であるオレンジ色の水玉模様のパジャマに着られた小さな背中。

パジャマの上に黒髪が漆黒の川を流していた。

リアトリアはその背中を見て、悪戯好きのフェアリーのような目になった。

「なんで後ろを向いてるのかな、シオンちゃん」  
「んっ！」

背を向ける紫苑にリアトリアは抱き付く。  
ボタンが開けられて、前が肌蹴たパジャマ越しに二つの豊かな乳房が潰れる。

薄布一枚を隔てて感じる丸みを帯びた体温と、柔らかな感触。  
紫苑は突然の事に身体を固くする。

「その……着替えを見ているのも失礼ですし、かと云って部屋を出ていく時間も無かったから」

「ふふ、冗談よ、シオンちゃん。御免ね、何時も部屋で着替えてるから、つい癖でシオンちゃんが居るのを忘れていたわ」

固まった紫苑からぱつ、と離れたリアトリア。

彼女は踊るような着替えで何時ものクリーム色のセーターとロングスカート。

そして花柄のエプロンを身に着けていた。

この間、約十秒足らず。

驚くほどの早着替えである。

「それじゃ、私は厨房の方に出ているから。シオンちゃんも着替えてら来てね」

「はい」

「ん」

またも突然、ちゅっ、と頬に口付けが降った。

母親が子供にするように。

面食らい呆然とする紫苑を余所に、リアトリアは調子の外れた鼻歌と共に部屋を去っていった。

パタリ、と締められる室内の扉。  
ベッドの上で一人になった紫苑に首筋を舐め上げるような女の声  
が掛けられる。

「よう眠れたか？」

声の出所は窓際。

其処には豪華な金髪をゆるく波打たせた西洋人形が座っていた。

球体の関節を曲げ、細い指で口元を隠し、くく、と忍び笑う。

球体関節人形　バルが肩を震わす度、白と黒のゴシック調のドレスにふんだんとあしらわれたフリルが嬉々と揺れた。

碧の硝子玉がさも楽しげに細められていた。

「お早う御座います、バル。見ていないで助けてくれても良いじゃないですか」

「くく、許せ。あまり見れぬ光景故な、つい傍観に徹してしもうたわ。

だが助けを求めるほどリアトリアとのやり取りは不快であったのか？」

「嫌、では無いです。ただ、如何すれば良いのか分からなくて……

……それと、その聞き方は狡いです」

ぶく、と頬を膨らませたの抗議。

バルは愛嬌のある抗議運動を仕掛けてくる担い手を見ながら、更に意地悪気な笑みを深くした。

「ほれ、此処でいつまでも油を売っておいても仕方あるまい？」

「……そうですね　その前に」

嘆息一つ。

肺の中の空気を吐き切った後、紫苑は頭を切り替えた。  
そして。

紫苑が余った袖で隠れた腕を無造作に振った。  
瞬間、糸の軌跡が扉のドアノブと、バルの白黒ドレスを囲むように閃いた。

「おろ？」

きゅい、と径を狭まる糸の囲い。

紫苑が左右に振った腕を引き戻すと、糸が両者を引っ張る。

ドアが独りでに口を開き、雁字搦めに糸で拘束されたバルが横に跳んで行った。

「着替えるので部屋を出て待っていて下さい」

早足で横に駆け抜ける視界の中で、此方をじっと見つめる紫苑。

先手を打たれた。

バルが歯噛みをするが時既に遅し。

パタリ、とバルが開け放たれた扉を潜ると同時に、扉はその口を閉じた。

当然、紫苑の着替えの光景も扉に隔てられて見る事が叶わない。

閉じた扉に視線を流し、紫苑はまた一つ息を吐いた。  
そして。

オレンジ色のパジャマのボタンに手を掛ける。

するり、と肩から肌蹴たパジャマを流し落とし、着替えを始めた

宿屋『渡り鳥の止まり木』の食事は食堂で出される。

なぜなら『渡り鳥の止まり木』は夫婦と必要最低限の従業員で切り盛りしている為、部屋に食事を運ぶより手間を掛けずに済むからだ。

元冒険者の主人が世界を旅して培ってきた伝手で仕入れられる材料の種類は豊富。

主人が振舞う料理の腕前も中々の物。

更に美人で評判の人妻　リアトリアが給仕をしてくれるのだ。

美味しい、一泊の料金も良心的、女将が美人の三拍子。

木造のこぢんまりとした宿屋だが、訪れる客は少なくない有名宿それが『渡り鳥の止まり木』。

だが。

今朝の『渡り鳥の止まり木』の食堂は、平時とは些か異なった様相を呈していた。

朝食の時間は賑やかなる食堂は、戸惑いを含んだ喧騒に包まれていた。

隻眼のリザードマンは裂けた口をあんぐり、と開き、

中年の双子ドワーフはひそひそ、と囁き合う。

ロングソードを腰に帯剣した軽薄そうな人間の青年は、口笛を吹いて話題の中心に色目を使っていた。

「おい女将さんよ。あんな娘、何時から雇ってるんだい？俺に紹介してくれよ」

大きな声が食堂に響いた。

にやにや、と視線は喧騒の中心から外さず、口笛を吹いた浅黒い肌の男は厨房のカウンターから覗いているリアトリアに尋ねた。

その瞬間。

食堂の幾多の眼が褐色の肌の男に殺到した。

集中する視線は好意的な物ではない。

寧ろ、駆け出しの初心者を見るような、馬鹿な者を見るような目付きだった。

中には訳知り顔の者も居て、男の失敗をやけに面白そうに見ている。

視線に乗せられた色の意味をおぼろげながら感じ取った男は戸惑う。

しかし、戸惑いも束の間。

男の尊大な自尊心がそのような眼で見られる事に酷く憤りを感じた。

理由の分からない苛立ちを抱えた男にリアトリアがにこにこ、と細目を更に細めて答える。

「残念だけど、シオンちゃんは今日一日限りのお手伝いさんなの」

その返答に食堂の喧騒が一層増した。

話題の中心。

其処には街一番の看板娘と称しても差し支えない程の少女が給仕をしていた。

黒絹の髪をリアトリアとお揃いの三つ編みにし、その上に純白の三角巾。

可愛らしいエプロンを纏い、顔にはにこやかな営業スマイルを湛

えている。

その後を付いて回るのは、モノクロのドレスを着た小さなお人形のような、否、本物人形であるバル。

「はい、どうぞ。今日の朝食はマッコウ魚の岩塩焼きにミッツ産野菜のサラダ、ポタージュになっております」

「心して食すがよいぞ」

「お、おう」

眼帯を付けた隻眼のリザードマンが看板娘　紫苑の給仕に戸惑

いながらもなんとか頷いて返す。

テーブルの上に湯気漂う料理を置くと白いエプロン姿の紫苑は、また食堂に犇めく客を器用に縫って移動する。

すいすい、と淀み無く、起きてきた客の群れを泳ぐ姿は見事。

手に持つお盆の上の料理は微動だにしない。

「おい、やっぱりアレ『少年アリス』じゃねえか。なんでこんな安宿で給仕なんかやってんだよ」

「知らねえのか？ 『少年アリス』が大概泊まるのはこの宿なんだから。かなり贗品にしているらしいぜ」

「本当か!？」

驚愕の二文字を獣頭に張り付けた獣人族の戦士。

贗品にしている主人の元冒険者仲間や、長い間この宿に泊まっている者の間では周知の事実。

囁き合っていた声もこれ程までに大きくなってしまえば、リアトリアに紫苑の情報を聞き出そうとした新米冒険者の耳にも入ってくる。そして彼は悟る。

『渡り鳥の止まり木』に一日限りで現れた看板娘の正体。

それは、現在の交錯都市ラタトスクで知らぬ者の方が少ない若き

冒険者 『少年アリス』。

「お、お、おま、男おお!? うえええ!?!」  
「はい、そうですか何か?」

頭を鈍器で殴られたような驚愕に眼を剥く新米冒険者の男。

あまりのシヨックに紫苑を指差す人差し指は、震えて一箇所定まっていない。

配膳する為に来た紫苑は、何時もの事なので平然と流してテーブルに食欲そそる朝食を並べていく。

新米冒険者の男は暫く石化の魔眼を直視したように固まってしまった。

彼の脳裏に『少年アリス』は男という図式は有れど、目の前のごうあがいても少女としか脳が判断しない紫苑と『少年アリス』の図式は難解すぎた。

「なかなか愉快な事になっているな」

「アルトさん、お早う御座います」

「あら、アルトちゃん。おはよう、良いでしょう? 可愛いでしょう? どう? どう? どう?」

上から降ってくる聞き慣れた女性の声。

下ろした深紅の髪に、無地のシャツと革製のパンツルック。

簡素な着こなしであったが彼女の均整のとれた肢体の魅力がそのまま前面に出ている。

二階へと繋がる階段を下りてくるアルトに向けて、紫苑は営業スマイルではない花咲く笑みを浮かべて朝の挨拶をする。

リアトリアは厨房のカウンター越しに、娘の晴れ姿を見せびらかすように、矢継ぎ早に感想を求めた。

アルトを知る人物は数多く居れど、アルトの事をちゃん付けで呼

ぶ人物は広い交錯都市においてリアトリアが唯一であった。

「シオン、ちょっと其処でターンをしてみてください」

「? こうですか」

突然の注文に戸惑いながらも紫苑は素直に応じた。

木製のお盆を両手で抱えるように持ちつつ、くるり、とその場で一回転。

ふわり、と純白のエプロンがスカートのように翻り、ゆるく編んだ三つ編みが回る紫苑を追って弧を描く。

前、側面、後ろ。

余す所無く紫苑の看板娘姿を拝見したアルトは一言。

「ああ、似合い過ぎと云うくらい似合っているよ」

「もう、恥ずかしい事云わないで下さい」

「でしょ! でしょ! やっぱリアルトちゃんもそう思うわよね!」

齒に衣着せない褒め言葉に、紫苑はお盆で口元を隠し、身体を振じりたくなる。

顔に散った朱色が紫苑の心境を如実に表していた。

更にリアトリアが興奮気味にアルトの意見を囁し立て、場を沸かせる。

結局、リアトリアを筆頭にバル、アルトの三人にお手伝い姿を褒めちぎられ、注目を浴び続けた。

終始に渡り紫苑の顔の火照りは取れずじまい。

結局、名残惜しまれつつ着替えを済まし、人心地着くまで頬を朱に染めたままだった。

知人以外の目には片時も関心を寄せて無かったのは流石であった

のだが

「しかし、なかなか可愛らしい物を見れたよ」  
「もう、まだその話を引き摺るのですか」

こつこつ、とブーツの踵が石畳を叩き、二人と一体は連れ立って  
通りを歩いていった。

馬蹄を鳴らす荷馬車。

鱗の生えた亜人。

甲冑を身に纏った衛兵。

石造りの街並みに溢れる人、人、人。

様々な喧騒が街の音楽として、今日も交錯都市ラタトスクは朝から忙しく賑やかだ。

「今日はウルドの村に帰らなくても良いのか？」

「はい、昨日の夜にバルと話し合って暫くは此方に居るつもりです。  
今日は折角なのでギルドで何かしらの依頼を受けようかな、と思っています」

「何を云うておる。途中で乱入してきた宿の女将に滞在を強引に押し切られたくせに」

バルの言い分に紫苑は力無い笑いで答えた。

アルトはその場面を頭の中で想像してみる。  
いいから、いいから、と紫苑に滞在を勧める光景が容易に想像で  
きてしまった。

「……まあ、あの人はあれで中々押し強い人だからな」  
「良く分かります」

共通の話題で盛り上がりながら歩みを進めていくと、道行く人波  
が顔色を変えていた。

革帯で腰にぶら下げられた重厚な手斧。

良く磨かれ、嫌味無く宝石が散りばめられた鞘。

銀色に陽の光を反射させるハーフプレート。

背中に担いだ大盾。

何れの品も争い事に用いられる闘争の道具類。

それを身に帯びた人波が大通りに増えていた。

彼等の目指す場所は限られている。

石畳が並ぶ通りの先。

目に付く一本の松明に二本の剣が交差した冒険者のマークの看板。  
白亜に彩られた輝かしい建物 冒険者ギルドが其処に威風堂々  
と居を構えていた。

「では私はヤドックを待たせているので此処でな」

「はい」

「何か困った事があれば何時でも相談に來い。何時も通り部屋は2  
04号室を取つてあるからな」

「有難う御座います」

ぼんぼん、と頭をあやすように撫でられ、紫苑とアルトは大理石  
を敷き詰めたギルド入り口で別れた。

ギルド二階に向かう紅髪の背中を見送り、紫苑は早速一階ロビー

の受付カウンターに足を向ける。  
バルはロビーに備えられたソファアの真ん中を陣取り、動く気は無いようだ。

冒険者ギルドの依頼受注の仕方は基本的に二つしかない。

斡旋か依頼書かの二種。

斡旋の場合。

受付カウンターを訪ね、ギルド職員が個々の冒険者に見合った依頼を提示してくれる。

この方法ならギルド側が受注者の実力、経歴、技能、地位等を様々な情報を統合し、分相応の依頼を斡旋してくれる為、比較的無難なくクエストを受ける事が出来る。

新米冒険者は安全面を考慮して大半がこの方法を選ぶ。

反面、ギルド側が依頼を選出する為、選り好みの激しい冒険者の求めに合致しない事が多い。

依頼書の場合。

ロビーの掲示板に職員が張り付けた依頼書を、掲示板から剥がし受付で受注する方法がある。

この場合なら冒険者が討伐依頼など好きな依頼を受注できる為、慣れてきた冒険者は此方の方法を取る場合が多い。

しかし、冒険者も千差万別である。

探索技能が不得手な人物が、遺跡探索クエストを受注してしまう事もある為、失敗の確率も高くなってしまふ。

ギルド職員としては、この受注方法を極力使いたくないのだが、何分依頼が多すぎて全部に手が回り切らない。

推定必要ギルドランクや、必要と思われる技能を依頼書に書いてはいるが、やはり斡旋より成功率は下回っているのが現状だった。

「お早う御座います、ツイーリツヒさん。何か依頼は入っていますか？」

「『黒アリス』か」

羽ペンを優雅に動かし、書類作成を行っていたエルフの美丈夫ツイーリツヒ。

鼻先に乗せた丸眼鏡を中指で押し上げ、羽ペンをインク壺に入れて、ツイーリツヒは改めてカウンターを挟んで紫苑に相対した。

無駄を一切排除したような洗練された動き。

何時もなら此処で意地悪な皮肉が飛んでくるのだが、今日は何故か飛んで来る気配が無い。

「お疲れのようですが、大丈夫ですか？」

「ふっ、まさか『黒アリス』に心配されるとはな。長いエルフとしての生、何があるか分からぬものだ」

「言葉に切れが無いですよ。なんだか今日のツイーリツヒさんは鈍なまくらみたいです」

「……云ってくれる」

癖の全く無い金髪の前髪を掻き上げ、ツイーリツヒは盛大に息を吐いた。

使用済みの空気が排出され、肺に新鮮な空気が満たされる。

そんな仕草もこの男が行うと優雅と気品に溢れている。

だが、本格的に疲労の色が濃い。

紫苑はそう思うと同時に、疲労が溜まっている人物がツイーリツヒだけでは無い事に気が付いた。

見渡せばギルド内の職員達は全体的に覇気が乏しかった。

化粧で誤魔化した目の隈。

艶を失いつつある髪の毛。

職員の制服はきつちり、と着こなしているが節々に疲れの彩りが見受けられた。

「ここ最近『吸血姫』の事件の事後処理に追われていな」

「納得です」

「加えて魔導学院生徒の課外実習期間に入る時期が重なってしまったているからな。都合の悪い時期に尻の青い餓鬼共を捌かねばならなくなってしまうたよ」

「そういえば学院の二期生は春から課外実習が有るのではたね」

課外実習期間。

それはブローサムス魔導学院二年目に始まり一学期の間、経験を積む為に行われる実習である。

内容はギルドから斡旋される依頼の完遂。

その完遂数が単位にも関わってくる実習なので、二年生から上の学年は必死に実習に励む。

冒険者ギルドと魔導学院が提携している為、この時期には大量の学生達の詳細なデータが載った書類がギルドに送られて来る。

学生は共和国を支える大切な金の卵。

ギルド側はその書類を吟味し、危険性の少ない比較的安全な依頼を割り振らねばならない。

当然、一人一人にだ。

毎年行われる実習期間は、ギルドにとって目の回るような忙しさなのだ。

「丁度良い『黒アリス』。お前は二人ほど受け持て」

「それは……吝かではありませんが」

期間中、学生達を現役冒険者の簡単な依頼に付き添わせる形で同行させる手法が、割と頻繁に取られる。

これは当然学生達の身を案じての安全策である。  
無論、冒険者側が同行を拒否すればその限りでは無いが。  
今の紫苑は、まさに鴨が葱を背負ってきた状態。  
ツイーリツヒは迷わずその愛らしい小鴨に白羽の矢を射った。

「では此方で依頼も決めさせて貰うぞ。これに行つて来い」  
「出すのが早いんですね。ひょっとして俺が来たら渡そうとしていましたか？」  
「何を云う 来ずとも伝書鳩で届けさせた」

切れを増した『黒アリス』弄り。  
紫苑は、元気を吸い取られたかのように八の字に綺麗な眉を曲げ、  
肩を落とした。

ツイーリツヒは早速必要書類をカウンターの上に並べた。  
カウンターに並べられる依頼書と、同伴する学生の情報を書き出した書類、そして『幻光石』。  
添付された『幻光石』に光が灯る。

光の中に同伴する生徒の上半身の虚像が映し出される。  
太陽の光を凝縮させたようなロールを描く髪の女生徒と、落ちて着いた色合いの茶髪をお下げにした女生徒。

其処には。

ソプラークルスバーグと、シンシアの姿が映し出されていた

あとがき

黒百合の花言葉：『呪い』

と云う訳で今回は、紫苑の母親『水鏡百合香』さんを登場させて  
みました。

なんていうか、情が強い、愛が重い人物ですね。

朝日奈もこのぐらい誰かに想われてみたいものです。

この母あってこの子ありといった感じですね。

## 第??章 『殺人狂シスター』

依頼整理番号：102番

依頼主：ツベロツサ「ツエペシユ

依頼内容：薬草各種の大量採集

場所：住宅地区 三番街 レクター教会

受注資格：ランク『F』以上

報酬：200リル

備考：昼食有り。早期の完遂求む。

「単なるお使いじゃのう。まあ、妾達にとってはあまり代わり映えのしないクエストではあるがな」

ラタトスク住宅地区二番街。

煉瓦造りの住宅が整然と並ぶ通りを抜け、奥まった場所に寂れたレクター教会があった。

こぢんまりとしながらも荘厳さを醸し出す鐘楼のある礼拝堂。

礼拝堂に併設された孤児達の住まう苔生す石造りの建物。

不格好なオブジェが作られた砂場。

そして。

騒がしく賑やかな子供達の声が孤児院から響いていた。

紫苑とバル。

二人はレクター教会の前で羊皮紙に記された依頼内容を改めて確認していた。

「良いじゃないですか。それにマリアさんには暫く会っていないかつ

たから丁度良いですよ。

でも、少しおかしいですね、依頼主の名前がマリアさんじゃないなんて」

「大方、新しく入ったシスターの名前じゃろう」

バルは退屈そうに教会を取り囲む塀に寄り掛かっていた。

よほど暇を持て余しているのか、時折紫苑の黒髪の毛先を指で絡めるなどして弄んでいる。

マリアとは、レクター教会で日々孤児達の相手をしながら神に祈りを捧げている年配の修道女だ。

厳格で清貧。

御年七十歳とは思えない程真っ直ぐな背筋に、しっかりとした足腰。

孤児院の子供達が悪戯をした場合には、彼女の手が唸りを上げてお尻に襲い掛かる姿が頻繁に目撃されている。

子供達からは、常に眉間に寄った皺からオーガ婆と恐れられていた。

そんな元氣御婆ちゃん　シスターマリアと紫苑には細くない交友関係があった。

依頼主と受注者。

薬屋『とんがり帽子の薬品店』のミーネと同様。

採集した薬草類などを届けたりしている仲だった。

「それと、あんまり髪の毛を弄らないで下さい」

「良いではないか、妾を虜にして已まないこの魔性の髪質がいかんのじゃ」

朗らかな陽気の日差しが二人を包み、輪郭の淡い影が灰色の塀に

滲んでいる。

くわあ、とバルが小さな口を開いて、可愛らしい欠伸をする。くすり、と可笑しそうに控え目な微笑みを浮かべた。

「なんじゃ？」

「だって、バルは秘蹟礼装なのに欠伸なんて。眠いのですか？」

「気分の問題よ。この陽気じゃからの、紫苑と共に昼寝と洒落込みたいものじゃ。シロが枕であれば猶の事良い」

「もう、約束があるのにそんな我儘云っては駄目です」

「ふん、どうせあの失礼極まりない小娘の子守りであろう。全く、いらぬ縁えにしが繋がったものじゃ」

紫苑とてバルの云う事に同意なのか、困ったように笑うだけ。

否定は、しなかった。

噂をすれば影がさす。

石畳が敷き詰められた通りの先から、ブローサムス魔導学院の制服を来た女生徒二人が此方に向かって近付いて来ていた。

色鮮やかな蜂蜜色ブロンドの巻き髪が特徴的な女生徒と、自己主張の柔和は色合いをした茶髪のエルフの女生徒。

ソプラとシンシアだった。

ソプラは自慢の姉と同じすらり、と長い脚を艶美に動かし、気品に満ちていた。

淡い茶色のボックスプリーツスカートが脚を動かす度にはためく。

しかし、その碧の双眸は些か不機嫌。

きゅっ、と引き締まった口元が彼女の心情を現していた。

「全く、何故私が薬草採集などと地味なクエストで単位を取得しなければなりませんの！ しかも、二人一組でランダムだなんて横暴ですわ。」

大体、昨日の夜に突然依頼書を渡して現役冒険者の付き添いをし

るだなんて、急すぎると思いませんこと。ギルドの職員ももっと前もって斡旋して欲しいものですわ。

付き添いの冒険者とやら不埒な輩だったら如何するといふのですか」

『わたし』と書いて『わたくし』。

ソプラの金切り声じみた不平不満が噴火していた。

その様はまさに低級魔術の掃射の如し。

一身に受けるシンシアは堪った物では無かった。

「あ」

眼と眼がかち合った。

シンシアにとって予想外の出来事。

進めていた歩が停止し、さあ、と血の気が引き、顔が蒼褪める。

シンシアから見た紫苑の瞳は、何の感情も読み取れない不気味な深海を覗き込んだようだった。

「あら？ どうしましたの、シンシアさん。急に立ち止まったりなんかしまし」

反応は正反対。

紫苑の姿を見止めたソプラの顔が、みるみる喜色に染まっていく。

それは夏の太陽の花が咲くようであった。

その笑顔は異性にとっても同性にとっても大変魅力的であったが、次の行動が台無し過ぎた。

「シオン様ああああっ！！」

石畳みの一枚が踏み砕けた。

すらり、と見惚れるようだった瑞々しい脚から生み出される殺人級の推進力。

それを余す事無く全身に伝え、ソプラは弾丸と化した。急加速の終わりは急停止。

ローファアの靴底面が強く石畳みの通りに圧着し、焦げた軌跡を描いて速度を減衰する。

その間にボックスプリーツが翻り、レースのあしらわれたパステルイエローの紐パンツが垣間見えたが、気のせいだ。

ゴムの焦げる臭いと共にソプラは、『少年アリス』と再会を果たした。

「本日はお日柄も良く、絶好の再開日和だとは思いませんか、シオン様？ 私達がこうしてまた再会できた事はティアラス様のお導き！

まあ、ひよつとして私の担当をなさって下さるのはシオン様ですか？ 今日は何て素敵なお日なんでしょう！ きつと赤い糸ですわ！」

「はっ！ あの女狐がそんな御大層な事をする筈なかつたが」

ぎゅっ、と何時ぞやの時と同様に握られた紫苑の手。

興奮しすぎて支離滅裂なソプラ。

バルはバルで『ティアラスのお導き』と云う言葉に反応して、あからさまに悪態を吐いていた。

しかも、教会が目と鼻の先にある状況下。

敬虔な聖ティアラス教徒が聞いたのなら異端審問並みの暴言であった。

幸いな事に、神への冒瀆を聞き届けたのは紫苑のみ。

ソプラは紫苑と再会できた喜びに打ち震え、バルの言葉が脳を右から左へと通り抜けていた。

「あの、ソプラさん。まだ一日ぶりだったと思うのですが……」

「まあ！ お恥ずかしい。私とした事が嬉しくて少々はしゃぎ過ぎてしまいましたわ」

『少々』の部分に、大いに首を傾げざるを得ないが、ソプラにその疑問を挟む余地が無い。

「ふふ、シオン様と過ごした時間があまりに楽し過ぎて、別離からの時間がとても寂寥感に満ちていました。

でもその寂しさもこの再開を味わう為のスパイスだったのですわ  
！」

「そんな、大袈裟ですよ。でも、其処まで想って頂けるのは、嬉しいです」

「ああ！」

ふらつ、と眩暈を起こしたようにソプラがよろめく。

麻薬の魅力を内に満たした言葉。

握った手の感触と温もり。

それらが相まってソプラは卒倒寸前だった。

「何を阿呆なやり取りをしておるか。依頼を済ませて早々に帰るぞ、紫苑」

三文芝居の前に、バルが呆れたように急かす。

横槍にソプラが漸く紫苑以外の存在を認識した。

「あらバルさん、居ましたの？」

「最初から居ったわい！」

心底気に喰わん、とばかりにバルは声を荒げた。

まあまあ、と紫苑が穏やかに相棒を宥める。

「で、何時まで妾の紫苑の手を握っておるのじゃ」

碧の硝子玉を半目にして睨み、バルはソプラの手を人差し指で突いた。

瞬間、浮かび上がる黒字で刻まれる幾何学模様の術式。

紫苑とソプラの繋がれていた手が、同じ極の磁石のように弾かれ合った。

術式が生み出した結果に、バルは満悦の色を顔に浮かべる。

「うむ！」

「全く。気を悪くしたのなら済みません、ソプラさん」

「いえいえ、気にしないで下さいまし」

紫苑の手前取り繕うとしたソプラであったが、離れてしまった手の所在を見てしまった。

其処には、バルが自分の物だと主張するように、見せ付けるように紫苑と手を繋いでいた。

どうじゃ、と目が語っていた。

いら、と腹に鬱憤が溜まり、張り付けた笑みが引き攣った。

「そういえば」

軋む雰囲気。

水面下での争いに話題を変えようと試みた紫苑がふと、頭に思い当たる事をソプラに告げる。

「あまり、ギルドの方を悪く云わないで下さい。『吸血姫』事件の事後処理で大忙しみだったのです」

「まあ！」

冒険者ギルドの内情を知っているが故、今のギルドの仕事の遅さを責める気になれない紫苑。

しかし。

ソプラは別の事に思考を飛ばしていた。

憧れの人物に醜態を見られていた。

その事実にはソプラは恥じ入って顔を赤面させる。

確かに、シオン様のご活躍の後処理で忙しい事は仕方ありませんわ。何とか取り繕わないと嫌な女と思われてしまいますわ。それは一大事！

バルは胡散気な眼でソプラをねめつける。

絶対反省しておらぬな、とバルは顔色の変わるソプラを見て、寸分変わらずに正鵠を射ていた。

「確かに私の浅慮でしたわ。正しく職務を全うしていらっしやるギルド職員の方を悪しように云うなど……、

お恥ずかしい所をお見せしました」

「いえ、俺も差し出がましい真似をしてしまつて」

「いえいえ、私の方こそ」

「ほれ、何時まで続ける気じゃ。時を常に流れているのじゃぞ」

放つて置けば延々と謙遜を続けそうな二人に、バルが先手で終止符を打つ。

会話を断ち切られた二人は、バルに急かされ教会の敷地内に足を踏み入れる。

教会の庭では、子供達が元気良く遊んでいた。

砂場でお城を作る子。

追いかけてっこをしている子供達。

落ちていた木の枝で騎士団ごっこをしている男の子。

お飯事まじごとで不倫現場を目撃され、修羅場になっている男の子一人に女の子二人。

遊ぶ子供達の服は、砂や泥で汚れていて、後で洗濯をしなければならぬシスターマリアの苦勞が窺い知れた。

子供達の幾人かが入口の門を通って来た紫苑達に気付いた。ぶんぶん、と元気いっばいに無垢な笑顔で手を振ってくる。

「紫苑お姉ちゃん！ 久しぶりー！」

「あれ？ 紫苑お兄ちゃんじゃなかった？」

「馬鹿だなお姉ちゃんが男なはずがないだろ！」

「バルーも久しぶりー！」

笑顔に釣られ、自然に顔が綻ぶ。

手を振りかえす紫苑に男の子達は顔を赤らめて、もじもじ、と恥ずかしげに照れ隠し。

その仕草は、憧れのお姉さんと対面して恥ずかしがる少しませた子供そのもの。

外見を客観的に見れば、おしとやかで可憐な乙女。

だが。

彼等が紫苑の本当の性別を知った時、世の不条理と無常さを知るだろう。

「ほら、シンシアさん。何時までそんな所にいらっしやるおつもりですか」

「で、でも」

「年端もいかぬ子供達ですらちゃんと挨拶を出来てますのに、貴女くらいの年齢の婦女子がそんな体たらくでどうしますの」

輪の中に入らず、一人一歩下がって居たシンシアの背中をソプラ

が押す。

『少年アリス』絡みの暴走さえ無ければ、基本的には面倒見の良い性格なのだ。

おどおど、と小動物のように落ち着かない様子でシンシアは紫苑の前に一歩、出た。

「あ、あの」

「何か」

戸惑いがちに、勇気を振り絞ったにしては消えてしまいそうなか細い声。

振り返った紫苑の顔には、子供達に向けていた笑顔の残滓すら無い。

そして。

色が無い。

透明な声質だった。

気圧され、挫けそうになる心。

シンシアは心身に鞭を打ち、今一度奮い立った。

あれから四六時中シンシアの頭には、ダークエルフについての事がこびり付いて離れなかった。

森の民 エルフは元来閉鎖的な種族。

それ故、掟は鉄の戒律で遵守しなければならない物だった。当たり前前すぎて思考を挟む余地が無い事柄。

ダークエルフは悪。

それ故に排斥するべき存在。

しかし。

その思考回路では行き詰る難題に直面してしまう。

悩み、悩み抜いて、それでも根付いた差別の壁は厚かった。

その堅牢な壁に亀裂を入れたのは、二人の友人だった。

まず、謝る。それが一番大切な事だよ。

そうですね。間違っただと思うのでしたら、其処からはまず始めるべきですわ。

亀裂は拡がり、強固であった壁は脆くなった。

最後に砕くのは自分自身。

「御免なさいっ！ 私、シオンさんの身内の方にとっても失礼な事をしてしまって……本当に御免なさい」

言い切った後、シンシアは腰を勢い良く曲げて、頭を下げる。

勢いが良すぎて、シンシアの二つのお下げが盛大に振れ動いた。

栗毛色の頭頂部が紫苑の視界に入った。

一秒。

十秒と時間が静かに流れる。

シンシアにとってその沈黙は、長過ぎる時間だった。

「紫苑お姉ちゃん、このお姉ちゃんとケンカしたの？」

「ケンカしたのー？」

「おケンカ、めっ！ なのー」

知らぬ内に、紫苑の周りに孤児院の年少の子供が数人取り囲んでいた。

紫苑とシンシア。

二人の間を包む雰囲気気付いた子供達が、腰に縋り付いて本音の意見を拙い言葉で伝える。

紫苑はその純真無垢な瞳の中に不安の影を見た。

一瞬の瞑目。

そして紫苑は粘り付く心の奥底にそつ、と蓋を閉めた。

「顔を、上げて下さい」

頭の上より降る言葉。

シンシアは恐る恐る顔を上げた。

高くなる目線に、青空の瞳が絡まり合った。

「今度……今度、ウルドの湖に来る事があるのなら、直接ミオに云って下さい。俺に云っても、仕方ありませんから」

「……はい」

一歩進めた気がした。

正午を告げる教会の鐘が高らかに鳴る。

まるで祝福を齎すかのよう。

出した答えは、エルフと云う種族としては間違いなのかもしれない。

最適解は何処にも無い。

それでも。

シンシアにとってその解答は、決して間違いなどでは無かった

Original Novel

追憶のシオン

第??章『殺人狂シスター』

孤児院に唯一存在する執務室。

無駄な装飾品が一切ない簡素な部屋で紫苑達は依頼主　ツベロ  
ツサ<sup>II</sup>ツエペシユと対面していた。

古びてやや硬いソファーに脚を揃えて座る修道女は、存外若い人  
物であった。

貞潔さを表す濃紺のヴェールから出された顔から推測される年齢  
は、二十歳前後。

頭を覆うヴェールから見え隠れする髪は、落ち着いた色合いの亜  
麻色。

ヴェールと同色の修道服に身を包み、銀のロザリオが胸元で輝い  
ている。

浮かべる柔らかな微笑みは常に絶やさず、まさしく慈母のような女  
性であった。

「お忙しい中、わざわざ御越し下さってありがとうございます。そ  
れと　騒がしくしてしまつて済みません」

「いえ、気にしないで下さい。それに嫌いじゃありませんから」

ヴェールから晒された顔には、申し訳なさが滲み出て、困った笑  
み浮かべていた。

執務室の中に居るのは、紫苑達とシスターツベロツサ。

だけでは無かった。

ツベロツサの視線の先。

其処には執務室の隅で子供達が、ある一点を凝視していた。

「ねえ、ねえ？　シオンお姉ちゃん！　今度はぐるぐるって跳んで  
回るのやって！」

「えー！　次はサリーちゃんと踊るの！」

「やだよそんなの！」

「はい、みんな。全部やりますから喧嘩しないで下さい」

言い争いに発展しそうな子達に紫苑が宥める。

「はい、と子供特有の可愛らしい高い声で返事が返ってくる。

子供達が目を輝かせて見ている物は、ケットシーをモチーフにしたぬいぐるみ。

三毛の猫妖精のぬいぐるみが、まるで生命を吹き込まれたかのように動いていた。

「つー」と氷の上を滑るようにぬいぐるみが床の上を動く。

そして。

クツシオンを詰め込んだ腕を交差させて、跳んだ。

空中で優雅に決める三回転半 トリプルアクセル・ジャンプ。

着地は寸分の狂いも無く見事。

そのまま片脚を上げ、くるくる、と自転する猫妖精のぬいぐるみ。そしてフィニッシュ。

フェルト生地の腕を天高く伸ばし、ぬいぐるみのプログラムが終了した。

沸き上がる子供達の甲高い歓声に、ぬいぐるみは執事のような一礼で答えた。

その礼儀正しくも可愛らしい仕草に、食い入る子供達は更に盛り上がる。

「シオンお姉ちゃん、私のサリーちゃんも！」

「はい、良いですよ」

女の子の一人が両手で持った妖精族フェアリーの人形を紫苑に差し出した。

紫苑はにこやかに女の子の大事な人形を受け取る。

そして。

紫苑が繰る糸によって命が宿る。

千差万別の滑らかな指の動き。

指先の微細な動きで、糸が操られ、フェアリーの人形が動き出す。ぴよん、と紫苑の手の中か飛び降り、軽やかに床に降り立つフェアリードール。

一緒に踊りましょう。

そう身体で表現するように、フェアリー人形はケットシーのぬいぐるみに掌を差し出した。

よろこんで。

猫妖精は迷わず差し出された人形の掌を掴んだ。

始まるは猫妖精とフェアリーの舞踏。

執務室の床を所狭しと二体は、滑るようにして踊り舞う。

糸で操られているとは思えない程の妙技に、目を奪われてしまった者は子供達だけでは無い。

シスターツベロツサと魔導学院の生徒二人。

彼女達もまた紫苑の指が織り成す人形遊びに夢中だった。

やがて小さな舞踏会も終わりを迎える。

それは夢のような一時だった。

「これにて閉幕。御観覧の皆さん、有難う御座いました」

紫苑のその言葉で白昼夢は覚める。

踊り終わったケットシーのぬいぐるみと、フェアリードールが観客の子供達に腕を振って感謝の気持ちを表す。

ぱちぱち、と小さな手で、小さな観客達は惜しめない拍手で二体を讃える。

修道女ツベロツサも、そしてソプラとシンシアも人形劇の余韻に浸るように、拍手を送っていた。

「シスターマリアから話は聞いていましたが、これ程とは……本当に素晴らしい」

「とても素敵なお催し物でしたわ、シオン様！ 名高い王都のジャリパール少女歌劇団に勝るとも劣らない劇。感服致しましたわ！」  
「とっても素敵でした」

次々と齎される心からの賛辞。

紫苑は面映ゆそうに笑って、照れを誤魔化した。

そして。

役目を終え、糸が切れた劇の功労者を紫苑が持ち上げ、持ち主に手渡す。

少ししゃがんで視線を合わせ、紫苑は人形劇の感想を尋ねた。

「楽しかったですか？」

「うん！ すごかったー！」

「楽しかったよ！」

「アタシのサリーちゃんがキレイだったの！」

口々に飛び出て来る無垢な感想。

特等席で人形劇を見ていた小さな観客達の褒め言葉に、紫苑の表情が綻ぶ。

あまりにも素晴らし過ぎた為、小さな観客達は次なる公演を求め

る。  
「紫苑お姉ちゃん、もっかいやってー」

「また見たーい」

「見たい見たいーい」

アンコールを切望する多重奏。

だが。

紫苑はその幼い希求に答えて上げる事が出来ない。

細い秀麗な眉尻を下げ、申し訳無さそうに断りを切り出した。

「御免なさい。今日はシスターさんに用事があって来たから、これ以上は出来ないのです」

えー！ と甲高く、納得できないと云わんばかりの聲が木霊した。紫苑はしゃがみこみ、一際大きい不満不平を噴き出した男の子の頭に手を置く。

そして、ゆっくり母親のように優しく撫でる。

「お兄ちゃんがまた今度来たときにやりますから、今日は我慢して下さい、ね？」

ね？ に合わせて微笑みと共に傾げられる小首。

さらり、と黒絹髪が頬を流れた。

吐息が聞こえる至近距離。

整い過ぎた美貌を間近に、男の子の淡い恋心は盛大に首から耳まで赤面する事で存在を主張した。

「お、おつ。我慢する」

「あー！ キール君のお顔真つ赤ー！」

「照れてるー！」

「う、うるさいー！」

子供特有の無邪気さに嘸し立てられて、キールの癩癢が破裂した。きゃー、と蜘蛛の子を散らすように部屋から逃げていく子供達。キールは彼等を顔を赤くした鬼の形相で追いかけていった。

子供達が出て行った後は、まるで嵐の去った後の惨状。

「本当に、騒がしくて済みません」

「なに童達はあれぐらい元気に溢れておった方が良い。のう、紫苑

「？」

「はい」

「そう云って頂けると助かります」

「では本題に移るとするかのう」

バルのその言葉にツベロツサは居住まいを正す。

そして、依頼の詳しい内容を説明し始めた。

「今回は、依頼書に記載していた通り、『ジエミニの葉』を採集して来て欲しいのです。

実は貯蔵していた分の薬草が残り少なくなったので、街まで買い出しに行ったのですが、何処も品薄で……………」

「先の事件で消費量も増えた事じゃろうからな、相場もそれ相応に上がっておるじゃろう」

「はい。お恥ずかしい話ですが、教会の収益もそれほど余裕が在るといふ訳では無く、お店に出されている価格では正直手が出し難いのです」

『吸血姫』事件の裏で大量に消費された一般的な薬草『ジエミニの葉』。

『ジエミニの葉』は幼児の掌のような形をした葉で、効能は多岐に渡る。

播り潰して傷口に塗れば大抵の怪我に効き、手荒れ、湿疹、火傷等にも効能が有り、煎じて飲めば簡単な解毒作用も期待できる。

また魔力との浸透性に優れ、薬草魔導額の分野では日夜研究され、新たな効能を発見されている様々な可能性を秘めた薬草。

更に軟膏に加工して持ち歩けば日持ちもする為、冒険者の御供としても重宝されている。

『ジェミニの葉』の自生分布は大陸全土に広がっているのも比較的安価で出回っている。

しかし。

それでも需要過多であれば相場価格も上がるのは必然。

一般家庭では少し家計を圧迫する程度でも、常に経営が赤字ぎりぎりの孤児院では手の届かない価格になってしまう。

商人達も需要があれば少々割高にしても売れるので、皆一様に価格を引き上げていた。

「それで以前、シスターマリアにお話して頂いた方法で薬草の補充を、と考えたのです」

「まあ、駆け出しには丁度良い小遣い稼ぎではあるからの」

薬草採集。

しかも誰もが日常的に目に行っている『ジェミニの葉』なら採集も容易。

また、この方法なら中間の卸売りを介していない。

つまり、ギルドへの手数料以外は、市場で購入するより安価に手に入れる事が可能だ。

「指名があればすぐにでも足を運んだのですが……マリアさんはその事を仰ってはいませんでしたか？」

ツベロツサの語る教会の内情を聞き、紫苑は頭に浮かんだ疑問を口にした。

紫苑が尋ねた内容に、今度は魔導学院の二人が頭に疑問符を浮かべた。

そんな事をすれば更にお金が掛かってしまうではないか、と。

冒険者ギルドの指名制度。

依頼者が特定の冒険者に依頼を受けて欲しいと思った場合。

ギルドの受付で依頼の委託をする時にその旨を申告すれば、特定の指名料を報酬に上乗せして有名冒険者へと依頼を行って貰える。冒険者の指名は、有名所になればなるほど割高になっていく事が基本。

「シオン様、それでは教会の方に更なる出費を強いてしまうのではありませんか？」

「ああ、俺は基本的にラタトスク内の依頼ではあれば指名料を受け取って無いので大丈夫です」

「まあ！ 本当ですよー！！」

「はい、本当ですよ」

疑問の解として齎された答えに、ソプラは啞然。

眼を白と黒に瞬かせて驚きを露わにした。

指名制度の中でラタトスクには一人、変わり種が居る。

冒険者の二つ名は『少年アリス』。

『少年アリス』が受注する殆どのクエストは、交錯都市ラタトスクでの雑務。

薬草採集を初めとして、屋根の補修や売り子、果ては飼い猫の捜索等々。

そして。

ラタトスクの雑務であるのなら『少年アリス』は、ギルド側に対して指名料は不要と公言している。

つまり『少年アリス』を指名する為に必要な指名料は0リル。

最もこれは『少年アリス』と交友がある極一部の人々にしか知れ渡って無いので、ラタトスクに住む大部分の人はこの事実を知らない。

その数少ない人の一人がレクタール教会のシスターマリア。

「実は　　シスターマリアは今実家で療養中です」  
「え？　何か病気に？」

目を伏せ、沈痛な面持ちで切り出すツベロツサ。

彼女の悲しみが空気に溶けだして部屋全体を満たす。

シスターマリアは御年七十歳。

何かしら病気を患ってもおかしくない高齢であった。

紫苑に不安の影が差す。

「いえ、ぎっくり腰です」

「ぎっくり腰……ですか？」

「はい、ぎっくり腰です」

きよとん、と目が丸くなる。

素直な反応に、ツベロツサは亜麻色の前髪を揺らしてくすくす、  
と口元を指で隠して笑う。

先程の雰囲気作りは布石。

ペロ、と可愛らしく出されるピンクの舌先。

新しく入った若い修道女は、見た目に反して悪戯好きのようだった。  
た。

「酷いです。本気で心配しましたのに」

「ふふ、御免なさい。あんまり二も素直な反応だから、つい。シスターマリアからも注意されてはいるのですが、癖のようなもので」  
「？」

些細な違和。

花園の中に造花が混じったような、殆どの人間が気付かぬ程の心地の悪さを紫苑は刹那、感じた。

だが、それは一目見て分かるものでは無く、直ぐに溶けて消えてしまった。

「しかし、近頃はマリアに会ってはおらぬが、お主のようなものが教会に入っておったとはな」

「此方には『早咲きの月』頃に身を寄せさせてもらっています」

『早咲きの月』は地球の暦で云えばおよそ三月に該当する月。

現在の『残花の月』の約一か月前にツベロツサはレクタール教会に来たという事になる。

「しかし、まあ、ようもこのような辺鄙な教会に住み込もうなどと思つたものじゃな」

「こら、バル」

見た目通り普通の人間族のツベロツサ。

年齢もその外見相応のものだろう。

二十歳前後。

その歳で神に身を捧げる修道女になつたのだ。

彼女が修道女になつた理由に触れるような物言いを、紫苑が窺める。

勿論、辺鄙な教会と云う齒に衣着せぬ物言いに対しての非難もあった。

「ふフ、良いのですよ。シスターマリアからも『こんな廃れた極貧教会に来ようだなんて物好きもいるもんだね』、と散々云われましてから」

その時のマリア老修道女の顔を思い出したのか、ツベロツサは苦笑しながら話す。

確かに云いそうだが、とシスターマリアを知る紫苑とバルは思った

ではお願いします、とツベロツサ修道女に送り出されて、紫苑達はラタトスクに程近い『ノーリアの林』の中に居た。

『ジエミニの葉』は余程の熱帯地帯か、寒冷地帯で無ければ何処の林にも自生している。

それ故、探す事は左程難しくない。

注意しなければならぬ事柄は採集中の魔物との遭遇だが。

『狼王の君』にその懸念は皆無と云えた。

「アウン」

紫苑程度の体格の者なら二人を一度に呑み込める大口。

シロは大欠伸をすると、再び顔を伏せ、眠りこける。

眠れる『白狼王』。

例え魔物が近付こうとも、『白狼王』の眠りを妨げようと命を無駄にする魔物は絶無。

カサリ、とブラックファングと称される大型の魔物が姿を現す。

しかし、ブラックファングは『白狼王』の姿を見止めた瞬間。脱兎の如く林の奥へと逃げ帰っていった。

シロは効果靨面の『魔物除け』だった。寝そべるシロの腹部付近。

真つ白な体毛を背景に、紫苑は自生している子供の掌のような葉

『ジエミニの葉』をせっせと採集していた。

摘み取った葉は手編み籠の中へ。

バルも『ジエミニの葉』と同じくらいの小さな球体関節の手で、葉を摘み取っていた。

伝説の獣『白狼王』の膝元で、花を摘むように葉を摘む幻想少女二人。

まるでその空間は、侵されざる聖域のようだった。

「ぐぬぬ、なんだかとっても入り辛い雰囲気ですわ」

「確かに……なんだか邪魔をするのが申し訳無いような空気ですよ  
ね」

齒噛みをするソプラ。

ハンカチを手に持てば、悔しさのあまり布を口で引き千切りそんな形相。

だがその瞳は眼福と、眼前の光景を焼き付けていた。

シンシアも『森の民』エルフ特有の整った容姿をしていたが、和と洋。

紫苑の日本的に整い過ぎた顔立ち。

それは『蒼の大地』の住人に見慣れぬ事もあってか、殊更不思議な魅力を感じさせる要因になっていた。

「ソプラさん、私達は私達で別の場所で葉を摘みましょう」

「も、もう少しだけ」

能率を求めるシンシアの提案に、ソプラは往生際悪く食い下がる。ソプラは次女と同色の碧の眼を血走らせていた。

沈黙していれば男達が振り向くであろう美貌は、その奇行により酷く台無しであった。

「ほら、あちらにも沢山『ジェミニの葉』が密生してますから」

「わ、分かりましたから、そんなに引つ張らないで下さいまし！」

腕を引つ張る強硬手段に、ソプラが遂に折れる。

このまま子供のように手を引かれては堪らぬと、ソプラは掴まれた手を解き、自分の足で歩く。

ずんずん、とシンシアを追い越して進むソプラ。

楽しみを中断させられた彼女は、前方に対する注意力が散漫していた。

故に、顔に白く粘ついたモノが降りかかる。

「うぶっ、な、何ですのこれは！ 蜘蛛の巣ですわー！」

立派な放射状に張られた蜘蛛の巣。

その中心部に吸い込まれるように顔を晒した為、被害は甚大。

鼻に、

口に、

顔全体に、と蜘蛛の糸が絡み付いた状態。

自慢の縦巻きロールの髪にも絡み付いてしまう。

ソプラは人差し指と親指をくつつけたり、離したり。

後始末の事を考えると憂鬱。

指の間で弧を引く粘着物に溜息を吐いたソプラ。

「大丈夫ですか」

自分の視線よりやや低い位置から掛けられる鈴の転がる声。  
至近距離。

蒼い海原の瞳と眼が合った。

長く繊細な睫。

甘い輪郭と血色の良い頬。

ぷるん、と小振りな桜色をした唇の蕾。

「シ、シオン様っ!?!」

「あ、動かないで下さい」

少し屈めば、唇同士が触れ合える距離感。

紫苑の姿を認めたソプラは思わず仰け反ろうとする。

しかし、紫苑がそれに待ったを掛ける。

『少年アリス』からの制止にソプラは反射的に固まった。  
そして。

黒シルクの長手袋に包まれた紫苑の手が、そっ、とソプラの頬に  
添えられる。

肌を感じる絹触りに、ソプラの鼓動が跳ねた。

「シ、シオン様!?!? こ、ここ、こんな昼間から大胆すぎます!

まだ私にも心の準備と云うものが                      あら?」

顔の皮膚を引っ張られる感触。

紫苑が人差し指と親指を挟んだ手をつい、と移動させる。

すると、ペリペリ、と蜘蛛の糸が剥がれる感覚がソプラの顔面を  
這った。

「やっぱり全部は直ぐに取れそうもないですね                      後、ソプラ  
さん」

「は、はい!」

「俺はそんなにケダモノに見えますか？」

困った風に紫苑が尋ねる。

すっ、と線を引く眉尻が若干物悲しそうに下がっていた。

男女の性についてある程度の理解がある紫苑だが、盛りが付いた猿のように云われるのは些か心外。

その紫苑が抱いた気持ちの湧水を、ソプラは掬い取った。

ソプラは先程の自身が口から漏らした言葉を顧みる。

こ、ここ、こんな昼間から大胆すぎます！

まだ私にも心の準備と云うものが。

頭の中で繰り返される己の言動。

そして。

白から赤へ。

顔面の色彩が目まぐるしく変化した。

「わ、わた、ワタクシ、私は、そんなエッチな娘ではありませんわ  
――！！！！」

逃げた。

脱兎の如く。

原動力は羞恥、日頃の訓練で鍛え抜かれた脚を出力とし、ソプラは一陣の風となる。

途中でソプラの直線上。

ブラックフアングやコボルトを轢いた気がするが恥ずかしさで沸騰した頭には些事。

轢いた魔物が魔霊殊に変わろうが彼女にとって些事。

黄金の鬘をもった美しき女豹が『ノーリアの林』を駆け抜けていった。

「媚びたり、橋渡しになったり、羞恥で悶えたりと真に騒がしい娘であるな」

「シロ、一応ソプラさんに付いて行ってあげて」

バルの呆れを多分に含んだ言葉が小さくなる背中を見送った。

紫苑はシロに念の為の護衛を頼むと、シロはのそり、と重たい腰を上げ、のっしのっし、とソプラの後を追っていく。

主人達との戯れを邪魔されたシロの尻尾は、しょんぼりと項垂れていた

『ジエミニの葉』をたらふく蓄えた手編み籠を両手に、紫苑はレクタール教会に続く住宅地区を歩いていた。

傍らにはバルが尺度の小さい脚を動かし、紫苑の横を連れ添う。

モノクロドレスのフリルが歩く度に揺れていた。

「うう……違うのですわ。私はそんなにはしたなくは無いのですわ。頭の中は常に花畑で桃色なのは御座いませんわ……」

紫苑とバル、一人と一体のかなり後方。

頭垂れ、ぶつくさと弁解を口から垂れ流しているソプラが付いて来ていた。

浮かべる表情は悲壮。

その格好は酷い有様だった。

服のあちらこちらが解れ、靴とスカートには跳ねた泥で前衛的。外気に晒していた太腿と二の腕は、枝で切った切り傷。

そして、ソプラ自慢の蜂蜜色をした髪には葉っぱが付いた状態。まるで悪漢に乱暴されたような姿であった。

「その、上手く言えないですけど大丈夫ですよ、きつと。

男の方に近寄られて吃驚して動転しただけで、ソプラさんはシオン君にその……邪な気持ちを抱いた訳では無いのでしょうか？」

「……」

「え？」

慰める為に尋ねたシンシアの質問に、若干の沈黙が返ってくる。信じられないと目を丸くシンシア。

「ち、違いますわよ、誤解ですわ。勘違いしないで下さいまし！別にシオン様主導でなくても、私から睦み事の手解きしても万事了解であって」

「うわぁ……」

これには流石のシンシアも距離を置く。

物凄い速度で墓穴を掘っていく友人に、彼女は掛ける言葉が無かった。

本当に『少年アリス』が絡まなければ、ブロッサムス魔導学院で優秀な生徒なのだ。

実技、筆記共にトップクラスは当たり前。

多少高慢ちきな面も有るが、過大に貴族と云う家柄を鼻に掛ける事も無く、面倒見の良い性格。

そして。

『少年アリス・ファンククラブ会員ナンバー01』。

あ、駄目だ、とシンシアはその事柄に、思い至った時に頭の中で思った。

ソプラニクルスバーグのファン魂は筋金入りであった。

「……紫苑、なるだけ彼奴あやつに近寄るでないぞ。否、妾めかけから離れるでないぞ」

「なるべく二人きりにならないようにしますね」

苦笑い。

警戒心を露わに、あまりにも深刻で沈痛な面持ちのバルに、紫苑はそう答えるしかなかった。

一行が一介のファンが原因で微妙な雰囲気になりつつも通りを行くと、やがて教会の門が見えてきた。

門前でぼつり、と立つ人影。

神に仕える者として濃紺の修道服を身に纏った女性　ツベロツサ。

両手を胸の前で組み、祈るような形で佇んでいた彼女は、紫苑達の帰還に気付くと顔を綻ばせた。

「ご無事な用で何よりです」

「まあ、何時もやっておる事じゃし、子供の使い走りのような依頼であるからな。そうそう危険などは有りはせんよ」

「でも怪我などが無くて何よりです」

教会に辿り着いた紫苑をツベロツサが出迎える。

彼女は無事を確認すると、我が事のように口元を綻ばせ、喜びを露わにした。

野花のような、華美さは無いものの秘めた美しさを感じさせる笑みだった。

「まあ、こんなに沢山。有難う御座います。これだけあれば暫く子供達が転んで怪我しても十分です」

ツベロツサは手編み籠に入った大量の『ジェミニの葉』に、驚いた。

そして、ヴェールに被った頭を深々と下げ、感謝した。

「喜んで貰えて俺も嬉しいです」

「子供は良く食べ、良く遊び、良く寝て、そして良く怪我をするからもう」

「はい。此処の子供達位の年齢ならまだ我慢できるから良いのですが、やはり大変ですので」

「？」

「む？」

奇妙な言い回し。

会話が繋がっているようで、繋がっていないような違和感だが。

ツベロツサは孤児院の建物へと促した為、解を得る機会を逸してしまつた。

「お茶を用意してありますので此方にどうぞ。お連れの学生さん達も帰ってきたようですし　　あら？」

門を潜ったソプラとシンシア。

彼女達の姿を確認したツベロツサの態度が何処かおかしくなる。空気が掠子曲がる。

ぼんやり、と虚空を彷徨うような瞳。

焦点が定まっていけないようで、しかし、その視線はソプラに釘付けになっている。

「いい……匂い」

「む？ どうしたのじゃ、お主」

隣で声を掛けるバルの事など思考の外へと放棄。

口の端を吊り上げ、清貧で礼儀正しい印象とは掛け離れた笑み。

今のツベロツサは聖職者の皮を被ったナニカであった。

背の低いバルを押し退けるようにツベロツサは、ソプラに近寄る。

「あらあらあらアラアラアラ」

壊れた打楽器のように調子の外れた音を出し続ける弧を描いた口元。

ソプラも張り付けたような笑みで、早足で近付いてくるツベロツ

サの逸した常軌に、漸く気付いた。

その時には既に彼女は目と鼻の先。

遅かった。

そして

「美味しそうな　綺麗な血と臓物の匂いですね」

「え？」

ツベロツサの手元の空間が滲む。

歪む掌から取り出された物は、黒く擦子曲がった歪な大剣。

修道女に大剣という不可解なアンバランスさ。

ツベロツサは迷う事無く、嬉々として、歪に擦子くれた切っ先を

ソプラの顔面に突き立てた。

「　　ッ、ソプラさんッ！」

叫ぶ『少年アリス』の焦燥に満ちた声がやけに鮮明に耳朶を打つた。

ゆっくりと流れる時の中。

ソプラは迫り来る死神の鎌　　黒光りする刀身の先を見ていた。

突然の事態。

前触れも無い凶行

硬直した身体では、除ける事も迎撃する事も不可能。

ただ見ているだけしか出来なかった。

そして。

凶刃の切っ先が　　寸前で、止まった。

「　　何を、何をしているのですか、貴女は！」

怒りに打ち震える紫苑の怒号。

『糸繰り』による強制停止。

ツベロツサの様子がおかしくなった時、紫苑は反射的に、本能的に微細な金属糸を彼女に刺し込んでいた。

輪郭を伝う汗が、真にソプラが絶体絶命であった事を物語っていた。

「んー動かないデすねえ。君ですか？　邪魔するのは？　何ってちよつと頭を串刺して脳漿を撒き散らせるダケじゃないですか。

見たいデすか？　綺麗ですよ？　興味ナいですか？」

どこか調子の狂った言葉の羅列。

ツベロツサは首から舌は自身の意志では全く動かない事を確認。ギギギ、と錆び付いた機械のように首だけを紫苑に向けた。

悪びれていない。

罪悪など度外視した子供のような動機。

紫苑は一瞬啞然とした。

その隙が彼女にとって好機であり、紫苑にとっての失態。

「爆発させましようか」

ちよつと散歩に行くかのような気軽さ。

またツベロツサの掌の空間が滲み、物体が取り出される。

滲んだ空間から落ちていく『黒い箱』。

ソレが眩い閃光と共に爆発した。

眼と耳を震わせる破裂音。

最も至近距離に居た者は、間違いなくツベロツサ本人。

爆発の衝撃波で彼女は、襪褸屑のように弾き飛ばされる。

二転、三転。

ボールのように修道服が跳ね、くるり、と体勢を立て直し、軽や

かな身のこなしで着地した。

しかし。

被害は甚大。

所々が破けた修道服。

破れて穴が開いた箇所から覗く素肌には、血が大きく滲んでいる。

ツベロツサのヴェールから外気に晒していた顔面は、火傷と血と

泥で凄惨な化粧が施されていた。

だが、彼女は気にした風も無く、口の端を吊り上げる。

「動く、動きまシた、動けれ」

「此奴、狂人の類か」

バルの言葉は、まさしく的を射ていた。

「服がボロボロ。気に入ってまじしたのに マ、いつか」

三日月形に弧を描いて裂ける口と眼。

亜麻色の髪を揺らし、狂人の周囲が歪む、歪む。

現世へと現れた数多の掬子くれた歪な凶器が、教会敷地内の地面に刺さる、刺さる、突き刺さる。

「真っ赤でテカテカな臍物、ブチ撒けませんか？」

白痴のように。

聖職者の衣を纏った殺人狂は笑う、晒う、嗤う

あとがき

・花言葉

チューベローズ (tuberosa) : 危険な楽しみ

英語をもじって『ツベロツサ』

今回は突然のツベロツサとの戦闘。

そして遂に姿を見せ始めた帝国の影。

次回も頑張って更新しますのでどうか見てやってください。

## 第??章 『帝国の影』

一人殺した時は吐いた。

胃の中身を全てブチ撒けた。

十人殺した時は慣れてきた。

頭の罪悪感を全てブチ撒けた。

百人殺した時は楽しくなってきた。

道德の倫理観を全てブチ撒けた。

千人殺した時からもう数えてない。

虹色に彩られた空がやけに綺麗だった。

「あはハー、痛いデすね。お肌がピリピリします、おめめがチカチカしますヨ」

嗤う殺人狂シスター。

紫苑の『糸繰り』から逃れる為とは云え、己を顧みず爆弾を起爆させる凶行。

ツベロツサは修道服に包まれた内に、途轍もない狂気を内包していた。

「ソプラさんッ！ 待っていて下さい、今手当をしますから！」

「う、うとう……」

「生焼けって感じですね。治療？ うんうん、いいですよ。何度でも串刺せるの八大歓迎です」

シンシアが巻き込まれ、吹き飛ばされた友人に駆け寄る。

爆心地付近に居たのは、ツベロツサだけでは無い。

狂った修道女と正対していたソプラも爆発の被害を被っていた。

朦朧とする意識。

閃光で焼かれた視界。

全身を苛む火蜥蜴の舌が這う痛み。

自身の焼けた肉の臭いが、鼻先を刺激した。

「清流たる水の恵み 肥沃なる大地の恵み その僅かなる一滴を  
此の者へ」

焦りを腹の底へと沈殿させ、シンシアは朗々と言霊を紡ぐ。

精神世界で描かれる術式に従い、彼女の両手が淡く白銀に輝く。

そして。

魔術の顕現の鍵 力在る言葉を発した。

「《白銀の御手》」

祈りの奇蹟。

白銀光を灯らせる両手でソプラの手を祈るように握り、癒しの光は対象に伝播する。

淡い光に全身を包み込まれるソプラ。

焼け爛れた箇所には、より濃い白銀光が集まり、時間の逆行の如くソプラの火傷を癒していく。

やがて。

制服が破れて、至る所から顔を見せていた火傷は消え、後に残るは白い素肌。

外傷の痕跡は衣服にしか残っていなかった。

元凶であるツベロツサは、再度『糸繰り』の支配下に置かれていた。

禍々しく掬子曲がった凶器に囲まれ、自由にならぬ己の肉体。

しかし、浮かべる仮面は裂けた笑み。  
余裕を顔に湛えていた。

「お肉の焼ける臭い美味しソウ。お腹ペコペコ。でも、また身体が動きませんね、どうしまシヨウか？」

「大人しくお縄につけば良からう」

「それは出来ない相談デす。それに、大体の想像はツいてますから平気でス」

何、と目を細く鋭利にするバル。

にやり、と裂けたように口角を吊り上げ、狂笑するツベロツサ。

「魔術ではありませんね、そんな感覚では無かつタです。かと言って呪術の類でモない。ならばコレは純然たる物理現象。

爆発で一時身体の自由が戻つタのが証拠。有線的なナニ力で私ノ身体を弄んでるのでしょウ。うう、傷物にサれた、シクシク」

論理思考と狂気とが入り混じつたあべこべの言葉遣い。

だが、ツベロツサの話す内容は真に迫っていた。

初見。

たった一度の体験で、紫苑の魔技『糸繰り』の真実に追従してきた者はこれが初めて。

紫苑は右手を殺人狂シスターに翳したまま、警戒の度合いを一段階引き上げた。

領主を殺害した時のように、脊髄神経を魔動の電気によって破壊し尽せばそれで事足りる。

しかし。

襲ってきた理由も未だ明確になっておらず、性格の激変の正体も不明。

そして。

ツベロツサは曲がりなりに孤児院のシスター。  
子供達の近くで彼女を殺す事は、良心が咎めた。  
それが決定的な隙、心の甘え。  
狂人に時間的猶予を与えてしまった。

「貴様、あの爆弾を放った時には其処まで分かっておったのか」  
「ノンノン、違いますヨ、お人形さん。乙女の勘とイウやつですよ」  
「ふん、どこまでも狂言を回しよるわ。して其処から如何するとい  
うのじゃ狂人」

こうするのですよ、とツベロツサは三日月に眦を歪めた。  
聖職者の皮を被った殺人狂が辿り着いた解答。  
それは 火刑だった。

「《火よ》」

指先より生じる火の粉。

その小さな火源が瞬く間にツベロツサの全身を舐め上げる。

「あはハ、熱い熱イですね！ おお、動く、動きます」

自身が燃えているにも関わらず、手を閉じたり開いたりして『糸  
繰り』の呪縛から解放された事を確かめていた。

燃え盛る炎の衣を纏い、ぐるり、とツベロツサの首が紫苑に向い  
た。

顔に張り付いた常軌を逸した笑顔。

それは紫苑を視界に収めた瞬間、ますます深くなり、澱んだ瞳も  
さらに澱む。

「でハ、此方の番ですネ。愉快に陽気に串刺しになって下さい。大

丈夫、死体はちゃんと鳥さん達が食べてくれますから」

ブン、と羽音のような音を伴って、ツベロツサの周囲に『浮遊する八本の腕』が出現する。

ただの腕では無い。

機械で作られた人工的な黒塗り腕。

無機質な黒地の上を、毒々しい紅い光が浮遊する腕の線に合わせて流れていた。

「まずは、前菜から」

浮遊する機械腕のそれぞれとツベロツサが、地面に突き刺さった擦子曲がった凶器を握る。

そして。

轟、と空間を削り取り、黒い凶刃の群れが機械腕の展開する魔法陣により、射出された

Original Novel

追憶のシオン

第??章『帝国の影』

飛来する九つの黒刃。

空気の壁を引き千切って悲鳴を上げさせる弾丸が、紫苑とソプラ

達を急襲する。

未だ意識が朦朧としているソプラは動かぬ的。

友を見捨てるという選択肢が無いシンシアは、ソプラの頭を掻き抱き、己が身を挺して凶弾から庇った。

「させません」

ゆらり、と流水の如く御手が虚空を泳ぐ。

宙に顕現するは、半透明の滑車型魔法陣。

無数の滑車に導かれ、水を得た金属糸が空間を縦横無尽に閃く。

瞬間。

迫り来る九つの凶弾は、その直線的な弾道を緩やかに曲げさせられ、あらぬ方向へと飛散する。

地面、塀、空へ。

紫苑は金属糸をレールのように敷き、一瞬にして黒き凶弾を糸のレールに沿って直撃経路を捻じ曲げた。

「お見事です。でもその馬鹿げた技量の技で確信が持てました」

パチパチ、と顔の横の拍手で素直に紫苑の御業を称賛するツベロツサ。

まさか迎撃も回避する事もせずにより過ごされるなど思ってもみなかった。

加えて血飛沫を上げて真っ赤な華を咲かせると期待していたソプラ達さえ庇う余裕。

だが。

ツベロツサは白痴の笑みを濃くして紫苑の『糸繰り』を見破った。

「あなたの金縛りの正体。ずばりそれは肉眼では確認できない金属の糸にヨる筋繊維の操作。」

まだ論理的証拠がある訳ではないですが、あながち間違ってもいいないでシヨ？」

まさに正鵠を射た正答。

紫苑の齢十五の経験の中で、ツベロツサは初めて『糸繰り』の秘密まで辿り着いた。

『糸繰り』の正体を見破られた紫苑。  
だが。

明察をされたかと云ってそれを戦闘中に、動揺を顔に出すなど軟かな精神を父親から叩き込まれてはいない。

しかし、此度は狂人が上手であった。

「……」

「動揺しましたね。アア、安心して下さい。顔には全く出てなかったデスよ。ただ私、感が良いのデス。

人が一番串刺しにして欲しくない所を見つкерるのが得意デ、チョット致命部位から外して刺してあげるノです。

そうすると、長ーク、苦しむ顔が見れて、とっても楽しいノです。そんな事をやつている内に、人より勘が良くなっているのデした。めでたしめでたシ」

ツベロツサは昔話のような締め言葉を使う。

その姿はまるで修道女が子供にお話を読み聞かせているようだった。

「あなたみたいな可愛い顔の子なら操り人形になルのもこなプレイですが、やっパリ私はその可愛い顔をグチャグチャに滅多刺しにしたいですネ」

ちりちり、と残り火を服に燻らせながら狂気の修道女はうっとり、

と恍惚に浸る。

その脳裏には紫苑の整った面立ちを、原型を留めなくなるまで滅多刺しにする妄想で満ち満ちていた。

妄想の旅から帰還したツベロツサは、脳裏に描いた光景を現実のものにする為、紫苑をねっとり、と舐め見る。

「だから、本気でイキますね。《接合》」

羽音に似た音色が再度鳴った。

ツベロツサの腕と脚の空間が、水を垂らしたインク文字のように滲む。

次瞬。

空間の歪みが終息した腕と脚には、ツベロツサの周囲を浮遊する機械腕と同様の手甲と脚甲に追われていた。

黒塗りの機械装甲に禍々しい紅いラインが光を奔らせる。

「貴様、やはり帝国の者か」

「アハ、物知りですねお人形さん。でも残念、私は脱走兵ですよ」

『神聖ミッドガルド帝国』

初代皇帝ヘリアンサスが建国した人間による人間の為の人間だけの国。

他種族の存在を排斥し、除去し、迫害する選民思想が根付いた国民性。

その歴史は深く、前回の『龍』による『大地の清浄化』が行われた後、約七百年前から建国されたとされている。

だが、それらは虚偽である。

『神聖ミッドガルド帝国』の真実。

それは『龍』が行う絶対的な『大地の清浄化』を生き延びた唯一の文明国。

文明の栄華を極めた帝国による魔導技術力が成す奇蹟　天頂に  
浮かぶ緑溢れる月こそ、『神聖ミッドガルド帝国』の領地なのだ。

「帝国も一枚岩じゃ無くてデスね、私は革新派の兵士を串刺し二してたのですが、殺し過ぎたみたいデお月様から此方の未開地に左遷させられたのですよ、シクシク」

よよよ、とわざとらしく泣いた振りをする殺人狂シスター。

彼女の肌表面を取り巻くように流動するマナの障壁。

薄いインクを垂らしたような魔力光。

帝国の特殊作戦部隊　通称『ブラックメイル』に支給される機械鎧の腕部から発生させられている『耐マテリアル魔力障壁装甲』であつた。

質量の軽い微細な金属糸は、障壁によりツベロツサに届かない。

「まあ、丁度良い機会ですから現地部隊の皆さんヲ張り付けにしておいてから脱走したのですよ。御蔭で私ハ追われる身の上、追っ手の方を殺せて一石二鳥デスね、キャハ。

ちなみにあなたの不可視の糸はもう届きませんのデあしからず」

張り付けた狂気的笑みを消さない。

ツベロツサは手に擦子くれた歪な黒の大剣を顕現させた。

そして、それを鼻歌交じりにひゅん、と軽々振るい火が消えた修道服を切った。

脚の付け根から裾まで際どいスリットの出来上がり。

スリットから覗く魅惑の生脚。

晒された素肌の凄惨な火傷は、目に見える速度で修復されていく。

『ブラックメイル』に内蔵された術式　『オート・リジェネレーション自動作戦継続構術式』による恩恵だつた。

「ウふ、セクシーですか？ セクシーでシヨウ？」

ツベロツサが焼け焦げた修道服の裾を掴み、ひらひら、と振る。過剰に裂かれたスリットから眩しい白い脚が覗くだけでなく、丸みを帯びた臀部までも白日の下に晒されていた。

ちらり、と垣間見える逆三角地帯を覆う黒いレース。

股間部を覆う布の少なさ、そして臀部の見え方からおそらくティーバックである事が予想された。

聖職者にあるまじき際どい蠱惑的な下着だった。

「この変態痴女め！ 斯様な振る舞いで紫苑を誘惑するでない！！」

ツベロツサの扇情的な振る舞いにバルが抗議の熱弁を振るう。

戦闘中の心理戦は常套手段。

バルは見事にその術中に嵌っていた。

尤も、相手側は心理戦を仕掛けているつもりは無いだろうが。

「とりあえず、逝きますよ。頑張って抵抗してください、あまり早く終わられるト楽しく無いですし。寂しいですから」

ツベロツサは言葉尻に哀愁を含ませ、にこり、と淑やかに微笑む。猟奇的な笑いとは異なる上品な笑み。

故に異質。

帝国特殊作戦部隊『ブラックメイプル』隊長 『串刺し嬢』のツベロツサ。ツエペシユが作戦行動を開始した

瞬きの速度で肉薄する剣群。

空間が滲み、絶え間無く補充される禍々しい凶器。

間断無く続けられる機械碗からの射出。

紫苑は高速で肉薄する剣群を、曲芸のような身のこなしで全て避けていく。

時に顔を地面間際まで沈み込ませ、剣群を潜り抜け、

時に糸のレールで軌道を柔軟に曲げて見せ、

時に糸を足場に、滑り、跳ね、三次元的な縦横無尽の回避を行う。

ソプラの避難は既に済んでいる為、紫苑本来の動きが出来ていた。

獲物を見失い、地面に突き刺さる掬子曲がった剣は、持ち手の柄まで深々と刺し込まれていた。

教会を囲む扉には、丸く抉られた痕。

当たれば人体など容易く穴開きチーズになってしまう貫通力。

ツベロツサの攻撃はたった一撃が致命傷に成り得た。

「気をつけよ紫苑。奴の得物に込められた術式が齎す現象は、単純にして強固な『貫通』そのもの。生半可な防御は無い物同然と心得よ」

「正解ですよ、お人形さん。花丸を贈呈しますね」

「ぬー」

標的を変更。

目標は、氷のように透明度の高い環状魔法陣を前面に展開し、空間を屈折させ危なげ無く剣群をやり過ごしていたバル。

ツベロツサは黒き弾幕の内部を疾駆していた。

ひゅん、と後方より飛来する剣が耳を掠める。  
また一つ、通り過ぎた刃が太腿に赤い線を付けていく。  
狂気の沙汰。

一歩間違えば絶命する剣群の渦中をツベロツサは心からの笑みを浮かべて走り抜ける。

剣の嵐から肉薄する修道女。

バルが獰猛に口の端を上げ、迎え撃つ。

「ふん、此方に来やるか、戯げが」

「至近距離かラの剣戟なら如何でスカ？」

「ほう？ 試してみるが良い、狂人」

「お望みとあらバ、《術式剥奪》<sup>デイス・スベル</sup>」

ツベロツサが鼓動するようにラインに紅い光を奔らせる機械手甲を翳す。

機械腕から幾重にも漆黒の帯状魔法陣が伸び、バルが展開する環状魔法陣に絡み付く。

帯に記された赤い術式紋様が半透明な魔法陣に溶け込み、侵食していく。

それは紅茶に溶かしたミルクのように。

パキン、と硝子の如くバルの環状魔法陣が砕け散った。

「まずハ、両手を貰いまショうかね」

「出来るならば、な」

左右の手に握り締めた歪な漆黒の大剣を振り被るツベロツサ。対するバルは無手。  
しかし。

その粘土で作られた球体関節の腕に、白く輝く紋様が浮き出る。紋様が刻まれた腕を腰のために、銃弾を装填するようにバルが構え

た。

ざわり、とツベロツサの生物の根源たる生存本能が警鐘を五月蠅く鳴らす。

頭で鳴り響く危険信号に、ツベロツサは更に口を裂けてさせる。人形の拳が放たれると同時に白銀の閃光が瞬いた。

全身の魔力が拳に集中するように濃密に圧縮され、術式による弁から解放される。

極太の砲撃。

やや斜め上に放たれた魔術のレーザー砲は、黒き剣群を呑み込み、蒸発させ、空の彼方へと吸い込まれていった。

「とト、危ないデス」

「じゃが、其処はちと袋小路じゃのう」

「また躲してあげますヨ」

発声の抑揚が調子外れた声が上空より聞こえた。

帝国の汎用装備『ブラックメール』により後押しされた身体能力が、ツベロツサを跳躍させる事で悠々と上空へと回避させていた。

まさに魔動にも似た人外の身体能力。

だが。

バルの言の通り、其処は回避行動も不可能な中空。

重力の鎖に捕えられ、自然落下からの強襲に移行する前に、無数の『糸』が閃いた。

「妾の紫苑を忘れてはおらぬかの」

「あう？」

頭上の修道女へと、大半の男ならば骨抜きになるような妖艶な流し目を送るバル。

瞬間。

中空を舞う狂った鳥を、蜘蛛の糸が捕える。  
手首、腕、首筋、胸部、腹部、太腿、足首。

糸はまるでそれ自身が意思を持つかのように、鮮やかな手並みでツベロツサの各部位を絡め取っていく。

両の手首を頭の上で括られた状態で、修道女は浮いたまま磔にされた。

「緊縛プレイですか？ 顔に似合わず鬼畜テイストなプレイが好きでスねシオン君」

危機を危機と思わぬ嬉々としたツベロツサの態度。

固い。直に届いてはいない。

指先に伝わる微細な感触。

常人とは比較にならない程、鋭敏な感覚器を誇る指が紫苑に違和を知らせる。

常に自動展開されている『耐マテリアル魔力障壁装甲』が肌表面で紫苑の糸を阻んでいた。

磔に処されたツベロツサの周囲に幾つもの空間の揺らぎが生じる。それは掠りくれた剣が現れる予兆。

刹那の判断。

紫苑の脳が対象の危険度を把握し、情けを捨てさせる。

蜘蛛の糸に捕えられた鳥の羽をもぎ取るべく、紫苑の腕が引かれた。

ギイイ、と硝子を爪で引っ掻いたような不協和音が盛大に木霊する。

糸と『耐マテリアル魔力障壁装甲』、接触面での鬨ぎ合い。

両者の拮抗は、空間の歪みから吐き出された無数の掠り曲がった大剣によって決着を見た。

正確無比に射出された剣の雨が、糸を切断。  
狂った鳥が野へと放たれる。

「すっごいデスねー。まさか帝国謹製の『耐マテリアル魔力障壁装甲』をそんな原始的な武器で少しとはいえ打ち破って見せるなんて素直に驚きデス。」

「まア、私も人の事を云えない武器を使って八いるのデスが。それに容赦の一欠けらさエも無い判断力。濡れてしまえそうです」

音も無い軽やかな着地。

大剣を両手に持ってさえいなければ拍手さえしてしまいそうな程、ツベロツサは感心していた。

その証。

ツベロツサの首筋には、浅い切り傷が一筋。

切り傷の赤い線からは、ぷっくり、と血液の雫が浮き出していた。

彼女は雫を機械で覆われた指の腹で掬い取り、口に含む。

ちゅぷり、と生々しい水音。

無機質な指ごと舌で舐め取る姿は、故意か無意識か、蠱惑的な魅力があった。

「さて、と興奮してきました。そろそろ第二幕を始めても宜しいですカ？ ドキドキ」

「今度は此方から攻めさせて貰おうかの」

「イエいえ、私もどちらカと云えば受け身より攻め手の方が得意でして、ちなみに床の上デもですヨ」

「ならば」

「デスね」

人格を宿した秘蹟礼装と、聖職者の皮を被った狂人の意見が一致する。

互いに張り付けるは獰猛な笑み。  
両陣営が互いの獲物を手に構える。  
脳裏に浮かぶ文字はただ一つ。  
先手必勝

三人の中で最も素早く先手を取ったのは、最も年若い『少年アリ  
ス』。

肩から下、腕と指先が正確無比、複雑怪奇に流動する。

まさに機械では絶対に不可能な緻密な動作。

操られた糸が空間に瞬き、滑車型魔法陣を介し、芸術的な作品を  
構築する。

かごめ、かごめ。

離れた位置に立つツベロツサの周囲を、鋭利な糸で構成された鳥  
籠が瞬時に作られる。

触れれば切断される鳥籠が、紫苑の指先一つでその内径を窄める。  
だが。

籠の中の鳥は力無き小鳥とは到底云えぬ猛禽類の怪鳥。

「あハハ、本当に狂った糸の使い方ヲしますネ      デモ、私モ

『コレ』の扱いにハちよつと自信があるノですヨ」

グッ、と両の手を交差させ、ツベロツサの上半身が沈み込む。

限界まで引き絞った弦のような、発条ねばりのような力の蓄え。  
そして、弾けた。

一重、二重、三重と体を独楽のように回転させ、二本の大剣の軌跡が鳥籠を斬り裂いていく。

無茶苦茶。

しかしツベロツサの芯はぶれない。

恐ろしく筋の通った太刀筋。

ツベロツサの心と同様に、定石を無視し、彼女の剣の扱い方も狂っていた。

「妾を忘れるでないぞ、小娘が」

火線が迸る。

先程と同様に、バルの突き出す拳から圧縮魔力が術式を介し、閃光となる。

差異は閃光の太さと、装填速度。

拳大に径を窄めた火線が、淡い術式紋様が刻まれた球体関節の両手から速射されていた。

迫る幾条もの火線。

「斬り捨てれば問題無しデス」

ツベロツサは恐るべき反応速度で、破壊を齎す光線を斬り裂いた。

一本であった光線は二本となってツベロツサの後方へと散っていく。

一つ、二つ、三つ。

嬉々として火線を斬り捨てていくが所詮人間の腕は二本。

次第に迎撃が追いつかず、押し込まれ、危なげな場面が出てくる。  
しかし。

ツベロツサには、十本もの腕があった。

操縦者の思念波を浮遊する機械碗が受信。

ツベロツサの剣閃と寸分違わぬ程に見事な太刀筋を披露。

機械碗の赤い光のラインが瞬き、襲い来る光線を全て斬り伏せ、ツベロツサを守護する鉄壁として聳える。

「ふむ、ちとあの腕は厄介ではあるな」

眉間に皺を寄せ、バルが面倒臭そうに呟く。

悪態にツベロツサは心底嬉しそうに口元を三日月型に綻ばせる。

「んふふー、お次は私の番ですネ。待ち草臥れましタよ」

ピン、と糸が張り詰める感覚。

紫苑がツベロツサの害意の糸を捉えた。

害意の方角は死角　つまりは頭上。

上空を仰ぐ動作を省き、即座に横跳びで回避鼓動に映る紫苑。

バルは詠唱など知った事かと、世の魔術師が見れば卒倒する速度で術式を組み上げる。

瞬間。

鈍く籠った音色が多重に響き渡る。

紫苑が直前まで居た空間に、擦子くれた漆黒の大剣が無数に突き刺さっていた。

バルは空間を屈折させ、自分の周囲へと弾道を逸らしていた。

「マダまだ逝きますヨ、太くて大きいノです。たっぷり喘いで下さ  
イ」

「ぬっ！　いかん！」

上空へと掲げられたツベロツサの機械手甲を装備された腕。

そして頭上では浮遊する機械腕が円を描き、禍々しくその装甲に

刻まれた線の紅い光を一際輝かせていた。

描かれる円の内部。

空間が黒ずみ、湾曲に湾曲を繰り返して、渦を巻いて捻じれていた。そして。

機械腕が描く円から途轍もなく、馬鹿げたほど巨大な刀身が姿を現した。

持つ事など到底不可能。

破城鎚の如く、城の堅牢な正門を簡単に砕く事が可能な十メートルを優に超える刀身。

それがただ一人。

矮小な人間一人の命を屠る為に、鎌首をもたげていた。

《紫苑！ 妾を翳せ》

「挽き肉二なーレ！」

頭に直接響くバルの焦燥に塗れた声。

瞬間。

後ろ腰に帯びたショートソードがその輪郭を崩し、紫苑の腕に絡み付く。

同時に空から巨剣が、紫のマナを噴き出させながら、空気を押し潰して降ってきた。

人一人を殺して余りある巨大な質量の塊。

紫苑は逡巡など見せず瞬時にバルの言葉通り、秘蹟礼装『バルトアンデルス』を纏う腕を巨剣に翳した。

刹那。

腕に纏わりついた『バルトアンデルス』が弾け、幾多に拡がりゆき、ある一つの形へと成っていく。

幾多の『バルトアンデルス』は銀の光を発し、魔力線で繋がれる。描く全容は、迫り来る巨剣に負けぬ程、『巨大な腕』。

白銀の巨大腕からは、溢れた余剰魔力が霜のように周囲へと舞っ

ていた。

その威容は、形は異なれどまさしく『外套と短剣』のクランリーダーが所有する『霜の鉄鎚』であった。

そして。

剣と腕。

規模を大きく逸脱した二つが激突した

眼球を劈く夥しい光量が激突部から迸る。

紫と銀。

互いが互いを押し潰さんと、塗り潰さんと侵し合う。

過去文明の栄華と現代文明との栄華が雌雄を決さんと咆哮していた。

『霜の鉄鎚』が、巨大質量の巨剣を全てエーテルへと還元しようとして一際白銀の光を増大させる。

召喚されし巨剣が、内包する魔力を破壊の力へと変換し、全てを呑み込まんと一際紫紺の光を侵食させる。

地鳴りが住宅地区全域を襲い、大気の鳴動が空へと哭く。

「ッ、あああああああ！！！」

「アはははははハハハハッ！！！」

裂帛の気合を吐き出す紫苑と、狂った笑い声を撒き散らすツベロ

ツサ。

拮抗する両者。

更に紫と銀の光は、その体軀を拡げ、力強さを増していた。

「アハははははは                      ガッ！」

ドン、と不可視の衝撃がツベロツサを襲う。

完全に不意を突かれた形での攻撃。

『耐マテリアル魔力障壁装甲』に阻まれたとはいえ、その衝撃波は僅かにツベロツサの体勢を崩させた。

衝撃波が放たれた方角の先。

其処には憤懣の炎を瞳に燃やし、黄金色の戦士が居た。

「この私を                      ソプラニールスバークを忘れて貰っては困りません！」

闘ぎ合いの天秤は、他者の介入で『霜の鉄鎚』に傾いた。

爆発的な白銀光が巨剣を掴み潰す。

切っ先から柄頭まで。

全てのマテリアルをエーテルへ強制変換。

マナの嵐が教会全体を狂ったように吹き荒れる。

視界の全容を銀一色に染め、世界を塗り潰し、『串刺し嬢』が召喚せし巨剣を消失させた。

エーテル粒子へと還元された巨剣が、霜のように周囲に降り注いでいた。

「あー、押し負けテしまいマしたか。内蔵兵装の中デもとっておきではあったのデスが……………邪魔も入ッテ来てしまったヨウですし」

バタバタ、と激突の残り香のような風が修道服のヴェールをはた

めかせる。

満身創痍まではいかなくとも激突の敗者であるツベロツサの代償は大きい物であった。

更に所々が破れて千切れた修道服。

バチリ、と紫電を迸らせ、不具合を主張する黒地の装甲を用いたガントレットとレギンス。

だが、戦闘行動は続行可能。

ぐるり、とツベロツサの首が捻じれ、闖入者の方角に向いた。

澱んだ暗褐色の粘液が凝り固まった瞳。

狂気を孕んだ視線が、むしゃぶりつくようにソプラに注がれる。

「あら、ご不満でしたか？ 私としては先程の無作法な行いの意趣返しでありましたのに」

胸を反らせ、ふくよかな二つの果実を窮屈そうに制服に押し込めて、ソプラは殺人狂シスターに相対する。

威風堂々。

竦みは無く、気負いも無く、驕りは少々。

泰然と構えたソプラ「クルスバーグが其処に居た。」

「実に結構デス。串刺し相手が三体、とても喜ばしい事です」

「ほう、豪胆よの。数の上では貴様の不利ぞ」

「はい、それを本気で仰つてルなら中々に愉快デスね。一人はどう見てもお荷物じゃありませんか」

「まあ、確かに遺憾ではあるが貴様の云う通りではあるな」

バルが疲れたように嘆息。

狂人との戯言回しに同意を示す。

自らの話題で扱き下ろされた中心人物は、ふるふる、と小刻みに震えていた。

顔面体温は急激な右肩上がりな上昇を見せ、首から上は活火山の如く真つ赤に煮え滾っていく。

そして。

爆発した。

「なぜそんな事を仰いますの！？ 酷いでは御座いませんか、私とて若輩の身ではありますが、この身は一介の戦士！ 決してお荷物ではありませんわ！！」

口角に泡を迸らせ、ソプラはあらん限り叫ぶ。

金切り声が発せられる度、彼女の蜂蜜色のロールが怒気に揺れる。

「とは云うものな、小娘。それが厳然たる現実と云うものじゃ」「程良く脂が乗った獲物を前にシて、小鳥を狩つてモあまり楽しくはないのでスヨ　このように」

無造作にツベロツサが浮遊する機械腕から四本の剣弾を射出。

即座に反応したのは、一挙一動片時も敵性対象から目を離していなかった紫苑。

一拍ほど遅れてソプラが迫る剣弾に対し、迎撃態勢を構える。

遅い。

場慣れしていない彼女の一連の動作は、やはり何処か浮ついた感覚があつた。

「舐めないで下さいまし！　これでも『響律師』<sup>きょうりつし</sup>の端くれ。この程度幾らでも弾けますわ！」

威勢良く啖呵を切つたソプラの喉が煌びやかに金の蛍光を発する。

『響律師』。

それは法則魔術を扱う者の中でも、特に特異な体系で魔術を具現

させる者達。

彼等が使用する魔術は一般に『音響魔術』と呼ばれている。

なぜならば、世界の法則を書き換える媒介は『音』。

彼等は楽器が織り成す音色で世界に語りかける。

音楽が、生ける者を癒し、育み、心に安寧を齎す。

媒介物が異なるからこそ、起こりつつ現象も普通の法則魔術と比べ、様を異と呈するものが『響律師』の特徴だった。

そして。

ソプラノクルスバークが法則魔術の媒介として働き掛ける物は『

歌声』。

瞼をそつと伏せ、彼女の喉から、歌が弾ける。

美しき旋律から、圧縮された音の塊が放たれる。

音の塊が金の魔力光を伴い、四本の剣弾を迎え撃った。

「あ奴、『響律師』の固定観念に真つ向から喧嘩を売る攻撃をしよるな」

呆れを多分に含んだ声。

『響律師』の覚える魔術は、主に補助魔術に偏っている。

攻撃魔術は有る事には有るが、絶対数は少ない。

そして、絶対数の少ない攻撃魔術の殆どが歌で引き起こされる現象による二次的な攻撃。

歌そのものに攻撃性能を持たせるソプラノの音響魔術は、『響律師』の中でも異端と呼ばれた。

「じゃが、錬度が足りん」

着弾しさえすれば人など容易く散り散りになるであろう音弾。

貫通に著しく特化した術式が刻み込まれた剣弾。

軍配は剣に上がった。

紙を突き破るかの如く音弾を貫く四本の漆黒の剣。  
唸りを叫びながら擦子曲がった大剣が、詠唱硬直で棒立ちになっ  
たソプラを襲う。

「あ」

声にならぬ声が漏れた。

眼球が映し出す四本の死の鎌。

背筋が凍り付き、まるで予測していなかった死の直面に思考が停  
止する。

しかし。

糸が 閃いた。

ソプラと剣弾を結ぶ直線上。

幾重にも束ねられた糸道が四つ敷かれ、錐もみ回転する大剣を柔  
軟に導く。

剣弾は進路を全て切り替えた。

二本は地面へ、もう二本は脇道へと逸れていく。

「ほれ、何を突っ立ておる！ 戦場で呆ける事は、死と同義と心得  
よ」

打ち付けられる怒号にソプラは、ハッ、と我に返った。

戦場は片時も停滞などしてはいなかった。

嬉々と聖職者の皮を被ったツベロツサが大剣を両手に疾走する。

一歩間違えれば転倒の恐れがあるほどの前傾姿勢での疾駆。

修道服を切り裂いて作ったスリットから白い太腿をちらつかせ、

地面を高速で這う殺人狂の目標は、最も力無き弱者。

つまり、一直線にソプラへと向かっていた。

「アハはは！ 余所見は駄目デスよ。そんな悪い子八手足を一本ず

つ串刺してあげますよ」

駆けるツベロツサに付き従うように浮遊する八本の機械腕が追従する。

疾走するツベロツサの横合いから小柄な影が飛び出した。

影の正体。

『少年アリス』は、無垢な白き剣 秘蹟礼装『バルトアンデルス』を片手に、鋭い刺突を繰り返す。

キーン、と甲高い金属音が教会敷地内に木霊した。

擦りくれた黒い大剣の腹で受け止められた白い切っ先。

刹那の瞬間、ツベロツサは奇襲に対し、驚異的な直感で紫苑の刺突を防いでみせた。

紫苑の姿を認めたツベロツサは、うつとり、と頬を染めて片方の大剣を横に薙いだ。

軽々と振り回される大剣の横薙ぎに、紫苑は体勢を深く沈み込ませ、下方へと回避する。

遅れて下降する一房の黒髪の尖端が、大剣に切られて宙を舞う。

そして始まる二人の剣舞。

紫苑が『バルトアンデルス』で軽々と振り回される大剣をいなし、片手で操る金属系を閃かせる。

ツベロツサが二本の大剣を小枝のように扱い、死角から迫る金属系を切断し、獲物に斬撃を浴びせ掛ける。

舞踏のような殺人技の応酬。

徐々にはあるが紫苑が押されていた。

元来紫苑の戦闘スタイルは中・遠距離間での金属系による間合いを取った特殊な攻め。

武器同士の打ち合いは、体格差の不利などから不得手としていた。相手が普通の者であれば、それでも魔動の後押しで押し切れた。しかし。

ツベロツサは『神聖ミッドガルド帝国』の魔導技術の粋を凝らし

て製造された『ブラックメイル』を装備している。

魔動での身体能力強化は、ツベロツサの前では相殺。

純粹は剣の技術は、ツベロツサの方が大幅に上回っていた。

紫苑が不得手な接近戦を選んだ理由。

それは、ソプラにこの狂人を直接相手取らせないようにする為に他ならない。

「才荷物を背負って戦うの八大変でシヨウ。現にこうしてあなたノ土俵で八無い戦いを強いられている」

「承知の、上です」

鋭すぎるツベロツサの剣技。

切れ切れに、紫苑が苦悶に喘ぐ。

斜め上から撃ち下ろされる袈裟斬り。

紫苑は遂に衝撃を逸らし切れず、『バルトアンデルス』を握った手が大きく外に弾かれる。

体勢が崩れる華奢な体軀。

紫苑は崩れた体勢の中で五本の糸を繰り、ツベロツサに仕掛ける。時間稼ぎの為の布石。

しかし。

ツベロツサの剣の技量は、事なげも無くその鋭利な糸を全て斬り捨てた。

「お見事デス。ですが、残り八本、どうしますか？」

心底殺し合いを楽しみ、狂気と喜色で塗れたツベロツサの問い掛け。

宙に浮く機械腕に握り込まれた漆黒の大剣。

何時の間にか紫苑を取り囲む形で、機械碗が浮いていた。

赤いラインが光を脈動させ、一斉に紫苑を襲う。

逃げ場など無い地面を除いた全方位からの斬撃。

「防ぎます」

凜、とした鈴の音の声。

瞬間。

紫苑が手に握る何者にも侵されざる純白の刀身が伸びた

打ち鳴らされる八つの金属音。

ギヤリ、と金属同士が擦れ合う不快な音色が奏でられる。

紫苑を守護するように幾重にも取り巻いた白い帯。

八の斬撃を、その白い帯が受け止めていた。

無垢な白を誇る帯 刀身を伸張させた『バルトアンデルス』が  
とぐるを巻く蛇の如く蠢動する。

ギリギリ、と接した掬子くれた大剣を滑るように蠢き、摩擦音が  
接触部で生ずる。

そして。

白き剣の繭が、爆発的にその径を膨れ上がらせた。

刃で構成された繭は、機械腕を悉く吹き飛ばし、使用者であるツ  
ベロツサも例外無く刃の膨張に巻き込む。

膨れ上がる繭内部は、まさに剣閃の密集域。

呑み込んだ者を悉く塵芥に斬り刻む剣界。

瞬時の判断。

ツベロツサは二本の大剣を交差させ、後へと全力で跳んだ。

交差させた大剣に、膨れがる白き繭が接触。

瞬間に数多もの剣戟が大剣を五月雨の如く打ち付ける。

歯を食い縛り、握力の限りを尽くして柄を握り込んで押さえ付けなければ、待っているのは千千と切り刻まれて肉片と化す未来凶。

握り込んだ手に感じる無数の剣戟の振動が、握力が急速に握力を殺していく。

次瞬。

ツベロツサは風に吹かれる木の葉のように吹き飛ばされた。

回る視界。

ツベロツサは猫妖精のようにしなやかに空中で体勢を立て直し、砂煙を立て着地した。

片掌と両の足を基点とし、姿勢を低くした着地。

敷地の地面を砂埃と共に滑り、漸くツベロツサの体が止まる。

立ち上がったツベロツサは全身に血化粧を施していた。

秘蹟礼装『バルトアンデルス』の刃は、常に展開している『耐マテリアル魔力障壁装甲』を紙の如く突き破っていた。

しとどに血で濡れるツベロツサの肢体。

激しく紫電を迸らせ、稼働率を著しく下げた『ブラックメイル』。

そして、『ブラックメイル』の支援機である浮遊する機械腕は、その全てが機能不全に陥り、地面に這い蹲っていた。

良くて中破。

大半の機械腕は、装甲が斬り破られ、内部の機械を撒き散らして原型を留めない程に壊れ尽くしていた。

「楽しくなつてきました。此処まで楽しい串刺し相手八あなた達が初めてですヨ」

「はっ！ そんな満身創痍でよう吼えよるわ。肝心の空飛ぶ腕も潰え、今の貴様に何が出来るのじゃ」

「……………くフ」

負け惜しみのようなツベロツサの物言いに、バルが鼻で笑い一蹴。尊大に胸の前で組まれた両腕。

勝敗を確信した強者の態度。

バルの勝利の女神として紫苑が傍らに佇んでいた。

だが。

ツベロツサは絶望的な状況でも、なお嗤う。

濃紺のヴェールが下へと垂れ、血と埃で汚れた亜麻色の髪で表情が隠れ、笑い声だけが不気味に何時までも続く。

「くフふふふふふふふフフフフフフふふふふふふふ

ゴ心配無く、まだマダ沢山たくさん有りますカラ」

ツベロツサの背後の景色、教会の建物が虫食いのように幾つもの滲みが出現した。

数にして二十。

其処から世界と云う粘膜を破るようにして、『ブラックメール』

支援機 『ガントレッツ』が二十機。

格納異相領域から吐き出された。

それぞれの機械腕が掠りくれた大剣を構えたまさに一人だけで構成されたフアランクス（密集陣形）。

「ソプラさん、離れていて下さい」

「然り、此処から先は妾達の領域ぞ。力無き者は即刻去れ」

「ですがッ

」

視線もくれず背中越しに伝えられる忠告。

食い下がるうとソプラの言葉が途中で止まる。

一見頼りなさそうな背中と、人形の背中が雄弁に語っていた。

邪魔だ、と。

それが分からぬ程、ツベロツサとの実力差が分からぬ程、ソプラは愚かでは無い。

「分かりました。今、シンシアさんが聖騎士団の方を呼びに行っていますわ。彼等が駆けつけてくるまどうか、どうかご無事で。御武運を」

「承りました」

「承知」

力強い肯定。

少女のように澄んだ声だと云うのに、紫苑の声がソプラの不安を拭い去った。

まるで吹き抜ける春風のように。

ツベロツサの我慢はお預けを命令された犬のように限界。

臨界点を越えた狂気の風船が破裂しようとしていた。

「サあ！ さア！ 楽しい楽しいパーティを再開しましょうー！！

クラッカーは噴き出す血液デ、ケーキは誰かの死体デ、ローソクは沢山の剣デ、バースデイソングは断末魔デ締め繰りまシヨウ！」

猟奇的すぎる祝いの前口上。

ツベロツサのしなやかな肉体が前傾で発射体勢を取る。

大剣を握る両手を地面へ、臀部を天へと突き出したその姿勢。

彼女の周囲には大量の黒塗りの機械腕『ガントレッツ』。

宴の火蓋が落とされる。

筈だった

「ツベロツサお姉ちゃん、なんで怪我してるの？」

その幼い声を聞くまでは

孤児院の正面扉から姿を現した獣人の子供。

茶色のふさふさした体毛に、犬を人間に近付けたような顔。

くりくり、とした瞳が不安げに揺れていた。

獣人の子供を皮切りに、孤児院の扉からぞろぞろ、と孤児達が姿を出す。

リザードマンの男の子に、耳の長い女の子。

脚の短いドワーフの子供など種族は様々。

皆が一樣に教会内の荒れように驚き、荒れ地で対峙する紫苑とシスターツベロツサの姿に困惑を隠し切れない様子。

「お姉ちゃん、大丈夫!？」

「クふ、来ちゃウ？ 来ちゃうんですカ？」

居ても経つても居られなくなった金髪を短く刈り揃えた男の子が一団の中から飛び出す。

それは朝に皆に囃し立てられていたキールであった。

キールは真つ直ぐ血で塗れたツベロツサへと駆け寄る。  
それはまさしく羊が腹を空かした狼に駆け寄る事と同義。  
自殺行為に他ならなかった。

「いかんッ！」

「駄目です！」

バルと紫苑の焦燥に駆られた声が同時に響く。  
だが、絶望的に両者との距離は開いていた。  
間に合わない。

その事実は確定的。

そして、キールに擦子くれた漆黒の剣の雨が降り注いだ。

小さな子供の体軀が見えなくなるほどの剣の豪雨。

二十機の『ガントレッツ』が射出する剣群が絶え間無く行われていた。

舞い上がる砂煙。

誰もが息を飲む中、ツベロツサだけがただ一人笑っていた。

「アハ、あははははハハハ

駄目デスよ」

ぼつり、と咳かれた弱々しい言葉。

ツベロツサは何かに怯えるように、心の奥底から湧き出る狂った感情を押さえ付けるように身体を両手で抱き締め、震えていた。

敷地を覆う土煙が晴れる。

其処には奇蹟的に着弾を免れた傷一つ無いキールの無事な姿があった。

否。

奇蹟的などでは無い。

キールの進行方向を塞ぐ形で、剣の墓標が打ち付けられていた。  
見ようによってはツベロツサと孤児達を分かつ境界線。

「駄目デスヨ、駄目デスよ、駄目デすよ……………駄目なのですよ」

自身の身体を掻き抱いて、ツベロツサは同じ言葉を呟く。

大切な物を自分の手で壊してしまいそうな恐怖。

抑揚がずれた調子外れの発音は、次第に鳴りを潜め、狂気が萎んでいく。

「あの子達だけは駄目なのです、あの子達だけは……………それだけは、絶対に……………」

狂気が水底に沈み、理性の光が瞳に戻りつつあるツベロツサ。  
やがて。

彼女に渦巻いていた狂乱の宴は、理性と云う名の自制心が鎮めた。

『ブラックメール』支援機 『ガントレッツ』が空中で力無く  
頂垂れる。

待機状態。

ツベロツサが装着していた籠手と脚甲の溝を走っていた紅い光も、  
緩やかに輝きを失っていった。

とん、とバルが剣の墓標の内、一本の上に羽のように降り立つ。

紫苑もツベロツサと子供達の間を阻むようにして立っていた。

油断は皆無。

蒼の宝玉と、碧の硝子玉は険しく殺人狂シスターを見据えていた。

「貴様、正気に戻りおったのか？」

「戻る訳有りませんヨ。これが私デス。これし力私ではありません。  
これカラもずっと……………」

抑揚のずれた声がバルの疑問に返す。

コインの表裏のように、ひっくり返せば、其処には狂気の増埒。狂った顔が表に出た。

だが、何故であろう。

その狂気表情には、僅かな悲しさが混じっていた。

「デモ、何故でしょう？ 殺したいのに、串刺しにしたいのに、あの子達だけはこの手二掛けたく無いのです……」

「ふん、貴様はそんな簡単な事も分からぬのか」

「お人形さんに八分かるのですか？」

「当然よ。紫苑、この阿呆に答えを教えてやるがよい」

どろり、と濁ったツベロツサの瞳が『少年アリス』に向く。

汚泥のように粘ついた瞳と、海の深淵を映した蒼の瞳が交差する。

紫苑の蕾の唇が、ツベロツサの求めた解を紡いだ。

「貴女は 愛しているのですよ」

「愛、しているル？」

「愛する人を苦しめたいと思う訳、無いじゃありませんか。少なくとも俺は絶対にそんな事したく無いです」

部隊の人間を皆殺しにしてから宛の無い流浪の旅。

部下を串刺しにする前に、極彩色の虹に変化した空で『ナニカ』

を見た気がしたが、思い出せない。

気紛れに人を殺し、魔物を殺し。

息をするように人を串刺し、魔物を串刺し。

寝て、食べて、歩いて、殺して。

そんな事を続けている内に辿り着いた交錯都市『ラタトスク』。

足の赴くままに、気の赴くままに進んでいると、ふと目に付いた

孤児院。

最初に門の前に立つツベロツサの姿に気付いたのはキールであった。

「愛している、愛している、愛している、愛している………」

お姉ちゃん、何をしているの、と尋ねられた。

何時も通りに食指が動いたので殺そうとした。

ただ、その純真な瞳を見ると、何故か擦子くれた剣を顕現しようとする意志が鈍った。

その理由を考えている内に、ぞろぞろと別の子供達が寄ってきた。

あの何物にも穢れていない瞳が増えた。

また、殺そうとする気分が薄れていった。

「愛している、愛している、愛している、愛している、愛している………」

困惑する心に戸惑っていると教会から現れた背の高い修道女。

口に啜え煙草、初老の域に達しているであろう年齢である筈なのに、その背筋はとても真っ直ぐしていた。

そして、印象に残っている鋭すぎる目付き。

シスターマリアは、ツベロツサを一瞥。

そして。

此処で働いてみるかい、と唐突に提案してきた。

それからの時間は、ツベロツサの人生の中で最も穏やかで心安らいだ物。

一緒におままごとをしたり、

泥塗れになって鬼ごっこをしたり、

おねしょをして世界地図を描いたシーツを乾かしたり、

怖い話を聞いて眠れない子に子守唄を歌ったり、

本当に、楽しかった。

「私は……あの子達を愛している」  
「ようやっと納得したか、この阿呆め」

答えに行き着いたツベロツサの腕がだらん、と下がり、力が抜ける。

手に握った大剣が二本。

するり、と掌より零れ落ち、地面に突き立った。

ツベロツサは両手を胸の前で組む。

まるで祈るように、行き着いた答えを噛み締めていた。

大事な、大事な宝物のように。

涙が一筋、零れ落ちた。

しかし。

粘り付く狂気は消えない。

「私ハ此処から去ります。『狂い龍』の毒が消え去る……いえ克服するその時マデ」

「貴様やはり奴を見ていたか」

「エえ、気が付いた時八部下の屍の上で笑っていました。元々素養が有ったんだと思いますヨ」

殺人嗜好。

人を殺す事で性的な快楽を得る人間。

その素養がツベロツサには根付いていた。

殺人性愛が花開いた直接的原因は『狂い龍』との邂逅。

絶対に見てはいけない存在を、ツベロツサは見上げてしまっていた。

「追ってきますか？」

「貴様がこの街の人間に手を出さぬのなら追わぬさ。第一貴様が何処で野垂れ死にしようと思味の範疇外じゃ。のう、紫苑？」

「はい。この街には俺にとって笑顔でいて欲しい人達が居ますから」  
「あハ、私と同じデスね」  
「そうですね」

狂気に侵された笑みと、穏やかで柔和な笑み。

『少年アリス』と『串刺し嬢』が互いに笑い合う。

先程まで殺し合いを演じていたとは思えない程、殺伐とした雰囲気は払拭されていた。  
そして。

「カふっ」

ツベロツサの口から血が吐き出される。

完全なる第三者からの狙撃。

上方より一条の閃光がツベロツサの胸を貫いた

あとがき

できれば今回の話の感想を貰えると嬉しいですよ。

かなり今までの世界観にそぐわない代物が出てきたので、

『耐マテリアル魔力障壁装甲』やら、

『ブラックメール』支援機 『ガントレッツ』やら、

なんだかSFチックというかFFっぽいというか。

一応『緑に溢れた月』とか『古代文明』など伏線は張っていたの

ですが、読者の方が置いてきぼりになっていないか心配です。

## 第??章『ブラックメイユ』

ツベロツサの胸を貫いた緑の閃光。

口から零れ落ちた血液。

修道服を赤い血潮で湿らせて、ツベロツサが崩れ落ちる。

ばっ、とバネ仕掛けのように、紫苑は光線が撃たれた方向に首を向けた。

時刻を告げる鐘楼の屋根の上。

其処に　黒い悪鬼が不気味に佇んでいた。

青空の背景の中に、ぼつん、とインクを垂らしたような人型の黒人型が纏うは、甲虫の外骨格を想起させる何処か有機めいた流線形に富んだ機械全身鎧。

一部だけ装着していたツベロツサとは異なり、頭の頂点から足の爪先まで、一分の隙間も無く装着された『ブラックメイユ』。

鎧の口元や背中部の排出機構から吐き出される視認可能な余剰魔力。

黒塗りの機械鎧の上を幾筋に奔る赤い線が、悪鬼の息遣いに呼応しているかのようにだった。

頭部全体を覆うマスクから爛々と人工的な光を灯す赤き双眸と、紫苑の蒼き双眸が絡み合う。

「ツベロツサお姉ちゃん!!　嫌だよ!　目を開けてよ!」

「やだやだやだっ!!　なんで!?!　お姉ちゃん!!　血が、血が  
!?!」

絹を裂く子供達の悲痛な叫び。

突如として慕っている孤児院のシスターが知り合いと死闘を演じ、

果てに胸を貫かれる光景を間近で見てしまった子供達の混乱は極地。訳の分からぬ不条理にただ泣き叫び、倒れたツベロツサに群がるしか出来ない。

その小さな手に付いた夥しい血が、ツベロツサの命が零れているという事実を突き付けていた。

「バル」

「やれやれ、治癒魔術はあまり得意では無く、マナ喰い虫じゃと云うのに……良いのじゃな？」

「はい。身近な人と引き離される悲しみは、良く知っていますから」

悪鬼から視線を外さないでの会話。

バルの念押しに、紫苑は確固として首肯した。

帰郷の為に蓄えていた魔力を使用。

それは身を粉にして切望した地球への帰還を遠のかせる行為。

「それに、『困っている人を見かけたら、出来るだけ助けてあげなさい』、ですから」

「そこまで祖父殿の言付けを守らずとも良いであろうに、難儀な事じゃ」

「大切ですから」

「ふん」

臍を曲げたように鼻を一つ鳴らすバル。

鐘の上から物言わず見下ろす悪鬼に背を向け、バルはずかずかと足音荒く倒れ伏せるツベロツサに近付く。

ツベロツサを取り囲む種族様々な孤児達の不安に揺れた瞳が、バルに集中する。

「悪運の強い奴め。紫苑の優しさに咽び泣いて感謝するが良いぞ」

紫苑はツベロツサ自身の為に、彼女の命を救う提案をした訳では無い。

寧ろツベロツサに対しては、暗殺者である父の教えである『仇なす者に容赦無用』が適用されている。

困っている人は、孤児達。

結果としてツベロツサを助けるという事は、『仇なす者に容赦無用』の教えに背く二律背反の行為だが。

「バルちゃん？」

「ツベロツサお姉ちゃん、しんじゃうの？」

降って沸いた身内の不幸。

大切な人との離別を、まだ幼い彼等に味わせたくは無かった。

二律背反の天秤が片方に傾いた。

「『バルちゃん』などと然様な呼び方をするでない。不本意ではあるが其奴を助けてやるから、涙と鼻水を拭くが良い」

「ほんと!？」

「不服ではあるがな。ほれ疾くと其処から退け、治療が出来ぬぞ」

バルの言葉に、倒れ伏すツベロツサに縋り付いて泣き喚く子供を、年長の子達が引き剥がす。

皆が一樣に頬を濡らしていた。

それはツベロツサが、如何に彼等に慕われていたかの証左。

全く。そのような眼をされては失敗など出来ようも無いではないか。

内心で嘆息をしながらバルは術式を展開する。  
横たわるツベロツサを包み込むように編まれていく楕円体状魔法陣。

揺り籠のようにツベロツサを乗せた術式が、胸に空いた穴を徐々に閉じていく。

楕円体状魔法陣が一際紋様を輝かせる。

意志媒体である球体関節人形が螢火を淡く発し、呼応するかの如く『バルトアンデルス』本体も光を発する。

それはもはや治癒魔術の範疇に収まっていなかった。  
傷周囲の時間が逆巻く。

地面に零れた筈の血液が独りでに動き、傷へと帰還していく。

砂も泥も混入していない純粹な血が、ツベロツサの体を再び循環治癒と呼称するには、あまりにも過ぎた奇蹟。

それはまさに復元であった。

「何の……つもり、デスカ」

「ほう、その傷で喋りおるか。じゃが黙っておれ、童達に心配を掛けさせたく無ければな」

喋る度、口から赤い命の雫を吐き出しながら言葉を紡ぐツベロツサ。

ガントレットとレギンスに内蔵された術式 『オート・リジエネレ 自動作戦継続機  
構術式』<sup>「シヨン」</sup>が細い糸でツベロツサの命を繋ぎ止めていた。

唐突。

それまで沈黙を保っていた機械仕掛けの悪鬼が動いた。

背中部のMana排出機構から猛烈な勢いで吹き出される黒ずんだ魔力が、推進力として悪鬼を加速させる。

塔の上より地面へ。

目標は、バルの手によって『蒼の大地』でも最高峰の治療を受けているツベロツサ。

「させるとでもお考えですか？　バルではありませんが、貴方はとても不粹です」

「……」

目標に向けて一直線の黒い軌跡を残す機械鎧の悪鬼を、紫苑が勇ましく迎え撃つ。

顕現する滑車状魔法陣。

即座に進路を塞ぐようにして張り巡らされる緻密な系のバリケード。

空を駆ける悪鬼は、そのツベロツサを守るためのか細い盾を引き千切ろうと更に加速する。

所詮は糸。

例えそれが鋼糸であって紙を突き破るように突破できる加速と質量であった。

しかし。

「ご存知ですか？　蜘蛛の糸は自然の中で最も丈夫な糸、なのです」  
「よ」

くすり、と普段の様子からは想像もつかない程、妖艶に笑う紫苑。魅入られた者の背筋も、心すらもぞつ、とさせる魔性の破滅的な美しさ。

平時は穏やかな紫苑も、この無作法な介入者に怒りを覚えていたのだった。

そして。

千変万化。

蜘蛛の糸の性質を付加された秘蹟礼装『バルトアンデルス』の糸

に、憐れな獲物が飛び込んで来る。

蜘蛛の出糸突起から紡がれる糸の強度は、およそ鋼鉄の五倍。ぎちり、と張り巡らされた糸の巣が、突撃してきた悪鬼によって円錐状の歪な形に変形する。

だが、糸は引き千切られない。

「ッ！」

予想を違える現実。

悪鬼の驚愕が表へと漏れる。

紫苑が編んだ糸の巣は、確かに悪鬼を受け止めきって見せた。蜘蛛の巣の中で内に、紫苑の巧みな指の動きにより、絡め取られていく機械仕掛けの鎧。

首を、腕を、足を。

次々と糸の呪縛に侵される身体の各部位。そして。

まるで不格好な人形のように、関節の各部を極められて地面へと落下させられる悪鬼。

重々しく鈍い音が辺りに響いた。

「それで、貴方は一体何者なのですか？」

這い蹲る機械鎧の悪鬼を見下しながらの尋問。

一つに束ねた後ろ髪を揺らし、見下ろす紫苑。

その瞳は、嗜虐性癖のある者ならば身悶えが止まらぬ程に冷たい極寒。

這い蹲った悪鬼は、絡んだ糸を『ブラックメール』の出力を底上げして引き千切ろうと試みるが徒勞に終わる。

自然界に存在する蜘蛛の糸は、鉛筆大の太さにすれば大空を飛ぶ飛行機すら止められる強度。

例え、『神聖ミッドガルド帝国』の粹を結集した特殊武装でも、破られる道理は無かった。

「無駄ですよ」

「がああッ！！」

紫苑の白魚のような指が繊細に動き、悪鬼の関節を更に締め上げる。

初めて機械仕掛けの鎧から漏れる苦悶の声。

それはまだ若い男性の物であった。

「くっ、《火よ》」

焦りを伴った一工程の詠唱。

黒塗りの機械鎧全体に火の手が上がる。

それはツベロツサが用いたのと同様の手段。

燃え盛る炎が一本、また一本と糸の拘束を燃やし切っていく。

そして。

悪鬼が再び野に解き放たれる。

油断も、慢心も既に取り払い、炎を纏い機械鎧の悪鬼が再び紫苑と対峙した

Original Novel

追憶のシオン

第??章『帝国の影』

「もう一度お聞きします。貴方は一体何者ですか？」

「……帝国軍特殊作戦部隊『ブラックメイル』所属、ノウゼンⅡハ  
ーレン。」

脱走兵ツベロツサⅡツエペシユの処分の命を受けて此処に居る。

其処を退け」

「お断りします」

紫苑のそれより大分低い男の声が、鎧内部より響く。

機械仕掛けの悪鬼　ノウゼンの要求を紫苑はにべも無く断った。  
思考の介入の余地も無い、見事な断言であった。

「……何故だ、お前は脱走兵と争っていたのではないのか？」

「幾つか思い付く理由は有ります。その中で一番大きな物は　そ  
うですね、あの光景を見て分かりませんか？」

紫苑の背後より上がる子供達の歓声。

其処には上半身を起こしたツベロツサが縋り付いて嬉し涙を流す  
子供達を宥めていた。

胸の傷痕は、修道服の胸部に空いた穴以外痕跡は見受けられない。  
彼女が泣く子供の頭を撫でれば、感極まって更に泣く。

ツベロツサがその様子に困ったように笑っている。

嬉し泣きと、笑顔の光景。

修道女と子供達が描く、汚す事を憚れる感動の光景だった。

「命令は。絶対だ」

「そう、ですか」

諦観が籠った紫苑の言葉。

すう、と紫苑の眼が細まり、大空のように澄んでいた瞳が深海の深い色へと変化する。

紫苑の精神は既に臨戦態勢に入っていた。

ノウゼンが纏う『ブラックメイル』は、ツベロツサが纏っていた物の一世代後の後継機。

やや無骨さの残るツベロツサの物とは異なり、流線の目立つ洗練されたフォルム。

性能と云う点では、上回っている箇所が大きい。しかし。

紫苑は、操者の技術面での実力では圧倒的にツベロツサの方に軍配が上がると予測していた。

直感と云っても良い。

立ち振る舞い。

重心の振れ。

微々たる情報が寄り集まり、紫苑はその結論に達していた。

未知なる物は、ノウゼンが所有している兵装。

そして。

カラン、とノウゼンが踏み砕いた鐘楼塔の屋根の欠片が落ちた。

それが合図。

ノウゼンが魔導機械の腕を紫苑に向ける。

掌には落ち窪んだ孔。

腕に葉脈のような光の筋が浮かび上がり、掌の孔に向けて光が収縮していく。

植物が水を吸い上げるように魔力を一点に集め、強力な機械仕掛けの魔術が発動しようとしていた。

ノウゼンとツベロツサを直線で結び、その間に紫苑が居る状況。

発射体勢に入った魔術は、紫苑の奥　上体を起こしたツベロツ

サに向けられていた。

ツベロツサの周囲には孤児院の子供達が居る。

ノウゼンの魔術が放たれば、子供達も無事では済まない事は予想に難くなかった。

「誰に　それを向けているのですか」

そのノウゼンの行為が、紫苑の激憤の琴線に触れた。人差し指と親指を合わせ、紫苑の手が何かを引く動作をする。瞬間。

弾かれたようにノウゼンの腕が、上へと跳ね上がる。

跳ね上がった腕には、何時の間にかノウゼンが気付かぬ内に鋼糸が巻き付いていた。

収縮された魔力が術式を介し、発射目前のタイミングでの介入。バネ人形のように上空へ向けられた籠手から、人の頭部程の光弾が発射された。

眼を眩ませる程の光量を撒き散らし、光弾は遙か上空で轟音と共に破裂した。

「今、貴方が向けていた矛の先には、関係の無い子供達が居たのですよ」

「命令は絶対だ。確実に遂行する手段を選ぶ」

ふつつつ、沸いてくる激情を押し殺して、頭は常に冷静に。

紫苑は静かに素顔を見せない『敵』に問い掛ける。

返ってきた返答は、ある意味で紫苑が望んでいた物であった。容赦など無用だと理解できたのだから。

「良く、分かりました　貴方を解体します」

紫苑の表情からごっそり、と感情の色が抜け落ちる。  
能面のように無機質になった紫苑が、流麗な腕と指の動きで糸を  
繰る。

その動きとは裏腹に、操られる糸は機械の如く正確無比な絵を描  
いていた。

「《火よ》」

《妾が何時までもその猪口才な焚火に甘んじると思ったか、戯けが  
！》

再び言霊を呟き、機械鎧『ブラックメイル』に炎を包ませるノウ  
ゼン。

その行為に、紫苑の長手袋と化したバルが一喝する。

そして、千変万化。

糸が陽の光を反射させ、閃く。

耐熱性を付加した秘蹟礼装『バルトアンデルス』の糸が、瞬きの  
間に檻と成りてノウゼンを取り囲んだ。

「『高マナ周波ブレード』展開」

黒地の装甲の腕部分。

二の腕に折り畳まれた棒状の突起がカシユン、と肘の接続部を基  
点に半周し、腕の前に装備される。

そして、ノウゼンの音声認識を経て、棒状の突起 実体剣に緑  
光のブレードが展開された。

ノウゼンは両手に展開したブレードを振り回し、迫る糸の檻を切  
り裂いていく。

時に『ブラックメイル』で強化された身体能力を嵩にかけて縦横  
無尽に斬撃を喰らわせ、

時に掌から発射される光弾で風穴を開ける。

紫苑は、時折飛来する光の弾を最小限の動きで避けながら糸を操る。

「バル」

「案ずるな。後ろの子守りは全て妾に任せておくのじゃ」

以心伝心。

バルが今度は球体関節人形の口を介して、紫苑の懸念を払拭させる。

後顧の憂いは無くなった。

紫苑の糸を繰る動きが俄然に鋭さを増す。

細く繊細な腕を羽のように拡げ、踊りを踊るかの如く紫苑が舞う。闘争の間際で無ければ見惚れてしまうほど、見事な演武はしかし、ノウゼンにとつての死の舞踏。

迫り来る糸の檻の密度が、段違いに高くなる。

一回り、二回りと、時を経る毎に密度は増していき、遂にはノウゼンの糸に対する処理速度を上回る。

キィイ、と耳鳴りに似た高音域の音色が左腕装甲から響いた。

「ッ!?」

ノウゼンの全身鎧に隠れた瞳が驚愕に彩られる。

其処には『耐マテリアル魔力障壁装甲』で常に防護されている筈の『ブラックメイル』に深い切断痕が残されていた。

しかし、ノウゼンに驚いている暇など無い。

腕に、首に、脚に、顔面に。

次々と奏でられる高音域の連奏。

回数を重ねる毎に、帝国の謹製の『ブラックメイル』に付けられる切断痕は、深く広くなっていく。

絶え間無く続く糸が鳴らす耳鳴り音。

徐々に装甲を削っていく糸と云う視認困難な見えざる敵。恐怖がひたひたと足音を立てて近付いていた。

『ブラックメール』と云う魔導科学の結晶は、今のノウゼンにとつて棺桶でしかなかった。

そして、遂に。

「ぐ、あああッ！！」

糸が 中身に到達した。

焼けるような右腕の痛み。

肉を裂く感触が、糸越しに紫苑に伝わった。

その激痛に機械仕掛けの悪鬼が苦悶の叫び声を上げる。

黒塗りに深々と刻まれた切断痕から流れる赤い血潮。

内蔵術式 『オート・リジエネレーション自動作戦継続構術式』の恩恵で傷口は直ぐに塞がる。

しかし、こびり付いた恐怖の感情は消えはしない。

ノウゼンはそれを振り切る為に、有らん限り咆哮をした。

「ガアあああああッあああああ！！ おおおおおお おおおお！！！！」

機械鎧に内包された魔力が膨れ上がる。

『ブラックメール』を奔る赤い光の線が、更に葉脈のように拡がり、マナが際限無く高まる。

そして弾けた。

高まり過ぎたマナが、物質に干渉するほどの密度と圧力でノウゼンの周囲全てを破裂と共に吹き飛ばす。

糸の檻が吹き飛ばされ、地面が擂鉢状に抉れる。

衝撃波は離れた紫苑まで届き、後退を余儀無くされた。

大量の土砂を撒き散らし、もうもう、と立ち込める砂煙。

視界を邪魔する砂煙が晴れる。

小規模のクレーターの中心部に大量の支援機『ガントレッツ』を侍らしたノウゼンが、幽鬼の如く佇んでいた

総勢四十を超える機械腕『ガントレッツ』の群れ。

その全てが手を広げ、掌に開いた銃口を紫苑達に向けていた。

浮遊する『ガントレッツ』に葉脈のような筋が現れ、銃口に魔力炉から生成された人工魔力が集中する。

発射目前まで準備が成された『ガントレッツ』は、まさに撃鉄を引いた銃。

後はノウゼンの思念波を待つばかりであった。

「最終通告だ。其処を退け、さも無くば殺す」

「今更ですか？ あまりおかしな事を云わないで下さい、臍でお茶が沸いてしましそうです。」

分かり切っている答えを訊く程、貴方の頭は中身が詰まっていな  
いのですか？」

低く脅す口振りに、紫苑が可憐な顔で辛辣な言葉の刃を放つ。

楚々と咲く花から滲み出る猛毒。

精神薄弱な物がその毒に晒されれば、それだけで鬱病になりかねない毒性であった。

ノウゼンは紫苑の毒舌を挑発と受け取った。すつ、と指揮者の如く掲げられる片腕。それは一斉掃射の引き鉄。

掲げられた腕が振り下ろされれば発射寸前の『ガントレッツ』が火を噴く。しかし。

「チョツと、待つて貰えますか、シオン君」

切られる火蓋に待ったを掛ける人物が居た。

腰に何人もの子供達に縋り付かれて、修道服を纏う殺人鬼　ツベロツサが立っていた。

心臓を確かに貫いた筈の人物が立ち上がり、ノウゼンの振り下ろさんとしていた腕が止まる。

破損個所だらけであった修道服すら新品同様に修繕されて、ツベロツサの損傷は直されていた。

その奇蹟の立役者。

縋り付く子供達と同じ背丈のバルが、一仕事を終えた顔で腕を組んでいる。

「心臓に開いた大穴は、狂い無く完璧に塞いでやったのじゃ。ついでにおまけとして他の傷も治してやったぞ、感謝し、平伏するが良  
い」

「あハハ、感謝してますヨ、お人形さん。機会が有れば優しく突いてあげますネ」

「ふん、それだけ戯言が云えるのであれば上等であるな。返り討ちにしてやるから何時でも掛かってくるが良いぞ、小娘」

謝意と宣戦布告が飛び交う奇妙な会話。

息をするように自然な殺人予告をするツベロツサに、不敵に返す

バル。

色良い返事に血色の良くなったツベロツサが喜色に染まる。

「お姉ちゃん、おげが大丈夫？」

「お胸いたくない？」

「ツベロツサお姉ちゃん……ツベロツサお姉ちゃん」

腰に抱き付いた子供達が真っ赤に泣き腫らした瞳で見上げていた。幼い彼等に見せてしまった血に塗れた凄惨な場面。

その衝撃が少しでも和らぐようツベロツサは一転して慈母の顔を滲ませる。

仮面を付け替えるかのような顔面の切り替え。

「キール君に、ロコちゃんに、ノリツツジ君、私ならもう大丈夫ですよ。ほらこんなに元気」

むん、と細い女の腕で力瘤を作る仕草をするツベロツサ。

わざとらしくも大仰なツベロツサに、子供達の不安が少し和らぎ、表情に安堵が広がる。

聖母と殺人鬼。

正反対とも云える性質を同居させるツベロツサが、子供達に向けてる瞳だけは慈愛に満ちていた。

「皆、私はちょっとあの真っ黒な趣味の悪い人にお話があるから、あそこのお姉ちゃんの所まで離れててくれませんか？」

「でも……」

「大丈夫です。私にはとっても強いシオンのお姉ちゃんが付いていきますから。皆も見てたよね？」

首を傾げて問い掛けるツベロツサ。

うん、すごかった等、子供達は口々に思った事を述べる。そして。

子供達は短い足を忙しく動かし、ツベロツサが指差した方向ソプラが居る場所へと駆けて行く。

わらわら、と向かってくる何人もの幼い子達にソプラは慌てる。

しかし、誘導した張本人　ツベロツサは孤児達の背中を見送った後、一歩前と進み、紫苑と並んでノウゼンと対峙する。

「ヤあ、お久しぶりデスね、『はなた湊垂れノウゼン君』。まさかあの情けなかった君がこんなニモ容赦無く殺しに来るとは予想外でしたヨ」  
「ツベロツサ隊長」

「行き成り心臓をブチ抜いてくる。こういうのヲ感動の再会と云うンでしたネ」

気安い口調。

それがツベロツサとノウゼン、二人が既知の仲である事を証明していた。

ブン、とノウゼンの頭部を覆うマスクが空間に溶け込むように消失する。

外気に晒されるノウゼンの素顔。

精悍、その一言に尽きた。

短く刈り上げ、逆立てた黒髪。

獰猛さを秘めた鋭い眼光。

彫の深い眉間の皺。

とても『湊垂れ』の呼称が当て嵌まらない、男と云う性別が匂い立つような顔立ちだった。

「何故ですか、ツベロツサ隊長？」

「ウン？」

「『蒼の大地』駐屯軍、第四師団一番中隊総員361名の内、死者

361名、生存者0名。貴方ほどのお人が軍を裏切ったのですか！」

顔から深い苦渋の色を滲ませ、低く静かに問い掛けるノウゼン。きよとん、と眼を丸くするツベロツサ。

神聖ミッドガルド帝国特殊作戦部隊『ブラックメイル』隊長と一兵士。

嘗ての部下と上司の間には決して理解できぬ溪谷が流れていた。

「はハ、『洩垂れノウゼン君』。それは今、重要な事ですか？ 違いますよネ、貴方が受けた命令八私の拿捕で八無いのですヨ。

殺害命令、分かりマスか？ ナら出会っテ遣る事は？」

「問答は不要と云う事ですか、隊長」

「物分りが良くテ大変宜しいデス。それニ今私は怒っているのですよ。君の粗末なチンコぶつた切つて、お口でシャブらせてあげたいくらいです」

「バル、何を云っているのか聞こえないです」

「聞かずとも良い」

紫苑の教育上不適切なツベロツサの発言は、バルが飛び乗って耳を塞ぐ事で阻止された。

突然の奇行に、紫苑は眉尻を下げてバルに抗議する。

だが、却下。

汚い言葉遣いを聞かせたくないバルの親心だった。

「トリあえず、粗チンの君ニも一応選択肢をあげますヨ。退却力  
闘争力」

両手には顕現した抜子くれた漆黒の大剣。

姿勢を低く、尻を持ち上げ、今にも飛び掛からんと力を溜めこんだ体勢。

ブン、と羽音共に宙を浮かぶは二十機の『ガントレッツ』。  
最新鋭のノウゼンの支援機と合わせれば六十を優に超える。  
相対するのはたったの三人と一体。

だが。

宙を埋め尽くす支援機『ガントレッツ』が作り出す荘厳たる光景は、戦争だった。

「軍の命令は絶対です。お覚悟を、貴女にはもう一度死んでもらいます」

「相変わらず、その愛国心の塊みたいナ性根八変わっていませんね。デモ命令第一主義な軍人として八合格力もしれませんが、それ八蛮勇と云う物デスよ!!」

初速から最高速。

限界まで引き絞った弦を解き放つように、ツベロツサと云う矢が射られた。

その疾走に反応したノウゼンが撃鉄を下ろす。

四十を超える銃口が三つの目標に照準を合わせ、一斉に火を吐く。しかし。

くっ、と紫苑のたおやかな指が、昼の朝顔のように恥ずかしげに花を閉じる。

その動作が数え切れぬ程の鋼糸と連動していた。

空間を満たしていた物は、『ガントレッツ』だけでは無い。

秘蹟礼装『バルトアンデルス』謹製の糸が、光の屈折率すら変化させ、戦場を覆っていた。

そして。

糸は物言わぬ数多の『腕』を操る。

ノウゼンの『ガントレッツ』だけを選別し、火を吐こうとしていた全ての銃口が太陽を仰いだ。

「馬鹿な！」

「はっ、戯けが青二才。戦力の逐次投入など愚者が酔狂でやるもの。初めから全力で殺しに来れば、或いは、じゃったな」

バルの嘲りの中、一瞬にして目標の居ない対空砲と化した『ガン  
トレッツ』。

破壊の力を内包した光弾が鮮やかに、視界を埋め、一斉に打ち上げられる。

鼓膜を強かに連打する轟音が、交錯都市中に激震した。

太陽より明るく輝く光源の最中。

修道服の狂人が影のように疾駆していた。

「驚くのも良く分かりマスよ。あの子ノ糸の操り様ハねじが十本、  
二十本抜けてマスよね。串刺しにしたいデス」

「くっ」

「アら？」

ギイン、と重く響く金属音。

緑色の粒子を放つブレード部がツベロツサの斬撃を受け止めていた。

一瞬の拮抗。

ぐるり、とツベロツサが罅迫り合う刀身に力を抜き、身体が回転する独楽になる。

淀み無い切り返しの刃がノウゼンを襲う。

横薙がれた漆黒の軌跡を、『高mana周波ブレード』で受け止める  
ノウゼン。

「アは」

元部下の成長を喜ぶように、まるまると太った子豚に喜ぶように、

ツベロツサは口の端を吊り上げる。

始まる剣戟の乱舞。

黒と緑の軌跡が帯を引き、無秩序に打ち鳴らされる金属音が間断無く続く。

近接戦闘の腕は、やはりツベロツサに一日の長があった。

ノウゼンは危な気ながらも漆黒の大剣を捌いていたが、定石を無視するツベロツサの変幻自在の剣筋に、徐々に抑え込まれていく。

「どうしました、『洩垂れノウゼン君』？ 随分と旗色が悪いようデスが？ 腹痛です力？ ぼんぼん痛イ？」

「くっ、ご心配無く。確かに隊長の技量には及びませんが『ブラックメイル』の性能面では俺に分があります」

「へエ、では見せて貰いましょう力、ね！」

片手で持った大剣の袈裟斬り。

女の細腕から人を両断できる馬鹿げた重さの斬撃が放たれる。

しかし。

粒子状のマナの残滓を残し、機械鎧に包まれたノウゼンの姿が掻き消える。

肩から腰を分断する筈の刀身が、獲物が消失した事により空を切った。

一瞬の空白が生まれる思考。

だが、ツベロツサの脳裏にすぐさま一つの解が浮かび上がった。

軍を脱走する直前に見た『ブラックメイル』改良の草案。

それには支援機『ガントレッツ』を目印とした極短距離間の『空間転移』の項目が記載されてあった。

つまり。

ツベロツサが結論に達すると同時に、背後の浮遊する機械碗の一つから空間が湾曲し、何かを生み出そうとしていた。

空間の湾曲が戻り、『高マナ周波ブレード』を振り上げた黒塗り

の機械鎧が踊り出た。

そして、緑の刃が無防備なツベロツサの背中を深く切り裂いた。ぱっ、と赤い飛沫が宙を彩る。

「ッあ！」

背後へ振り向き様に横薙ぎ。

しかし、明らかに動きが悪くなった太刀筋は、簡単に避けられてしまう。

修道服を染める夥しい量の血液。

一手で盤面が覆され、ツベロツサに長期戦は望めなくなってしまった。

「やれやれ、もう実用化してイタのですか、『シフトチェンジ』を開発部の勤勉さにはホトホト呆れてしまいマスよ」

流れる血が腰を伝い、尻を伝い、脚を伝い、地面を赤く濡らす中、ツベロツサは平然と軽口を叩く。

だが、滲み出た脂汗が状況の悪さを物語っていた。

近接戦闘において単純な破壊力や速度よりも重要な要素がある。

それは位置取り。

極論を云ってしまえば戦闘は間合いの取り合い。

槍を使う相手ならば超近接でそのリーチの差を逆手に取り、逆に短剣ならば間合いの外から一方的に攻撃すれば良い。

その間合いの取り合いの常識を覆すのが、ノウゼンが使用して見せた短距離間空間転移『シフトチェンジ』。

不利な状況からならば相手の攻撃圏外へと外れ、逆に無防備な背後へと移動できるこの術式機構は、まさに反則業。

戦闘において莫大なアドバンテージを取れる反則機能あった。

状況は一転する。

ぱっくり、と顔を覗かせた傷口から夥しく流れ出る血潮。

『オート・リジエネレーション  
自動作戦継続構術式』が機能しているが、機能不全に陥っている『ブラックメイプル』では遅々として治癒が進まない。

時折紫電を迸らせる機械の装備は、紫苑との戦闘の痕跡を色濃く残していた。

ツベロツサの唇からは血の気が引いていた。

しかし。

狂った聖職者に後退の二文字は無い。

「ですが、その機能もソウ無制限に使用できるといふ訳で八無いの  
でしょう？ 現に君ノ『ブラックメイプル』の術式処理機能が全稼働  
デスよ」

ツベロツサの指摘。

ノウゼンの纏う最新式『ブラックメイプル』の表面装甲には、数多  
もの赤いラインが踊り狂っていた。

走る赤い光だけで人型の像として確認できるほどの光の乱舞。

鎧の排出機構からは多量の余剰マナが大気を汚す。

「流石です。だが分かった所で無意味。まずは貴女では無く厄介な  
後方組を始末しましょう」

装甲表面の赤い光が大人しくなった瞬間。

再びノウゼンの姿が世界に溶け込む。

脂汗の浮かんだ顔にツベロツサはくすり、と不敵な笑み。

そして消え去った元部下に向けて届かぬ忠告を呟いた。

「あの子がそう簡単にどうこう出来るとは思えませんが、ね」

ざわり、と後方支援に徹していた紫苑の頭に警鐘が鳴り響く。

紫苑独特の感覚器『害意の糸』がぴん、と張り詰め、背後から強烈な悪寒が迫る。

即座に半身になり、紫苑が『害意の糸』の先から逃れる。

次瞬。

ヒュン、と泡立つ肌を風切り音が撫で上げる。

背後の空間から緑の光剣が通り過ぎ、黒い悪鬼が溶け出た。

「ッ」

「疾ッ！」

予想外の回避。

描いていた未来予想図が外れ、空間転移『シフトチェンジ』を終えたノウゼンが驚愕に硬直する。

一瞬の停滞。

棒立ちになつた黒塗りの機械鎧を、紫苑の細い脚による蹴りが見舞われる。

いかな紫苑の細脚とて、魔動の後押しによるソレは巨人族の剛腕に等しい。

蹴撃がノウゼンの側頭部を打ち据えた。

「ッグ！」

視界の光景が数メートルずれ込む程の衝撃。

奇襲を悟られたのとは別種の物理的な衝撃がノウゼンの脳を揺さ振る。

蹴り飛ばされる重々しい機械鎧に、紫苑は更なる追撃を仕掛ける。

グン、と吹き飛ばされている途中のノウゼンの身体が、慣性を無視して引き止められる。

黒塗りの甲冑に幾つも絡み付いた細い細い線。

日光を僅かに反射させるソレは紫苑の最も得意とする獲物の糸。

気付けば、急減速により制止させられたノウゼンの懐の奥の奥に、紫苑の小柄な体躯が潜り込んでいた。

「ふッ！」

蕾のような唇から鋭く吐き出される呼気。

肩を用いた超至近距離からの当身。

瞬間。

ドン、とノウゼンの腹に収まった内臓が爆発した。

否、そう錯覚させる程の衝撃が彼の腹を突き抜けて行った。

「ガハッ！！！」

古流武術における内部破壊の技、『徹し』<sup>とあ</sup>もどき。

これもまた紫苑が『じいじ』と呼ぶ祖父に護身術として手解きされた物であった。

だがその威力は護身術の枠に括るには些か凶悪過ぎた。

ノウゼンの口から撒き散らされる血液。

糸によって束縛されたノウゼンの身体は、衝撃を逃がす余地など無く、真正面からその技の牙に身を曝け出していた。

「『ガントレッツ』ッ！！！」

腹の中を暴れ狂う激痛に耐え、血反吐を撒き散らしながらノウゼンが思念波で浮遊する数多の機械腕に命令を下す。

機械腕の掌から無数の光弾が紫苑へと殺到。

これ以上の追撃は無理だと判断した紫苑が、即座にその場から離れる。

断続的な破壊音が、二人の距離を引き離れた

半刻前の寂れた孤児院とは掛け離れた荒れよしの敷地内。

地面や塀には大量の剣群が深々と突き刺さり、地面の彼方此方には小規模なクレーター！。

散発的に鳴り響く破壊の炸裂音。

空へと伸びる極太の光線。

其処はまさしく死が近い生々しい戦場であった。

つまり。

街中でそのような物が勃発したならば間違い無く野次馬が集まる。

ましてや孤児院のある場所は、住宅地区。

必然と人々の目がその戦場へと誘われていた。

「なによ、あれ」

「おい！ 憲兵はまだなのか！」

「押すなって！ 危ないから前に出んな！」

「あの奇怪な鎧野郎がこんな馬鹿騒ぎをやってるのか？」

「あれ、戦っているのシオンちゃんじゃない？」

喧騒が孤児院の門に満ちていた。  
そんな中、人波の波間に金の巻き毛が見えた。  
プロツサムス魔導学院指定の制服を着ている少女はソプラ。  
彼女は必死に人の波が孤児院内に入らぬよう奮闘していた。

「ち、ちょっと、あなた方！ 此処はとても危ないのですから前に出ないで下さいまし！ ああ、もう！ 本当に危険なのですわよ！」

人波に揉まれ、ソプラがこの場の危険性を示唆するが誰もが好奇心に負け、去る者は居ない。

帰ってソプラの物言いに興味を引かれ、怖いもの見たさの者達が増えてくる始末。

必然、高まる喧騒は闘争の渦中に身を投じる者達にも聞こえていた。

「……………これまで、か」

「そのようですね。俺としては、貴方が一般の方々を巻き込むような思慮の無い輩とは違う事を祈るばかりです」

闘争の幕引き。

任務未達成の苦渋に顔歪ませるノウゼンと、辛辣な毒を以って対応する紫苑。

その最中、ざわめく野次馬の人垣が割れる。

割れた人垣の先には二つの人影。

その二つの人影の二の腕に付いたバル・イス聖騎士団の腕章の威光が、人波を切り開いていた。

一人は若草色の長い髪と、頭にかぶったベレー帽のリボン紐を靡かせた女性。

女性的な曲線を描く銀の手甲と脚甲を装備し、コルセットのよう

な軍服を纏ったメルトラルトであった。

その眠たげな半目には、平時とは異なる剣呑な光が灯っていた。そして、メルトラルトに付き従う形で続くのは、長くも短くも無い金の髪をさらり、と流した優男風の青年　フェイランだった。

「はいはい、どいてください。通りますよ」

「危険です。道を開けて、下がって行ってください！」

緊張感を感じさせぬような間延びしたメルトラルトの声と、集った野次馬に避難勧告を発するフェイラン。

割れた人垣から孤児院の惨状を、そして『少年アリス』と対峙する黒塗りの機械鎧を目の当たりにしたバル・イス聖騎士団の二人は、既に己の得物を抜き放っていた。

メルトラルトは、細身の身の丈もある十字槍。

そしてフェイランは、腰に帯びた実用性を重視した幅広の片手剣。

「帝国の手の者か!？」

「不法入国の帝国兵さん、面倒くさそうなのが出て来たね」

「のほほんと云わないで下さい、メルトラルト副隊長！」

のんびり、とのたまう副隊長にフェイランから悲痛な叱咤が飛ぶ。非常時、平時間わずマイペース過ぎるメルトラルトの態度に、部下の胃痛は日々お祭り騒ぎであった。

お友達である胃薬がフェイランのキリキリと痛む胃を呼んでいた。

「ソプラさん！」

「シンシアさん!？　お姉様を呼んで来て下さいましたの？」

「はあ、はあ……はい」

人込みを掻き分け、茶髪のお下げエルフが姿を表す。

シンシアは膝に手を付き、肩で息をしながら呼吸を整える。頬を伝う汗が彼女の必死さを物語っていた。

外野がざわつく中。

殺人狂シスターと漆黒の悪鬼は静かに対峙していた。

「ツベロツサ隊長。次、あいまみ相見える時にその首を頂きます」

「はハ、両手足を串刺し二して、失血死直前で頭ヲ撃ち抜いてあげまアよ」

殺人予告の別れの言葉。

元部下　　ノウゼンはただ実直に、元隊長　　ツベロツサはただ

猟奇的に。

それぞれがお互いの喉元に牙を突き立てんとした声明だった。

何時の間にか、あれほど宙に浮いていた数多の支援機『ガントレ

ツツ』は空間に溶けて消えていた。

「貴様等の事は忘れん」

「ふん、弱い輩ほどよう吠えるわ」

「貴方の方こそ、その首が胴体から離れないように後生大事にして下さい」

ノウゼンが忌々しそうに紫苑達に言葉を吐き付ける。

対しバルは不遜に見下し、紫苑は首筋が薄ら寒くなる台詞をゆつたりと紡ぐ。

ぐっ、とノウゼンの黒塗りの鎧に包まれた身が沈ませる。

力を溜めこむ動作の後、ノウゼンの身体が跳んだ。

高々と。

黒き悪鬼は、赤く光る線を残しながら住宅地区の屋根を軽々と飛

び跳ねる。

その遠くなる帝国兵の背へ、良く通る声が掛けられた。

「あらら。勝手に逃げちゃうのはメッ、ですよ。ソプラちゃん」

「は、はい、何ですの、メルトお姉様」

「久しぶり、大きくなったね。でね、急だけど座標の補正と援護よろしく」

ベレー帽のリボン紐を風に揺らし、メルトラルトが眠たげな目で遠くなる悪鬼の背を視界に収めていた。

メルトラルトは、ノウゼンから目を離さずに妹の前に立ち、支援を要請。

「分かりましたわ、お姉様。あの不届き者にきつい一槍をお見舞して下さいまし」

最初こそ慌てていたソプラも、すぐに姉の言葉の意味する所を悟り、『響律師』の本分を全うせんと瞳を閉じた。

ソプラから発せられる黄金の音色。

その声帯を震わし、奏でられる歌声は酷く美しく、旋律が色を伴って現世へと形を成す。

前方に居るメルトラルトを包み、長く伸びる黄金色のマナの道筋。それは砲台にも似ていて、去りゆく黒い悪鬼へと続いていた。

「ソプラちゃん、ちょっと見ない間に随分と『歌』が上手になったみたいだね。えらいえらい」

「茶化さないで下さいまし。もう私は子供ではありませんのよ」

軽口を叩き合いながら、メルトラルトは細身ながら十分な重量のある十字槍をくるくる、と手で回し、投擲体勢に入っていた。

上半身を限界まで捻転させたその姿は、さながら弦を引き絞られた弓。

そして。

僅かな助走に勢いづけられ、足から脚へ、脚から腰へ、腰から肩へ、肩から腕へ、腕から手へ。

全身を弓にした投擲が放たれる。

ソプラの『歌』により十字槍は、衆目の目から掻き消えるように更に初速が加速する

それはさながら閃光。

目標は屋根伝いに撤退する帝国兵。

柄の朱塗りが赤い軌跡としてだけかろうじて肉眼で判別できるだけの超高速の弾丸であった。

背後から猛然と飛来する十字槍の存在をノウゼンが気付いた時には、既に遅い。

もはや迎撃も回避も出来ぬタイミング。

故に。

「『シフトチェンジ』！」

『耐マテリアル魔力障壁装甲』では防ぎきれない。

そう瞬時に判断したノウゼンが『シフトチェンジ』を発動させる。

ふっ、と音の壁を越えかけていた十字槍が消えたノウゼンの幻影を突き抜けた。

ノウゼン本人は通り過ぎた十字槍のすぐ隣に転移していた。

「あらら？ ん、目測を誤りましたかな？ まあ、でも

『猛禽の鉤爪』はしつこいよ」

空へと突き抜けて行った朱塗りの十字槍

秘蹟礼装『猛禽の鉤

爪』が突如として軌道を変化させる。

真つ直ぐ一直線に進んでいた軌道が大空で宙返り。

穂先の左右の刃が空気の流れに沿うように鋭角へと根本から折れ曲がり、更なる加速を見せる。

音すらも突き抜けて上空より遙か下方の地上へと落ちてくる様は、まさに隼はやぶさの狩り。

鎧表面を情報処理の為、赤い光のラインを乱舞させたノウゼンへと再度、十字槍が襲い来る。

二度目の来襲。

ノウゼンにとってそれは決して逃れられない魔弾に狙われた事と同義であった。

軌道の補正をしながらノウゼン目掛け音の壁を突き抜けてくる秘蹟礼装に彼は、回避と云う選択肢を除外した。

「デイス・スベル  
《術式剥奪》」

今一度の『シフトチェンジ』は不可能。

ならば残る選択肢は迎え撃つのみ。

ノウゼンの両腕を黒色の帯状魔法陣が取り巻く。

帯状魔法陣に込められた効力は、術式を侵食する病原体。

刹那。

ツベロツサが使用した物より一世代ほど経たそれが、古代文明の術式と衝突した

あとがき

護身術……！ 圧倒的護身術っ……！！

ちらほら作中に出てくる主人公の家族が濃すぎる。

それはそうと第??章投稿完了しました。

特殊部隊『ブラックメイル』に居た元部下のノウゼン。

正直影が薄い気がする。

まあ、殺人狂シスターのツベロツサが濃すぎるからかもしれませ  
んが……

## 第??章 『知識鱗の魔弾』

一条の閃光が天より地へと墜ちた。

マナの衝撃波が放射状に拡散し、周囲の建物を揺るがす。

朱色の輝線を描いた『猛禽の鉤爪』が地面に突き刺さる瞬間。

着弾点から遠く。

担い手であるメルトラルトは、目を閉じて耳を澄ませていた。

そして、『猛禽の鉤爪』と『ブラックメイル』が搗かち合った音でメルトラルトの眉が珍しく顰められる。

「んゝ浅い、仕留めきれなかったっばいですねゝ」

「そんな!? メルトお姉様の秘蹟礼装は百発百中の筈だったので  
は」

「そう云われても事実なんですよゝ、ソプラちゃん。それに、響律師ならこれくらいちゃんと音で判断できるようにならないとメッ、  
ですよ」

遠方の激突音を正確に分析したメルトラルトには、『猛禽の鉤爪』  
がなんらかの作用で機能を減衰された事が分かっていた。

クルスバーク家は代々続く優秀な『響律師』の家系だ。

ソプラは次女の叱責にうつ、と声を詰まらせる。

メルトラルトが何時も通りの眠たげな半目で妹に詰め寄る中、朱色の閃光が地より天へと舞い上がる。

閃光の正体は、第?等級秘蹟礼装『猛禽の鉤爪』。

『猛禽の鉤爪』は土煙を巻き上げて、上空へと飛び出し、意志を  
持つかのようにメルトラルトへ飛翔を開始する。

然程の時間も掛からずに、『猛禽の鉤爪』は到達する。

メルトラルトが高速で接近する自身の秘蹟礼装を見向きもせず、片手で掴んだ。

そして、何事も無かったように妹への苦言を再開しようとして口を開こうとした瞬間。

「メルトお姉様！ そんな事より当事者の事情聴取を行わなくても宜しいのですか？」

「むぐ、上手く逃げたね」

詰め寄る姉の前に突き出した両手で抑えていたソプラが、起死回生の一声を放った。

正論故に不満げなメルトラルトが頬を膨らめます。

膨らめますが事情聴取は執り行なわなければならぬ。

「でも仕様がない、か」

「あのメルトラルトさん」

「およよ、何かな、シオン君？」

「もう一人の方は、既に居ませんよ」

「……………え？」

横からの紫苑の報告に眼を瞬かせるメルトラルト。

ぱつ、と首を巡らせるが視界に殺人狂シスターの修道服は、影も形も見当たらない。

頼れる部下　フェイランに視線を向けるが、彼は無念そうに首を左右に振る。

その顔は苦渋に満ちていた。

「おぐ、見事に逃げられちゃったねぐ、あはは」

「あはは、ではありませんわよメルトお姉様。私、お姉様がバル・イス聖騎士団でちゃんと仕事出来ているのか本気で心配になってき

ましたわ！」

今度はソプラが詰め寄る番だと口角沫を飛ばして姉へと嘔み付く。両肩を掴んで揺さ振る妹に、メルトラルトはあはは、と笑って誤魔化そうとする。

暢気に笑う姉に、ソプラは蜂蜜色の前髪を押さえて痛くなった頭を抱えた。

「あん？ 家の庭は何時から野戦場になっただい」

ハスキーな声が響く。

野次馬の人混みを掻き分けて、荒れ果てた孤児院の敷地に老年のシスターが足を踏み入ってきた。

否。

はたして彼女を『老年』などと評して良いものか。

現場に居る者達の誰よりも高い180以上の長身。

齢七十を数える彼女の背筋は一切曲がっておらず、修道服に包まれて歩く姿は足腰の衰えを感じさせない。

何よりもその眼光が目を惹いた。

鷹のように鋭すぎる目付きは、孤児院の荒れ様に眉間を顰めさせ、更に凶悪になっていた。

「おい、シオン坊。説明しな、アタシの城で一体全体何があったんだい？」

「えっと、マリアさん。その何から話せば良いでしょうか、色々な事が立て続けに起こって……」

老年の修道女　マリアは、その長い脚のコンパスで紫苑へと歩

み寄る。

ほん、と頭二つ分ほど違う紫苑の旋毛に掌を置き、マリアは腰を屈めて視線を合わす。

紫苑とマリアの視線がぶつかり合う。

「いいから、最初っから、最後まで、説明しな。二度も云わせんじやないよ」

ずい、と至近距離になるシスターマリアの皺だらけの顔。

その不機嫌さを隠そうともしない眉間の皺が、早期の説明を求めているようだった。

一言、一言、区切られて力強く念を押される言葉。

子供ならば泣き出してお漏らしをしまいそうな眼光に少したじろいで、紫苑はこくん、と頷いた。

「最初は新しく此処に入ったツベロツサさんが血の臭いを嗅いで暴走してしまった事でしょうか」

「なんだい？ あの子結局我慢できなかったのかい！」

大仰に驚くマリア。

その後、彼女は心底残念そうに、気落ちしたように嘆息する。

マリアの一連の仕草は、ツベロツサの持つ狂気を知っている証であつた。

「そうかい……あの子が。やっぱり駄目だったかい……」

「いえ、暴走と云うか、攻撃自体は此処の子供達を見て止めてくれました」

紫苑は一連の出来事を説明し始める。

ツベロツサを貫いた閃光の事を。

バルが治癒魔術を使った事を。

脱走兵を抹殺する為に帝国が刺客を送り込んできた事を。

そして。

その刺客を撃退し、現状に至るといふ事を、紫苑はマリアに説明し終えた。

「そうかい……そうだったのかい、随分あの子が迷惑かけちゃったみたいで悪かったね」

「それは魔導学院の生徒の子に云ってあげて下さい。体験学習でしたのに随分と危ない目に会わせてしまいましたので」

「そいつはシオン坊も変わり無いさ。歳だけで云やあ、アンタの方が年下だろうに」

ぼんぼん、と撫でるように掌を置きやすい位置にある紫苑の頭にマリアが触る。

苦笑するマリアの顔を紫苑は見上げる。

ふいに、紫苑の腰マントが引つ張られた。

マントの生地を引くのは、球体関節の小さな手。

「のう、紫苑よ。ほれ」

「これは、何ですか？」

差し出されたのは、機械的に精密な細工 紋様が刻まれた長方形の石。

頭上に疑問符を浮かべる紫苑に、バルは解を与える。

「あの狂人が置いていった物じゃ。紫苑と共に見よ、と言付けも付けてな」

「幻光石……ですよね？ これ？」

「然り」

正面、ひっくり返して背面。

紋様が刻み込まれた石を様々な角度から見ていた紫苑が、石の材質に気付いた。

紫苑が内に込められた映像を確認する為に少量の魔力を幻光石に流し込む。

すると、石に表面に彫られた術式に魔力が通いだす。

そして。

幻光石は『画像』では無く『映像』を映し出した。

『ハイハイい、ツベロツサお姉さんデスよー。シオン君、さっきぶりですネ』

「はい、先程ぶりですね」

「なるほどのう、通信機と云う訳か」

『ご明察ですヨ、お人形さん。花丸を贈呈しますよ』

「いらぬわ、莫迦者め」

思わず律儀に挨拶を返してしまう紫苑に、得心が行ったとばかりに顎に手を当て、一つ頷くバル。

映像の中のツベロツサが、陽気に調子の狂った拍手をしていた。すると。

二人の会話に割り入るように MARIA が幻光石型通信機に顔を寄せてきた。

「なんだい、こりゃ？ あの子とこれで話せるのかい？」

『感度良好、ばっちり聞こえていますヨ、シスター MARIA』

面妖な物を見た、と云った MARIA に、ツベロツサが答える。

その顔の狂気の中に一抹の申し訳なさを滲ませて。

「全く、面倒な事になっちまいやがって、しゃんとしないかい。老人に気苦労をかけさせるんじゃないよ」

『アはは、面目無いです』

「はぁ……………まあ、良いさね」

『ご迷惑ヲおかけします』

「ケツの青い餓鬼が一丁前の事を云ってんじゃないよ……………何時でも戻っておいで。レクター教会の門はアンタに対してならどんな時でも開いてるんだからさ、シスターツベロツサ」

目尻の皺を深めて、優しく鼓膜を震わせる一言。

その一言で幻光石に映されたツベロツサの表情がくしゃり、と歪んだ。

映像の中のツベロツサが俯き、表情が亜麻色の前髪で隠れてしま

う。

『……………はい。その日が来る事ヲ心待ちにしていマス』

「ああ、風邪引くんじゃないよ」

からり、と鬼婆と恐れられている老修道女の顔に、気持ちの良い笑顔が浮かんでいた

Original Novel

追憶のシオン

第??章 『知識鱗の魔弾』

その後。

紫苑達は当事者として『吸血姫円舞曲』の時と同様に、取り調べの後、調書が作成され解散と相成った。

ブロッサムス魔導学院の生徒二名　ソプラとシンシアに関しては、不測の事態故に学院側もクエスト未達成に関わらず単位は出るようであった。

ギルド側からも詫び状と、僅かばかりの金一封が紫苑達に届けられた。

これには帝国の人間が、国内に侵入していた事を口外しないように口止め料としての意味合いも込められている。

そして現在。

紫苑は立て続けに起こった『吸血姫円舞曲』と『殺人狂シスター』の骨休めとして、

妖精達が飛び交う『ウルドの湖』の自宅で穏やかに時間を過ごしていた。

「ほれ、第二陣目がゆくぞ！」

「はい、お願いします」

気合の入ったバルの声。

人形の小さな足が湖畔の地面を強かに打ち付ける。  
すると。

湖畔の湿った柔らかい土が盛り上がり、人型へと像を形成していく。

十数体もの泥人形が一斉に紫苑へと襲い掛かる。

紫苑は慌てず、その蒼穹の瞳を泥人形達に這わせ、数多の糸を指揮する。

- 一重、
- 二重、
- 三重、

鋼糸が銀線を閃かせる度、顔無しの人形が玩具の如く手足を胴体から分断されていく。

瞬く間に泥人形は、その数を減らし、跡地に残るのは人体を模した部品だけ。

そして。

最後の一体の首が飛び、空中へと放り出された頭部に、一瞬格子状に線が走る。

宙の頭部は1センチ四方に切り刻まれた後、再び元居た地面に帰還を果たした。

「まさに眼福たる妙技。見事である。では、これならばどうじゃ？」

だん、とバルの靴が地面を打ち据える。

術式たる陣が瞬時に放射状に地を駆け抜ける。

すぐさま魔法陣の効果が目に見えて現れ始めた。

辺りに無造作に散らばる泥の人体の部品がチョコレートのように溶け、一か所に集まり始める。

液化した泥は互い合流を果たし、その質量を増加させてゆき、巨大な四足歩行の獣として形を成した。

バルは泥でできた巨獣の背に乗り、眼下の紫苑を得意げに見下ろしていた。

どう攻略する、硝子の瞳が雄弁に言葉を語る。

「よいしょっと」

軽やかな掛け声一つ。

紫苑は身体を独楽に見立て、回転と共に大きく腕を振るう。

その大らかで優美な動きとは裏腹に、操られる糸は苛烈に荒れ狂う。

大樹の幹の如く太い泥巨獣の首に、糸の軌跡が走った。

そして、巨獣の首と胴体がずれた。

ずん、とまず首が落ちる。

「お、おおう!?!」

「ぶっ……はっ……せいっ!」

振るう、振るう、振るう。

優美にして雄大な舞を踊るかのように紫苑が一挙一動する度に、泥の巨獣は首から順に切り落とされていく。

泥巨獣の背に乗っていたバルからしたら溜まったものではない。

次々と膾なますにされていく足場。

遂には、バルがその大きかった背から飛び降りた直後、泥の塊で出来た輪切りが完成した。

一軒家程もある物体の解体劇は、傍から見れば大変に見応えのある物であった。

「ふむ、泥とはいえ強度は青銅並みに高めて有った筈なのだがのう

……」

「父さんは鉄筋コンクリートの家くらいなら両断出来るって云って  
いましたから、俺も頑張ればこれくらいは、です」

「いや、その理屈はおかしいじゃろ」

むん、と可愛らしく意気込む紫苑。

余人が同じ事を口にすれば何を莫迦な、と一笑に付されてしまうが紫苑が云うと真実味が濃厚になってしまふのだから怖い。

何処の世界に『家屋』を鋼糸で両断可能な親子が居るといふのだ。紫苑の言い分にバルは、手を顔の前で振って、呆れを含んだ声色で返す。

「まあ良い、次で締めぞ。心せよ」

「はい、お願いしますね」

ダン、と再びバルが足を地面へと打ち据える。

強かに叩かれた音が湖畔に反響し、呼応するかのよう紫苑の周囲の土が異形へと姿形を変容する。

その数は四。

前後、そして左右。

先程と同様の泥巨獣が四倍も数を増やして紫苑を取り囲んでいた。

ヒイイイン、と耳鳴りに似た異音。

紫苑の眼前を陣取る泥巨獣の口腔内部に魔素が集中圧縮されていた。

判断は一瞬。

零から最速へ。

紫苑の小柄な身体は、極度の前傾姿勢のまま鈍色の破壊光線を放つ直前の獣の真下に滑り込んでいた。

瞬きの後、紫苑が存在していた空間に破壊の奔流が撒き散らされる。

「ほう、あの狂人の歩法か……技術には貴賤は無いとはいえ『妾の紫苑』が使つのは些か抵抗があるのう」

一步の間違えば転倒の危険性を孕んだ歩法である。しかし、使いこなせるのであればその有用性は高い。重力に惹かれ地を這う生物は、基本的に上下の動きに鈍感だ。加えて静止の状態からの急激な加速。それらの要素が組み合わさり、四体の巨獣は紫苑の姿を見失っていた。

巨獣達の脚に見え隠れする黒い影。そして。

糸の輝線が幾重にも巨獣の下で瞬いた。刹那の停滞の後、巨獣達の16の脚が全て斜めにズレた。大地に根ざす脚を切断された獣達は為す術も無く、その巨体を落石のように脚と云う支柱から転がり落とす。

「これで、終わりです」

砂煙舞う湖畔から姿を現した紫苑が、断頭台のギロチンの如く腕を高らかに掲げている。

断頭台に掛けられた罪人は四体の獣。

その腕が振り下ろされると同時に巨獣の首が椿の花のように全て地面に落ちた。

「残心に入るには、まだちと早いの」

「ッ」

紫苑の脳裏でぴん、と張る『害意の糸』。

胴体と泣き別れにした筈の首を見て、紫苑が目を見開く。

口腔に灯る鈍色の破壊光。

避ける間も無くそれが放たれた。

「『霜の鉄鎚』」

自身に向かつて放たれた四条の光線に対し、紫苑は秘蹟礼装『バルトアンデルス』を使用する。

弾けて散り散りになる黒の長手袋が、白銀の光で湖畔を照らす。

紫苑を害さんとする破壊の光線は、霜の光を舞い散らせる巨大な手によって阻まれた。

『霜の鉄鎚』と化した腕が破壊光を受け止め、エーテルへと還元していく。

光が 収束する。

眼を覆う光が止んだ湖畔。

首のみとなった泥巨獣は、最後の力を使い果たしたのか、瞳から意志の光が消失していた。

「……使って、しまいましたね」

「確かに使ったのう。くふふ、まだまだ功夫が足りぬようじゃの」

紫苑が若干肩を落として、ずぶずぶ、と土塊へ戻ってゆく泥巨獣の亡骸を見詰めていた。

その眉尻はやや下降気味。

担い手の紫苑とは対照的に、バルはからから、と愉快そうに笑う。

それは紫苑の未熟を笑っているのでは無く、紫苑が訓練の最中『バルトアンデルス』を必要としたからである。

頼られて悪い気はしない、そういう事だ。

「お疲れ様ですシオン様、バル様」

すっ、と音も無く丸眼鏡を掛けたメイドが一人、模擬戦を終えた

二人に近付く。

きつちりと一部の隙も無く編み込まれた紫紺の髪に、完璧な足運び。

手に持つは白く映えるまっさらなタオル。

垢抜けた所作のメイド　ラヴァテラは押し留める紫苑を押し切って、真新しいタオルでうっすらと滲んだ汗を拭う。

抵抗は無駄だと悟った紫苑は、気恥ずかしさから運動の高揚とは違った頬の紅潮を隠し切れていなかった。

「有難う御座います」

「あちらで冷たいアイスティーをご用意しております、どうぞ喉を潤して下さい」

「何から何まで」

「いえ、お気になさらず。私、メイドですので」

見れば、ラヴァテラが示す湖畔の咆哮には洒落た白いテーブルとイスが用意されてあった。

先に席に着いていたテーブルの住人　ミオソティスとラティルスが近付いてくる紫苑を待っていた。

ミオソティスは訓練の音が途絶えた事と、近付く紫苑の魔力を感じ取って、紫苑に向かって薄く微笑む。

紫苑も答えるように包帯を瞳に巻いたミオソティスに微笑み返した。

麗らかな午後。

見目麗しき妖精達の茶会が開かれようとしていた

「それで何とかツベロツサさんに矛を収めて貰ったのですが」  
「  
「そこで妾達の鬭争に横槍を入れた不届き者が現れたのだ」

『ウルドの湖』を囲うように広がる木々の葉擦れ。  
吹き抜ける柔らかな風が森の匂いを届け、木漏れ日が悪戯に揺れる。

洒落たテーブルを囲い、紫苑とバルとラヴァテラ、そしてミオソティスが語り合う。  
ラヴァテラはそんな席に着いた四人の後に控え、給仕に徹していた。  
た。

「彼奴は全身を趣味の悪い黒き鎧で包み、あろう事か不意打ちで狂人の心臓を魔法で撃ち抜きおったのじゃ」

語らい合う内容は専ら冒険組の体験談。  
変化の乏しい湖畔の生活では、紫苑とバルが体験した冒険譚が何よりの土産話だ。

それらは遠い国の英雄譚のように少女達の胸を躍らせる。

「なんとも不粹！ 事の始終をつぶさに見ておったにも関わらず狂人が狂気を収め、童達に心を開いたその一瞬を刈り取ったのじゃ！」  
「酷い、です」

「……」

芝居じみて大仰に話を紡ぐバル。

その様は真に迫り、聞き手に情景を思い起こさせる。

ミオソティスは、バルの語る黒の悪鬼　ノウゼンの所業に眉を  
顰めて悲しみ、ラティルスは無言で何度も頷きバルに同意する。

聴衆の素直な反応にバルは弁に更なる熱を込める。

「そうじゃ！　妾と紫苑がそんな不屈き者を許すと思つか！？　否  
なのじゃ！！」

本意では無かったが紫苑に頼まれて狂人を治療してやった後、ぼ  
っこぼっこにしてやったのじゃ。

くく、彼奴が慌てふためく姿が今でも頭に浮かびよるわ」

ツベロツサの無事に、ミオソティスとラティルスは胸を撫で下ろ  
す。

一喜一憂。

似通った反応を見せる二人の傍らで、紫苑は微笑まじげな笑みを  
絶やさない。

こくり、と喉をアイスティーで潤し、バルの話の中で足りない部  
分を補足する。

「傷が治ったツベロツサさんも参戦して来て、数の上では三対一。  
俄然有利な状況です……………ですが。」

ツベロツサさんはその盤上を『良し』としました。

全身鎧の帝国兵士、それは嘗てツベロツサさんの部下であった人  
だったのです」

紫苑の話声はゆったりとして、聞き取りやすい旋律だった。

バルとは方向性の違った話し上手。

湖畔のお茶会に参加した皆が、言葉を歌う紫苑の口元に意識を集  
中する。

「帝国兵士は喋ります。自分はツベロツサさんが隊長をしていた隊の中で唯一の生き残りだと。」

そして、隊を全滅させた張本人が　　ツベロツサさん。

怒気を露わにする帝国兵士に彼女は、全く取り合いませんでした。帝国兵士が受けた命令は脱走兵の始末。二人の殺し合いはそれが当然であるかのように始まりました」

サアア、と森を吹き抜ける風が、湖畔の表面を揺らす。

語り手はゆっくりと物語を奏でる。

土産話は、まだまだ長くなりそうだった

淹れ直された冷たいアイスティーを一口。

喋り過ぎで披露した喉に清涼な液体が通り抜け、口に紅茶の香が花開く。

土産話も途切れ、なんとなしに会話が途切れた間隙。

ほう、と紫苑は一息を吐いた。

「そういえば、バルに訊きたい事があったのですが」  
「なんじゃ？」

「ツベロツサさん達が使っていた装備は、帝国兵士の一般的な装備なのでしょうか？ それとも『ブラックメイル』と云う部隊だけの特殊な兵装なのですか？」

紫苑の懸念は尤も。

『聖ミッドガルド帝国』汎用兵装『ブラックメイル』は、それほどまでに驚異的な性能だった。

魔動に匹敵しうる身体能力ブースト術式。

常在発動型の『耐マテリアル魔力障壁装甲』と『オート・リジエネレー自動作戦継続構術式』の恩恵で過酷な状況下においても十全な作戦行動が可能。

加えて数多の支援機 『ガントレッツ』による波状攻撃は、並大抵の魔獣であるなら瞬時に挽き肉になるだけの圧倒的火力を実現している。

そして。

ノウゼンの纏っていた『ブラックメイル』最新式の特異な能力。短距離間空間転移『シフトチェンジ』。

まさに帝国技術の結晶であり、現代版の秘蹟礼装と呼んでも過言では無い兵装であった。

「そうさな、結論を先んじて云ってしまえば あんたの装備が一般的に普及している帝国の通常兵装じゃ」

沈黙が湖畔に降りた。

あの装備を身に着けた集団が万単位で攻め込んでくる。ぞつとしない想像だった。

そうなつてしまえば如何に大陸最大の共和国と云えども一方的な蹂躪が簡単に予測できる。

国と云う強大な後押しを受け、大量配備された『ブラックメイル』は『吸血姫』などよりも余程厄介な代物と云えた。

「個々の戦力を比べるとじゃな……軍人の力量にもよるが、まあメイドは勿論の事、気張ればラティルスでも打倒は出来るじゃろうな。じゃが、それはあくまで個々での話。マクロな視点から云えば相

手は軍であり国。

仮に帝国が本気で共和国に攻め込むとしようかの。どうなると思うっ？」

問われた内容の答えは、想像に難くなかった。

唯一不確定要素を挙げるならば、それは秘蹟礼装だ。だが。

「普通に考えたのなら、帝国の勝利は揺るぎ無い物だと思います。何より文明の進み具合が違う、そう肌で感じました」

紫苑の解答にバルは出来の良い生徒を見るように頷く。

幻光石を通信手段として加工する技術や、『ブラックメール』の製造技術。

それらを可能とする帝国に対し、

魔法、地球には居ないエルフ等の種族云々要素があるとはいえ、共和国の文明は地球で云う中世ヨーロッパを若干進めた程度。

例えるならば、銃を持った大人に丸腰の子供が挑むような無謀さだった。

「概ね正答じゃ。なればなぜ帝国は天頂を昇る月より攻め入って来ぬと思う？ 彼奴等の戦力ならば天下を統一するなど赤子の手を捻るかの如く容易い事じゃ。」

しかも人間以外の多民族には排他的で、選民思想の気もあるし。う」

確かにバルの云う通りである。

理由としては、様々な可能性が考えられた。

その可能性を茶会に参加した各々が述べていく。

「お月様の土地だけで満足なのでは？」

「……自分の国だけで手一杯」

「国民の総意が纏まっていないのではないのでしょうか？」

ミオソティス、ラティルス、紫苑が順番に己の考えを述べていく。どの回答も現実味が有り、可能性として否定できない。

「ふむ、メイドよ。お主はどう思う？」

「僭越ながら私見を述べさせて頂きますと  
『龍』の存在を  
危惧しているのではないのでしょうか」

皺一つ無いヴィクトリア調のメイド服を完璧に着こなしたラヴァ  
テラが淡々と答える。

にいい、とバルはラヴァテラの回答に不遜な笑みを深くする。

丸眼鏡の奥の表情を崩さずに答えられた回答は、バルの望む物であつた。

「然り、彼奴等は怖れておるのじゃ。過剰に此方の星へ介入し、その進み過ぎた文明を『龍』に気取られる事をの。

そうなつてしまえば折角這う這うの体で宇宙まで落ち延びたのに、月まで『大地の清浄化』に巻き込まれん。

『龍炎』による息吹の灼熱地獄、

『巨龍』による未曾有の大津波、

『龍樹』による大森林の侵食。

どれも帝国の百や二百、滅ぼす事に事欠かんじやろうな」

『大地の清浄化』。

千年毎に一匹の『龍』が引き起こす文明を滅ぼす大災害。

いまいち理解が及んでいないのはミオソティスとラティルスの二人である。

彼女達は『龍』という存在を知っていても、それが文明を滅ぼす存在であるという予備知識は無かったようだ。

二人して同じ角度で小首を傾げている。

仮に知っていても、それは経験を伴わない予想でしかない。

千年という周期は、長命種ですら気の遠くなるような長いスパンなのだ。

「ふむ、お主ら二人には実感が沸かぬようじゃの」

「『龍』という凄惨な存在が居るといふ大まかな話なら聞いた事があるのですが……」

「……うん」

無理も無い事ではあるがの、とバルは一人ごちる。

そして。

バルは身近に居る『龍』の存在を認識させる事にした。

「『ウルドの湖』の底に大きな大きな根っこがあるじゃろう？ あ

あ、ミオは大地がうねる様なマナの流れを感じている筈じゃ。

あれは別に『蒼の大地』の霊脈でもなんでも無い 単なる

『龍樹』の根っこの一つじゃ」

何気なく告げられる真実。

身近過ぎる場所に『龍』の存在は、確かにあった

夜が更ける。

湖畔にポツリ、と建ったログハウスの窓からは生活の光が漏れて  
いる。

その光も住人達の就寝と共に消されようとしていた。

球体関節人形が小さな身体をリビングのソファに預け、寛いで  
いる。

落ち着いたシツクな色合いのソファは軽すぎる体重を難なく受  
けとめ、使用者に快適な座り心地を与えていた。

其処へ、傍で控えるラヴァテラの声が掛けられる。

「失礼します。バル様、そろそろ御就寝のお時間です」

「む、もうそんな時刻か。ベッドの準備は出来ておるか？」

「滞りなく」

くあ、とバルは可愛らしく小口を開いて欠伸を一つ。

炊事、洗濯、家事万能。

痒い所まで手が行き届く心遣いに、ベッドメイキングも完璧。

真に有能な者を拾ったのう。

バルは吸血鬼特有の青白い肌を見ながら、心内で呟く。

視線に晒されながら、ラヴァテラは平然としていた。

吸血鬼である彼女は、これからの時間が本来の活動時間。

その眼鏡に隠された双眸は、心なしか昼間より精気に満ちていた。

「して、紫苑は寝室に居るか？」

「シオン様でしたら恐らくアトリエにいらっしやるかと」

帰ってきた返答に、バルはふむ、と手を顎に当て考える。

今の時刻で既に常の就寝時間を少々超えている。

こういう時は、大抵人形を製作する紫苑の興が乗っている時であった。

それを邪魔するつもりはバルに無い。  
故に。

「妾は先に寝室で身体を休める。お主は紫苑の様子を見て来るのじゃ。大方、集中し過ぎて時間の事など頭からすっぽり抜けておるだけだと思いがの」

「かしこまりました」

命を受け、一礼して踵を返すラヴァテラの所作は、やはり一分の隙も無く完璧だった。

木の暖かな雰囲気漂うリビングから去るメイドの後ろ姿を見送り、バルはまた小さく欠伸をした。

ラヴァテラがログハウスの廊下を歩く。

だが足音は全くしない。

廊下の隅に僅かな埃を見つけたのなら、己の影をその埃へと伸ばし、跡形も無く消滅させる。

飾られた花瓶の花が萎れてきたならば、影の倉庫から今朝、摘んできたばかりの花壇の花を飾り付ける。

それらの動作に一切の無駄が見受けられない。

動作の無駄を省き、全ての行動の帰結は主人への奉仕。それが長年に渡って染み付いたラヴァテラの行動原理である。まさにメイドの鑑。

「ラヴァテラさんですか？」

「どうなされましたか、ラティルス様。こんな夜更けに」

「お恥ずかしい事ですが、お昼の話を思い出している内に興奮で寝付けなくなってしまうって」

「そうですか」

腰まで伸びる白銀の絹糸が廊下の角から姿を見せる。

褐色の肌にその白銀は良く映えていたが、目に付くのは、やはりその両目を覆う包帯。

早寝早起きを地で行くラティルスが車椅子に乗って、ふらりと現れた。

ログハウス内ではほぼ間取りを把握しているとはいえ、ラティルスが一人で居るといふ事は非常に珍しかった。

疑問の鎌首がラヴァテラに擡げた。

「失礼ですが、お一人でしょうか？」

「はい。ラティ姉さんに甘えているばかりでは駄目だと最近になって思い始めまして、これもその一環です。

やはり珍しい、でしょうか？」

今度はラティルスが小首を傾げて尋ねる番だった。

「いえ、その意気込みは大変素晴らしい物だと思います」

「あ、ありがとうございます」

不意打ち気味に告げられる褒め言葉。

予想の外から投げ掛けられたその言葉に、ラティルス顔に若干の朱が見え隠れする。

「それで、ラヴァテラさんはどちらに行かれるのですか？」

「シオン様がまだ寢室に戻られてないそうなので、バル様に様子を  
見て来るようにと仰せつかっています」

「アトリエ、でしょうか？」

即座に浮かぶ答えは真実。

一年にも満たぬ間ではあるがミオソティスは紫苑の行動パターンを正確に捉えていた。

「おそらくはそうだと思われまます」

「私も一緒に行っても良いですか？」

「ええ、構いません」

ミオソティスの提案にラヴァテラは快く了承する。

その口元には控え目な微笑が見え隠れしていた。

湖畔の虫の音がささやかに聞こえる廊下をラヴァテラは車椅子を  
押して歩き出す。

盲目のダークエルフ　ミオソティスは姉よりも丁寧な介護人の  
運転に身を委ねながら、愛すべき主人の下へと進んでいった

筆立てに入れられた多種多様の絵筆に籠<sup>へ</sup>。

粘土細工で作られた元となる人体を縮小した人形のパーツ。

その部屋に一步足を踏み入れれば、絵の具と紙粘土の香りが鼻先を掠める。

そして。

すうすう、と規則正しい寝息が部屋の中心から静かに聞こえる。音を奏でる発生源を見れば、其処には精巧な日本人形を模したような見た目少女のような少年が居た。

深い紺色の着物の上から、厚手の汚れが目立たない黒いエプロン。鴉の濡れ場色をした黒髪は珍しく紐解かれ、背中の上を艶やかなに流れている。

閉ざされた瞳の睫が、呼吸をする度に揺れる。

日本人形じみた少女のような少年　紫苑は作業台を正対する格好で椅子に凭<sup>もた</sup>れて掛かって寝入っていた。

「シオン、さん？」

「お静かにお願ひします、ラティルス様。どうやらシオン様は御就寝のようです」

物音のしないアトリエ内に、扉の前に居たラティルスが紫苑を呼び掛ける。

ラヴァテラはそんなラティルスに声を潜めながら注意を促す。

光を移さない両目の代わりに感じられるマナの変動が穏やかだった。

故にミオソティスは紫苑が寝入っている事を分かった。

「寝てますね」

「はい、良くお眠りになられております」

今度は二人とも声量を抑えての会話。

疲れているのならそのまま休ませてやりたいが、此処は身体を休めるには不適切な場である。

何しろ椅子に凭れて眠れば身体の筋を痛めてしまうし、ベッドで無いのなら悪ければ風邪を引いてしまう可能性も有るのだ。

メイドの鑑　　ラヴァテラは即座にこの結論に達した。

ならば遂行すべき任務は、紫苑を起こさずにベッドまで運ぶ事。

ラヴァテラは即座に、迅速に行動を開始した。

音も無く紫苑の傍まで歩み寄り、失礼します、と心の中で一言断りを入れる。

そして、ラヴァテラはメイド服の袖に包まれた腕を紫苑の膝の下と、小さな背中に回した。

大した重さを感じさせずに持ち上がる眠り姫の紫苑。

一瞬にして紫苑は、完全無欠メイドの腕の中、胸の中。しかし。

「……………ん」

長い睫が違和感に揺れ、眉間に皺が寄る。

うつすら、と開かれていく瞼にラヴァテラは任務の達成を諦めざるを得なかった。

「……………あ……………ラヴァテラ、さん？」

「そのまま眠っておられて構いません。寝室までお運びします」

云いながらラヴァテラは人一人抱えても小揺るぎもせずに歩を進める。

胸の中に抱える紫苑を考慮して、酷く丁寧かつ振動を伝えない歩

き方だった。

残されたミオソティスは、ラヴァテラの影から漆黒の腕が伸び、その腕が車椅子を押しして移動させる。

「その、悪いです。一人でも歩けますから」

寝起きでぼんやりした頭。

少々舌足らずな口調で紫苑は、身動きをしながら吸血鬼メイドの申し出を断ろうとする。

しかし。

「ご安心を寝室まで後ほんの十数歩程度で御座います。それに、あのような体調を崩しかねない場所でお休みになれるのは自己管理が出来ていない証左。

どうか、ご自愛して下さいませ」

抵抗の意志は柔らかくほどける。

腕の中の紫苑の強張りが無くなった事にラヴァテラが満足げに微笑む。

紫苑とバルの自室の前。

ラヴァテラの影の触腕がドアノブを捻り、扉を開けた。

其処は紫苑の生活が色濃く反映された空間。

部屋のベッドには小さな先客が鎮座していた。

「おお、来おったか　　うむ？　なんじゃ、ミオも居ったのか」

「はい、少々寝付けなくて」

バルがベッドの縁に座して、足をぶらぶらさせながら来客を招く。

その姿は昼間に着用していたモノクロドレスでは無く、淡いピンク色のベビードール。

胸部と股間部の布は比較的厚いのだが、それ以外の部分は透けていて、端的に肌を隠す役割を放棄していた。

ピンクの膜に覆われたならかな曲線を描く腹部と背面は、ほぼ丸見え。

性的な起伏に乏しい少女人形が、性を強調したベビードールを着用している様は倒錯的な魅力を醸していた。

「バル様、失礼します」

ラヴァテラが横抱きにした紫苑をベッド中央にそっと下ろし、ブランケットを肩まで掛ける。

バルが腰掛け、紫苑が寝かされたベッドは、後二人は寝られそうなほど巨大だった。

王侯貴族の寝具と云われても不思議ではない天蓋付きの豪華のベッド。

この豪華すぎるベッドの出所は、紫苑達には不明。

ラヴァテラをメイドとして仕えさせた後、何時の間にか置かれていた物だった。

「有難う御座います、ラヴァテラさん。あの、次からは起こしてくれるだけで結構ですので……こういうのは止めて下さい」

毛布で顔の下半分を隠した紫苑が、ささやかに主張する。

羞恥が見え隠れしたその仕草に、バルは珍しい物を見た、と目を瞬かせた。

だが、次の瞬間には驚きは消え失せ、代わり悪戯心が芽生え始める。

「畏まり」

「構う事は無いぞ。一回、二回など小さき数など気にせず紫苑が寝場所を不精しておつたら遠慮せずに抱き抱えて運ぶが良い」

主人の命である為、内心では不承不承しながらも頷こうとするラヴァテラに強力な援護射撃が送られる。

射撃元は勿論バルである。

横からは抗議の視線が送られているがバルは意図的に無視。何かを云われる前にバルは行動を起こした。

「くく、そう睨まずとも良いではないか。妾は紫苑を想って云ったまでの事。なあに、要は紫苑が面倒がらずに妾と共に寝れば良いだけの事ではないか」  
「む」

猫の如くバルはしなやかにベッドに潜り込み、紫苑に抱き付く。  
目と鼻の先。

掻き抱くようにして紫苑の頭を包み込んだバルが、シーツに広がる黒髪を優しく梳く。

心地良い感覚にとろん、と落ちていきそうになる暇。

紫苑は誤魔化されると勘付いていたが髪を梳かれる心地良さと、傍にバルが居る安心感から忘れかけていた睡魔が押し寄せてきた。  
そして。

その睡魔の誘惑は抗い難いものだった。

「明日……起きたら……話を……つづけ……ます」  
「……………寝たか」

結果。

揺り籠　バルの腕の中ですうすう、と穏やかな寝息を漏らす幼

子が一人、出来上がる。

あまりにも無防備で無垢。

ダンジョンでの探索や野宿では常に警戒心を保っていなければならない為、見る事が叶わない紫苑の素顔。

バルは優越感にほくそ笑む。

《ミオソティス、寝付けないのであろう？ こっちのベッドに来やれ、寝物語でも聞かせながら夢へと誘ってやろうぞ》

部屋の前で一部始終を見守っていたミオソティスの脳内にバルの念話が直接響く。

ミオソティスは一瞬思案気な表情をした後に、こくりと頷いた。包帯の下の口元には微かな笑みを浮かべて。

《メイド》

その一言でラヴァテラはバルの云わんとする事を理解し、実行に移す。

紫苑の時にそうした様にミオソティスを横抱きに抱え、ベッドに移動する。

そして、ミオソティスの小柄な体は、バルとは反対側、眠り姫の横へと下ろされた。

ミオソティスは手探りで紫苑の居場所を探す。

這わせた掌に、すぐ傍にあつた紫苑の背中の中の体温が触れた。

そつ、と壊れ物を触れるように、宝物を抱くようにミオソティスは背中に頬を寄せる。

あたたかい……

このぬくもりの中でならとても良く眠れるだろう。

耳は息遣いを、

鼻は匂いを、

肌は体温を、

それぞれの感覚器官が傍に居る人間の要素をミオソティスに伝えてくる。

このまま微睡んでしまいたい。

そう思う中でミオソティスの心に、ある引っ掛かりが生まれる。

あ、包帯をどうしましょう。

降って湧いてきた問題点。

身動きをしてみれば傍らで眠る紫苑を起こしてしまうかもしれない。

そう思うと、普段外して就寝する包帯を無理にでも外そうとは思えなかった。

《安心せい》

包帯を外さないまま眠ろうとするミオソティスに、バルからの念話が響く。

バルは規則正しい吐息を繰り返す紫苑の頭を抱いて、御見通しと云わんばかりの笑みで微笑む。

その不遜な笑みは、包帯越してもミオソティスには感じられた。

バル、さん？

指先に浮かぶ小さな小さな魔法陣。

細やかに書かれた術式の意味する所は、単純な念動であった。

しゅるり、と独りでにミオソティスの双眸を隠す包帯の結び目が解ける。

解けた包帯はそのまま風に舞うかのように枕元に置かれて置かれた。

そして。

現れたのは、眉を顰めるような凄惨に引き攣った皮膚。

眼球があつたであろう場所を真一文字に走る火傷痕。

足の腱は斬られ、まともに歩く事もままならない車椅子の上での生活。

それらは消える事の無い実の親によって刻まれた虐待の痕だったが。

それでもミオソティスは今が幸せだった。

穏やかな湖畔での生活。

使い物にならない足の代わりに紫苑から貰った車椅子と云う新たな足。

飢える事も、寒さに身を凍えさせる事も無い。

暖かな食事が毎日食べられる幸福。

《さて、ではどの物語から語るとしようかのう》

寝付けない夜はこうして寝物語を歌ってくれる人形も居る。

そして。

ミオソティスは一段と顔を紫苑の背中に寄せ、深く息を吸った。

こうして他の人達とは違う『好き』を心に芽生えさせる少年と共に居られる。

ラティルスに寄せる姉妹愛とも、バルに寄せる親愛とも違う。

胸に萌芽した感情の名前を、ミオソティスはまだ知らない。

「紫苑、さん……………好き、です」

誰にも聞こえないようにぼつり、と呟く。

それだけで褐色の肌が熱を持ったように火照った。

ミオソティスがその感情を名付ける日まで、大事に大事に『好き』は育てられていく

ラタトスクの街に存在する二大クラン『外套と短剣』、『知識鱗の魔弾』。

その内の一つ、『知識鱗の魔弾』の女傑　バジリーは苛立つていた。

細い眉は神経質そうに吊り上り、悪癖である親指の爪を腹立たしげに噛む。

バジリーの取り巻きの男達は、クランリーダーである彼女の機嫌の悪さに怯え、顔を青白くさせていた。

普段であれば酔っ払いの馬鹿笑いで賑わう酒場が、彼女の放つ怒気で異様な静けさを保っていた。

例えるなら怒れる女帝。

ぬめり、と顔半分を爬虫類のような鱗で覆われた特長的な面長の顔は、マゾヒストの心を刺激する天性の嗜虐的な美貌。

冒険者でありながらスリットの大きく入った真紅のナイトドレスを着こなす肢体は、男の劣情を催す豊満な肉付き。

己の価値を高めるかのように、彼女の身体には至る所に装飾品が散りばめられていた。

指の数だけ身に付けられた指輪。

耳に幾つものイヤリング。

癖の強い金髪は盛るようにしてアップにされ、その髪留めに豪華な髪飾り。

ただ一つ欠点を挙げるとしたら、その美貌に施された濃い目の化粧だろっか。

酒場の一番良い席に座ったバジリーは、手に持ったアルコールがなみなみと注がれたジョッキを一気に呷る。

昼間とはいえ、その呑みっぷりを彼女のご機嫌を取ろうとした取り巻きの男達が囁し立てる。

しかし。

周りの野太い歓声を意に介さず、バジリーは琥珀色の液体を飲み干すとジョッキを大きく振り上げた。

「ったく、ついてないねえ！ お前達、首尾の方はどうなんだい！」

ダンツ、とジョッキの底が木のテーブルに叩き付けられた。

ジョッキが打ち鳴らす大きな音と、バジリーの剣幕に大の男達はびくり、と肩を震わせる。

「い、いえ！ その……なあ？」

「俺に振るなよっ！」

要領を得ない部下達の態度に、バジリーの細眉がびくり、と跳ね上がる。

明らかに機嫌を損ねた証拠だった。

「しゃんとしないかい！ 大の男共がなっさけない！」

「は、はいいい！！ ギ、ギルドでは大掛かりな仕事は無いそっで、

一番大きな依頼はクドコ山に出来た洞穴の調査だけです！」

怒気を孕んだ一喝に、男達は気の毒な程に縮み上がる。

あまりの情けなさにバジリーは、はああ、と腹の底から深い深い溜息を吐く。

こんな事ならば宿で待たせてある子猫ちゃん達と戯れていた方がまだマシであった。

男と女。

両刀使いであるバジリーは、手籠めにしたお気に入りの美少女達を想い馳せて、更に溜息を吐いた。

「はあ……全く、でかいギルドクエストを悉く遠征で不参加だなんて……間が悪いというか、なんとというか、しかも『吸血姫』なんて大捕り物。

ちっ、また『外套と短剣』の馬鹿一つ目に差をつけられちまうよ」

カリ、と真つ赤に彩られて親指の爪を噛む。

『外套と短剣』、そして『知識鱗の魔弾』。

ラタトスクに在籍する二つの大規模クランの仲が悪いという事実は、冒険者筋では有名な話だ。

互いにほぼ同程度の構成人数、ギルドへの功績、秘蹟礼装の発見数。

これで意識するなと云う方が無理な話である。

違いを挙げるとするならば、一つ目の巨人　ゴルデイス率いる『外套と短剣』は戦士系職業の比率が多い武闘派。

一方で、蜥蜴人のハーフ　バジリー率いる『知識鱗の魔弾』は名の通り魔術師系職業の比率が多い武闘派。

どちらも武闘派で尚且つトップ同士の仲が悪いのであるから、クラン間での軋轢も激しい物であった。

そして。

今現在『知識鱗の魔弾』は『吸血姫円舞曲』という大事件に不参加だった為、『外套と短剣』に一歩溝を開けられてしまっている状態。

バジীর心中は穏やかでは無かった。

「まあ、『吸血姫』に引導を渡したのは『少年アリス』だからまだ良かったものを……」

『少年アリス』。

ここ一年で台頭してきた新人冒険者。

『狼王の君』とも呼ばれ、傍らには常に『白狼王』が控え、その戦闘能力は極めて高い。

女性のように見目麗しい容姿をしているらしいが、直接面識の無いバジীরにとっては眉唾物である。

「何時までも此処で腐っててもしょうがない、か……その洞穴の調査つてのを詳しく教えな！」

「い、いえ、その……」

「なんだいはつきりモノを云いな！」

「ひえええ！！ すんません！ 詳しい内容までは訊いてきませんでした！！」

部下の気の利かなさにバジীরは再度嘆息。

こんな時に自身と同じく顔半分鱗を持つ弟が居れば、とバジীরは思うが直ぐにその思考を打ち切る。

何故か『外套と短剣』のクランに所属してしまった弟の事を考えれば機嫌が悪くなるだけだ。

やわら立ち上がったバジীরに取り巻きの男達は身を固くする。

バジীরは男達の一人の尻を思い切り良く引く叩く。

店内に野太い悲鳴がバジীরは意に介さず、深紅のドレスの裾を

翻して出口へと向かう。

「ほら、とつととギルドに向かうよ、ぐずぐずしてないで付いてきな愚図共！」

要領の悪い部下達に一喝。

扱き使われる彼等の顔には、罵られる度に恍惚の色合いが浮かぶのは、『そういう事』なのだろう。

特に尻を引つ叩かれた男は、だらしなく顔を緩めていた。

バジーリの取り巻きは慌てて手荷物を纏めて、歩く度に左右に振れる女帝の尻を追う

あとがき

今回初めてミオソティスが紫苑に好意を寄せている描写をしました。

他のキャラクターはバル以外は作中では親愛以上の気持ちを言及していませんからね。

ミオソティスの初恋。

『知識鱗の魔弾』の登場。

蠢く帝国の影。

次回もお楽しみ下さい。

## 第??章 『恋花への水蜜』

「それでは、行ってきます」

リン、と鈴の音の挨拶が霞漂う早朝の『ウルドの湖』に響いた。

紫苑は既に冒険の装束に着替えて準備万端である。

傍らにはバルが踏ん反り返り、シロの巨体が大きな影を作っていた。

見送りは三人。

車椅子に乗ったミオソティスとそれを押すラティルス、そして恭しく控えるラヴァテラがログハウスの玄関で見送る形。

しかし、今朝は三人の内一人の様子がおかしかった。

「いつてらっしやいませ、シオン様、バル様」

「……いつてらっしやい」

「……いつてらっしやい、気をつけて」

ラティルスがワンテンポ遅れて喋る事はいつも通り。

だが、ミオソティスがそれをするとなると話は別。

顔は俯き加減。

褐色の肌で分かりにくいだが、その肌には朱が混じっている。

紫苑もミオソティスの様子に傾げざるを得ない。

思えば今朝の朝食の時からミオソティスの調子は変だった。

「ぼー、と話し掛けてもどこか上の空、かと思えば紫苑の居る方向にじっと首を見て慌てて逸らす奇行の連続。」

「ミオ、調子が悪いようでしたら無理に見送りに来なくても大丈夫ですよ。部屋で休んで下さい、ね?」

「は、はい!?! あ、いえ、大丈夫です、平気なんです、見送りも

任せて下さい！」

ね？　の部分で紫苑は首を傾げて、ミオソティスの顔を覗き込む形となった。

何時の間にか目と鼻の先に居る紫苑。

意識すれば吐息すら感じられる距離。

ミオソティスの脳裏が真っ白になり、普段見せないような醜態を晒してしまふ。

失態と紫苑がすぐ傍に居る事実。

その両方の要因で、ミオソティスは車椅子の上で身を小さくする。顔の朱色が更に酷くなった。

「ほほう……ミオが、のう」

「これはこれは」

「……」

遣り取りを見ていた年上組の反応は三者三様。

バルはさも面白い物を見つけた子供のように。

ラヴァテラは丸眼鏡を指で押し上げ興味深げに。

そして。

ミオソティスの実質姉であるラティルスは、常の無表情を複雑に歪めていた。

「本当に大丈夫なのですか？」

「はい、平気なんです。シオンさんも気にしないで下さい」

知らぬは本人達ばかり。

紫苑はミオソティスから何かしらの感情が向けられている事に気付いたが、それが秋波と云う事には思い至っていなかった。

恋心ともいえない淡い気持ち。

そんな拙くもいじらしい物を注がれた経験が紫苑には欠如していたからだ。

街を歩けば誰もが振り返る。

眼を合わせれば固唾を吞まれる。

自身の容姿が人並み以上に優れている事も経験則から理解している。

地球に居た頃、告白された回数は一度や二度では無い。だが。

それは紫苑と云う皮 外面しか見られていなかった。

そして、光を移さないミオソティスが、紫苑の外見を知っている筈が無い。

故に。

ミオソティスから送られる蕾のような淡い感情を理解し切れない、受け止め方が分からない。

それは紫苑にとって初めての事なのだから。

「シオン……さん  
「ん」

伸ばされたチョコレート色の手が、紫苑の顔にゆっくりと振れる。手が輪郭をなぞり、整った目鼻立ちを確認するように指が這う。

四本の指が頬を滑り、親指が唇を何度もさする。

紫苑は嫌がる素振りも見せず、屈んで目を閉じ、ミオソティスの気の済むまでじっとしていた。

やがて、満足したミオソティスは名残惜しむように紫苑の顔を解放する。

「……身体には気をつけて下さいね」

「はい、行ってきます」

心配げなミオソテイスに、紫苑は柔らかく微笑んで返す。  
その二人の姿は、まさに出掛ける夫を見送る妻の構図であった。  
新婚夫婦と付け足しても良いかもしれぬ

白狼王の背に跨り、木々生い茂る道へ遠ざかる背中を、ミオソテ  
イスは車椅子の上で何時までも見送り続けていた。

姿が見えなくなっても感じられるマナの波長を目印に何時までも  
不意に。

背後から誰かに抱き締められる。

抱きすくめられる形で、頬には別の誰かの頬が触れる。

ログハウスに残った面々の中で、ここまで肌を重ね合せてくる人  
物は一人しかいない。

「ラテイ姉さん？」

「……………」

呼び掛けの答えは、更なる抱擁。

ぎゅっ、と息が苦しい程きつく抱き締められる。

二人の体温が重なり合って溶けていく。

「ラテイ姉さん、少し、苦しいです……………」

「……………だめ」

耳元で囁かれた言葉は、震えていた。  
何が駄目なのであろう、ミオソティスにはその言葉の真意が掴み  
とれない。

ただ。  
次に発せられる姉の言葉が、なぜか怖かった。

「……シオンを、好きになつては駄目」  
「……………え？」

好き。

誰が　私が。

誰を　紫苑を。

齎された言葉がミオソティスの頭の中で弾けた。

自覚は唐突に、芽吹いた萌芽が冷水を掛けられる事で、自分が咲  
かせる花の名前を知ってしまった。

花の名前は、恋。

そして、姉であるラティルスがその萌芽を枯らそうとしている事  
も。

きつく、きつく唇を噛む。

「どう、して……………どうしてですかっ！」

反応は顕著で劇的。

気付けばミオソティスは自身でも驚くほど声を張り上げていた。

日常生活の半分以上に介護を必要とする社会的にも、生存競争的  
にも弱者の彼女が初めて見せるような激昂。

当然だ。

これから大輪の花を咲かせる恋花を、誰が好き好んで枯らせるも  
のか。

そう思う事によつて、ミオソティスは激昂の裏側に潜む、ある可能性に耳を塞ぎたかつただけなのかもしれない。

暴れるミオソティスをラティルスはきつくきつく抱きしめる。

「……シオンはっ、いつか帰ってしまう！ ミオはっ！ 眼が見えない、歩けない！！」

「ッ」

叫ぶように、泣いているように、血を吐くように、ラティルスは告げた。

突き付けられる残酷な事実がミオソティスの胸を抉り、身体が強張る。

聞きたくなかつた。

耳を塞いでしまいたかつた。

それが叶わぬのなら耳ごと事実を突き付けられる前に、引き千切つてしまいたかつた。

「離して！ 離してください、姉さん！」

「……駄目！ ミオの気持ちは実らない、不幸になるだけだ！！」

受け入れられない現実から逃れようと、ミオソティスが暴れる。

癩癩を起した子供を叱るように、ラティルスが腕の中の妹を押さえ付けて、叫んだ。

紫苑は時折、此処では無い遠くへと想いを馳せている。

紫苑の身体は『此処』に居るのに、心は『此処』に居ない。

ミオソティスはソレを故郷に向ける望郷だという事を知っていた。

そして、何時までも紫苑と共に過ごす生活も永遠では無いと、知っていた。

いつかは終わりを迎える暖かな日々。

その時、思い人の背を追いかけていける両足をミオソティスは持ち合わせていない。

思い人の姿を見つucker両目をミオソティスは持ち合わせていない。強張った身体から力が抜ける。

抱きしめる腕の中から、やがて嗚咽が途切れ途切れに漏れていた。

「……………なん、で……………どう、して……………好きなの、に……………こんなに  
も……………わかったのに、なのに……………私はシオンさんに一緒に居られない  
い……………いられないよう」

溢れだした想いが、悲痛に口から零れ落ちる。

手で包帯の巻かれた顔を覆い、泣きじゃくった。

それでも、涙腺すら醜く癩痕ケロイドになった目から涙も出ない。

その事が、より一層ミオソティスを傷付ける。

不意に、両手で覆った顔の頬が湿る。

気付けば抱き締めるラティルスも、泣いていた。

流した涙が頬を伝い、ミオソティスの頬にも伝う。

火傷で全ての涙滴を奪われた妹の代わりに涙を流していた。

実らない恋の花を想い、二人して泣いていた

Original Novel

追憶のシオン

第??章『恋花への水蜜』

一人と一体は首を後ろに傾ける。

見上げる視界の前には紙、紙、紙、またもや紙。

それら全てはギルドの掲示板に整然と張り出された依頼書。

秘蹟礼装に関するめぼしい情報は無く、紫苑達は自分達の背丈よりかなり大きい掲示板を覗いていた。

もしかしたらこの幾つもの依頼書の中には秘蹟礼装と関連している物があるかもしれない。

そんな淡い思いも抱いて、二人組は掲示板を仰ぎ見る。  
黒と金。

二色の髪の毛が、二人の背中に美しく映えていた

「して、紫苑はどうする気なのじゃ？」

肝心な部分が欠落した質問。

声色には些か愉快気な響きが含まれていた。

バルが視線を掲示板と睨めっこのまま隣に問い掛ける。

「どうする気、とは？ 一体何の話ですか？」

一方、紫苑も依頼書の文を目で追いながら質問の心意を問う。

流石に紫苑も肝心な部分が省略されては、バルが求めている事に答えようも無い。

ましてや、それが気付いていないミオソティスの恋慕の行く末なのだから。

「ふむ、紫苑にしては珍しく鈍いのう……成程、妾の紫苑があまり

に美し過ぎる故、逆にこのような経験も少ないという事か。うむ！  
美しさとは罪じゃのう」

得心がいったとばかりに、うんうん、と頷いて悦に浸るバル。  
なんの説明も無い紫苑の困惑は更に増す。

一人退け者のような状態に、紫苑は少し不満気そうだった。

「もう、一体なんだと云うのですか？　ちゃんと云ってくれないと、さっぱりです」

困り顔での抗議。

抗議の時でさえ粗野では無く、しつとり、と奥ゆかしさを感じさせる担い手にバルは愛いのう、と思う。

だが、バルはいつまでも見ておきたくなる欲求をぐっ、と抑えた。  
これ以上の先延ばしは、本当に紫苑が臍を曲げかねない。

「今朝のミオは少々様子がおかしかったであろう？」

「はい、そうでしたが……」

それと何の関係が？　と尋ねたそんな紫苑にバルは、はつきりと云わねば駄目か、と決意を新たにす。

首だけを向けるのではなく、身体ごと。

瞳を瞳で捕まえて、バルは今まで包んでいた話の核心を告げる。

「ミオはの　紫苑、お主に懸想しておるのじゃよ。思慕、傾慕、云い方は多々有れど答えは変わらん。ミオはお前を女として恋慕しておるのよ」

バルが語った音を言葉と認識するのに、紫苑は多大な時間を要した。

5秒、10秒、20秒。

漸く脳に理解が追いついた。

ぼっ、と紫苑の頬に火が灯る。

予想もしない答えに、紫苑は顔を伏せて最大級の困惑に耐える。

しかし、前髪のカーテンから見え隠れする白磁の肌を染める朱は、誰から見ても明らか。

紫苑は今、混乱の極致であった。

俯いてしまった紫苑を、バルはとりあえず手を引いてギルドのロビーに設置してある椅子へと誘導した。

人で賑わうギルドの、更に人が集まるクエスト掲示板の前に居ては衆目を集めてしまう。

ただでさえ人目を寄せる容姿をしている紫苑の滅多に見られぬ姿を、むやみやたらに晒す気などバルには毛頭無かった。

清潔感溢れる白いテーブルを挟んで椅子に座る一人と一体。

混乱から幾分か落ち着いた紫苑は、おずおずと上目遣いで尋ねる。

「……………うそ、ですよね？」

「嘘など吐いてどうするっていうのじゃ。あれは誰がどう見ようと恋する乙女と云うやつじゃ」

「……………あうう」

にべもないバルの返答に、紫苑は赤くなって縮こまる。

思い返してみれば、なるほど確かにミオソティスは何時の頃からか紫苑に対して秋波を送っていた。

人形制作をする紫苑の傍らで日が暮れるまで居たり、

紫苑と共に日向ぼっこをしたり、

『ウルドの湖』のログハウスに戻った時には、何時もミオソティスが傍に居た。

次々とバルの言葉を裏付けるような過去の出来事が、紫苑の脳裏に浮かび続ける。

其処に魔物達を切り刻む冷徹な冒険者の姿は無く、急に告げられた好意に戸惑う等身大の十代の子供が居た。

「して、どうするのじゃ？ ミオは紫苑の事を好いておるし、紫苑もミオの事は心憎からず思っておるのじゃろう。でなければ傍に置きはせぬ」

によによ、と良い酒の肴を手に入れたとばかりに目を輝かせ詰め寄るバル。

紫苑は漸く収まってきた胸の鼓動を確かめながら、とつとつ、と己が考えを口に出していた。

「正直、よく分かりません」

「なんじゃ、尻の青い童共には想いの文を少なからずぶつけられて来たのじゃろう？」

「あの時は、じいじが居て、幼馴染の子が居て、そして父さんも居ました。満たされていたんだと思います。其処に他人が入る隙間も無いほどに……」

既に頬の火照りは冷め、故郷に想いを馳せる紫苑の横顔。

その瞳が見つめる先に『蒼の大地』は無く、遠く離れた 世界すら隔てた地球を見ていた。

「それに告白してきたのは、みんな男の子ですよ。俺も男ですけど……だからもしミオがそういった感情を俺に対して抱いてくれるなら、素直に嬉しいです。

けれど、それに対して俺は返せる答えを持ち合わせていません」「何故じゃ？」

「何故つて、俺は『蒼の大地』で骨を埋めるは毛頭ありません。絶対に帰る、帰るんです……だから答えられない」

紫苑は己の偽らざる心情を吐露した後、きゅっ、と口を噤んで押し黙る。

だが。

心の内を聞かされたバルは心底不思議そうに首を傾げる。

まるで1+1が3になってしまったかのような奇妙な物を見る目付き。

「だから何故そうなるのじゃ？」

「？　バルは何が云いたいのですか？」

「だーから、連れて帰れば良いではないか」

「はい？」

思わず素っ頓狂な声を上げてしまう紫苑。

連れて帰る、お持ち帰り、送り狼。

それらが『地球への帰還』と等号で結ばれない。

今度は紫苑が小首を傾げる番だった。

「なあに、紫苑の国でも不法滞在の外国人など探せば出てくるじゃろうが、それが一人二人増えた所で大して変わる訳でもあるまい。」

『狂い龍』が織り紡いだ世界を断絶させる壁にさえ孔を穿つてしまえば、人数の多寡など問題に入らぬ」

「ですが、ミオ達が生かす承するとも限らない事ですし……」

「訊けば済む話じゃ。何故行動を起こさずに結果を決めつける？」

珍しく煮え切らない態度の紫苑に、バルは畳み掛けるように問う。

『狂い龍』という最上級の精神浸食すら柳に風と流してしまふ紫苑が、たかが色恋沙汰だけで百面相。

ここまで紫苑が素の感情を露わにするのは、やはり相手が身内だから。

心の奥深くまでミオソティスと云う存在が入り込んでいるが故に、紫苑は戸惑い迷う。

「本当に、良いのでしょうか？ バルが帰還魔術のManaを溜めて地球に帰ってしまったえば、俺は二度と此方に戻ろうとは思いません。

往復に要するManaを溜める事は、たぶん帰りたくて逸る心が拒否してしまいます。

今の安定した生活を俺の都合だけで捨ててしまう事になります。

それを強いるのは……」

「理由など付け加えていけばキリがない。紫苑、お主がやるか、やらぬのか決めねばならぬ事柄じゃ。お主はもう少し我儘に生きても良いのではないか？」

手を組み、その上に顎を乗せたバルの不遜な態度。

その振舞い方と裏腹に、硝子玉の瞳に乗せた色は酷く優しい。

すとな、とバルの言葉が胸の奥に落ちた。

そして。

くすりと、と野花のように控えめな笑みが紫苑の顔から零れた。

「俺はもう十分我儘ですよ。でなければ魔術師一人分の魔力を集めようと思いませんから　でも……そうですね。この際だからもうちょっと欲張ってみようかと思えます」

にこり、と淑やかに笑う紫苑。

その表情には何時もの覇気が宿り、迷いは退けられていた。

空色に輝く双眸に決意を宿らせて。

漸く本調子を取り戻した担い手にバルはくくく、と外見不相応な笑い方で喉を鳴らす。

「それで良い。それでこそ妾の紫苑じゃ……………じゃが、ミオソテイスが何時告白して来ても答えられるように、返答は用意しておくのじゃぞ」

後半の部分で紫苑は再度、あうう、と弱った姿になってしまった。そんな紫苑にバルは今度こそ腹を抱えて大笑い。

ギルドに足を運んでいた冒険者もギルド職員も何事かと思って顔を向けるが、バルは構わず笑い転げる。

懐に入れた相手には誰より甘くて、

身内を脅かす外的には何処までも冷徹で、

自らの言葉には本当に素直な反応を見せてくれる。

そんな担い手が愛しくて堪らないと、バルは笑い続けていた。

「丁度、ラタトスクの祭りも近い頃じゃ。気持ちも振り切れた事じやし、皆で見えて回るのも良いかもしれんな」

「そうですね。ミオ達を誘って楽しむのも、良いかもしれません」

そして。

耳心地良く鳴く小鳥達の囀りは、乱暴に開け放たれた扉で中断される事となった

バン、とかなりの頻度で酷使されるギルドの扉が悲鳴を上げながら開け放たれる。

女王様。

現れた人物はまさにそれであった。

開け放たれた扉から注ぐ光を後光に、媚びへつらう大の男達を取り巻きに囲う。

サンダルハイヒールの踵を高らかに鳴らし、ロビーの床が悦びに喘ぐ。

女王　バジリーは戸惑い無く真つ直ぐに受付まで歩いていく。目的地は最初から決まり切っている。

ギルド一番の美丈夫、エルフのツイーリツヒの受付卓であった。

「久しぶりだねえ、色男。元気にしてたかい？」

「用件があるならば早々に云え、ぼうへにまじよ『棒紅魔女』。そして帰れ」

冒険者と職員を隔てるカウンターに寄り掛かり、バジリーの淫蜜の詰まった二つの果実が柔らかく潰れる。

背中が艶めかしい雌の曲線を描き、その最果てには魅力溢れる尻の肉が雄を誘う。

大抵の男ならば骨抜きになってしまふ流し目に、ツイーリツヒは眉間に皺を寄せるだけで心底嫌そうな表情を作る。

職務でなければ舌打ちもブレンドしそうな雰囲気だ。

「つれない男だねえ。アタシが折角こうまで誘っているのにさ」「貴様の化粧の臭いは好かん。で、何の用だ。さっさと話せ」

軽口の応酬。

バジリーは艶やかな色香で誘い、ツイーリツヒが冷静且つ辛辣な対応で袖に振る。

そして、早々に嫌な来訪者から捌きたいツイーリツヒは銀縁の丸眼鏡を指で押し上げ、用向き促す。

「早いねえ、気が早い。ベッドの上でも自分だけ真っ先にイツちまう男は女に嫌われるよ」

「安心しろ。目の前に居る魔女に嫌われた所で痛痒も感じん」

「あーはいはい。随分嫌われたもんだ。此処に来た用事は何時も通りさね。今一番でかいヤマ、それを幹旋してもらいに来たよ」

初めからそう云えば良かろうに、とツイーリツヒは珍しく疲れたような溜息を吐く。

その憂いを帯びた横顔に女性職員は黄色い悲鳴を上げる。

ツイーリツヒとの会話が楽しいのか、バジリーは長く真っ赤な舌で嬉しそうに自身の唇を舌なめずり。

『知識鱗の魔弾』の女王様はご機嫌だった。

「内容はクドコ山に突然できた洞穴の調査だ。この洞穴は最近になって現れたようで、地元の猟師は洞穴が現れる前に頻発するようになっていた自身が原因ではないかと証言している。

洞穴からは頻繁に魔物がうろつくようになり近隣の村集落を荒らしている。中には強力な個体も居り、村々の自警団だけでは対処能力を超えているそうだ。

依頼元はその近隣の村々の各村長からだ」

ツイーリツヒが口頭で詳細な依頼内容を告げていく。

事務的な口調で淡々と告げられていてもバジリーは構わずに色男の顔を見詰め続けていた。

顎に手を当てにやにや、と。

例えるならば獲物を前にした女豹。

ギルドに訪れてはそのような視線を向けてこられるツイーリツヒ

からすれば迷惑この上ない。

彼がバジーリに辛辣な言葉を吐く事も無理からぬ事であった。

「洞穴の内部に有志で集った調査団が潜った所、予想以上に魔物の数が多く、這う這うの体で逃げ帰ったと報告されている。」

既にかんりの数の冒険者が現地に向かっているが、洞穴は深く、未だ魔物の出没理由も不明。以上だな。で、受けるのか？」

「ふうん。どんな案件かと思つて来てみれば、なかなか面白そうじゃないかい。決めた、その依頼『知識鱗の魔弾』が受注するよ」

「そうか。ならば後で資料を届けさせるので早々に帰れ」

「待った」

「……………なんだ？」

話に歯止めを掛けられ、ツイーリツヒは再び不満顔。

眉間に皺を寄せながらもその美貌が崩れないのは、流石エルフと云った所か。

「アタシ等以外で有名所はその依頼、受けてんのかい？」

「……………『黒アリス』が検討中だ」

「『黒アリス』？ ……ああ、『少年アリス』って奴か。会った事はないけど噂通りの容姿をしてるのかい？ はっきり云って眉唾物なんだけれどもねえ」

怪訝な含みを露わに、懐疑的な表情が滲み出るバジーリ

バジーリ自身『少年アリス』の噂は度々聞いていた。

ラタトスクの街で一番の有望株の新人冒険者。

容姿は振り返らない者が居ないほど可憐な乙女。

糸使い。

列挙すればキリが無くなる程度には特徴的な『少年アリス』だが、バジーリはその容姿に関しての噂は余り信用していなかった。

確かに美しい少年は居る。

女兒の格好をさせれば良く似合う者もいるだろう  
エルフの男児などはその最たる物だ。

バジリーも一度、エルフの見目美しい男の子を摘み食いした事があるが、それでも目鼻立ちが整っているだけで性別を誤認するほどでは無かった。

「そう思うのならば、貴様の目で確かめれば良いだろう」  
「……居るのかい？」

何時もの癖で銀縁眼鏡を指で押し上げたツイーリツヒの視線は、  
カウンター越しのバジリーを見てはいなかった。

彼女の奥。

陽光が吹き抜けの天窓から明るく差し込むロビーの雑談場。  
其処に備え付けられているテーブル一式に座って談笑する一体と  
一人を視界に収めていた。

そして。

バジリーはその視線の先を目で追う。

「……………は？」

身体中に雷撃呪文が張り抜けたような感覚が貫く。

全身が総毛立ち、顔半分を覆う鱗にも鳥肌が立ったと錯覚してしまっただけだ。

知らず呆けた声が漏れていた。

今の今まで大人しかかった取り巻きの男三人組は、ただ単にぼう、と魅入られたように『少年アリス』とバルの遣り取りを見詰めていただけだった。

立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花。

そんな諺を地で行くような見た目少女の少年が其処に居た。

否。

仮に真実少女であったとしても、今と同様に呆けていただろう。楽しそうに雑談する『少年アリス』　紫苑は向けられたツイーリツヒの視線に気付くと、控え目に微笑んで会釈をする。嫉妬した。

バジリーはあの花のようにたおやかな微笑みを受け取ったのが自分では無い事実。

それが堪らなく不愉快であった。

「　欲しい」

「おい」

言葉が口を突いて出た音に、バジリーは自分が何を云ったのかを自覚した。

横でエルフの美丈夫が何か云った気がするが、耳がそれを言葉として認識しない。

彼女の瞳では、あれほど輝いて見えた宝石が綺麗な石ころ程度にしか感じられない。

より美しく輝く宝石を前にしたからだ。

願望の赴くまま、欲望の赴くまま、バジリーは歩みを進める。

逸る気持ちは歩幅を大きくし、歩みを速めていた。

そして。

顔半分を鱗で覆う『棒紅魔女』と『少年アリス』が遂に、邂逅した

紫苑達の席に影が差す。

和やかな談笑を中断し、隣を見ると真紅の高級そうなドレスを纏った女性が一人。

厚く塗った化粧の匂いが鼻先を掠めた。

「『少年アリス』。アンタ、アタシの物にならないかい？」

ぐわし、と紫苑の両手を取って突拍子も無い事をのたまう女性はバジーリその人。

その瞳は爛々と輝いていて、欲しい玩具を目の前にした子供そのものだった。

突然の出来事に紫苑は困り顔。

単に荒くれ者が絡んで来た訳では無いので対処に迷う。

「あの、どちら様でしょうか？」

内容の是非は兎も角、とりあえず必要な物は、名前すら知らない相手の情報。

両手をしっかりと握られたまま紫苑は女性の素性を問う事にした。問われた内容にバジーリは若干頭に上っていた血が下がり、冷静さを取り戻す。

だが、少しでも気を抜けば吸い込まれそうな程澄んだ蒼の瞳を何時までも見つめ続けてしまいそうになる。

アタシとした事が、ちょっと焦ってたみたいだね。大事なのは如何に子猫ちゃんを墮とすかの過程、手段！

くっく、見れば見るほど手に入れがいの有りそうな子じやな

いか。

頭の中では紫苑の調教メニューまで考えていたバジリーは、不審げな紫苑の視線を受け、己の素性を明かす。

「初めましてだね、『少年アリス』。アタシの名はバジリー・リザー  
リイーゼ。」

アンタも此処の冒険者なら知っているとと思うけど、『知識鱗の魔弾』  
のクランリーダをしている半爬虫人さ<sup>ハーフリザード</sup>」

「ご丁寧にも。俺は紫苑、水鏡紫苑です」

色香を振りまきながらつん、と上を向いた胸を張るバジリーと、  
丁寧にぺこり、と頭を下げて自己紹介をする紫苑。

対照的な初対面の挨拶。

それは二人の性格を良く表していた。

「して、藪から棒になんじゃお主は。妾の紫苑を物にしたいとは些  
か不愉快じゃぞ」

「アンタは？」

「ふん、妾はバルトアンデルス。紫苑の無二の相棒じゃ」

棘を含んだバルの物言い。

横槍を入れたバルに対し、バジリーの視線が顔に行き、そして特  
異な関節部へと固定された。

魔術に精通したバジリーはバルの存在を使い魔あたりだと検討を  
つける。

そして、刺々しい態度は気位が高く人に懐かない猫を想起させ、  
中々に彼女の好みの性格であった。

調教のしがいがある、と。

「へえー、お嬢ちゃんが相棒ね……………」

「子供扱いするでない百も年を経ている小娘が。千年単位で早いぞ」

「千年…………なるほど、ね。アンタ、『秘蹟礼装』だろ」

「然り」

「バル、あまり軽々しく言いふらしては…………危ないです」

不用意な発言をするバルに、紫苑の注意が飛ぶ。

八の字を描いた細い眉が、バルの身を案じる気持ちを露わにしていた。

『秘蹟礼装』は冒険者にとって垂涎物の代物だ。

富と名声。

二つが一度に転がり込んでくるお宝。

そんな宝物が道の真ん中を闊歩している場面に遭遇したら彼等は  
どうするか。

心無い輩は、その足の付いた『秘蹟礼装』を我が物にせんと動く  
だろう。

紫苑はその可能性を心配していた。

「ふふん、案ずるでない。妾がそこいらの雑兵に遅れを取ると思  
うか？ 邪な輩が近付いた所で塵芥が空に舞うだけじゃ」

物騒な事を平然と謳うバルに、紫苑を少し安心したように表情を  
緩める。

ふうん、とバジリーは二人の会話に得心がいったとばかりに息を  
漏らす。

短い遣り取りで二人の関係がどのような物なのかある程度理解が  
及んでいた。

「仲睦まじいじゃないか。安心しなよ、無闇に云いふらしたりはし

ないよ。なんなら二人揃ってだつて一向に構わない、アンタ達、アタシのクランに加入しないかい？」

「あ、さっきのはそういう事だったんですね」

腑に落ちた、と紫苑は先程のバジリーの発言を納得する。バルはそんな紫苑を横目に筆舌し難い表情を浮かべた。

なぜこつても害意に対しては敏感であるのに、善の方向に対しての感情については察しが悪いのかのう。

余程周囲の者が気を割っていたか、或いは察した上で誤魔化しているのか。

釈然としない気持ちがあるがバルの心内に重く溜まる。

懊悩する相方を余所に、紫苑は居住まいを正してバジリーの提案に返答する。

「折角の申し出ですが、済みません。お断りさせて貰います」

馬鹿に丁寧な断りを入れ、紫苑は頭を下げた。

その対応にバジリーの頬の鱗が引き攣る。

しかし、厚化粧と同様に顔面を強固な意志で塗り固め、次瞬には男を惑わす女の貌になっていた。

「アタシの勧誘が断られたのは『炎獅子』以来だよ『少年アリス』。理由を云いな」

有無を言わさない。

高圧的な物言いには、マゾヒストには抗い難い魔力が込められていた。

大の大人ですら平伏を強制される響きに、紫苑はやはり柳に風。

至って自然体。

臆さず女王様の詰問に答える。

「俺はある目的の為に冒険者稼業をやっています。ですので目的さえ達成してしまえば直ぐにでも廃業するつもりです。

そんな何時脱退するかも分からない人間がクランに居ても迷惑なだけですし、無責任だとも思います。

それに、個人の方が足も軽いですから」

「確かにクランってのは一つの生き物に例えられる事が良くあるからねえ。正論といえ正論。」

けど、クランの規模が大きくなれば大きくなるほどそこらへんは仕方が無いとはいえ結構杜撰になってくるもんだよ。

人の出入りも激しい。そんな人間が一人二人居ても構いやしないよ」

「……不義理な事はしたくありませんから」

やんわり、と断りを入れているが紫苑の意志は岩のように固い。

柔和な顔立ちからその意志を汲み取ったバジリーは、勧誘の矛を収め ずに、別角度から攻める。

真正面から愚直に特攻を仕掛ければ穂先が欠けてしまつならば、梃子で動かせば良い。

左腕で乳房を下から持ち上げ、右手は顎の下。

少しの間、思案した後、バジリーはこう提案してきた。

「ふむ、ならアタシのクランに遊びに来ないかい？」

「遊びに、ですか？」

「そうさ。アンタ達もクドコ山の調査に赴くんذار？ 結構な数の冒険者がもう既に依頼を受注してるんだ、麓の村の宿泊施設だって満杯。」

必然的に後発でやって来た冒険者は野宿を強いられちまう。その

点、ウチのクランは大人数だからね、野営の道具もそれなりに充実している。

どうだい？ アンタ達なら大歓迎だよ」

下心も有るだろうが、美味しい飯に暖かく周囲の警戒も行き届いた寢床はかなり魅力的な提案だ。

だが、紫苑達には最高の荷物持ちが居るのだ。

その名をシロこと『白狼王』。

美味しい食事を作る料理器具も、暖かい寢床も全てシロが持つてくれる為、紫苑の荷物は常に最低限。

更に野宿での警戒はシロが行ってくれるので、並大抵の魔物は近付く前に逃げてしまう。

つまり、紫苑達は一般の冒険者が求めて已まない暖かい食事と寢床を確実に確保できてしまうのだ。

バジリーの提案は左程の旨味は無い。

しかし、ここで断ってしまうのは、『知識鱗の魔弾』のクランリーダーの面子を潰してしまう行為だった。故に。

「はい。ラタトスクのお祭りに『身内』の人達と参加してから依頼を受注しようと思うので、その時には是非お願いします」

それは無意識に口を突いた言葉かもしれない。

だが、バルにとって紫苑が口にした『身内』という単語は、迷子がやっと拠り所を見つけた証左であった。

自然と緩む頬が止められない。

そして、和んだ気持ちを半蜥蜴人が打ち壊した。

「任せな。それと　これは手付けだよ」



エンブレム  
『浄火』。

浄化の白銀炎が付着した口紅を汚れと判断し、その身に包み込み分解していく。

「ごしごし、と念入りに指の腹で擦られる当人はむずがるように身をよじる。」

「ん……………もう、いきなりは止めて下さい。吃驚するじゃないですか」

「ふん！！ 妾は悪くない！！ 悪いのはあの化粧もまともにも出来ぬ半蜥蜴人よ！！ 紫苑も紫苑じゃ、あのような輩は切り刻んでしまえば良かるうに」

「そんな無茶を云わないで下さい」

すつかり臍を曲げてしまったバル。

抗議する紫苑につん、とそっぽを向き、その眉尻は急勾配の線を描いていた

「『ただいま、帰りました』」

その一言は壮大な破壊力を伴って住人に衝撃を与えた。

気落ちし、車椅子の上で曇天のように沈み込んでいたミオソティスも弾かれたように顔を上げ、

叱ってしまった手前、励ましの言葉も掛けられなく足踏みをしていたラティルスもピン、と獣耳を立ち上げ、  
いの一番に主人を出迎えたラヴァテラも丸眼鏡を奥で目を見開いた。

例外無く皆が時を止めた。

紫苑はただ穏やかに微笑みを湛えている。

だが、違う。

春の雪解けのように、植物の芽が解けた雪間から顔出すように、  
地肌の晒した紫苑が居た。

隔てていた見えない一枚の壁が綺麗さっぱりと取り払われている事に気付かぬとも、五感で感じられる寄り添うように向けられる親愛の情。

それは日溜まりだった。

「今日はクリームシチューですか？ ラヴァテラさんの料理はどれも美味しいから楽しみです」

鼻腔をくすぐる匂いに今日の夕食を言い当てる紫苑。

衝撃冷めやらぬラヴァテラの傍を擦り抜け、『第二の我が家』に足を踏みしめる。

歩く度、束ねた黒髪の毛先が踊るように跳ねた。

木造りの床を叩く足音が陽気な音楽を奏でた。

「ただいまって……シオンさんが、ただいまって……」

「おっといけません。鍋に火をかけっぱなしでしたね」

ミオソティスは紫苑が発した言葉を反芻する。

その言葉の意味が信じられぬように何度も。

一方でラヴァテラは頻りに丸眼鏡の位置を指で直し、家事に従事する事で平静を保とうとする。

「……シオン、何かいい事でもあったの？」

当惑する三人の代表でラティルスが恐る恐るといった態度で聞いてきた。

その指摘に紫苑は頬に手を持ってきて確かめる。

緩む頬はどうやっても暫く治りそうになかった。

十人が十人とも上機嫌と答え、その笑顔から優しい気持ちを貰える、見惚れる笑みを零しているのだから。

「はい。どうしても解けなかった簡単な問題が解けました」

湖畔の木々さえ歌いだす程に声は弾んでいた。

油断すれば不図した拍子に口を突いて飛び出してしまうような『あの言葉』を抑え、紫苑は先に用件を伝える事にした。

「それより、今度ラタトスクの街で花摘み祭があるので、皆一緒に参加しませんか？」

その提案は、何時に無く押し強い物であった。

しかし、終始微笑みを絶やさないう紫苑を見ると、断るという選択肢が気泡のように弾けて消えてしまいう気さえしてしまう。

『花摘み祭』。

ラタトスクで春と秋に行われる祭りの内、春に盛大に催される祭りの名前だ。

この日ばかりはと活気溢れるラタトスクの街が、更に人と喧騒、そして色取り取りの花に満ち溢れる。

中央通りに、出店に、建物の煉瓦壁に。

街一色を花色に染め上げ、花の香りが街を包み、花弁がラタトスクの空を舞う。

夜にはプロツサムス魔導学院の教員、生徒達が総出で星空に火の花を咲かせる。

諸外国にさえその噂が伝わる盛大な祭りである。

「でも、私は……」

ミオソティスが顔を俯かせる。

きゅ、と握り締められたスカートが歪な皺を作り、その下の動かぬ足の存在を強調していた。

人が所狭しと溢れかえる『花摘み祭』で、ミオソティスは車椅子で移動できるとは思えなかった。

魚が空を飛ぶ鳥に憧れるような決して実現しない憧憬。

紫苑と自分が違う世界に住む生き物なのだと、突き付けられた気がして胸の奥が痛む。

折角の誘い。

それを断らなければならない事に、ミオソティスは悲観を感じる。不意に。

スカートを握り締めた両手に、別の体温が溶けていた。

片膝について、包帯に隠された両目に視線を合わせた紫苑が其処には居た。

「大丈夫です。ミオとはずっと一緒に居ますから、ね？」

その声が、麻薬のように甘く、切なくミオソティスに染み入ってくる。

ずるい、とミオソティスは思う。

それはミオソティスが一番欲しい言葉の筈なのに、決定的に意味が食い違っている。

なのに。

貴方の顔で、貴方の匂いで、貴方の声で。

そんなずるい言葉を云わないで、下さい。

差し出された掌を掴んでしまいましたくなる。  
その細い腰に縋り付いてしまいたくなる。

優しくしないで下さい。夢を見てしまうじゃないですか。魚  
だって空を飛べてしまうなんて、そんな馬鹿な事を考えてしまうじ  
やないですか。

離れていく紫苑のぬくもりに名残惜しさを感じてしまう。  
それを勘違いだと思い込む事で、ミオソティスは初恋に蓋をしよ  
うとする。

だが、それすら貴方はさせてくれはしない。

「それと、ミオ、ラティルスさん。いつも有難う御座います

『大好き』ですよ」

本当に、ずるい。

枯らせようとする恋の花に、そんな太陽のような微笑みで水を与  
えてしまうのだから。

何時まで経っても枯れはしない。

踏まれたら、踏まれた分だけ恋花は強く立ち上がるのだから。

障害があるほど幼い恋心は燃え上がってしまう

あとがき

紫苑 吹っ切れた

ミオソティス覚醒

ラティ姉さんはずっとミオソティスの保護者をやっていたから憎まれ役を買って出ました。

『蒼の大地』は月の帝国以外は社会保障制度なにそれ？ たべれるの？ な感じの世界観ですので、地球よりずっと障害を持つミオソティスには生き難い世界です。

一緒になった時の負担、精神的引け目、ダークエルフという世間一般の認識。

それらを思い、ラティ姉さんは互いに一緒になるのは不幸になるだけだと判断してミオソティスの恋を否定しました。

今回の話はそんなラティ姉さんの思惑を無自覚でぶっ壊す紫苑君の話でした。

次回はラタトスクの『花摘み祭』。

イベントです、イベント。

お楽しみにしていて下さい。

## 第??章 『花摘み祭』

馬蹄の音がカツポカツポ、と長閑に響く。

ラタトスクへと続く街道。

馬車の手綱を握る御者の調子外れた鼻歌。

廻る車輪が轍を作り、澄み切った青空が絶好のお祭り日和と教えてくれる。

街道を走る馬車は一台だけではなかった。

今日はラタトスクの盛大な催し、『花摘み祭』。

各地からこの一年に一回の祭りに参加しようとする遠路はるばる人が集まって来ていた。

そんな馬車の中の一つ。

麗らかな小春日の下、その馬車の中は女の園であった。

目の保養となる四人の少女達が馬車に揺られながら、話の花を咲かせている。

藍に染め上げた蒼の大地では異彩を放つ和服と、絹糸の如く繊細に流れる黒髪が今日は珍しくアップに纏め上げられた人間 紫苑。

白と黒が二極のコントラストを描くゴシックドレスを身に纏い、波打つ豪華な金髪の球体関節人形 バルトアンデルス。

褐色の肌に映える銀髪を今日はリボンで飾り、レースとフリルで可愛らしく彩ったワンピースでおめかしをしたダークエルフ ミオソティス。

きつちり、と黒のスラックスとシャツを着こなし、男装の麗人と見紛うばかりに格好の良い魔物のハーフ ラティルス。

若干一名ほど性別的に少女では無いが、外見的には全く問題無い。

「だいぶ風に乗ってくる花の香りがはつきりとしてきましたね」

馬車の壁に取り付けられた覗き窓を身ながら、紫苑は云う。  
入り込んでくる風には確かに数多の花々の良い香りが混ざっている。  
まるで風が色付いたように。

まるで風が色付いたように。

「アオバナゴロモ、グミの花、スーレン。本当に沢山……」

「凄いです。何の花かこの距離で分かるのですか？」

「はい。もっとも香りの強い花だけです」

独り言のように呟いた内容に紫苑が些か驚く。

口にしたのは全て花の名前。

馬車に揺られながら花に関係する事と云えば、覗き窓から入り込んでくる薫風しかない。

ミオソティスはその花で色付いた風から嗅ぎ取って、正確に花の種類を言い当てていた。

素直な紫苑の賛辞に、ミオソティスは口元を緩ませて面映ゆそうにしていた。

「おーい、お嬢さん方！ 後半刻ほどで街まで着くんで荷物の準備をしよう！」「

「はい、有難う御座います」

「なんの、なんの。嬢ちゃん達も祭りの参加者だろ。楽しむのはいがこの時期にはスリも多いから気をつけな」

白髪交じりの頭髪をした中年の御者のしわがれた声が馬車内に響く。

紫苑のお礼の言葉に、御者の中年は赤鼻を擦りあげて照れ隠し。

気分良さ気に祭りの注意も教えてくれた。

ひよっこり、とバルが窓から首を出せば、続いていく街道の先端に小さく見えるラタトスクの街があった。

バルは出していた顔を引っ込めて、席に戻ると鷹揚にうんうん、と頷いた。

「うむ、シロの背に乗った方が断然早いが、たまにはこのようなゆったりとした馬車での移動も粋な物じゃな」

「シロさんはそんなに凄いのですか？」

「あのおんぼんたん犬に『さん』など付けずとも良い。まあ、早いといえば早いほう。シロならば日が明けきる前に到着しているであろうしな」

紫苑達一行が馬車に乗ってから随分の時間が経っていた。

朝日が昇る前に出発してから既に太陽が天頂に到達しようという時間帯。

シロこと白狼王の脚力であれば二往復して人心地をつけるほど時間的余裕がある。

されど、待つ時間と云うのも祭りを楽しむ為のスパイス。

濃くなる花の匂いと、遠く聞こえる祭りの喧騒が心を今か今かと躍らせていた。

ただ一人。

ラティルスだけは心内で複雑な気持ちを暗鬱と抱いていた。

……とつても、近い。

紫苑とミオソティスの距離が、だ。

物理的な意味合いでは無く心理的な意味合い。

否。

ミオソティスだけでは無い。

崩された壁の先にはラティルス本人も居たのだ。

「ラティルスさんは何処から見て回りたいですか？ 最初は『渡り鳥の止まり木』にチエックインしてからですけど」

「うむ、聞き及んだ話では出店が多すぎて祭りの間で全て回り切れな者は居らぬらしいな」

ラティルスに尋ねてくる紫苑の顔は朗らかで優しげ。

其処に一点の隔意も微塵に無く、するり、と心の奥に入り込んでくるような親愛の情を向けられていた。

まるで塞き止められていた川の流れが一気に押し寄せてきたかのように、紫苑を良く知る人物ほど変化は顕著に感じられた。

全ては昨日。

紫苑が築き上げていた心の壁が綺麗に無くなっていた。

それは良い事であり、また別の側面から見た時にはラティルスにとって悪い事でもあった。

「もつともミオも居るから窮屈な思いをさせられまい。移動は屋根伝いで行くのじゃ。くくく、下手な娯楽よりも妾達の移動の方が爽快であるぞ」

「その、御免なさい。私なんかの為に」

「気にするでない、妾達が望んだ事じゃ」

「気にしないで下さい、俺達が望んだのですから」

皆に負担を掛ける。

その事実により暗くなりかけたミオソティスを掬い上げたのは、重なる主従の一言。

それに、と紫苑が付け加える。

「それに、ミオの事で迷惑だなんて思った事なんて一度もありません」

んよ。逆にもつと我儘を云ってくれても良いくらいです」

「然り。ラティルスも遠慮無く云うが良い。金子には困っておらぬからな。今日は湯水の如く使うのじゃ」

「それは駄目です」

「何故じゃっ!？」

漫才のような二人の遣り取り。

くす、と盲目の少女が堪えきれずに吹き出してしまう。

そのままお腹と口を押えて笑いを押さえようとするが、どうにも上手くいきそうになかった。

くすくす、と漏れてしまう笑いは、暫く収まりそうにない。

笑顔は伝染する。

「ふふふ」

「くくく」

紫苑とバルが顔見合わせると自然に零れてくる笑い声。

それは次第に大きくなり、馬車の外に漏れ聞こえるほど大きな物になっていった。

ラティルスの心配すらも吹き飛ばそうとするように、大きく、いつまでも続くように

Original Novel

追憶のシオン

第??章『花摘み祭』

ラタトスク外壁の門を通ると、祭りの熱気と喧騒、花の芳香の壁が押し寄せてきた。

見渡す限りの色鮮やかな花、花、花。

民家のベランダに、

通りを縁取るように、

街全体が花の色彩と香りで満ち溢れていた。

人々が頭に花を一輪飾り、空に花弁が舞い散る。

人間が、エルフが、ドワーフが、巨人が、獣人が。

種族の差に関係無く、祭りの陽気に当てられて飲み、食べ、歌い、騒ぐ。

「飲めや、食べやの大盛況であるな」

中央通りを埋め尽くす人の波を見て、バルが本心から来る感想を云う。

まさにその通りであった。

一旦波に呑み込まれてしまえば祭りが終わるまで合流が望めない人の数。

ましてやそれが車椅子ならば瞬く間に波に揉まれて見えなくなってしまうそうであった。

ミオソティスもこの日の為に集まった『花摘み祭』の参加者の多さを目では無く、肌で感じ取っていた。

「これは、流石に車椅子で行くのは無理なんじゃないでしょうか…」

ミソオティスの発言も無理からぬ事だった。

しかし、その懸念は泡の如く消える。

なぜなら、ぽん、と背後から両肩に手を置かれ、淡い恋心を抱く  
思いに優しい声を掛けられたから。

そして、バルは素敵に不敵に不遜に口角を上げる。

「大丈夫ですよ。何も中央通りだけが『道』じゃありませんから」  
「紫苑の云う通りじゃ。それに云うたであろう？ 屋根伝いで行く  
とな」

「ミオ、ちょっと失礼しますね」  
「ほれ、ラテイルス！ お主も妾に続け！」

するり、と細腕が背中と膝裏に滑り込み、車椅子から身体が浮く  
感覚をミオソティスは味わった。

密着する体温。

傍に在る他人のぬくもりにミオソティスは、自身が抱きかかえら  
れた事に気付いた。

それを自覚し、羞恥が脳に届く前に事は起こった。

ぐっ、と紫苑の身体が沈み込んだ後、強風がミオソティスの頬を  
打つ。

そして、ミオソティスは重力から解き放たれていた。

「きゃっ」

紫苑がミオソティスを横抱きにラタトスクの空を跳躍する。

通りの横に並んだ煉瓦造りの家のベランダを足場に、もう一度跳  
ぶ。

紫苑の近くに居た祭りの参加者は何事かと、曲芸のような身軽さ  
を魅せる紫苑を目で追う。

集まる視線を意に介さず、抱いたお姫様と抱かれたお姫様は目的  
地に到着した。

着地音は無音。

衝撃も無く軽やかに着地した場所は、民家の屋上であつた。

続く形でバルが白黒ゴシックドレスの裾をふわり、と膨らませて屋上へと到着。

魔物のハーフであるラティルスも危なげなく、タン、と音を立てて紫苑達と合流を果たした。

「…………ミオの車椅子を取つてこないと…………」

「案ずるでない、ちゃんと此処に有るのじゃ」

ラティルスは置き去りにしてしまった木製の車椅子の心配をするが、バルの鶴の一声で押し留まる。

バルは凧いだ青空に人差し指を突き出し、くるり、と真円を描いた。

すると。

門付近へ置いてきぼりにされた車椅子の下。

地面に黒い孔が唐突に口を開けた。

車椅子はずぶずぶ、と汚泥に吞まれるようにゆっくりと黒い孔へ

落ちていき、完全に姿を消した。

車椅子の行先はバルが描いた上の真円。

描いた円が色を侵食して黒に染まる。

其処から吐き出されるようにして現れるのは消失した筈の車椅子だつた。

「どつじゃ？ これならば問題無かるつ」

ふふん、とバルはラティルスに向けて胸を張る。

威張るバルを横目に紫苑はいそいそと甲斐甲斐しくミオソティスを車椅子に乗せていた。

ミオソティスの顔面の毛細血管は絶賛お祭り状態。

顔の表面温度が一気に上昇し、茹蛸になっていた。

この時ばかりはチョコレート色の肌も赤面を隠し切れていなかった。

故に。

「凄かったです！ ふわっと浮き上がったと思ったたら人がもう真下に居るなんて」

一瞬の空の旅を興奮した風を装い、誤魔化す事にした。その反応に紫苑はなんとなく違和感を覚えたものの、祭りの陽気に当てられ気分が浮かれているのだらうと自己完結する。

「喜んでくれたようで良かったです。ちょっと驚かせようと、茶目っ気が出ちゃいました」

「お空を跳んだ時はちょっと吃驚してしまいましたけど、楽しかったです」

それは良かった、と紫苑は顔を綻ばせる。

着物に刺繍された紫陽花と同様のしっとり、とした控え目な微笑みを浮かべ、紫苑は車椅子のノブを手に取る。

車輪が自らを回転させて進んでいく。

「今度は俺が魔動でちゃんと『道』を作りますので、安心して下さいね」

「？」

言葉の意味が良く分からなかったミオソティスは頭に疑問符を浮かべる。

浮かんだ疑問符は次の瞬間、何処かへと行方不明になった。

呼吸のように容易く、紫苑の意志に応じて周囲のマナが糸の如く操られる。

マナの糸が編み込まれ、丸めた絨毯を広げるようにして足元から透明度の高い薄水色の力場が形成されていく。

それは帯状の魔法陣。

紋様が魔法陣を縁取り、本物の絨毯のようだった。

その様をミオソティスはマナの流れとして感じ取った。

要は紫苑の扱う滑車型魔法陣の原理と同一。

超常現象を引き起こさない代わりに物理的な干渉を行う事の出来る力場で『道』を作ったのだ。

これならば屋根から屋根へ。

そして、足場など無くとも空中散歩が可能になる。

「これで大丈夫です」

「シオンさんが魔動を使っているところ、初めて感じました」

「えっと、ミオの前では初めてでした？」

「はい」

『魔動』が扱える者は希少だ。

ましてそれが後天的に備わった人物など殆ど存在しないと云って良いだろう。

そして、紫苑の魔動は『ある意味』で生まれつきの能力と云えた。

水鏡紫苑は一度死んでいる。

その艶やかな髪も、息を呑む完璧な美貌も、身体を構成するありとあらゆる要素は全て紫苑本来の物では無い。

魂の設計図に従い、膨大にして莫大な魔力を魂の設計図に流し込んで形作られたに過ぎない。

地球での紫苑の亡骸は既に火葬され遺骨として墓前に置かれているのだ。

祖父も、幼馴染も、紫苑の魂が異世界の地で帰郷を目指している事実など知る由も無い。

彼等にとって紫苑は故人。

「また見える可能性があるなど、夢にも思<sup>ま</sup>つまい。

「よし、では祭りを堪能しようではないか。皆の者、妾の後に続くのじゃ」

肩で風を切つて意気揚々と先導するのはバル。

彼女の足元にも紫苑が敷いたのと同様の『道』が前へと続いていった。

異なる点は色の一点のみ。

紫苑の薄水色とは異なり、バルのそれは真紅。

王者の辿る道を指し示すレッドカーペットの如く紅い色であった

「おおう、あの串で焼いた肉は旨そうじゃ。ゆくぞラテイルス、妾の胃袋が串肉を待ち侘びておるぞ！」

屋根伝いの空中散歩でラタトスクの祭りを練り歩く。

時折、眼下に居る祭りの参加客から驚きの視線を感じるが構わず進む。

すると、バルの視界に腹の虫を刺激する良さ気な出店が目に残った。

そして、バルは迷う事無くラタトスクの宙を舞った。

フリルを満載したモノクロドレスが荒々しくはためく。  
着地点は人がごった返す密集域の空隙。

突如として出来上がった影に気付いた祭りの参加者は空を見上げる。

其処にあった物は、スカートとその中身に詰まった『形容しがた  
い泥のような黒』。

「ふふん、みだりに見せびらかす程、妾の下着は安くはないのでな」

たん、と空白地帯に着地。

バルは涼しい顔で着地時に乱れた豪華な金の髪を背中に流す。

続く形でまた人影が宙より降って来る。

猫を思わせるようなしなやかな着地を披露するのはラテイルス。

「来たか。ではゆくぞ」

突如として振ってきた少女人形に集まる周囲の目など痛痒にも感じぬとばかりに、バルは歩き出す。

一步、また一步進む度、前の人垣が自然と押し開かれていく。

威風堂々、天上天下唯我独尊と顔に書かれた少女人形が醸し出す  
空気には、そうするだけの威光が含まれていた。

その後ろをラテイルスが従者の如く付き従う。

傍から見た二人の関係は、我儘な令嬢と男装の執事そのものであった。

「もう、バルはいつも唐突なのですから」

「でも楽しそうですね、バルさん。なんだかいつもより声が弾んでいます」

「それを云うならミオもですよ」

「自分では気付きませんでした。そうなんでしょうか？」  
「そうなんです」

屋根の上を移動する二人は、降りてしまった二人を見送りながら和気藹々と会話。

ころころ、と蒼い絨毯を車椅子の車輪が転がる。

バルのいきなりの行動に呆れた調子を含ませながらも、紫苑の声の調子はどこか楽しげ。

それはミオソティスも同様であった。

「なんだかんだで二人ともしっかりしていますから、俺達は先に今晚泊まる宿屋にチェックインしておきましょうか？」  
「でも、後で二人と合流できるでしょうか？」

懸念すべき事項は、人の多さ。

今はモーゼの十戒の如く人波が左右に分かれているが、所詮その人数は氷山の一角。

すぐに降りてしまった二人の居場所は、波に消えてしまっただろう。だが、ミオソティスの懸念は紫苑によって解消された。

「心配いりませんよ。合流は今でも難しいですけど、バルと俺は離れていても会話ができます。合流する場所を決めて、其処へ行けば良いだけですから」

なるほど、そんな便利な手段が有れば合流は容易。

そう思ったミオソティスの頭に突如として声が響く。

《もの見事に二人つきりじゃな。これを機会に妾の紫苑と仲を進展してみたらどうじゃ、くくく》

びくり、とミオソティスの肩が跳ねた。

脳に直接響いた声は確かにバルの物。

だが、バルは先程屋根から眼下の通りに降りた筈。

バルの魔力の位置も正しく、その場所をミオソティスは感知していた。

故に、完全な不意打ちだった。

「どうかしましたか？」

「い、いえっ、何でもありません」

意識し始めると、その想いの抑制は難しかった。

姉に叱られた事実と、大好きと紫苑が口にした事実。

ラティルスの言い分は尤もであった。

盲目と足が不自由というあまりにも大き過ぎるハンディキャップ。それに。

奴隷商人に捕まった自分達を買い取り、見返り無く自由に解き放つてくれた。

そして、何不自由ない暮らしも提供し続けてくれている。

紫苑から与えられる物は手に持ち切れないほど与えられているくせに、自分は何一つ返せていない。

まるで寄生虫ではないか。

そんな思考に、ともすれば陥ってしまう。だが。

いつも有難う御座います

『大好き』ですよ。

車輪がころころ、と回り、回る。

そして、紫苑が齎した言葉が脳裏に反芻される。

他愛も無い一言。

その一言が枯れかけた花の芽に水蜜となって垂らされた。

花の土壤に染み渡り、芽吹いた萌芽は甘美に身を震わせられる。  
諦めようと、努力を試してみた。

でも、一日と経たずにそんな言葉をくれるなんて狡過ぎます。

間が悪かった。

云ってしまえばそれだけなのであろう。

故に、今でもこうしてミオソティスの胸の最奥で恋慕の念が燻っている。

「ねえ、シオンさん」

「ん、どうしましたか？」

「もし……もしも。あの日、あの時、あの場所で、私達が出会って  
いなければどうなっていたんでしょう？」

それは在り得たかもしれない『もしも』であった。

さあ、と花の香りをふんだんに貯め込んだ薫風が通り抜け、空へと  
無数の花弁が舞っていく。

銀と黒。

二つの髪が悪戯な風の手梳かれる。

紫苑は此処では無い、何処か遠くを見つめるような目で舞い散って  
いく花弁の行方を追っていた。

そして、瞑目。

祭りの喧騒は遠く、噛み締めるような静寂が屋根の上にはあった。

「……少なくとも、俺はこんなにも穏やかで、心安らぐ時を過ごせ  
てはいなかったと　　思います。貴女に出逢えて心の底から良  
かった」

その答えに、一体どれだけの想いがあっただろうか。

万感の想いが込められている紫苑の吐露。

浮かぶ顔は、暗い夜道を彷徨い、救いの手を差し伸べられた子供のような表情だった。

紫苑にとつてミオソティスは、『紫苑の世界』を構築する重要な替えの効かない要素の一つになっていた。

地球に居る祖父と幼馴染がそうであるように。

かけがえの無いたった一つの。

告白をした後に、気恥ずかしくなった紫苑が茶化すように付け加える。

「なんだかありふれた陳腐な言い方になってしまいましたね。俺にばかり云わせてずるっこです。ミオはどうなのですか？」

「……答える前に一つだけ云わせて下さい、シオンさん。ありふれただなんて、陳腐だなんて、そんな事ありません。

嬉しいです、貴方に、そんな風に想われて私はとても、本当にとても嬉しいです」

ミオソティスの声は震えていた。

気の利いた科白ならば他にもあった。

だが、今のミオソティスに切れ切れに思いの丈をぶつけるだけで精一杯。

そうでもしなければ、言葉に出来ない感情が胸を突いて溢れ出すうだった。

車椅子の柄を握った細い手に、褐色の手を重ねる。

祭りの熱気から逃げるように舞い上がった花弁が一段と多くなる。

「そう……一方通行な思い込みじゃなくて良かったです」

「私も、私もシオンさんと出逢えて

」

寸前。

グワシ！ と屋根の縁を掴んだ巨大な手の音が、ミオソティスの告白を遮った。

いきなり現れたごつごつ、と岩のように節くれた手に集中する二つの視線。

空気が読めていない。

致命的に空気が読めていない。

大事な少女の時間を打ち壊した手の持ち主が片腕だけの力でひよっこり、と姿を見せた。

頭髮の一切無い禿げ頭に、よくよく見れば愛嬌のある単眼。

「おうおう、やっぱりシオンじゃねえか！！ がはは、ちっこくて近くに来るまで分かんなかったじゃねえか。

なんだなんだ？ こんな場所で何してんだ？ お前らも祭りに参加しに来たんだろ？」

単眼の男 『短剣と外套』のクランリーダー、ゴルデイスがよじ登ると、ぎしり、と屋根が悲鳴を上げる。

ずかずか、と無遠慮で無神経な性格は、巨人族の美点でもあり、致命的な欠点でもあった。

とても良い雰囲気は微塵も残っておらず、ミオソティスは呆然から立ち直ると、しゅん、と肩を落とした。

ゴルデイスに悪気は無い。

それは能天気な彼の顔を見れば分かる。

されど、このやるせない気持ちは何処にしまえば良いのか。そして。

一陣の風が吹く。

乙女の恋路を邪魔する者へと馬代わりのホビット族が鉄鎚をお見舞いする為に。

「こおおおおおんんんのおおおおおおおつっ！！ 大馬鹿

者おおおおおおおおおおおおおおツツ！！」

風精霊を身に纏い。

薄緑色の魔力が尾を引く。

緑の彗星　　ゴルデイスの相棒、モモの超長距離跳躍の跳び蹴りが朴念仁の側頭部、こめかみを正確に撃ち抜いた。

そして。

3メートルを優に超す巨体が、横に吹き飛んだ。

「つぶればあ！！」

不可思議な奇声を発して視界から消えた巨人族の代わりに、可愛らしいホビット族の女性が入れ替わった。

ギャリリイ、と民家の屋根に靴跡を長く残し、モモが漸く止まり、ゴルデイスは屋根から落ちる。

靴の裏から焦げた臭いが漂う中、あ、とモモはやっちゃったと云う顔をする。

視界には屋根の上から消えていく単眼の大男。

だが、あの馬鹿ならば大丈夫だろう、と即座に頭から馬鹿の事を斬り捨てた。

「ぬわあああああ！！」

どずん、と鈍く、重たい肉袋が落ちる音が下から響く。

幸い、下で賑わっていた人々は屋根から降って来る巨体にいち早く気付き、下敷きになった者は居ない。

ゴルデイスは物の見事に、地面に背中を叩き付ける罰を受けたのだった。

「ほんつとに！　ごめんね。シオン君に其処のダークエルフの子。

あの馬鹿が邪魔しちやったまいたいで」

「いえ、あの……」

「ゴルデイスさんは大丈夫なのでしょう……？」

平身低頭、本当に申し訳ないと小さな身体中から滲ませて謝るモモ。

対する紫苑とミオソティスと云えば、惨劇を目にした後にその張本人から謝られている現状にただただ混乱するばかり。

かろうじて屋根から落下したゴルデイスの身を案じる紫苑だが、がしつと背伸びをしたモモに肩を掴まれる。

万力の如くしつかりとホールドされる肩に困惑する紫苑。

「シオン君………後生だから、お願いだから、今はあの馬鹿の事なんか口にしないで貰えるかな？ ハア……ハア………本当に色々と限界だから！」

青筋を立てて必死に憤怒を堪えるモモに紫苑は何も云えなくなる。息巻く小さなホビット族の女性は、今にも爆発しそうな爆弾にも見えた。

ゴルデイスの話題は控えた方が良い。

否、控えなければならぬ。

二人は本能で悟った。

「お姉さんが何でも奢ってあげるから、それで水を流してくれないかな？ 駄目かな？」

「そこまでしてもらおう訳には……」

「遠慮しないで。お姉さんにどーんと任せなさい。これでも克蘭の副リーダーをやってるんだから、意外と小金持ちなのよ」

どん、と薄っぺらい胸を叩き、モモは若干わざとらしく胸を張る。

それにしても、と紫苑は思う。  
なんだか会う度に謝られているな、と。  
主にゴルデイス関係で。

「まあ、それはさて置いて……今日は一段とお洒落さんだね、シオン君。そっちの子も、えつと？」

「あ、そうですね自己紹介がまだでしたね。私はミオソティスと云います」

「あは、ミオソティスちゃんか。アタシはモモ。宜しくね！ ミオソティスちゃんもお洒落さんだね」

モモの云う通りだった。

藍の着物は物珍しくも一目を引き、結い上げられた黒髪は何時もと違う魅力の側面を覗かせる

アップにされた事によって普段黒髪に隠れているシミ一つ無い純白のうなじが、ほのかな色気を控え目に主張していた。

一方でミオソティスはこの日の為に急遽用意した一張羅のワンピース。

淡い橙色の生地に愛らしいフリルがあしらわれた一品で、褐色の肌に良く映えている。

そして、銀系の髪は赤い紐リボンでワンポイントのアクセントが加えられていた。

成程、二人で並んだ姿はさながら妖精が戯れているようである。

モモが頻りに頷き、しげしげと観察するのも納得であった。

「有難う御座います」

ぺこり、と頭を下げるミオソティス。

下げながらもミオソティスの脳裏に疑問が鎌首をもたげる。

モモはいたって普通に挨拶を交わした。

自身が特別な存在と思っている訳では無いが、それでも『普通』とは掛け離れていると自覚しているミオソティスである。

両目を覆う包帯に車椅子。

そして、同族に忌み嫌われるダークエルフの要素。

幼い時分に受けた虐待を彼女は忘れない。

深層心理の奥の奥まで刻みつけられた抗えない暴力と云う陰惨な過去。

この両目も、この両足も、全部がダークエルフだからという自分自身ではどうしようもない生まれの結果。

紫苑達という例外はあれど、ダークエルフである自分に大多数の人がどういった反応を示すのかをミオソティスは良く知っていた。

あの時の魔導学院の生徒 シンシアのように。

故に、疑問がもたげる。

ミオソティスの外見の要素を目の当たりにしても、モモは意に介さないように振舞った。

当たり前のように。

「あの、私の事を見てもどうも思わないんですか？」

「どうって……………ああ、ダークエルフがって事？」

「はい」

ミオソティスの懸念はモモの快活な笑いによって吹き飛ばされた。

あの巨人族のように。

「あはは、別にそんな種族がどうかっていうみみっちい事で人色眼鏡で見やしないって。

それにシオン君の連れなんですよ？ だったら尚更悪く見る理由が無いよ」

「そこまで云われると流石に面映ゆいです」

紫苑だから。

そのモモの言い回しに紫苑は若干顔に恥じらいの朱を散らして蒼い瞳を細める。

そして、モモは未だに言葉を噛み締め切れていない様子のミオソティスに笑い掛ける。

「これで納得できたかな？」

「えっと……はい」

「うんうん、素直で大変宜しい！ じゃあ、さっきも云ったようにお姉さんがなんでも奢ってあげようじゃないか。『皆、出ておいで』」

モモが発したフレーズには形容し難い『力』が込められていた。強いて近い表現で表すなら波一つ無い湖面に零された一滴の水。波紋が広がるようにして言霊が世界へと浸透していった様子を、ミオソティスはマナを知覚する感覚で悟った。

モモを中心にして、四つの箇所にも魔力が凝縮した。そして、魔力の塊になった四箇所からぽんぽん、と愉快的音と白煙を伴って下位精霊が顕現する。

地、水、風、火。

人間の幼児程度の大きさの四精霊がふよふよ、と理外の力で浮いていた。

「食べ歩きに適した物を買って来てくれるかな？ できれば甘い物系がいいけど」

モモは顕現した四精霊の一匹 確り者の水精霊の手に多めの金子を手渡す。

ちゃぽん、と水精霊は水分で構成された体内に貨幣を取り込んだ

後、透き通った青い身体を震わせて、快諾の意を示す。

それから水精霊は他の三精霊を伴って祭り客賑わう眼下の露店へと飛んで行った。

火精霊は祭りの熱気を更に盛り上げ、

風精霊は時折、風を舞い上がらせ悪戯に人を驚かし、

地精霊はのほほんとマイペースで皆の後を追う。

それぞれが各々の特色を以って下位精霊達は、祭りに溶け込んでいった。

「『お駄賃は魔霊殊だからね、今日はちょっと奮発しちゃうよ』」

その遠くまで通るモモの言霊に四精霊達は俄然にやる気を出したようであった。

はい、とモモに返事の念を送り勢いを増して街へと散っていく。おつかいを送り出したモモは一仕事を終えた主婦のように額を拭う動作をする。

「ん、これでよし！」

「なんだか済みません」

「いいの、いいの。それにシオン君達に任せていると遠慮しちゃって決まりそうに無いからね。そういう所は美德だとは思っけど年上が奢るって時は素直に受け取りなさい。」

その方が奢る側も気持ちの良いもんだからね」

「そういう物なのでしょうか？」

「そういうもんなの！」

「なら、お言葉に甘えさせて頂きます」

「ん、よろしい！」

持論を持ち出して諭すモモに観念した紫苑は素直に好意に甘える事にした。

お姉さん風を吹かすホビットの女性は、そんな後輩に気分をした様子で快活に笑う。

「それで？ シオン君達はこれからどこかに行く予定があるのかな？」

「はい、先に『渡り鳥の止まり木』へ行つて、今晚の宿を確保しようと思つています」

「うえ？ 今から行つても何処の宿も満杯でしょ？」

「いえ、先方には予約を取っているので大丈夫です。やる事はチェックインだけです」

「あ、なるほど」

納得に至つたモモはポン、と小さな手に握り拳を叩いてその意を表した。

年齢には不相応で、外見には相応。

成人したホビットでもその背丈は人間の子供程度。

年齢に見合わない幼げな容姿を持つホビットだからこそ似合う仕草。

そんな可愛らしい仕草を自然に出来るモモという女性は、やはり魅力的な女性であった。

妖艶や大人の魅力といった物には全く縁が無いが。

「うーん、ならアタシも一緒に行つてもいいかな？」

「構いませんけど、本当にチェックインするだけですから面白い物はありませんよ」

「大丈夫、大丈夫。シオン君達とおしゃべりしながら歩くだけでもお姉さん的には楽しいよ。それにちよつと人に酔つてたからね。

やっぱりほら？ 同じ酔うにしてもお酒で酔いたいじゃない？

それにこのまま祭りを練り歩くにしても……アタシの身長でしょ？ 『人避け』が無いと歩く気にもなれないし」

「ああ……確かに」

この場で云う『人避け』は禿げ頭の巨人族の事である。その比喩表現に気付いた紫苑はくすり、と笑みを零した。それはつまり。

モモはゴルデイスと一緒にでない祭りは面白くないと断言しているのと同義なのだから。

紫苑が零した笑みの真意に辿り着けなかったモモは、何処に笑える部分があったかな、と首を傾げるばかり。

「なにかおかしな所があった？」

「いいえ、素敵な事だと思いますよ」

「？」

ますます迷宮入りをする可愛らしい女性を余所に、紫苑は足元に敷いた絨毯状魔法陣の幅を一人分だけ広げた。

そして、まいつか、と自己完結したモモが車椅子の取っ手を握った。

「よし！ それじゃ行こつか。シオン君はちょっと先に行つてもらえるかな？ ちょーつとアタシはミオソティスちゃんと話したい事があるから」

「俺は大丈夫ですが、ミオの方はそれで良いのですか？」

「えっと、大丈夫です。私もモモさんとお話したいです」

「これを押せばこの椅子は動くんだよね？」

「はい、そうですよ」

ダークエルフという突然変異種の自分を受け入れくれた人物。

若しくは『そんな物』と笑い飛ばしてくれたモモに対して、ミオソティスの初対面の印象は非常に良好な物だった。

枝毛一つ無い後ろ髪の毛先を躍らせながら先を歩く紫苑の背中を見て、モモはそつとミオソティスの尖った耳に口を寄せる。

「御免ね、ウチの馬鹿が邪魔しちゃって……………告白の最中だったんでしょ？」

「……………っ!?!」

告げられる内容にミオソティスはピクン、と肩を跳ねさせ、声にならない悲鳴を上げた。

顔の毛細血管が今日は良く働く。

一気に表面温度が上がった頬を隠す為、ミオソティスは俯き、輝く銀髪のカーテンで閉める。

初々しい。

なんて初々しい反応なのだろうか。

モモはこの初対面の少女が示す反応に、母性本能のようなこそばゆい感触が胸をくすぐるのを感じた。

それは恋の橋渡し役を買って出る程に。

「たぶん花火が上がる頃合いならみんな上を向いてるし、邪魔も無いんじゃないかな。それにそっちの方がロマンチックだしね」

「その、あの……………」

「がんばれ、女の子」

「……………はい」

紫苑とミオソティス。

二人が好き合っ一緒になるには困難な道程が待ち構えていると云う事は、第三者であるモモにも当然の如く想像し得た。

だが。

それでも、だ。

それでもモモはこの二つの花が寄り添い合う姿を見てみたいと思

った。

邪魔な石ころが多い道かもしれない。

肌を切り付ける茨道かもしれない。

ひよつとしたら岩が道を塞いでいるかもしれない。

しかし、モモは恋路に手を出した。

なら、最後までとは云えないけど、困ってる時が来たら精一杯手を貸してあげる。それが手を出した責任だからね。

だから、確りと想いを伝えたらいいね、ミオソティスちゃん。なかなか居ないぞ、こんない子は。

もう一つ、理由があるとすれば。

或いは二人の行く末に己を重ねたのかもしれない。

モモもまた種族の垣根を越えて恋する一人の乙女なのだから

「あの木偶の坊め、やはり一度去勢しておいた方が良さそうじゃないか。しかしホビット族の彼奴も結局は出歯亀をしておったのではないかい。だいたい現れるタイミングが良すぎるわ」

忌々しげに悪態を吐きながらバルは、手に持った肉汁溢れる串焼き肉を頬張った。

少なくともそれは『遠見の法』という封印時代から使い続けた覗き専用の魔術を使用している者の言い草では無かった。

そんな事実は棚に上げ、街の至る所で見かける事の出来る『ラタトスク（走り回る出っ歯）』の如く串焼き肉で頬を膨らませるバル貴族の令嬢と見紛うばかりの外見を誇るバルがする粗野な振舞いに、道行く人々は些か奇異な物を見る視線を寄越す。

勿論バルは有象無象の視線など気にしない。

頭の大部分を占める彼女の関心事は今ゴルデイスに行く折檻の事。その気になればありとあらゆる万物を千変万化させる事が可能なバルトアンデルスだ。

材料は適当にそこいらの土。

拷問器具の調達に憂いは無い。

鞭打ちが良いか、石抱きがよいか、はたまた鉄の処女アイアンメイデンに抱擁させるのも良いかもしれない。

思考が危険域に達しているバルに、背後から声が正気に戻らせた。

「……バルは……反対じゃないの？」

「む？」

相も変わらず絶対的に言葉数が足りていないラティルスラティルスの問い掛け。

振り向けば、心なしか平時の無表情より固い顔が其処にはあった。ごくり、と口の中の肉を嚥下し、肉無しの串は『形容しがたい汚泥のようなもの』が見え隠れする空間の亀裂を作り出し、ぽい、と捨てた。

フリル付きスカートから取り出したハンカチで口元を拭いた後、バルは暫しの瞑目。

「反対でもあり、賛成でもある。天秤はミオの芽吹いたばかりの恋心を応援する方向に傾いておるがの」

「……バルはシオンが好き、なのに？」

身長差から仰ぎ見る形でバルは告げる。

不思議であつた。

秘蹟礼装『バルトアンデルス』は確かに紫苑という一個人を愛している。

其処に疑いは介在しない。

しかし、現実として彼女はラティルスにとって妹のような存在であるミオソティスの恋路を支援している行動を取っている。

初めはバルにとって二人の間にミオソティスが入る事は、正妻が側室を許す事だと思つた。

否。

否である。

この場に居るバルと正対したラティルスの脳に不正解の鐘がけたたましく鳴り響く。

自嘲を含んだ嗤いを浮かべている疲れた老人の顔。

目の前の精巧に作られた粘土細工の顔がソレに重なる。

「くく、然りじゃ。妾は紫苑が好きじゃ、愛しておる、万の言の葉を書き連ねても足らぬ程。

紫苑の瞳に映る者は妾だけでありたい。妾の瞳に映る者もまた紫苑だけでありたいと懸想するほどに」

「……ならどうして？」

「どうして、か？ ならば、この狂おしい感情が余所から持つて来られたものであるならば、作り物であるならば……お主なら如何する？ 如何すれば妾は紫苑を愛していると証明できる」

氷柱の杭が心臓を不意打ちに貫いた。

それが冷たいと五感が認識し、脳に伝わるまでラティルスは言葉の意味を理解できなかった。

え？ と間抜けな声が漏れて思考が止まる。

掛けるべき言葉は宙へと去っていき、沈黙だけが寄り添う。

人形の少女が吐いた狂おしい懇願は、地獄の窯で煮えられる囚人が天より垂らされた糸に縋り付こうとしているようだった。

どのような解ならば天より助け来る糸となるのかラティルスには分からない。

その『糸』を垂らせる人物はきつと世界にただ一人。

「ふ、戯れが過ぎたな。忘れよ、祭りの陽気に水を差すような事を云ってしまった、許せ。」

おおう、そこな店主、飴を二つくりゃんせ」

不躰な質問をしてしまった、と謝罪するバルは前方に赤、青、黄色とりどりの飴細工を売る露店を見つけて、その内二つを購入した。不自然に、強制的に断ち切られた会話。

深い、仄暗い、井戸の底に沈んだ情動の本音。

ラティルスはその怪物を覗き込み、逆に覗かれたような感覚に陥っていた。

そして。

分からない事だらけの中で唯一腑に落ちた確信。

人間とダークエルフ。

バルが二人の幼き恋を成就させようとしているのは、その事実を以って紫苑を愛していると証明する為なのだ。

「……………むぐっ」

唐突に口の中に何かを突き込まれた。

思考に耽っていた身体は反応が完全に遅れる。

口内を蹂躪する異物にラティルスは不快感を覚える。

しかし、次の瞬間、その異物から甘味が溶けだす。

見ればバルが爪先立ちで棒に付いた飴細工をラティルスの口内に突き入れる形。

「三度は云わぬぞ 忘れよ、良いな」

絶対の命令であつた。

頭二つ三つ分も低い躰の何処にその威圧感を隠し持っていたのか。半分流れている魔物の血の本能が全力稼働をしていた。頭部にある銀より灰色に近い獣耳がピン、と総毛立つ。敵わない、逃げる、と。

本能が発する指令に全肯定で従いたい。

しかし、それは無理な相談であつた。

鋭い細身の刃を想起させる眼光にラティルスは完全に射竦められていた。

生殺与奪の権利すらその瞳の前では無条件で譲渡される絶対的捕食者。

舌の上を溶け出す甘味は感じられずに消えていく。

ラティルスに残された唯一出来る事は一つ。

「……………う……………ん」

それは秘蹟礼装『バルトアンデルス』の望む答えを口にする事だけであつた。

バルはにやあ、と三日月に口を割き、満足げに嗤う。

ラティルスには、その捕食者の笑みが堪らなく怖ろしかった。

「くく、少々稚気が逸つた行いであつたのう。往くぞ、ラティルス。そろそろ紫苑達とも合流せねばならぬ故な」

スイッチを切り替えたように一瞬で威圧感が去る。

嗤いは笑いに変わり、不遜で我が道を往くいつものバルに雰囲気  
が戻っていた。

スカートの裾を翻し、やはりバルは飴細工を真つ赤な舌先で舐め  
ながら、己が歩調で人混みを進む。

ただ。

ラテイルスにはどうしても訊かなければならぬ事柄があった。

なけなしの勇気を掻き集め、口腔を占領していた飴細工を引き抜  
き、先を往く小さな背中中に声を投げかける。

「……バルはっ、ミオに酷い事をするつもりなの？」

それは姉として絶対に訊いておかなければならない事柄。

妹の為ならば姉は鬼にでも悪魔でも対峙してみせる。

ともすればカチカチ、と歯が鳴りそうになる奥歯は力の限り噛み  
締める。

少女人形は問い掛けにぴたり、と歩みを止めた。

振り返る時間が途轍もなく長く感じられた。

「阿呆が、それでは意味が無かるう。心配せずとも良い。紫苑が幸  
福ならば妾はそれで良いのじゃ」

はらはら、と花卉が雪のように舞う最中、顔のみ後ろへ振り返り、  
バルは偽らざる心情を吐露する。

紫苑の幸福を願う素顔は童女のように無邪気だった。

時に救いを求める囚人のように、

時に慈悲の絶対的捕食者のように、

時に無邪気な童女のように、

ころころ、コロコロ。

形は無形、材質も不明、そして表情すらも千変万化

夕暮れ刻。

赤も、青も、黄も、其々の花の色彩が全て斜陽によって夕暮れ色に染められる頃合い。

吹き上がる広場の噴水すら橙に煌めかせ、地平線に落ちゆく西日が祭り客を照らしている。

声を張り上げて客引きをする芸細工を売る露店の主人。

ビールを片手に大笑いをしながら下手糞な歌を垂れ流す酔っ払い。胸や大事な部分だけを隠した露出度の非常に高い色っぽい衣装で舞う踊り子達。

それらの人々を花の香りが等しく包み込んでいた。

祭りの賑わいと熱気は未だ衰える事を知らず、ますます活気が溢れている。

「んつく……ふいい……旨い」

「はい、杯が空いてしまいましたよ。おかわりをどうぞ」

「花で瞳を色付け、祝祭で心を躍らせる。そして紫苑に酌をしてもらった格別の酒で喉を焼く。うむ！ 妾は大いに満足じゃ！」

「はいはい、大袈裟なんですから」

朱塗りの杯になみなみと注がれる透明な液体。

酌をするのは髪を結び上げ、ほのかな色気を醸すうなじを晒した大和撫子の紫苑。

全く赤くなっていない頬で調子の良い事を云うバルに、呆れながらも紫苑はくすくす、と笑みを絶やさない。

バル程では無いにしろ、少しお酒の入った頬は桜色に上気していた。

吐く息は艶つぽく、それがまた少年アリスの隠された色を露出している。

紫苑が両手に持つ一升はあるつかという酒瓶をひったくりバルが酒を勧める。

「ほれ、妾も酌をしてやろう。杯を差し出すが良い」

「もう、俺なんかを酔わしてどうしようというのですか」

「くくく、それはのう、色々あるじゃろう。愛でるも良し、戯れに啄むも良し」

「訊いた俺が馬鹿でした」

「ぬ！ 待て、待つのじゃ。妾の失言じゃった、じゃから紫苑は妾の隣の席に居るのじゃ」

今度こそ本当に呆れたとばかりに席を立とうとする紫苑をバルが慌てて引き止める。

極上の酌婦たる紫苑をむざむざ野に放つ愚行をしたと悟った。

その慌てぶりに紫苑は袖で口元を隠し、こころころ、と笑う。

「ふふ、そんなに慌てなくとも何処へも行きはしませんよ。お酒、頂戴します」

「そうか！ うむうむ、よしよし、妾が手ずから注いだ酒じゃ。しっかり味わって飲むじゃぞ」

「はいはい」

主演の席に再び正座で座る紫苑。  
白魚のような両手に持つ杯は、バルの物とは異なり小さな御猪口の  
のような入れ物。

透明な液体が御猪口へ表面張力一杯にまで注がれる。  
紫苑はそれを零さぬようにと一気に傾ける。  
ん、と白い喉が酒を流す度に動く。

「ん……ん………っはあ………」

「あっぱれな飲みっぷりじゃ」

「なんですかそれは、見ていても楽しくないですよ」

紫苑達が現在酒宴を開いている場所は、噴水広場が見渡せる建物の  
屋上。

屋上といっても階下へと繋がる階段等は無く、完全に階下から隔  
離された場所を見つけたのだ。

建築されてからの年月分だけ雨風に晒された屋上は相応に砂や土  
で酷い状態であったが其処は紫苑とバルの出番。

屋上に蔓延っていた不要な物は、バルが風を操り空の藻屑へと化  
し、紫苑が白銀の炎「エンヒリアル浄火」で除菌。

即席の花見と花火見会場と相成った。

酒宴の席には数多くの銘酒の酒瓶が剣山のように立ち並び、見て  
いるだけで涎が過剰分泌してしまう酒の肴が所狭しと置かれていた。  
宴の参加者はまず紫苑とバル。

当然の如くミオソティスとラティルスも居る。

そして。

「がはは、一番巨人族のゴルディス！ 一気飲みをやるぜ！ ただ  
し樽ごとな………」

「やめなさいよ、この馬鹿！」

「やめんか、この阿呆が！」  
「ごふえつつ！！」

酒樽を持ち出して一気飲みを敢行しようとする『外套と短剣』のクランリーダーに二人の女性の些か強烈すぎる突っ込みがめり込む。真紅の赤髪が目には鮮やかな『炎獅子』。アルトの裏拳が鳩尾へと吸い込まれ、

肩口で切り揃えた桃色の髪を振り乱し『外套と短剣』の副リーダー、モモのガゼルパンチが顎を撃ち抜いた。

奇怪な叫び声を上げて後ろへ倒れ込むゴルデイス。それをバルが大笑いで囃し立て、紫苑は民家の人に迷惑ではないかな、とご近所への配慮を心配していた。そして。

事の一部始終をアルトの横で見っていた頭に巻くバンダナが特徴的な男性。ヤドックは巨人族すら倒れ伏させる女性陣に顔を蒼くしていた。

「ふう、まあ馬鹿は放っておいて、シオン君、私にもお酌ー！」

「駄目じゃ、紫苑は妾の隣に居るのじゃ」

「ああー！？ 狡い、それは狡いよ！ バルさん」

「ふふん、なんとも云うが良い、のうミオソティス？」

バルは紫苑の腕にしな垂れかかり、紫苑を中心に反対側に座るミオソティスに同意を求める

「ちゃっかり反対隣を陣取っていたミオソティスは、本音とバルに促されるまま同意をしよう。」

「え？ あ、はい。シオンさんは駄目です。渡しません」

「良いぞ、もつと云ってやるのじゃ、妾が許す」

「むうー、二人して狡いんだ、狡いんだ。いいもんアタシはアルト

に酌してもらうもん、ん！」

拗ねたモモは口を尖らしたまま自身の顔程の大きさもある大ジョッキをアルトに向かって突き出す。

「なんだそれは、まったくしょうもない奴め。ほら、ほどほどにしておけよ」

「良いの！ 今日はお祭り、お酒も無礼講ってやつさー！」

片手でぞんざいに酒を注ぐアルト。

なんだかんだ云いながらも酌をし、飲み過ぎを諷める態度は彼女の面倒見の良さを表していた。

そんな気遣いに気付いているのか、いないのか。

既に酒瓶を五本も空けているモモは、まだまだこれからだと云わんばかりに豪快に大ジョッキを傾ける。

ホビット族の小さな体躯の何処にそれだけの量のアルコールが入っているのか。

宴が始まってから鎌首をもたげたヤドックの疑問はついぞ解消される事はなかった。

「シオンさん」

「ん？ なんですか？」

呑めや、歌えや。

酒気漂う騒がしい車座。

其処には陽気な笑顔で溢れていた。

人間も巨人族もダークエルフも魔物だって関係無い。

ただ酒を飲んで馬鹿騒ぎ。

それだけで楽しかった。

「私は、今がとっても楽しいですよ」

女の子にはとっておきがある。

包帯が有ろうが無かろうが関係無い。

ミオソティスはとびつきりの笑顔を添えて、あの場で云えなかった答えを返した

天頂を数多の星々が瞬く夜空に、大輪が花開いた。

ドン、と腹の底に響く音。

燦然と咲いた花火はラタトスクの街並みを色鮮やかに照らし出す。

魔導学院の教師陣、生徒達が組み上げた魔術の花火は、通常のそれとは違い幾何学的紋様を拡張ながら花咲く。

その大玉の花火を皮切りに、次々に打ち上げられていく大小様々な火の花が夜空というキャンパスを埋め尽くす。

学院の一人一人が個性を前面に押し出して構成した術式が、競い合うようにして作品を打ち上げられていく。

白い雪の結晶を模した花火が、

不死鳥の如く羽ばたく火の鳥の花火が、

精密に編まれたタペストリーのような模様の花火が、

数多の彗星が飛来する花火が、

千差万別、多種多様。

『花摘み祭』最大の目玉である催しが盛大に始まった。

「おおう、やっと始まりおったか！ むむ、なんじゃあの術式は？  
下手糞じゃのう」

「がはは、やっぱり祭りの締めはこうでなくっちゃな！！」

「はーなやー！！」

バルは己の視点からはあまりにもお粗末な花火の術式を酷評し、  
ゴルデイスは単純に喜ぶ。

そして、モモはこの催しが恒例の魔導学院主催なのでお決まりの  
掛け声を大声で叫ぶ。

掛け声の由来は、魔導学院の最後の一文を除いたブロッサム（  
花）からだ。

「綺麗……………」

『蒼の大地』の夜空を彩る花火は、それが魔術故に盲目のミオソ  
テイスにも視覚以外の全てで感じられた。

マナの波動が地上から天空へ昇り、弾ける。

拡散する魔力が芸術的な波紋を立てる。

遅れて届く身体の芯を叩く爆発音。

一瞬。

一瞬で終わるが故にその瞬きの時が堪らなく美しいと思えた。

誰も彼も。

紫苑も、バルも、ラテイルスも、ゴルデイスも、アルトも、ヤド  
ツクも。

ラタトスクに居る殆ど全ての人が、空を鮮やかに満たす花に魅入  
られて上を見上げていた。

そして。

ミオソティスの傍らには、違わず清流のような清らかなマナの持ち主、紫苑が居た。

紫苑もまた立ち上がって空を見上げている。手を伸ばせば触れ合える距離。

見え無い筈なのに、車椅子の上からその横顔を見詰めてしまう。だから。

ドン、と花火がまた一つ弾ける。

「……………好き、です」

花火の音に重なるようにして想いを口にした。

伝わらない。

当たり前だ。

小さ過ぎる声は、花火の音に掻き消されてしまう。

それで良いと考えていた。

考え込もうとしていた筈なのに。

けれど、想いを口にした途端、込み上げてくる更なる想い。

言葉を放った唇と心臓が、熱を持ったみたいに熱い。

ドン、と夜空にまた一つ花が咲く。

「……………好きです」

花火が打ち上がる時、想いを口にした。

また胸の奥が熱くなる。

心臓が早鐘のように打ち鳴らされて、締め付けられるように切ない。

声は先程より大きくなっていた。

それでも足りない。

想いを込めたミオソティスの声は花火が鳴らす音に打ち消されてしまう。

ドン、と大輪がまた一つ花開く。

「……好きです」

あの日、添い寝をした夜には伝えられなかった想い。  
今日は伝えたい。

ラティルスが小さな声でミオソティスを制止する。  
それでもミオソティスの告白は止まらない。

花火が打ち上がる度、指の隙間から水が零れ落ちるように紫苑に  
好きと云った。

姉が付けた歯止めは、何時の間にか消えていた。

ミオソティスの声は『好き』と口にする度、大きくなっていく。  
そう。

大声で叫ぶほどに

「私は、貴方が好きです。シオンさんが好きです！」

花火に負けない程、その声は夜空に響いた。

伝えた。

伝わってしまった。

あれほど五月蠅かった花火の音が酷く遠い。

ラティルスがひゅっ、喉に息を呑む音が聞こえた。

紫苑の答えを聞く事が今のミオソティスには途轍もなく怖い。

ぎゅっ、と握っているワンピースの裾には深い皺が出来ている。

一瞬だった

その瞬間、ミオソティスは何が起こったのか分からなかった。

ただ気付けば誰かの腕が背中に回されていて、抱きしめられてい  
た。

貴方はなのですか、と訊かずとも分かる。

街中を包む花の香りでない、ミオソティスを抱き締めるその人は、どこか安心の出来る匂いで彼女を包み込んでくれる。

この瞬間だけは世界中に自分と、紫苑だけのように。そして。

「俺も、貴女が　　ミオソティスが好きです」

結んだ。

その一言で想いが実を結ばれた。

耳元で、紫苑がはつきりと云い切った。

ミオソティスは焼かれた筈の瞳の奥がじんわりと熱くなって来た事を自覚する。

放っておけば大粒の涙が本当に溢れてきそうだった。

震える手でミオソティスは、紫苑の顔を探す。

触れてしまえば泡沫に溶けて消えてしまうのではないか、夢なのではないか。

嗚呼、けれども其処には確かに紫苑のぬくもりがあった。

ミオソティスの指が紫苑の頬をなぞり、指が湿る。

「泣いて、いるのですか……」

「……そうですよ。嬉し泣きなんて、本当にするんですね」

つう……、と紫苑の頬を真珠の粒が零れ落ちていた。

伝う涙滴がきらきら、と顔を飾る。

そして。

たった一人の為に、紫苑は見惚れるくらい綺麗な微笑みを湛えていた。

頬に触れたミオソティスの両の指が、手探りで紫苑の唇を探す。

指の腹が絹肌を滑り、唇へと辿り着く。

口付けをするのにも目の見えない為に拙くて、不格好な形になってしまふのがミオソティスは少し残念だった。  
しかし。

そっ、と褐色の手に白い手が重ねられる。

手を介して溶けていく二人の体温。

紫苑からミオソティスへ、距離は近くなってゆく。

そして。

一際大きな花火が空へと打ち上がる。

赤、青、黄、緑。

祝福のように、恋の花が咲き誇る。

二人の影が一つに重なった

あとがき

ミオソティスの大告白。

最近聞いた某VOCALOIDの曲に触発されてこの回の構想が決まりました。

その曲中でも盲目の人が好きな人に告白するという内容なのですが、違う所を挙げるとすれば男女が逆の立場になっています。

如何だっででしょうか？

個人的には荒削りな所も有りますが、かなり胸にクる告白の場面

に仕上がったな、と思います。

こんな素敵な告白を試してみたいものです or されてみたいも  
のです。

ではまた次回にお会いしましょう。

朝日奈ポチでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5828t/>

---

追憶のシオン

2011年10月28日19時29分発行